
桜の下で君を待つ

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の下で君を待つ

【Nコード】

N4905R

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

※サイト内別タイトルで公開していたものを、見直してアップしています※

お人よしを地でいく碧音と、なまじ見た目が完璧なために周りに持ち上げられ、人と向き合うことがNGになった克己のお話。

— 1 —
(前書き)

“ *** ”にて視点がころころ変わります。ご注意ください。

「遅いなあ……」

今日も、私は待っていた。かれこれ1時間以上は待つてゐるかな。きっと時間を間違えて覚えてしまったんだろう。良くあることだ。

はあ……つ、と、白い息を冷え切った指先に吹きかける。じわりと痺れるような暖かさが体に染み渡った。

夕暮れ時の町並みは少し昼間の喧騒とは違った感じで、行きかう人々も同じ様に浮き足立っているような気がする。

私はそんな人たちを眺めているのも嫌いじゃなかった。

道路を挟んだ先のカフェに腰掛けて、こちらの通りを眺めてゐる人たちも、誰かと待ち合わせなのかな？ 良く考えたら、待ち合わせ場所をどこかのお店にしておけば良かった。

私は少し恨めしげな思いでカフェで暖を取る人たちを見て、これから食事にも向かうのだろう人たちをぼんやりと眺めた。

—— ……小西さんの姿はまだどこにも見えない。

はあ……と思わず溜息を重ねて落としてしまって、私は慌ててそれを吸い込むように息を呑んだ。

—— ……今日は冷えるなあ……。

私は、踵を忙しなくかちかちと打ち鳴らして、寒さをごまかした。私が彼とこういう関係になったのは数ヶ月前の話だ。

「小西静也」それが彼の名前だ。彼は私と同じ会社に勤めている三つ年上の上司だ。

最初は彼が誘ってくるが多かったのだけど、最近はどうも仕事に忙しいらしい。実際、直属の上司というわけではないので、詳しいことはわからないけれど、基本的に営業開発部という部署は忙しいものらしい。

それは、あやもいつていた。

だからこうして、私が待ちぼうけを食らうことも特に珍しいことではなかった。

でも私は”待つ”ということは嫌いじゃなかった。

どっちかといえば好きだ。

少し申し訳なさそうな笑顔を浮かべて駆け寄ってくる彼の姿を見るのが好きなんだ。

いつもの彼の笑顔を思い出して、思わず口元が緩み、慌てて両手で隠すと誰かに見られていないかと辺りを見渡した。

手の中のカップの温度は下がっていた。生暖かな温度が手の中に伝わってくる。

初めて見かけた時も、確か誰かを待っていた。

このくそ寒いのにご苦労なことだと思いつつ、俺は目を離せなかった。

別に、別段美人というわけでも何でもなかったんだが。

何故だか俺は目を離せなくて時間の許す限り経緯を見守っていた。

「聞ってるのか？ 古河」

俺の隣に腰を掛けて一緒に時間をつぶしていた透が、呆けていた俺に痺れを切らせて声をかけてきたらしい。

ぐいつとジャケットの袖を引っ張られて俺は彼女から視線を外した。

「何、ぼおっとしてんだよ？ 美人でも通ったか？ って、なことで気をそらさないよな。古河克己くんは」

「どういう意味だよ」

にやり顔でそう言った透の遠まわしげな嫌味に俺は怪訝な顔をした。

「お困りでないってことだよ」

そんな俺の心を知ってか知らずか、変わらずにやにやと透は薄笑いを浮かべた。

馬鹿馬鹿しい。と、口に出すのもどんなものかと思いつつ結局何も言わずに、冷め切ったコーヒーを一口流し込んだ。

人肌ほどの琥珀色の液体が喉元を通り過ぎていく。

「おっと、そろそろ時間だ。出ようぜ」

ぱたんっと携帯の時計を確認して無造作にポケットへ携帯を押し

込んだ透に、殆ど引っ張られるようにして俺は店を出た。

—— ……ウイイ……ン……

鈍い機械音がドアの開閉を告げる。

いや、それよりも外から吹き込んでくる冷風が一番身体に沁みる。あいつそんな寒そうな顔してなかったのに……無茶苦茶冷えてるじゃないか。俺は思わず眉間に皺を寄せて、きよろきよと道路の脇を見渡した。

「悪い。ちよつと先行ってろ」

そして、俺は店先の自販機を見つけると「早く行こうぜ」と、俺の肩を叩いたと透の背中を押し追いやった。

透は何だよ？ という顔をしながらも、その場から離れる俺に文句は言わなかった。

—— ……がこんっ。

何でこう、缶コーヒーってやつは種類が多いんだ。

うー……。

俺は自販機の前でやや思案してから、当たり障りのなさそうなもののボタンを押した。

重たい音を立てて、コーヒーがひとつ落下してくる。俺はそれを無造作に取り上げて……青信号が点滅する横断歩道を小走りで横断した。

「やっぱし、馬鹿だな」

通り過ぎていく人の足元ばかりを見ていた私は、聞き覚えのある声に顔を上げた。

「克己くん」

「誰かまってるんだったら、その辺のカフェにでもはいつて待ってれば良いだろ？ このクソ寒いのに」

そう言っ、大きく嘆息し呆れた顔で見つめているのは、克己くんだ。

彼は最近あやが教えてくれたショットバー「X―クロス―」のバイトさんだ。

この『X―クロス―』というバーが克己くんを入れて、三人で切り盛りしているのだけど、三人ともホストかと思えるほど端正な顔立ちをしている。

まあ、そのためにあやは気に入ってるみたいだし、女性客が殆どだ。そしてその中でも若干、十九歳――だから、お酒は振らせてもらえなくて料理担当だ――の克己くんが一番男前というか抽象的な顔立ちをしている。

「おい？」

その彼が何でこんなところにいるのか？ とか、君こそ一人で何をしているのか？ とか、ぼんやりと考えながら彼を見上げていると、痺れを切らしたのか苛立たしげに確認がはいった。

カルシウム足りてないんだろうか？

やれやれと、私も短い息を吐いた。

「良いんだよ。ここで約束したんだから、ここで待ってないと着いたとき寂しいでしょ」

小動物のような丸い瞳を静かに細めて微笑みつつ、俺を偉そうにも諭すようにそういった。

「その誰かは時間を一時間以上も間違えているのか？」

俺は口にしたあとで、一時間も前から見ていたことをばらしてしまったと気まずい思いをし、いい訳を考えたが、それを口にする前にこいつは微笑んでいた瞳を曇らせて見上げていた視線を落とした。

—— ……もうこないかもしれない。

幾ら馬鹿でも、そのくらいの考えはあるということか。そう思った俺はもう一度小さく溜息を吐くとポケットを探った。

「ほら」

そして、買っておいした缶コーヒーを無造作に彼女に手渡した。彼女は一瞬驚いた顔で俺を見たが「やるよ」と俺が付け足すと、その小さな両手で缶を包み込み

「ありがとう。あったかいね」

ほんわり笑ってそういった。

思わずそんな彼女を見て、俺まで顔が緩みそうになったがそんな自分がどうしても許せなくて「じゃあ」と片手を軽く上げて一つ先の横断歩道で待っていた透のもとへ歩いた。

「ありがとね」

もう一度そう囁いた彼女の言葉に見送られ、俺は足早に信号も確認しないまま横断し、透と合流した。

「行くぞ」

呆けていた透の肩を叩いて俺は先に歩き始めた。

「珍しいな。知り合いか？」

「別に、只のバイト先の客だよ」

大股で俺に追いついてきた透が、ものめずらしそうに聞いてくるのでそっけなく答えた。

（それが、珍しいっていうんだよ）

その後、透が何事か口籠ったような気がしたが、そんなこと気に掛ける余裕がその時の俺にはなかった。

声を掛けたあとで、どうしてあんなことをしたのか良く分からなかったのと、どうして、目を引いたのか、何となく分かったような

気がしたからだ。

待ち続けているはずなのに、あいつは楽しそうだった。

思わずそう感じた自分が信じられなくて、何だか自分のことではないのに気恥ずかしかった。

馬鹿な女だ。

ああいうのは絶対騙される口だ。

待ち合わせの相手も他の女の方が忙しいんじゃないのか？

そう、心の中で毒づくことで俺は何とかその感情を隠した。

辺りはすっかり暗くなってしまった。

行きかう人たちはカップルか、家路を急いでいるような会社員が殆どだ。

いい加減待ちくたびれてきた。私は、んーっと両手を空に突き上げて、身体を伸ばした。腕がぱきっとなってちよっと痛かった。

それにしてもどのくらい、待ったつけ？ 携帯ならしてみようかな？ でも、仕事でだったら迷惑かもしれないし。やっぱそれは拙いでしょう？

そんなことを考えて、もうあと少しだけ待ってみようと、一人で頷いた。

克己くんに貰った缶コーヒーはとっくに冷めてしまった。
オリジナルブレンドか、当たり障り無いな。

暖かいうちに飲んでおく方が良かったのかな？ そうは思ったが
もう遅い。バックの中へ缶コーヒーを押し込んで変わりに鳴らない
ケータイを取り出した。

ちょっと眺めてみた。

やっぱり、着信もない新着メールもない。
小さく溜息を吐いた。

そしてやっぱり慌てて吸い込もうと努力した。

週末のイタリアンレストランはとても賑わっていた。
そして、そんな中俺は透の付き合いで、気の進まないコンパに参
加していた。

「今回は割りとあたりだな」

小声で透がつぶやいた。

社交辞令のように自己紹介がなされていくのを、ただなんとなく
眺めていた。

俺の分は調子の良い透が勝手に進めてくれた。良く回る口だな？

といつもながら感心してしまう。

ざわざわと盛り上がっている室内で、ぼおっとしていた俺はかなり浮いていたんだろうか？ 隣に腰を降ろしていた女が「心ここにあらずね？」とさもおかしげに声を掛けてきたので、俺は素直に顔をしかめた。

煩いんだよ。

そんな俺の心うちを悟ろうともしないで女は勝手に話を続けた。

「瑠香よ。ちゃんと、聞いてた？ 克己くん」

正直、聞いていなかった。

——…大体、俺は

「数合わせに呼ばれた口ね」

俺の台詞を取り上げてそう締め括った瑠香の返答に困って口を間誤付かせた。

「あ。いや」

腹の底を見透かされたような気がして、俺は目を伏せた。

瑠香はおもしろそうに笑うと、テーブルの上の空になったグラスをからからと、揺らしていた。憂いを帯びたような瞳でじっとそれを見つめていた。

美人という形容詞はとても似合わないが、そうしている姿は少し色香を含んでいる。

「でよっか」

—— ……ぽつり

俺が考えていたことを感じ取ったのか、大人しそうな彼女からのその一言に俺は必要以上に驚いて動揺してしまい、片手を胸の前で振った。

「いや、今日はそんな気には」

そして、いい訳のようにそう口ごもった俺に、瑠香は小さく笑うと

「そういう意味じゃないよ。ただ、ここにいたくないだけ」

と、口にしてもっと声のトーンを下げると

「帰ろう」

そう呟いた。

そしてその時の瑠香の視線はそこにはなかった。

一体瑠香がどこを見ていたか……そんなこといちいち気に病むほど俺はお人よしではなかった。

只の利害の一致だ。俺は「そうだな」と頷いて立ち上がった。

「あれ？ 瑠香お持ち帰られ？」

つれの女達に、瑠香が帰ることを続けると、妙な反応をされてしまった。

まあ、どう思われてもかまいはしない。

俺たちは、揃って店を出た。

暖かかった室内から出た俺は小さく肩をすくめた。

―― …… やっぱり今日は、冷えるな。

「さてっと、ここで良いよ。何か用事があるんでしょ？ さっきから落ち着かないみたいだし、私適当にタクシーでも帰るから」
「ああっと、いや、ちよっと確かめたいことがあるだけだから。それが済んだらちゃんと送るって」

幾ら薄情な俺でも、夜に女を一人でふらふらと帰らせたりはしない。
い。

その後何かあったら後味悪いじゃないか。

じんじんと指先が冷える。

ブーツで固めた足先もかじかんでいるような気がする。足首から下が氷のような温度になっているだろうことは容易に想像出来た。

私は真っ白な息を吐きながら、ぎゅっと握り締めた携帯が、やっと、音を伝えたのに弾かれるように肩を強張らせ慌てて相手を確認する。

「碧音ちゃん？」

聞き覚えのある優しい柔らかい声。小西さんだ。

「はい」

悴んで震えそうな声を抑えて私は、短く返事を返した。

「今日はごめんよ。どうしても仕事が抜けられなくて、もう、家だよね」

心配そうな彼の声には私はまさか待っていたなんていえなくて、一度、息を大きく吸い込んでから落ち着いて答えた。

「はい。今、ご飯食べて家についたところです。仕方ないですよ。仕事だし。気にしないで下さい」

後は、何を話したかよく覚えてない。

かじかんだ手と、震える声を隠すのが精一杯だった。じゃあと、電話を切るまでこらえていた涙が溢れた。

零れた涙に冷たい風が当たって頬に針が刺すような痛みを感じる。

しばれるなー。

ごしごしと乱暴にコートの袖で涙を拭って、タクシーを捜すが、都合よく見つかってくれる車はそうそうない。

もっと大通りまででないと無理かな。

私はがつくりと落ち込んだ肩を何とか奮い起こした。

「――……っ！」

通りを挟んであいつが立っていた場所を確認して驚いた。

――……まだ居る。

馬鹿だな、良くは確認出来ないが、明らかにすっぱかされているのは確実だ。

呆れすぎて声を掛ける気にもならない。というか、あれだけ肩を落としている奴に掛ける気の利いた言葉が自分の口から突いて出てくれるとは到底思えなかった。

やれやれと、振り返ると瑠香がタクシーに乗り込もうとしていた。

「瑠香。ちょっと待て、タクシー譲って」

空いたドアから乗り込もうとした瑠香の肩を掴んで、頼む。と、重ねると瑠香は不思議そうな顔をしはしたが「いいよ」と頷いた。

恩にきると礼を告げた俺は、タクシーに頭を突っ込んで運転手に凍死寸前の馬鹿女を乗せてくれと頼んだ。

タクシーの運転手は面倒臭そうな顔をしたが、客が付くことには変わりないと思ったのか、承諾し、車を回してくれた。

あいつの前でタクシーがハザードをたいて停止し、再び走り出したのを確認すると俺は一息吐いた。

「へえ、克己くんてあんな感じの子がタイプなんだ。意外かも」

瑠香の声で自分に連れがいたことを思い出した。

「そんなんじゃないよ」

心底驚いたように声を掛けた瑠香に俺はそう軽く交わして、大通りへ進み出て新たなタクシーを拾うことにした。

「それより、お前こそ真と知り合いだったのか？」

自分のことを聞かれるのは懲り懲りだ。何か他の話をと、とりあえず振ったその質問に瑠香があからさまに身を強張らせたのを見て、

返事を聞くまでもなかった。

「私たち付き合ってた、のかな？」

質問したのは俺だが、遅疑逡巡した結果瑠香が口にしたのは質問返しだった。

その質問に俺は怪訝な顔をするしかなかった。真に特定の彼女がいたという話は、聞いていないような気がしたからだ。

「知らない？ よね」

小さな溜息のあと、彼女は言葉が続けた。

「私が、同じ講義受けてること。克己くん知ってる？」

それも初耳だ。基本、あまり関心がなくて講義のメンバーなんていちいち覚えていない。

「それも、知らないみたいだね。私ってばそんなに地味かなあ」

地味か。一言で済ませてしまうなら、その言葉がしっくり来るのだろうか。俺は記憶の糸をたどった。やっぱりはつきりは思い出せない。

いや、しかし、それをあえて瑠香が気にする必要はない。

俺が覚えているメンバーなんていつもつるんでるあいっくらくらいのもので、他は余程でなければ2回目でも「はじめまして」の仲だ。

「私は知ってるよ。克己くんってば、目立つもん。麗華さんといつも一緒でしょ」

またこれだ。

俺は知りもしない奴でも俺のことを知っている。
これほど面倒なことはない。

俺を知っているというのは間違っている。見たことがある。
もしくは噂を聞いたことがある。

これが正解だろう。

何といっても俺が留香と話をするのは今日が初めてだ。（多分）
それにしても……

——…麗華……ああ、あいつか。

「あれは勝手についてくるだけだ。好きで一緒にいるわけじゃない」
「学内一の美人を捕まえてそれはないでしょ」

学内一の美人。

そうか、麗華は確かそんな呼ばれ方をしていたかな？ 確かに外
見は目立つ。中身は根っからのお嬢様気質。自分の思い通りにいか
ないと気に入らない、俺が一番苦手なタイプだ。

自分に屈しない俺が余程気に入らないのだろう。付き纏われてい
い迷惑だ。

俺は歩道から一步踏み出して、回送中のタクシーに手をあげた。
運が良い。

タクシーは一発で俺を見つけてくれた。近寄ってくる車に俺は歩道まで下がった。そして、そういえば、俺はふと思い出したことがあった。

「ありがと」

結局のところ、瑠香と真がどんな仲だったのかとか、まあ、いろいろと詳しいことを聞かないまま、俺は瑠香をタクシーに乗せた。

瑠香は素直にタクシーを止めただけの俺に礼を告げて、少し淋しそうに微笑んだ。俺は思いたしかけた何かを探るように問い掛けていた。

「お前、上、何ていうんだ」

閉まり掛けたドアの向こうで瑠香は俺の質問に少し不思議そうな顔をした。しかし、結局は俺の意図なんて分からないとばかりに口元を緩めて

「川合。だよ。川合瑠香」

小さく笑いながらそう告げたのが早かったか、発進するのが早かったのか……いい勝負だった。

そして、俺は走り行くタクシーを静かに見送った。

— 1 —

—— サアアアアア……

暖かいシャワーで冷え切った身体が徐々に温かくなってくる。
手足は氷のように冷たくなってしまっていた為、お湯が痛いような感覚にさえなってしまう。

肌を包む暖かな湯気のぬくもりにほっと息をつき、ふう……と、小さく、そして重たいため息を吐いた。

—— きゅっ

止まったシャワーの先端からぽたぽたと雫が落ちる音までもがにぎやかに聞こえる。

腰のあたりまで伸びた栗色の髪から落ちる水滴も気にすることなく、バスローブを羽織ってバスルームをあとする。

別に、お酒に逃げてるわけじゃないんだけど。

私は、自分にそういう聞かせながら、途中で購入したワインのボトルを抜いた。

グラスになみなみと注いで、リビングの椅子に腰掛けて、ぐいっと飲み干す。

体が一瞬熱くなるのを感じたけど、このくらいで酔いが回って眠

ってしまえるわけもなく、私は2杯目を注いだ。

テーブルの上に結局口にするこの出来なかった缶コーヒーが行き場をなくしてぼつんと、鎮座している姿が何だか自分のようで見ていられなくて、私はそれを冷蔵庫へ突っ込んだ。

「おはよう」

がっくりと落ち込んで自棄酒を呷ってベッドに横になると朝だった。

容赦ない朝日はカーテンを閉め忘れた私に、無遠慮に陽光をあててきて二日酔い気味の頭を刺激する。

—— ……でも、仕事にはいけないと

這うようにベッドから抜け出して、ようよう出勤してきた私に掛かる聞きなれた声は、朝の喧騒のように晴れやかだった。

私が気だるい雰囲気を全身にまもって振り返ると、その視線の先では、今朝もかっちりブランドスーツに身を包んで襟には一枚一万円のスカーフを小器用に巻いた私の良き友人…泉あやが予想通りの笑顔で立っていた。

そして力なく返答した私の肩をぽんつと叩くと

「何、あんた。また朝まで飲んでた口？　すごい顔してるわよ」

と遠慮のない言葉を投げってくる。

いつものことだが、あやの言葉は的を得ている。言い返す言葉もありません。

とはいえ

「んん。それも、あるんだけど。何か風邪っぽいのよね」

ようよう辿りついた社内のロッカールームで、脱いだコートをハンガーに下げながら付け加えた私にあやは奇声を上げた。

―― ふ、二日酔いの頭に響くのでやめてください。

ほろりと心で涙して、私はどうしたの？ と問い返した。

あやは悲劇のヒロインのようなオーバリアクションを取ってくれる。

「今日またコンパに付き合ってもらおうと思ったのに。風邪っ?!

風邪ですって？ 参加できないなんてことないわよね」

「え？ 何、また人数足りないのに予定したの?」

あやは当然っ。という顔で深く頷いた。

「あのねえ。私を頭数に入れてコンパ組むのやめてよ」

何度同じ台詞を口にしただろう。

個人的にコンパという席が私は苦手だったし、紛いなりにも今現在彼氏持ちだ。彼女探し中の男性のお力にはとてもなれそうにない。

「まあ、今回だけでもお願いよ。碧音。このとーり」

—— ぽんっ！

と、あやは顔の前で両手を合わせて、私に哀願の目を向ける。
私はこのあやのお願いに弱かったりする。頼まれるといやと言えないこの性格。

「あやのお願いには弱いな」

私は小さく息を吐き、眉を寄せたまま笑顔を作った。

ありがとうっ！ 感極まったあやが私にタックルし抱きしめてくる「うげえ」女の子なのに、思わず蛙を潰したような可愛らしくない声を出してしまった。

「決定。7時に『X―クロス―』で待ち合わせて行こう」

そういう捨てると、私の返事も待たずにあやはさっさと更衣室を後にしエレベーターに乗り込んだ。

全く持って不思議なんだよね。

あやと私ってばちっとも、似てないのに仲が良い。

あやのほうが2つ上でこの「情報処理室」チーフをしている。
簡単にいうと、この会社が集まってくる情報は一度そこを通過して、各部署に分けられるわけで広い意味で社の中樞みたいところのトップだ。

所謂、キャリアウーマンって、やつかな。

私の前であんな風にはしゃぐと思ったら、伊達に近い眼鏡を掛け

てパソコンのディスプレイに向かう仕事モードの彼女の姿は圧巻だ。

そのギャップが彼女に人気を生むのだろう。

若干、人——この場合男性を主に指すのだが——の気持ちを金で計る節があるところが私としては、心配だけど。それ以外は、非の打ち所のない完璧な女性だ。

そして私といえば、まあ、普通のOLさん。
企画処理みたいなことを主にやっている。

雑務が殆どで5年保存の義務のある書類などの管理までやらされている。

私は、少しむくんだ顔をぺちぺちと叩いて仕事場へと向かった。
ちよつと、早かったかな。

私は、あやとの待ち合わせで場所である「Xークロスー」のある
雑居ビルの前に来ていた。

あやが時間通りに来ることなんて最初から期待してないけど、今日は残業もなく早めにきりがついてしまったのだ。

私は静かに開いた自動ドアをくぐった。

運良くエレベーターが下りてきたところだった。私はぼちっと上向きの△ボタンを押して開いたドアの中へ気分良く乗り込んだ。そして当然『Xークロスー』が店舗を置く階を押した。

正面の壁に掛けてある鏡でそっと前髪を直しながら、閉まってくドアに目を向けた。

そしてドアの閉まる瞬間！

—— がんっ！！

何かが派手にぶつかってきた。

私はびくっと肩を強張らせて恐る恐る振り返った。

殆どしまっていたドアから手っ！ 手が生えていたっ！！

私は声に鳴らない悲鳴を上げて、どんっ和后ろの壁に背中を着いた。

「ちょ！ 待って！」

挟まった手に気が付いたエレベータは、ゆっくりと閉まったドアを再び開き、挟まった人物を快く招き入れてしまった。

倒れこむように入ってきた男の人は両膝に手を突いて肩で息をしている。

「だ、大丈夫ですか？」

恐る恐る問いかけた私に、彼は片手を挙げて「大丈夫」の意思表示をしているようだ。

「何階？」

「っ、はあ、は？ え、何？」

「だから何階ですか？ ——って、克己くん？」

階数のボタンに手を添えて、大丈夫だという彼に続けて問いかけた私に素っ頓狂な声を上げた彼に見覚えがあった。

彼も私に覚えがあったらしく、真っ直ぐに立ちなおすとちらりと光っている階数を確認してから鏡に寄りかかり

「ああ、あんたか」

と一言。

随分な挨拶だ。

しかし！ あくまで彼は年下でまだまだお子様なのだ。
ここで大人の私が目くじらをたてるわけにはいかない。
それに、彼には少なからず借りがある。

「そうだ。昨日はありがとうね」

にしてもまさか、こんなところであうとは思わなかった。
とりあえず、話題もないので礼を告げた私に、克己くんは記憶の糸を辿るように逡巡してから「ああ」と頷いた。

そんなに昨日はいろんなことがあったのだろうか？

「——で、やっぱり時間、間違えてたって？」

「うん。そうみたい。コーヒーが冷める前には会えたよ」

「ふ……ん。なら良いけど」

克己くんに私の事情は関係ない。

彼が本当は来たいようがいまいが関係のない話だ。この場を丸く治める為に私は小さな嘘を付いた。

にこりと微笑んで口にしたはずなのに、克己くんはそんな私の顔を見て、何故かなんとも言えないような顔をしていた。

どうかしたのかと聞き返そうかと思ったけど、そんな時間もなく、エレベータのドアは店のある階に到着し、ウィ……ンと、僅かな機械音を響かせてドアが開いた。

開いたエレベータのまん前に店の入り口がある。

——カランカラン……。

先に行つて。と、克己くんに残ろから囁かれて、私は克己くんに背中を押されるように硝子のドアをぐいっと押した。

小さなウエルカムベルが可愛い音を立てる。

「いらっしやいませ」

マスターが入り口から見えるカウンターから私に一声かけたが、

静かに裏へ行こうとした克己くんを「遅刻ですよ」と見逃さなかったので少し噴出してしまった。

「今日はお一人ですか？ カウンターで？」

「ああ。どこでもいいですよ。優さん、髪型変えたんですね」

私を、席へと案内してくれたのは――確かあやの説明によると、あやと同じ年ってことだったから27歳でマスターの片腕さんらしい――本名かどうかは知らないけど『優』さんだ。この間ここへ訪れたときにはサラサラのストレートヘアだったと思ったんだけど。

「そうなんですよ。初めて、パーマをかけてみたんです。どうぞ」

少し照れくさそうに毛先をくるりと指に巻きつけて笑いながら頷いた。

柔らかそうな金に近い茶色の髪もヘーゼルのカラコンも少し小柄な彼にはとても良く似合っていた。

「ここなら夜景も見えるし、時間を潰すにはいいですよ？ あやさんでしょ？ 待ち合わせ」

「え？ はい」

カウンターの一番端の席の椅子を私に引いてくれ、手に持っていたコートを隣の席にかけてくれた。

「待ち合わせは7時ってところですか？」

「ええ」

「8時過ぎないと良いですね？」

訳知り顔でそういった優さんに私も思わず苦笑してしまった。一時間で来るならまだましだろう。

では、ごゆっくり。と笑顔を残して、優さんは他のお客さんのオーダーを取りに席を外した。

ちよつと、時間は早かったから開店早々だったと思うのに、もう何人かお客さんが入っていた。

そして、私がよいしょと椅子に座りなおして一息吐くより早く

「ほら」

とエプロン姿の克己くんがおしぼりを差し出してくれた。それを受け取ると間髪居れずに注文を聞かれた。

——接客なってますんよ。克己くん。

私はそんな愛想のない克己くんの接客にもめげずに口を開いた。

「マスターに何かてきとーに振ってもらって」

「空っ腹に飲むと回るぞ」

その言葉をいい終わる前に

「克己。オーダー入ってますよ」

克己くんはマスターに呼ばれて「じゃあ、適当に持ってくる」といい残してその場を離れていった。

私はその後姿を見送ってから、ほう、と眼下に広がる夜景を眺めた。

それにしても最近小西さんとともに話してないなあ。私は、バッグから何の着信も伝えていない携帯に目を落としていた。

私は、小西さんにとって。

いや、そんなこと考えるのはよそう。

彼を疑うことになってしまう。

それだけはしたくない。

誰かを、疑うなんて

―― ……はあ。

駄目だと分かっているにもかかわらず出てくる溜息を吸い込むことは出来なかった。

「―― マスター。ちょっと聞いてもいいですか？」

ややして運ばれてきた柔らかくて甘い香りを漂わせる、乳白色のそれを眺めながらの私の問いに、マスターは不思議そうな顔を見せつつ次の言葉を待ってくれていた。

「あの、何で、卵酒なんですか？」

お店の雰囲気にもったくそぐわない湯呑みを片手に、そう尋ねた私にマスターは明らかに焦っていた。

いつもは心情の伺えないポーカーフェイスを地で行くような人なのに、緩やかに弧を描いていた瞳は驚いて開かれていた。

「ご注文ではありませんでしたか？」

「ううん。何でもかまわないって言ったから、間違いつて訳じゃないんだけど」

「あんた、風邪気味なんだろう」

動揺しているマスターの横から克己くんが口を挟んだ。

そして「お客さんですよ」という優さんの言葉にマスターは小さく頭を下げるとその場を離れた。

「でも、どうしてわかったの？」

「昨日は、寒かったんだ。あんなところで何時間も待ってたらどんな馬鹿でも風邪くらいひく」

リゾットを差し出しつつ、私の疑問に何の遠慮もなくすっぱりと答える。

「顔も赤いみたいだし、熱でもあるんじゃないか？」

続けてそういったあと僅かに視線を逡巡させて一呼吸おくと、少し躊躇ったような口調で克己くんは続けた。

「――だから……」

「――……？」

「来なかったんだろ？」

――……ズキン……っ

心のどこかが痛んだ。

「来なかった」その一言が私の心に、重たく押し掛かった。

「ええっと、見られてた？」

—— 驚いた。

俺の問いかけに、もっと深刻な顔をすると思っていたのに、

「どうしても、仕事が抜けられなかったんだって。仕方ないよね」

「仕方ない」そういったこいつは、困ったように眉根を寄せてそれでも、へらへらと笑っていた。

俺が関係のない部外者だから、平静を装って他人には怒りを見せたくないのか？

それともそんな目にあっても、何とも思わないのか？ どっちかは、俺には判断することは出来ないが、少なくとも男にすっぽかされるなんて喜ばしくない事件であることは確かじゃないんだろうか。

それなのに、まるで昨日の天気の話でもするように口にした目の前の女が気に入らなかった。

「静也。ちょっと、待ちなさいよ」

「どうしたの？ 泉」

帰宅する社員の姿もなくなったオフィスビルの一階で呼び止めら

れたのは小西静也。

泉と呼ばれたのは、あやのことだ。

静也はあやの姿を確認すると細身の黒ぶちのメガネの奥からやさしそうな瞳が微笑む。

「あんた、いい加減あの子から手を引きなさいよ。あの子はあんたが遊ぶような子じゃないわ」

何の挨拶もなしにいきなり用件から、いきり立つあやに静也はますます笑いがこみ上げた。

「ひどいな。別に僕は碧音ちゃんのこととは遊びだなんて思っていないよ」

「やめてくれる」

重ねたあやの様子を見てさもおかしげに笑い肩を竦めると静也は聞く耳持たないとばかりに話題を変えた。

「これから、夕食なんだけど。泉も一緒する？」

「遠慮するわ。今日は碧音とデートなのよ」

「そう。ご苦労様」

素っ気無くそう答えたあやの肩を静也は終始笑顔を決やすことなく軽く叩くとその場を離れた。

あやは片手を軽く挙げて去っていく静也の後姿を睨めつけると下唇をかみ、言葉を殺した。

—— カシャン。

ガラスの割れる音が店内に響き、店内は水を打ったように静まり返った。

頬に痛みが走った。
驚いた。

大きな瞳には今にもあふれ出しそうなくらい涙が溜まっていた。
そしてその瞳は怒りに満ちていて、俺を真っ直ぐに見据える。
俺はその視線から逃れることが出来なかった。

「怪我、ないですか？」

永遠に続くのではないかと思われた沈黙を破ったのはマスターだった。

大股で彼女に歩み寄ったマスターは、迷いなく膝を折って床に散らばった湯呑みのかけらを集めつつ立ち尽くしていた女に声をかけた。

その声に、はっと我に返ったのか、女は俺からようやく視線を反らし、頬を紅潮させると慌ててしゃがみこんで破片を拾い集めた。

「いたっ」

「大丈夫ですか？ 気にしないで良いですから、座っていてくださいね」

慌てていたせいか、案の定、指を切ったらしい、人差し指を唇に添えて勢いよく立ち上がると

「わっ私！ 帰ります！！」

と、口にして俺を振り返ることなく、優に勘定を済ますと足早に出て行ってしまった。俺は動けなかった。

「克己」

マスターの呼ぶ声も俺には届いていなかったらしい。俺が気がついたときには、マスターは明らかに怒っていた。

「裏で顔を冷やしてきなさい。それと今日はもうフロアに出なくて良いです」

「――……」

「克己。聞いてるんですか？ 早く行きなさい」

「あ？ ああ。悪かった……」

呆けていた俺にマスターは念を押した。俺はこういうときどう対処して良いか、全く分からなかった。

僅かな謝罪の言葉だけ残して俺はマスターにいわれるままに裏へ引っ込んだ。

「優。他のお客様にワングラスサービスしてください」

「ああ。そうですね」

マスターと優とのやりとりがどこか遠くで行われている事のように現実味を失っていた。その時の俺の現実、僅かに熱を持ってちりちりと痛む頬ぐらいだった。

「ええっ?! 帰った?!」

それから10分程経って、あやが店に入ってきた。カウンターから驚きを隠せない声が聞こえてくる。

—— ……説明しにくいしかないか。待ち合わせしてるっていったいな。

俺は小さく溜息を吐いて、重い足取りでフロアに出た。あやは、カウンターの一番奥、あいつが座っていた席だ。

そこでマスターと話していた。

「あ、こら。裏にいなさいっていったでしょう」

歩み寄った俺に気が付いたマスターは、眉根を寄せてそういったが、俺を見つけたあやはにやにやとした笑いを浮かべて俺に手招きをした。

「ああ。克己、あなたでしょ。諸悪の根源は。マスター、私は克己から話が聞きたいわ。良いでしょ」

—— ……諸悪の根源ってひどいいわれようだ。

俺は思わず肩を落とした。

マスターはあやと俺を順番に見てから、やれやれ。と、いった表情で俺にその場を勧めた。

あやはその様子をさもおかしげに見ていたが、急に携帯の電子音が響いた。

「あつ、忘れてた」

その着信音にあやは焦った様子もなく、俺にそこにいると命令し俺の身柄を確保してから電話に出た。

「ああ、ごめんね。今日どうしても人数がそろわなくて。ぎりぎりで悪いんだけど、また今度埋め合わせするから」

—— ……こいつは、絶対悪いなんて思っていない。

片手で半分ほどなくなったグラスの中の氷をぐるぐると回しながら、肩に携帯を挟んで空いた手でカウンターをこつこつと叩いていた。

余程、面倒臭いのだろう。

あやはそんな態度とは裏腹に昇り調子な声で何度か相槌を打つと電話をきった。

「良かったのか？」

「いいのよ。あの子が帰っちゃたんじゃ、話にならないもの」

きれいに整った顔を緩ませてあやは笑顔でそういった。まあ、あ

やになんていわれても、あんまり嫌な気はしないだろうな。ふとそんなことを考えてた俺に

「ちょっと、克己。あんたその顔、ひっぱたかれたの？」

あっと、まだ赤かったか？

手を伸ばしてきたあやを避けて思わず頬に手を当ててしまった。

「へえ。流石、克己ねえ。あの子を怒らせただけじゃなく、手まであげさせるなんて」

「流石って」

つい避けてしまった事に気を悪くするでもなく、あやは心底感心したように、感嘆の声を上げた。

—— ……ほっといてくれ。

家路に着くまでに何度も……何度も後悔した。
どうして、克己くんの手をあげてしまったんだろう。
まだ、震える右手を見つめながら私は思った。

きっと痛かっただろう。悪いことをした。

何もそんなに怒ることはなかったんだ。私のことを知りもしない
彼にそんなに腹を立てることなんてなかったんだ。

—— ……ばたんっ！

木製のドアが壊れそうなほど乱暴に私は部屋の鍵を外しドアを開
けて部屋の中へ雪崩れ込んだ。

走って帰ったため、息はあがっていた。

ダイニングテーブルに両手を着いて肩で何度も短く息を吐いてい
るうちに頭もくらくらしてきた。克己くんの指摘通り熱でも出てき
たのかもしれない。

体中にダルさを感じて私はそのままよろよろと寝室まで足を運び
ベッドに倒れこむ。

スプリングは僅かに軋んで私の疲れきった身体を柔らかく包んで
くれた。

それにしてもどんな会話をしてたんだっけ？

ごろりと寝返りを打った私は天井の灯っていない電気を見つめて、ぼんやりと会話の節々を思い出そうとした。

確か、昨日の話をしている時に、克己くんが……

—— ……本気で愛されたことのない淋しい女。

とか何とか、そういったんだ。私ってばそんな言葉に血が昇っちゃって。

……だって

だって……

私にとって凶星だったから。だから堪らなかった。

自分でも避けて通ってる言葉をすっぱりと口にされて、本当……堪らなかった。

でも、何で克己くんあんなこといったんだっけ。普通の会話でそこまでの話しになったりしないよね？ きつときっかけがあったはずだ。私が、何かいったんだ。克己くんがあんなことを口にしてみようような酷いことを、きつと、口にしたんだ。

私はその内容を少しでも思い出そうと額に腕を乗せて、うーんつと唸った。

お互いの台詞の端々しか思いつかない。

「あ」

—— ……本気で誰かを好きになったことのないような人には分

からない。

あまりに、しらっとしている克己くん、かちんときてつい、
いってしまったような気がする。

きつとそれに克己くんも頭にきたんだろうな。

自分で招いた結果ってことね。

私は「ああ」と一人唸り声を上げてベッドの上をごろごろと
と転がると自己嫌悪に陥ってしまった。

――…もう、寝よう。

明日、仕事の帰りには謝ろう。克己くんのご飯は、お、いし、い、
し。

「私だって、あの子にいろんなこというけど、怒ったことなんて一
度もないわよ。まあ、私にはそれが悲しいけどね」

あやは、着々とグラスを進め愚痴るように俺に話していた。

加えてマスターの機嫌はいまいち良くなって、俺は帰り支度をし
てあやの隣に座っていた。

「私ね。あの子のこと凄く好きなのよね。なんていうか、一生懸命
でしょ？　ひとりで空回りして。頑張って。仕事もそうなんだけど、
恋愛ってやつ？　あれにも、凄くまっすぐで」

からからと、ブランデーの入ったグラスを片手に微笑みながら話をするあやは綺麗だった。

あやが、もてるのは分かる気がする。

何だか、一つ一つの動きが映画のワンシーンのように絵になっているから。見ていると目が離せなくなる。

そんなことを考えていた俺の心を知ってか知らずか、あやは、ますます綺麗に目を細めると嬉しそうに話を続けた。

「あんな馬鹿な子みたことないもの。私はほら、人にどうこう言えるほど良い恋愛ってやつをしてきたわけじゃないからさあ、信じるなんてこと馬鹿馬鹿しいでしょ？　というか、そうなって当然だと思わない？　ああ、私を裏切らないのは諭吉だけよ」

そういうとあやは、おもむろに左手の中指に嵌っていた花をモチーフにカットされたダイヤに口付けた。

「で、それが普通。でも、あの子ってば馬鹿だから何回でも信じちゃうのよねえ。どんなに酷い裏切られ方しても、騙されていたとしても、あの子の目は、まだ真っ直ぐ見ている。だから、あんな男に引かかるのよ」

そこまでいうとあやはグラスをぐいと空けた。

—— ……ふう。

と色っぽい吐息が漏れる。

「ほんっと、どうしようもない」

「で、なんでそんななのに、あやはあいつに執着するわけ？」

素直な疑問だった。

あやはここへはよく毎回違う男を連れてきたけど、女を連れてきたのはあいつが初めてだった。そう、俺を力任せにひっぱたいたあの女だ。

「わからないかなあ」

俺の問いかけに対して、あやはふっと瞳を細めると俺の鼻先を弾いてにやりと得意げな笑みを浮かべた。

「私にはないものをもってるあの子に幸せになってほしいのよ。それにあの子は絶対に裏切らないわよ。男も、女も。なのにあの子がばっかり裏切られて敵ばっか作ってたんじゃ可哀相じゃない。ああいうのが幸せにならなきゃ嘘よ」

「――・・・」

あやの返答に俺は思わず黙った。

誰も、裏切らない人間なんていない。俺には物心ついたところからこの観念がある。それに、この考えは間違ったことは一度だってなかった。

「今、嘘だって、顔したわね」

「別に」

「いーのよ、それでも」

「なんだよそれ？」

「だって、あんたはあの子を好きになるもの」

「はあ？」

思わず、声が裏返った、一体どこをどうとってそんな話になるんだ？

「私がそうして欲しいなって思うのが本心かなあ？　喧嘩も出来ないような奴といたって面白くないでしょ？」

「――……」

「それに、自分すら信じてないような顔してるあんたには丁度良いわよ」

そこまでいって「さて、帰るか」と席を立ったあやを支えて俺も店を後にした。

あやをタクシーに放り込んだあと、俺はぼつぼつと家路に向かって歩きながらあやのことを復唱していた。

――……自分すら信じていないような、か……。

よく見てんのなあ……あやのやつ。

しかし、だからといっても、だ。ますます良く分からなくなってきた。今あいつには男がいて、どうもその男をあやは快く思っていない？　快くないってだけで、あやは引き離れたがっているのか？　その代役に俺を？　勘弁してくれ。

俺は溜息を吐くしかなかった。

翌朝、雨が降っていた。冬の寒空をますます曇らせて。暗雲立ち込める空は私の気持ちをそのまま反映させているようだった。

でも、風邪は良くなったみたいだ。

ぼおっとする頭は単に目が冷め切っていないせいだろう。

—— あふう。

私は大欠伸をしながらベッドから這い出した。

会社へ向かう足取りは重かった。

2駅ほどの近い距離なんだけど、私はこの地下鉄っていうのがどうも苦手だ。

だから、仕方なくいつもは自転車または早く目が覚めたら徒歩で通うのだけど、生憎今日は雨だ。

天気には敵わない。

そんな気のすすまない時間を過ごしてからの、出社はいまいち乗り気がしない。

天気の悪い日は、朝なぜかあやの顔を見ることはない。早いのか遅いのかよくわからないけど。

とりあえず、私は社内メールを使って、あやへ昨日の謝りをいれておいた。怒ってるかなあ。電話しようと思ったのにすっかり寝入ってしまったっていた。

あやから返信が届いたのは、昼休み前だった。

『おこりんぼの碧音ちゃんへ

気にしないでいいよ。昨日は昨日で楽しかったし。

あと克己も怒ってないからまた、いこうね。

それから、今日のランチはお向かいのカフェに行こう。

心優しいあやちゃんより』

—— …… やれやれ。

……ていうか、やっぱし昨日のことあやにもばれてるのね。はあ。
思わず溜息が漏れた時。

「白羽さん」

声をかけられて振り返ると、弥生ちゃんが資料片手に立っていた。

「どしたの？」

「あのー。これちょっとわかんないんですけど」

「ああ、良いよ。ちょっと待って」

そういつて、席を立とうとしたけどにこやかに私の両肩を掴んだ
弥生ちゃんに再び座らされてしまった。

「—— ……。まったく、返事が返ってこないと思ったら。あんた何
やってんのよ」

「んんー。弥生ちゃんが、わかんないっていうから」

私は、ディスプレイに向かいつつ後ろで呆れ顔を見せるあやに返
事をした。

「あんたまた貧乏くじひいたのよ。あの子がわかんないわけないでしょ。あんたより詳しいわよ」

「え？ そうなの？ まあ、良いよ。夕方までっていったし間に合わせれば良いんでしょ」

あやの溜息が聞こえた。

損をしているのは私なのに、怒っているのはいつもあやだ。あやが私の変わりに腹を立ててくれるから私は怒らなくてすむ。人間関係とは実に上手く出来ているものだ。

そう思って満足気な顔をした私にあやは心底呆れたという風にオバーに肩を竦めた。

「良いわ。何か買ってきてあげる。お腹空いたでしょう」

「うん。私トムヤンクン食べたいなあ」

「ええ?! 今から行くのよ?」

私のリクエストにぶつぶついいながらあやは部屋を出て行った。夕方までの書類も何とか片をつけることが出来た。なんだかんだいいながらもあやが資料集めを手伝ってくれたお陰だ。

—— ……良かった。

朝から降っていた雨はやんでいた。

路上から雨の冷気が上がってきて冷え込む。でも、これなら歩いて帰れそうだ。

そしていつもより若干早く会社を出られたことに気分を良くした私は必要のなくなった傘を軽くふって会社を後にした。

そうだ、そうだなあ。 克己くんに謝罪にいかなくっちゃ。

ああ、なんていって謝ろうか？ あやは怒ってないっていったけど、普通怒るよね。なんといっても私ってば手を上げちゃったし。

そんなことを考えながら歩いていると、ふと足が止まった。

「これ、似合うかも」

手ぶらっていうのも、何だし。

今日は、何だか冷え込むな。

まだ、そんな季節でもないはずなのに少し息が白いような気がする。

—— ……ふう、さむう。

俺はビルの裏で瓶を片付けていた。細い路地を通っていく奴らの早い足音を聞きながら、よいしょとビールケースを積み上げた。

—— ……ごとつごとつ

「克己くん？」

聞き覚えのある声。茶色とベージュのパンプスの先が視界に入っ

て、しゃがんでいた俺は顔を上げた。
声の主はあいつだった。

「あつと。昨日は、その、ごめん」

そういったあいつの顔は真っ赤だった。
会社帰りに立ち寄った。って感じか？ ああ、それはこういうところでは基本？ ていうか、何か謝られてるし。別に気にしてるつもりはないし、俺が怒ったりなんかする必要のないことだとも思うんだけど。

「いい。別に関係ないし」

「ああ、そうだよ。うん。でも、私が悪かったし。その、これ、お詫び」

早口にそういうとずいっと、俺の前に小さな箱を差し出した。

「いらなかったら、捨てちゃったら良いから。じゃあ、今日は帰るよ。ほんとごめんね」

そこまでを一気にいい切ると、くるりと踵を返して来た道に戻り始めた。

「おい！」

俺は思わず、呼び止めてしまった。

あいつは、不思議そうに振り返ると俺の次の言葉を待っているようだった。

「また、来いよ」

しまった！ つい、心にもないことを口に出していた自分に驚いた。

別に来ようが、来まいが俺には何にも関係ないのに。

「ありがと。またね」

動揺した俺の心を知ってか知らずか、とびっきりの笑顔でそう答えると小走りに走っていった。

どうしてだか、あいつが視界からいなくなるまで俺は見送っていた。

―― ……で、これは何だ？

俺は手の中に残された小さな箱に視線を落とし、とりあえず開けるとそこからは、ブレスレット？――一周レザーでできていて、とめ具の部分だけがシルバー？ いや、ホワイトゴールドか――が入っていた。

とりあえず、俺はその箱をポリバケツに放り込んで、中身は右手にはめ店に戻った。

「おい。克己」

透が昼飯に向かう俺を呼び止めた。

「何？」

ついそっけない返事をしてしまう、が、まあそんなことはいつものことなのでお互いに気にしたりはしない。

俺の返答は特に気にも留めていないように、透は自分の話を続け俺の隣に並んだ。

「この間。結局どうなったんだよ。やる気なさそうな顔してたくせにちゃっかり、一番おいしいところもって帰るんだもんなあ。」

「は？ 何のことだよ。それに、一番おいしいところって？」

昨日の冷え込みが嘘みたいだ。今日はとても空が高い。中庭に出た俺は思わず目を細めた。

「溜香ちゃんのことだよ」

「なんだお前知ってたのか？ あの子がここの学生だって？」

「知ってたかだってえ？」

透が何のことをいっているのか、ようやく合点のいった俺はそう問い返したが、透は素っ頓狂な声を上げた。いやいや、説明するよりも……と透は大げさな驚き方のあと

「ええっと。この時間は多分」

「お、おい？」

自分の時計を確認しつつ透は俺の手を引いて中庭を進んだ。そして、大きな木の陰に隠れるとそっと真ん中を指差した。その先には、瑠香が本を読んでいた。

「瑠香だろ？」

「ああ。そうだよ。お前が見るのはそこじゃなくてな、ほら」

そういつて俺の頭を両手で固定すると殆ど無理矢理、視線を移させた。

その先には、ちらり、ほらり、明らかに瑠香を見つめる視線を確認出来た。

「お前ぐらいだよ。知らなかったのは」

「なるほど。なんとなく、分かった」

「真も本当は堂々と、付き合いたかったんじゃないの。ほら、瑠香ちゃんてばあんな調子でお前と一緒に、全然周りの視線なんて気になんねえの。真、ああいうのすっげー気にするから」

「だから、一緒にいるのをやめたって？」

「まあ、そんなとこ。高嶺の花ってやつだったんじゃないの。だから、こないだあんなとこで、あって、相当驚いてたみたいだぞ。まあ、聞くところによると他の子が無理に誘ったみたいだし。前の彼氏のことでへこんでたみたいだからっていったし」

なるほど。分かったような分からないような。

ようするにまさかあんなところでその凹みの原因の男に出くわすとは……と、いったところか？　まあ、兎に角分かるのは俺には関係ないってことかな。

「で、やっちゃった？」

にやにやと、俺の顔を覗き込んでくる透の視線が痛い。

ったく、こいつはこんななんばかりだ。俺は少々呆れ気味に言葉を返した。

「なんもしてねーよ。タクシー拾って帰らせてただけだ」

「へえー。紳士だねえ。克己くんは」

年中発情期のお前と一緒にすんな。

のど元まで出た言葉を飲み込んだ。

それにしても、だからあいつの名前に聞き覚えがあったのか。本人は地味だと思ってるらしいが。

なるほど。

確かに木陰で本を読む姿も絵になっている。絵になる女は大抵良い女だと思うし、実際そうだったんだろう。俺は小さく納得すると、

「透。飯食い行こう」

その場を後にした。

—— ……はあ。

出てくるのは、溜息ばかりだった。

その理由ははっきりしている。今日私は、小西さんにどうしても会いたかった。数日前、食事に行ったきりだったし、何より今の私は迷っていたから。

彼に相談する心つもりはなかったけど、顔をみて私の中で決着をつけようと思っていた。

だから、今日はメールで一方的に呼び出したんだけど。結局、来る気配はない。分かってはいたんだけど。

そう、自分にいい聞かせつつ確認をとらなかった自分に少々腹もたっていた。

一人で飲むお酒はいまいち、美味しいとは思わない。

家で飲むのともまた違う。

この間来た時は小西さんと一緒だったワインバー。

今年も絶妙な香りと舌触りで楽しませてくれる「レ・フォルト・ラトゥール1993」ちょっとお高いワインに手を出してみても、一人ではその話すらできない。

今日、私はチーフに呼ばれた。

また、何か失敗でも見つかったのかと思って、ひやひやしたんだけど。

—— ……その内容は。

「え？ 私がですかあ？」

「ええ。そうよ。あなただったら向いてると思うのよ。チーフ補佐」
「でも、部署も変わるんですよね？」

「営業開発部へ、廻ってもらうつもりよ。今のここより、ずっと良い条件だと思うけど？」

「――……」

私は、チーフの言葉に沈黙してしまった。

言葉にならなかった。

頭の中真っ白になって、何に的を絞って思考を回転させれば良いのか分からない。

「まあ、突然じゃ、驚くわよね。泉さんはこの話が上がってること、知ってたと思うけど。聞いてない？」

――……そんなこと、聞いていない

「その気があるなら、言って頂戴。私が後押ししてあげるから」

チーフはそういうとぽんぽんと私の肩を叩いて、ミーティングルームを後にした。私は、一つ椅子を引くと。どさりっと座り込んだ。

おいしい話なのはわかる。

あやに相談したら帰ってくる返答は大体想像がつく。

問題なのは、その部署だ。

「営業開発部」小西さんのいる部署だし、そんなとこのチーフ補佐なんてなってしまったら、彼の上に立つことになってしまう。

（ちよっと加えると、チーフが部長なら補佐は次長。ちなみに小西

さんは課長なわけだ)

何だか、肩の荷が重い。

小西さんのことだから、きっと喜んでくれる。でも、それを正直に受け止めて良いものかどうか真意のほどは定かじゃないと思う。

はあ、どうしたものだろう。

私は思わず良いワインなのに、一気にグラスを空けてしまった。

「お客さん。ボトル、一本空きますよ」

「すみません。ボトルでいただきます」

空になったグラスにワインを注ぎいれながら、そう声を掛けられて苦笑した私は、すかさず返事を返した。

どうして、私はザルなんだろう。

柔らかなグラスの曲線に合わせて血のように赤い液体を滑らせる。ぐるぐると渦巻く中心を眺めていると吐いた溜息が全て溶け込んでいくようだ。

—— ……溜息成分を含んだワインだなんて、不幸を呼ぶワインとかってなりそう。

自嘲的な笑みが零れた。

「克己。お腹空いたわ。何か作って」

あやは店に入ってくるなりカウンターの中央に突っ伏した。

「珍しく、一人だな。」

「何？ あの子にあいたかったの？」

突っ伏した腕の間から俺の顔色を伺い面白そうにそういった。あの子だあ？ ったく。

あやの言葉に少々機嫌を損ねつつも俺は磨いていたグラスを置いてオーダーを聞いた。

「何食いたい？」

「んゝ何でもいいよ。今日のお勧めとかないの？ シェフさん」

ったく、こんなときだけ子供のみたいな顔しやがって。

「今日はラム肉の香草ソテーだけど、こんな時間に食うのか？」

「ラムか、いいわね。それと、ワインをマスターに選んでもらってきて。もちろん赤よ」

「へいへい」

俺がこんな時間といったのは、もう夜の9時を回っていたからだ。俺も後1時間で、勤務時間を終える。

今日は25日か、給料日だな。

そんなことを考えながら、キッチンへ向かった。

「今日はお仕事だったんですか？」

マスターがワインをグラスに注ぎつつ、あやに訪ねた。

「ええ。今日は会議だったから。遅くなったし、疲れたわ」

「お疲れ様です」

「でもまあ、楽しくなってきたし、いいんだけどね」

「楽しい？」

「んん。人事異動があるのよ。末にね」

そういつて、笑ったあやは何かを企んでいた。

—— RRRR……RRRR……

短い機械音が聞こえた。

私は慌てて携帯を開けると、メールが一件届いていた。そのメールの主は小西さんだ。ほっとすると同時に小躍りしそうなのをこらえて、メールを開封した。

『今、会議が終わった。』

これから、上の人と食事に向かう。

ごめんね。また、今度埋め合わせするから。』

「——……」

—— パタン。

私は静かに携帯を閉じると、最後の一口を飲み干し店を出た。ま

あ、今度があるということは、気にしなくても良いか。不安になってきた自分にそういう聞かせると、酔い醒ましついでに歩いて帰ることにした。

もう、時間も遅い。

すれ違う人たちはみんなアルコールがまわった酔っ払いか、カップルか、そんなところだ。

私も、そんな中の一人になりたかったが、見た目以上にアルコールに強い体に出て来ているらしい。

残念ながら、酔いつぶれたという、記憶はない。

ちらりと、時計に目をやると10時過ぎになっていた。これから食事って、どこに行くんだろう。ふと、そんなことが頭の隅を掠めたそのとき……っ！

——ガツンッ！！

「あいったた」

——……驚いた。

グレーチングに足を捕られてしまった。

ぼおっとしてたのが悪かったな。やれやれと、次の足を踏み出した瞬間。

バランスが悪かった。利き足のヒールが折れている。

がっかり。気に入ってた一足だったのに。

ぐつたりと肩を落として、よたよたと歩車道の境界線を作るガード柵にもたれかかった。ついてないなあ。

—— …… なんとか、くつつかないかなあ？

「んーっ」

私は、ぶらぶらと皮一枚で繋がっているヒールを靴底に押し当てて力を込めてみる。

しかしまあ、無理だね？ 綺麗に折れすぎてる。じゃあ、祈ってみようか。今日のこの不幸な私に一つくらい神様も奇跡を施してくれるかもしれない。

そう思ってヒールの折れたパンプスをぎゅっと握り締めて両目を閉じ一心に願った。

「—— ……」

—— …… はあ、やっぱ無理か。

当たり前だ。流石に馬鹿馬鹿しくなってきた。

「ていうか、あんた、何やってんの？」

「ひっ！」

私は突然掛かった声に必要な以上に驚いてしまった。それはもう、漫画みたいに肩を跳ね上げたと思う。

も、もしかして、み、見られてたかな？

恐る恐る顔を上げて、声の主を確認した。知らない人だったらどうしよう。警察の人とかだったらどうしよう？ 職務質問？ 勘弁してください。

「って、何だ。克己くんか」

「何やってんだよ」

「見てわかんない？ 祈ってたんだよ」

「はあ？」

折れてしまった靴をぶらぶらと見せつつ、そういった私に、克己くんは素っ頓狂な声を出した。その後、暫らく克己くんは、私と靴を交互に見て黙っていたが、おもむろに私の肩をぽんと叩くと

「もっかい、祈ってろ」

とのたまった。

「——…はい？」

「良いから。しっかり祈れよ」

何だか、良く分からないけど、そういわれては、私もやりだしっぺだから嫌とはいえない

不思議に思いつつも一度チャレンジしてみることにした。

――…ふう。

克己くんに祈れといわれてやってみたけど、結果は同じだった。いや、違ってたらし怖いよね？　ちよつと笑ってしまった。

「一人で笑ってると不気味だぞ」

「ああ、おかえり」

そうこう考えていると克己くんが悪態をつきながら戻ってきた。

ようやくと戻ってきた克己くん「おかえり」と声を掛けたのに「ただいま」は、いってもらえなかった。挨拶は人間関係の基本でしょーよつ。全く。

というか、整った顔は不機嫌そうに歪められていた。

私はまた何かやってしまったでしょうか？

「つたく、俺が戻らなかったらどうするつもりだったんだ？　あんな、頭わりーだろ」

「ん？、そっかなあ」

ていうか、私は何で5つも下の子に怒られているんだろう？　首を傾げてしまう。

「ほら」

克己くんは、ずっと私の前にしゃがむと新しいパンプスを差し出し、ひょいと履いていた片方も脱がせて新しいものに取り替えた。

「え？」

そして面食らった私の手を引いて、一気に立たせると、

「まあ、この間の佗びだ。片足じゃ帰れないだろ？」

私と顔を合わせることもなくそういつて、歩き出した。ぐいっと引かれて一歩踏み出せば、あとは二歩散歩について歩き始める。新しいパンプスは、とても履き心地が良く、私の足に丁度良かった。靴のサイズまでいったつもりはないのだけど、良く分かったなあ。と、妙なところに感心してしまった。

「ねえ。克己くん」

「何？」

「ありがとね」

「別にいい」

—— ……うん。自分でもよくわからないから別に良いんだ。

「ねえ。克己くん」

「何？」

「何か、克己くんと歩いてると、目立つね」

「悪かったな。目立つ顔で」

確かに、そういわれると他の奴の視線も気にならなくはない、が、そんなことは大した事じゃない。

「ねえ。克己くん」

「何だよ」

「克己くん家こっち？」

「――…違う。違うけど、酔っ払いを一人で帰すわけにも行かないだろうが。見つけちゃったんだから」

全くだ、見かけたとき「しまった」と思ったんだ。思ったのに、関わってしまった。俺にも感染しちまったのか？

こいつのあほさが……。

「ねえ。克己くん」

「うるせーな。なんだよ」

「あの、さ」

若干何度も問いかけられて腹の立っていた俺は苛立たしげな返答をした。そのあと、急に口ごもったので、何か拙かったかと振り返った。

俺の半歩ほど後ろを歩いている姿に怒気は感じない。どちらかといえば、戸惑いだ。俺も戸惑っている。それと同じかと思ったのに、あーとか、んーとか唸ったあと……

「私、多分一人でも歩けるよ」

そういつてそいつが少しあげた右手につられて、俺の左手が動く。

「っ！……っ、悪い」

俺は慌てて手を離れた。

な、何どさくさにまぎれて、こんなところで仲良く手を繋いで歩いてしまっていたんだ。

くうっ！俺、何やってんだ。

急に脱力感に襲われた。そして俺の視線の先にいるこいつは、慌てた俺を見て、にこにここと笑って、

「克己くんって、左利きなんだねえ」とか、変なとこに関心していた。

それから、暫らく俺的に嫌な沈黙が続くのに、なんとなく並んで歩いていた。そして、沈黙を破ったのは、

「今日は、何だったんだ？」

俺だった。

「何って？」

「よく一人で飲みに行くのか？それとも、また」

「ん？ たまには、一人で飲むのも良いでしょ」

「たまには……か。いや、あやも、一人で来てたからさ」

その言葉にちょっと驚いた顔を見せたが、すぐに目を伏せてしまった。

「あや、何かあった？」

「いや、特に何も？ ああ。人事異動がどうのとか、マスターといつてたかもな」

「そっか」

なるほど、その「人事異動」とやらに関係があるわけか。

まあ、あやが楽しむっていったら、そんなとこだな。

「昇格すんのか？」

「さあ。どうかな？ 私ははどっちでも良いし。ていうか、降格といわれなかっただけ、私結構買われてる？」

「まさか。フツー、客に突然『降格ですか？』とは聞かねえだろ？ にしても、フツー仕事してる以上、上に立ちたいもんじゃないのか？」

その一言に、小さく溜息が漏れた。

「その時と場合によるよ。私は」

そこで言葉を切った。なんとなく、ぴんと来てしまった。

「ふーん。なるほど、男がかんでるわけか？」

「別に」

しまった。また、俺に関係ないことに首を突っ込んでしまった。

「別に」ってそうだって、いつてるようなもんじゃないか。

溜息吐きたいのはこっちのほうだ。

「あのさあ、あんた。そんなに彼氏に気い使うことないんじゃないかねえーの？ 疲れるだろ？」

「――……」

「仕事、あんた何の為にしてんの？ 彼氏の為とかじゃないだろ？ 彼氏だってそんなところに気い遣って欲しくないんじゃないかねえの？」

「――……く、ん……だって……」

俺の質問に小さな声で何かいった。

声は震えているように聞こえたが、顔は下を向いていた為、表情は伺い知れない。

肩が小刻みに震えている。

寒いのか？

いや、この場合は怒りをかったのか？ それとも……このまま放っておけば良い。そう思うのに、俺は問い返していた。

「なんて？」

「だらっ！ 克己くんだってどうなの？ どうして、お医者さんになりたいの？」

「俺？ 俺は家も病院やってるし、なんとなくこうなってたって感じで別に理由なんて」

「ほら、理由なんてないでしょ？ 私だって、そうだよ。別に働いてる理由なんて」

「んじゃあ、男とは付き合ってる理由があるわけだ？」

だから首を突っ込むなっ！ 俺の中の誰かがブレーキを促したが、その時にはもう口からその言葉は吐き出されていた。

俺を無遠慮に見上げてきた瞳にじわりっと涙が溜まる。

「か、関係ないでしょうっ？！ 理由くらいあるわよっ！ 理由くらい」

「あそ。ならいいんだけど」

何だか、やけにつっかかってくるなあ。

—— …… やれやれ

いきり立ってぷいっと顔を逸らした頭をぼんぼんと叩くと、言葉は続いた。

「どうして！ どうして克己くんは、そんなことばかり訊くの？ 訊かれたくないことばかり、その上、いわれたくないことばかりいうし！ 私のことも……そうだよ、名前だって知らないくせに」

そういえば、知らなかった。

最初に聞きそびれると、なかなか後になると訊きにくくなるからな。妙に納得したのもつかの間。

良く考えると、なんだか、こいつは好きなこと羅列しやがって、俺だっていいたくないこと、いわされて、聞きたくもないこと訊かされて、挙句の果てにはひっぱたかれるし、泣かれるし、怒られるし。

—— ……ろくなことないと思うんだけど。

「知らない、くせ、に……」

いつもはなんともない、ていうかさっきまでなんともなかったアルコールが回ってきた。血が頭に昇ってきているのかもしれない。

私は、必死で堪えたけど。止まらなかった。

—— ……ぽろぽろ

大粒の涙が落ちてしまった。

ああ、情けない。私、何泣いてんだろう。

もう、どうしてこうなっちゃうんだろう。

あまりに情けなくって無造作に頬を伝う涙を手で拭った。

「もう、うちそこだから！ 送ってくれてありがとう」

これ以上、格好悪いところなんて見せられない。

「後、これ！ これも、ありがとう。じゃあ、バイバイ」

買って貰った靴を指差しそういつて、私はその場を走り去った。

走り去った。というよりは逃げ出した。

そう、そんな感じだった。

「おいっ！ あんた待てよ！」

後ろから克己くんの困惑しきった声が聞こえた。

ほんとに名前も知らないんだな。私はかつんと踵を鳴らし、肩越しに後ろを振り返ると

「あおねだよ。白羽 碧音！ じゃあね」

「碧音？」

「そう、私の名前っ！」

それだけ告げて後は止まることなく家まで猛ダッシュした。

翌朝、気分は最悪だった。

目は腫れていた。

ぼんやりとする頭をたたき起こして私はシャワーを浴びる。

別に昨日だって、今思えば、大した事じゃない。きっと、あやでも同じようなことをいったかもしれない。

そして、いったのがあやだったら、あんなに取り乱すこともなかったと思う。やっぱり、年下の子に言われたってのがネックなのか？ その辺、自分でも良くわかんないや。

うう。

暗くなる気分を持ち直して、私はコックをひねった。勢い良く水が飛び出してきた。

—— ……水っ?!

「ひゃあっ!」

なんとも間拔けな声を出してしまった。そういえば、昨日の朝、掃除してから出かけたんだった。

はあ。

お湯の温度くらい確認する心の余裕ってもんがあっても、良いのに。私は、一人で突っ込みながら、徐々に暖かくなってくるお湯を浴びていた。

―― ……心の余裕か。

最近の私にはちょっと足りないのかもなあ。だから、あんなにすぐ、感情的になるんだ。

私の心は決まっていた。

辞令は末日。

会社に出かける準備を済ませ、玄関においてある靴に目が止まった。

昨日はあんまり、気にならなかったけど、よく見ると良い靴だ。というか、これきつと5万円近くするんじゃないかなあ。

克己くん奮発してくれたなあ。

とかそんな問題じゃなくて！ 学生から、こんなの貰えないよ。といっても、相手は靴だし履いて外を歩いちゃったし、返品ってわけにもいかないし。

ここは、素直に貰っとくしかないか。

うん。かわいいし。私好みだ。

とりあえず、私はその靴を履いて会社へ向かった。

「あれ？ 靴新しくない？ あんたらしいわね」
「あいかわらず。目敏いね」

あやの顔を合わせての第一声がその台詞だった。あやは、ほんといろんなところを見ている。思わず感心してしまう。

「誰かからプレゼント？」
「え？ どうして？」

思わずどきっとした。

克己くんを買ってもらったなんていえないし。

「ん？ 碧音らしいけど、きっとあんたなら買わないと思ったから。そんなブランド物の新作なんて」
「ああ。そうなんだ」

—— ……はっ！ しまった。

そう思ったときには遅かった。あやは物凄く興味深げな顔で私の顔を覗き込んできた。

「ほら。早く行かないと遅刻になっちゃうよ」
「ええ？ もう、後で絶対聞かせてよ」

私は何とかその場を切り抜けようと、あやの背中を押した。あやはしぶしぶとエレベーターに乗り込んで「ちゃんと教えてよっ！」と、念を押していた。

そして私はその日のうちに、昨夜辿り着いた結論を告げた。

「そう……それで良いのね」

「はい。本当に嬉しかったのですが」

「良いのよ。貴方ならそういうと思ったし」

私は、やはり断った。

そうするしか、思いつかなかった。

小西さんの上に立つなんて……無理。まだ、辞令が出ているわけではないから、きっと上層部でしかこんな話は上がっていないのだろう。

そうなら、小西さんにこんな話が上がっていたことはきっと届かないはずだ。

「私ね。貴方のこと結構かってたのよ」

「え？」

私をかっていた？ その言葉に驚いた。

チーフはあやのように出来るって感じの人で、いつもちゃっちゃと仕事をこなしてて、誰かの力をかうとかそういう風には思えなかったから。そんな人に僅かでも認めてもらえる部分が自分にあったなんて信じられない。

「あのねえ。私はこれでも、ここのチーフなわけ。みんなのことくらいちゃんと見てます」

チーフは私の心を見透かしたように、さも可笑しげに笑った。私は、ちよつと恥ずかしくなって視線をそらした。

「それで、この話を断ったら、どうしようかと私なりに貴方の身の振り方を考えたわけよ」

「――……」

「で、決めたの」

葉月チーフは思わず逡巡してしまった私の瞳を真っ直ぐに見つめてきた。私は正直、この瞬間にいろんなことを覚悟した。

「私の補佐についてもらうことにしようって」

――……はい？

思わずチーフから出た言葉が私の耳に届いた時には、脳内で勝手に私に都合の良いように変換されているのではないかとさえ思えて……間の抜けた声を上げてしまった。

「え？」

「駄目？ これも断っちゃう？」

「あ、いえ、その」

葉月チーフはその雰囲気すら楽しむように、胸の前で組んだ腕を組みなおして、私から決して視線を逸らそうとしない。

私は無茶苦茶動揺し、頬が紅潮してくるのが分かった。

「貴方、ほら、よく弥生に仕事押し付けられてるでしょ」

「え。いや、そんなことは」

「良いのよ。隠さなくても、出来上がったものを見れば、弥生が作ったデータじゃないってことくらいすぐ分かるわよ。弥生のは、確かに高度な出来ではあるし、その点では貴方の方が劣るわ」

「はあ」

—— ……何もそんなはつきりと。

「でもね。貴方のは、第三者に扱いやすいのよ。その後の、処理も変更も誰でも出来るように考えて作られてる。その気持ち私が私は欲しいわ。私の片腕になって欲しいのよ」

嬉しかった。すごく。言葉も出ないくらい、変わりに涙が出そうなくらい、嬉しかった。見ていてくれる人が居る。必要としてくれる人が居る。それだけでも、私にとって十分過ぎる評価だ。

私は、何か口にしたら、魔法が解けてしまうような気がして、言葉なく頷いた。

—— ……そして、週末。

俺は暇つぶしに、大学の図書館にいた。どこで嗅ぎつけたのか、ふらりと現われた麗華がさも当然という風に、俺の隣に座っていたが、それ以上の邪魔はしないので気にしないことにした。いつものことで慣れた。というほうが正しい。

だから、静かな時間を過ごせていた。それなのに、そんな俺の静かな時間を遠慮なく壊しに現れた奴がいた。

「おっ！ 発見。こんなところにいたのか」

もちろんそれ以外にありえない。

透だ。隣に座っていた麗華が少し顔を顰めたのが視界の隅に入っていた。

「今日も麗華さんと一緒か。まあ、良いや」

「どういう意味です?！」

「ごめん。深い意味は無いよ。美人といつも一緒に羨ましいなあと思っただけだよ」

嘘をつくな。嘘を……。

透はどんな女も基本的に好きだが麗華だけは苦手だというのは、疎い俺でも知っている。そして、麗華も透を嫌悪の対象としてみている。水と油で相容れない。

また、こんなところで麗華とひと悶着起こされては敵わないと俺は話を元に戻した。

「で、何だ。用事があったんだろ？」

「そうそう。お前今日誕生日だろ」

「は？ そうだったか？」

思わず間の抜けた声を出した。

「勘弁してくれ。まだ、誕生日と年齢を忘れるにはちょっと早いぞ」

大げさに肩を竦めて嘆息する透に俺は「仕方ないじゃないか」といいそうになって飲み込んだ。大体そんなことをいわれても、誕生日なんかに特別な思い入れなんてない。

別段、変わった日になることなんて、今までなかったし。

「それは、お祝いするべきです」

すっく、と麗華が立ち上がった。

透から小さな溜息が漏れたのが伺えた。透の考えそうなことだ、俺の誕生日とやらを餌に合コンでも開く気だったんだろう。

麗華のお祝いというのにも、透の合コンにも、参加する気にはなれない。体よく断る理由を直ぐに考える。考えていたのに……

「なっ?!」

突然、透が俺の腕をつかんで、図書館を走り出た。強行突破だな。麗華のヒステリーが目に浮かんで、暫らく近づかないで欲しいと俺は心に強く思い、無宗教だが小さく十字を切った。

――…

結局、強引な透に負けて、俺は誘われるままにいつものイタリアンレストランに来ていた。

今夜は若干、人数も多いようだ。

レストランの中二階の一部屋を貸しきっている。透、やる気満載だな。しかし今回、真は来ていなかった。

「今日、真は来なかったのか？」

「ん？ ああ。何か用事があるとかいってたぞ。まあ、瑠香ちゃんも居るし参加しにくかったのかもな」

それを、分かっている、瑠香も呼んだのだろうか。透、鬼だな。公然的に酒も飲めるようになったし、とりあえず、最初の乾杯に使ったシャンパンに手を付けた。

正直、最近の俺はちょっと変だ。

何が変なのかは、よくわからないけど変なんだ。あやの一言も妙に気にかかって仕方ないし。

あいつら、こんなことやって、何が楽しいんだろう？ お互い騙し騙され、くっついて離れて、馬鹿馬鹿しい。

その度に「辛い」とか「苦しい」とかいうくせに、分かっているのに何度何度も繰り返すんだ。

『関係を持った女の数と、恋をした数とは同じとは限らないのよ』

あの日あやは、ふてぶてしく俺にそっくり残して帰っていった。

まあ、実際女に困ったことはない。しかし、どの女も好きだったという感触は一度も感じたことも無い。

好意、か……。

それを抱くことが馬鹿馬鹿しいと思うものの、それを得たことがない俺にそんなことを思う資格はないということも分かっている。

「―― ……ん。克己くん！」

「あ？ ああ。何だ瑠香か」

しまった。

ついこんな賑やかな場所で、物思いに耽ってしまった。瑠香は何度も呼んでいたらしい。ようやく、気がついた俺に少々呆れ顔だ。

「また、考え事？ 克己くんて、いつも何考えてるの？ それとも、酔った？」

―― ……よくいわれる言葉だ。

別に、俺が何考えてようと誰にも関係ないはずだ。なのにどうしてもみんなそんなことを聞くんだ。

俺は気分を害して、視線を逸らした。

気がつかなかったが、みんなそれぞれ、今日のお相手は決定しているようだ。

なるほど、俺と瑠香はあまり者同士ってことか。

「もしかして怒っちゃった？」

瑠香が黙ってしまった俺に心細そうに声をかけてくる。

——…やれやれ。

別に留香が悪いわけじゃない。

もしも、誰かが悪いというのなら、それは俺が自分自身にいうべきだ。俺は自嘲気味な笑みを浮かべると、短く嘆息した。そして、短く告げる。

「別に怒ってない」

「そっか。良かった。じゃあ、ちょっとこっち付き合ってもらって良いかな？」

留香は俺の機嫌を確認すると、にこりと微笑んで席を立ち、ドアの前で俺を手招きした。気は進まないが、ここにおいても楽しいわけじゃないし。席を立ち留香の後ろに続いた。

個室を出ると、結構人が入っていた。

やっぱ、人気店なんだな。と、そんなことを考えていると「あれ？」と、小さく声を上げて瑠香の足が止まった。

「ほら、見て」

「何？」

「ほら、あそこの窓際の席の二人」

俺は瑠香に促されるまま、中二階の階段の踊り場から下を覗き込んだ。

瑠香が控えめに指差した先にいたのは、あいつだった。

男と一緒だ。

あいつはあんな性格だから、きっとあれが噂の彼氏というやつだろう。こんな場所からは、はっきり顔を窺い知ることが出来ないが、物静かそうな落ち着いた感じの男だった。

あいつが好みそうなタイプだ。

俺とは全く正反対だな。

ふと脳裏に過ぎった台詞を俺は盛大に関係ないと否定した。

「この間の人だよね」

「ああ。そうだな。よく覚えてたな」

「んゝ。なんていうのかなあ」

瑠香は、何だか意味深げにそういつて階段の手摺に背を預けると、言葉を続けた。

「雰囲気があるんだよね。何となく、顔とか特別綺麗って歓喜をあげるほどではないんだけど、なんだかあの人を包んでる空気が居心地を良くさせるっていうか」

「へえ」

「あ、今、馬鹿にしたでしょ」

「いや、そんなことはないけど」

そう、そんなことは思わなかったんだけど、女でも同性にそんな風を感じることもあるんだなあとと思って、不思議だったんだ。

思って、もう一度視線を投げる。こちらに到底気が付くことはない。前を見ているだけで、必死な様子が手に取るように分かる。余所見なんてとんでもないだろう。

あいつもあんな顔するんだな。

暖かな毛布に包まれた仔猫のような柔らかい顔をしていた。

まあ、毎回つい関係ない話をしてしまっただけで怒らせてしまうのは俺が悪いんだけど。って、悪いのか？ いや、俺は別に悪くないだろう。正論に一々噛み付いてくるあいつが悪い。

もやもやと胸の奥がざわついて、意味の分からない不愉快な気分になった。

――…もう一回、飲みなおそう。

みんなが馬鹿騒ぎしている部屋へ戻ろうとした時、瑠香に、くんと腕を引かれて立ち止まった。

「どした？ まだ、何かあるのか？ あいつらは、別に俺に関係ないし覗く趣味も俺にはないぞ」

「ああ。うん、そんなんじゃないかってね。ええっと」

瑠香はどことなく照れくさそうに、小さな箱を取り出した。

「誕生日おめでとう。これ、大したものじゃないんだけどプレゼント」

「瑠香」

俺は一瞬ためらった。

瑠香と、箱の間で何度か視線を彷徨わせた。でもやっぱり、差し出された箱に押し返すように手を添えた。

「悪いけど俺は何貰っても、お返しとかできないし、受け取らないことにしてるんだ」

「え？ 良いよ。お返しなんて」

瑠香はおろおろになっていた。

かわいそうだとは思ったが、実際プレゼントなんて貰っても迷惑なだけだ。

迷惑……迷惑……そう思いつつ、ふと伸ばした自分の腕に目を落とした。

—— ……あ……

「やっぱり、貰っとくわ。ありがとな」

「え？ ううん、良いの」

ひょいっ。と、瑠香の手からその箱を受け取って、当初の目的どおり部屋に戻った。その後ろを、不思議そうに瑠香がついてきていた。

だって仕方ないじゃないか。

俺は言い訳のように心の中でぼやく。

俺の右手首には、あいつから受け取ったブレスレットがまだ付けられていたんだから……――。

「おいしそうに食べるよね」

テーブルに並べられた料理を口へ運んでいると、それを眺めていた小西さんがそういつて微笑んだ。私は何だか気恥ずかしくなって、食事の手を止めてワインを一口飲み込んだ。

「でも、今日は驚いたよ。碧音ちゃんが、補佐につくなんて」

「はい。私も吃驚です。私なんか補佐に就いちゃったりして、あの部署大丈夫ですかね」

私は照れ隠しにそういつて、あははと笑い飛ばした。

正直、嬉しかった反面どうしたものかと思ったのも確かだったから。

今日のネットミーティングで、移動の詳細が社員すべてに回った。それで、私の昇進に気がついた小西さんが「お祝い」をしようと誘ってくれた。二人で食事は久しぶりだから、私は二つ返事で了承した。

「大丈夫だよ。碧音ちゃんは優しいし、気が利くから。きっと上手くやっていける。少なくとも僕はそう思ってるよ」

そういつた小西さんはますます目を細め優しく笑ってくれた。私は小西さんのその表情が大好きだった。

そうしてくれていると、何でも許せてしまうし、心がほんわかあったかくなって「この人が好きなんだ」って確信できる。

恋愛体質の私は、この瞬間のために生きているようなものだ。

あやはそんな私をいつもは笑いながら見ててくれた。でも、小西さんと付き合うようになってからは、しょっちゅう遊びに誘ってくる。

まるで、小西さんとの時間を共有させまいとしているかのように……って、それは、考えすぎだよな。

きつと、偶然が重なって。それでそんな風に感じるだけだよな？

「どうかした？」

つい、考え込んでしまった私を小西さんが心配そうに覗き込んできくる。私は慌てて首を振り「なんでもないです！」と声を張ってしまった。そんな私に小西さんは相変わらずの笑顔で「そう？」と小首を傾げる。

恥ずかしさと、小西さんへの気持ちで胸がいっぱいになる。私は心臓の音が聞こえるのではないかと心配になり、胸に手を当てるとこそりと深呼吸をした。

丁度そのとき規則正しい電子音が聞こえてきた。

R R R . . . R R R . . . R R R

鳴っていたのは小西さんの携帯だ。「ちょっと、ごめん」そういった彼に私が小さく頷くと、小西さんは「本当にごめんね」と重ねて少し体を窓際に向けて電話に出た。

私は、手持ち無沙汰で周りの様子を伺った。今日も、中二階の個

室は満室のようだ。

ここってあやもよくコンパに使うんだよね。そんなことを考えていると、その中の一室のドアが開いた。中からはぞろぞろと、10人くらいかな？ が、出てきた。大学生くらいかなあ。最近の子は年齢が良くわかんないからなあ。いや、なんかそんな発言はおばさんくさい気がする。撤回しておこう。

「誰か居た？」

「あ、ううん。何でもないです。電話終わった？」

「うん。でも、会社に戻らないといけなくなったんだ」

宛もなく団体様を見送っていた私にそう声を掛けた小西さんは、物凄く申し訳なさそうにそういつて眉をひそめた。

そんな申し訳なさそうな顔をされて、駄目だとか嫌だとかの我侭はとてもしえない。否定的なことを口にして揉めるよりも、このまま幸せ気分を家に持ち帰った方が私としては正解だった。

「構いませんよ。出ましようか？」

「そう？ いつもごめんね」

「仕事なんだもん、仕方ないですよ」

素直に言えば本当はもう少し一緒にいたかった。

私は幸せ気分を壊さないためにその気持ちを押し殺して、笑顔を作った。

お店を出ると、さっきの団体さんが、わいのわいのと二次会の場所を決めているようだった。その輪から少し離れたところで、見慣れた姿を発見した。面倒臭そうなのを隠しもしないで街路樹に背中を預けて眺めている。

克己くんもコンパなんてするんだ。

なんとなく私には意外に見えた。

克己くんは私に気がつきそうもなかったし、邪魔してもなんだと思っただけで私は声をかけることなく愛らしいドアベルの音とともに出てきた小西さんに向き直った。

ご馳走様です。と、微笑めばにっこりと優しい笑顔が添えられる。自分の分は持つといったのだけど、今日はお祝いだからと簡単に断られた。毎回そんな風に適当な理由をつけられた私はおごろれているような気がしないでもない。でもそれが小西さんの好意なら受けるべきだと割り切ることにしていた。

「大丈夫ですよ。一人で帰れますから。急がないと怒られちゃいますよ」

ちらりと時計を見た小西さんにそう声をかけた。でも、小西さんはそんな私の顔をみて、また優しい顔をした。

「そんなこといわないで。僕だってもうちよっと一緒にいたいんだから、家くらいまで送らせてよ」

そういつて私の肩を引き寄せた。

とくんつと心臓がはねて、頬が熱くなるのを隠そうと顔が見えないように私は俯いて寄り添った。家まではそんなに離れていない：徒歩でも二十分前後だろう。私たちはその道のりをゆっくりと歩き始めた。出来るだけゆっくりと、でも、迷惑が掛からないように少し早く。そんな風にいつも矛盾している部分を抱えている。きっと恋は矛盾だらけで出来ているのだろうと、そう、思うから、私はその矛盾すら愛しくなる。

私は小西さんが好きだ。

私の髪を撫でる彼の大きな手が好きだ。

小西さんという優しい気持ちになれるし、笑顔にもなる。

何でもしてあげたくなるし、何でも許してあげたくなる。

そんな私は駄目なのだろうか？

あやなら間髪居れずに馬鹿だといって否定するだろう。

でも、そうは思いたくはない、だって、今私はとても幸せだから。

—— ……うん。きっと幸せだから。

「——…ん、んう？」

カーテンの隙間から指してくる陽光の刺激に耐えかねて目を覚ますと、俺は知らない部屋に居た。

ボーっとする頭を抱えて、何とか上体を起こして考える。

——…あの後、確か。

カラオケにいつて、あいつらが馬鹿騒ぎしてるのを横目に俺は一人で飲んで、それから…それから、どうしたんだっけ？

「い、っ、てえ……」

ずきずきとこめかみと後頭部辺りが傷む。これが二日酔いというやつだろうなと自嘲的な笑いを溢して膝に額を擦りつけてぐりぐりぐり……。

「——……」

まあ、一番の問題は二日酔いから来る頭痛じゃなくて、ここがどこか。という根本的なところだと思うが……。他の連中もどこにいったんだ？

透や真の部屋にはいったことがある。そのどちらともここは違う。というか真は昨日居なかったし、合流したような記憶もないような、あるような……ない。

……それに、どちらかといえば、女の匂いのする部屋だ。

俺は急な訪問客に対してか、赤いソファベッドの上に寝ていた。

「さむっ」

じわじわと脳が覚醒してくると、外気温に気がつく。ぶるっと寒気に襲われて身を強張らせた。

全く、なんて格好してるんだ。上、着てないし……なぜだ。

ふと、掛かっていた布団を捲ると下は大丈夫。履いていた。にしても何もなかった保障にはならない。脱ぐ癖があるとは思えないし、その場合は全裸だよな？

俺は小さく溜息を吐いた。

「克己ー。起きたの？ 珈琲飲む？」

「あー……ん。もらう」

後ろから聞こえた声に条件反射で答えてしまった。

「はい。どうぞ。熱いから気をつけてね」

そういつて、珈琲を差し出した女はカップを受け取った俺に軽くキスをした。

—— ……ああ。やっぱり、昨夜何かあったのか？

とりあえず受け取った珈琲に口を付けた。

だんだん、頭が冴えてきた。

二次会の最中、酔いが回った俺は外の空気を吸おうと、こっそり外へ出た。

そしてその時、俺は見えてはいけないものを見たような気がした。けど、まああんなことは俺には関係ない。騙されるほうが悪いんだ。簡単に騙されて、あんな馬鹿みたいにリア充な顔しやがって……人間の本質は善だと思って疑っていない。そんな、あいつの方が悪い……。

そう思うのに、余計に苛々して気分が悪くなり。

—— ……俺は何も見なかった。

忘れてしまおうと、そう、気を取り直した。

思い出しても胸糞悪い。嫌な気になってくる。俺がそんな風に思うことないのに、なんでこうも苛々しないといけないんだ。

そんな必要微塵もない。だから俺は今自分におかれている境遇について考察することにした。

ここは多分リビングだ。

珈琲を淹れた女は、俺の足元に腰を下ろしてTVのニュースを見ていた。スラリと伸びた綺麗な足を組みかえる仕草が少し俺好みだ。って、のんきに考えてる場合じゃなくて！

「克己。何も覚えてないの？」

「あ……いや」

「だよねえ。昨日は結構酔ってたから、二日酔いとかじゃないの？」

咄嗟に口ごもった俺を試すように、その女は口を開いたが、俺の記憶が定かじゃないのを感じ取ったのか降ろしていた腰を上げると、

奥の部屋へ続く襖をすつと開けた。

その開けた先には、昨夜のメンバーが雑魚寝をしていた。なるほど、みんなでこの女のところへ押しかけた。ということか。

そうとしても、何で俺だけあそこにいないんだ？

あいつらよくあんな状態で寝ていられるな。男も女も関係なく倒れこんでぐっすり寝込んでいるという感じだ。

しかし、そこに溜香の姿はなかった。

まあ当前か、無断外泊するようなタイプには見えないからな。

「みんな良く寝てるわね」

女は自分で開けたその先の部屋を見て、楽しそうに笑っていた。

「俺、帰るわ」

今、自分の前にいる女と昨夜何があったかなんて特に興味はなかった。何かあったとしても、どうせ酔った席の話だ。気にしたってしょうがない。こいつだって気にしたりしないだろう。

そんな雰囲気を感じさせる女だった。

ソファアの下に置かれていた服を無造作に取り上げて俺は立ち上がった。

「そう？　ねえ。一つ聞いて良い？」

悪ふざけでも考えているように、口元に紅い爪を添えて声をかけたきた女に、俺は着替えながら面倒臭そうに「何？」と問い返した。

「それって大切な物なの？」

そして着替えた俺の右手を指差してその女はいたずらっぽくそういった。

女の指差した先で、華奢なブレスレットが僅かに揺れた。

「ん？　いや、それでも無いけど。どうして？」

「昨日、克己の何か欲しいと思って、それ、外そうとすると凄く怒ったから」

俺が、怒った？　こんな物のためにか？

「まあ、変わりにこれ貰ったからいいけど」

そういつて左手を俺に向けてかざした。

その左手の親指には見覚えのない指輪がはめられていた。

あんなものどこに持ってたんだ？

俺のそんな疑問符に気がつくこともなく。女は嬉しそうに指輪を窓に翳して喜んでいるようだ。まあ、それで納得したんならそれで良い。基本的に俺は物には執着しないタイプのはずだ。

そう納得した俺は他の奴らを置いて、玄関に向かった。

靴もばらばらだ。目を凝らして自分の靴を発見し、ドアの鍵を回した。

「ねえ。今度はいつ会えるの？」

一瞬俺の時間は止まった。

まさか、そんなことをいつてくるとは。見かけによらず厄介なことになるそうだ。次。次なんてあるはずない。今だってなんだったのかよく分からない。記憶にないし。興味もない。なかったことで問題ない。

「とりあえず、今日は俺帰るわ」

どうともつかないあやふやな返事をして、俺は何とか部屋を出た。そして、家路を急ぐ中あの指輪の出先を思い出した。

「ああ」

――…瑠香からのプレゼントだ。

答えを導き出すことが出来て良かった。分からないだらけの中、僅かでも分かったことに胸を撫で下ろす。一瞬だけ、どうしようかと思ったが、今更あそこに戻る気もしないし、あの部屋に瑠香はいなかった。

まあ、良いか。気にするほどのことじゃない。俺がもらったものを俺がどうしても構わないだろう。そう思うことにして俺は引き返さなかった。

今日もいい天気だ。

私は日の高くなったこの時間、まだベッドの中にいた。ベッドの後ろ手にある窓のカーテン越しに日の光が差し込んでくる。

私の身体には昨夜の小西さんの感触がまだ残っている。優しく触れてくれた指の感覚まで鮮明に思い出せる。いつも一緒に居られるわけじゃないから、余計に忘れたくないし忘れられない。

だから私は未だその余韻に浸っていたかった。

ふふっと一人ほくそえんでしまつてベッドの中で身体を丸くする。

久しぶりの上天気のようなだ。折角の天気良い休日だ。
有意義にすごさなくちゃ！

頭の中ではそう思うのだけど、身体が思うようにいうことをきいてはくれない。

もう一眠りしようと、布団を頭からかぶつた。丁度そのとき、りんごーんっと少し古めかしい呼び鈴が鳴る。この音も私にはお気に入りだ。

「碧音ー。居る？」

私の折角の安らぎの時間を割いたのは、あやだった。
あやだけはうちの鍵がどこに隠してあるか知っていて、鍵をかけていても遠慮なく入ってくる。

「なあに？」

私はベッドから出ることなく、返事をした。

あやは、ずかずかと部屋に入ってくると寝ている私から布団を剥ぎ取った。

「いつまで寝てるの？ もう、11時過ぎよ。折角、珈琲飲みに来たのに」

——…寒い。

私は仕方なく眠い目をこすりながら上体を起こした。早朝ではな

いとしても、あやだって夜遅いタイプのはずなのに、私と違って爽やかだ。って、珈琲飲みに来ただけなの？

「珈琲だけ？」

「んん。そうよ。その後、買い物にでも行こう。外は良い天気だしね」

はあ、あやの無鉄砲さにはほとほと呆れる。

でも、そんな奔放さにも嫌味が無いのがあやの良いところなのだろう。そんなあやの雑談に今日は付き合うことにした。

日中でも肌寒く感じる季節になってきた。見上げた空はどんよりと暗雲が立ち込めていて、泣き出した空は到底やみそうにもない。

—— ……今日は散々だ。

何もかも上手くいかない日というのは、本当にあるもので今日の私が、まさにそれだ。仕事でも久しぶりに、派手に失敗した。小さな失敗はちよいちよいやらかすけれど、他の部署まで巻き込むようなことは新人の頃以来、多分やってない。私だって少しは成長したつもりだった。でも、それもただのつもりで、結局上手くいかなかったし、迷惑をかけた。

しよぼくれた帰り道で降り始めた雨は目の前で豪雨に変わった。

駆け出す気にもならなくて、濡れて歩いていたけれど、痛いくらいの雨脚になり、私は仕方なく雨宿りのために、近くのマンションの前に陣取った。

簡単に肩の水を払って、溜息。
うんざりする。

—— ……くしゅん。

寒い。

やっぱりこんな時期に雨に濡れたら即体温が奪われていく。私は冷え切った体を抱きながら、背にしていたマンションを見上げた。

高級そうなマンションだなあ……。

下から見上げたんじゃない。階数も分らない。セキュリティもしつかりしてそうだし。良いなあと思うものの、どう考えても私には一生縁のないような建物だ。だから、見上げているだけで十分だ。

豪華な佇まいを前に暇つぶしも兼ねてどうでも良いことに頭を使う。

きっと住民もセレブたちばかりなのだろう事を思うと、世の中の不景気に揺るがない人間が如何に多いのかと思ひ知らされる。

—— ……はあ……

もう、どうでも良いから、雨やめば良いのに。

憎々しげに見上げた空は、余計に雨脚を強めたような気がする。

マンションの脇に車を停車させた。駐車場は地下だが、偶然居合わせただけだし俺が頼んだわけでもない。

「もう、ここで良い」

「そう？ お茶でもご馳走してくれるかと思ったのに」

「悪いな。そんなつもりはない」

「良いわよ。また今度の機会で」

麗華はそういって綺麗に微笑むと車のドアを閉めた。

—— ……今日は参った。

こんな雨に降られるなんて。予報はそんなこと告げてなかったと思っただけ、あまり真剣に見ていたわけじゃないから自信はない。流石にこんな日は冷え込む。

俺は麗華の車が走り去るのを適当に見送ってマンションの表にまわった。早く部屋に戻って、何か飲もう。そう思っていたのに、俺は足を止めてしまった。

「—— ……またか」

思わず誰にも聞こえないほど小さな声で呟いた。

正面玄関の前に陣取っていたのはあいつだ。それもかなりな濡れ鼠になっている。とりあえず、こちらには気がついていないようだ。

何事も無いように通り過ぎればいいだけだ。

俺には関係ない事だ。

そういい聞かせて俺は止まってしまっていた足を進めた。

—— ……へっくし。

なんて古典的なくしゃみだ。

ああっ！ もう！ 俺も甘い。

苛々としつつも、放っておくという選択肢をあつさり俺に消去させる。仕方なく、俺は踏み出した足を碧音に向けた。

真後ろに立っても気がつかずに、馬鹿みたいに空を見ている。

——…ぽこっ！

「っ痛！」

「何やってんだ」

「え？」

手刀で頭頂部を軽く叩いた。ぼんやりしていたのか、目で見て分かる程度に肩を跳ね上げて、俺は笑いそうになるのを何とか堪えた。そして、俺の顔を確認すると肩を撫で下ろし明らかにほっとした顔で微笑んで、ことんっと首を傾げる。小動物みたいだ。

「克己くんだ。どしたの？　こんなところで」

「それは、こっちが訊いてるんだけど？」

ったく。

意味のない問い掛けを繰り返し続けるつもりはない。

眉を寄せた俺に、碧音は苦笑してまた空を仰ぐとぽつと答える。

「私は、待ってたんだよ」

「こんなところで待ち合わせ？　だとしてもそんなに濡れてたらどこにもいけないだろう？」

「違うよ。雨。雨がやまないかなーと思って待ってたの」

当然の俺の返答が何かおかしいことでもいったように、くすくすと笑いながらそう答えた碧音に、俺は馬鹿馬鹿しいとばかりに溜息を重ねた。

「ほら、さっさと来いよ」

そういった克己くんは私の了承など待つこともなく、腕を引っ張ってマンションに入ってしまった。

正面フロアの奥にあるインターホンにカードキーを差込、部屋番号と暗証番号を押す。すっとカードを引き抜くと自動ドアが静かに開いた。

そして、その奥のエレベータに乗り込んでも、今いち実感が湧かない。

「何かいいたいことがあるのか？」

私は馬鹿みたいに啞然として克己くんを見ていたらしい、怪訝な顔をした克己くんの声が頭に響いた。

「ここ、克己くんち？」

「そうだけど？」

「い、いや。私、克己くんって、てっきり苦学生かと思ってたから」

克己くんは、そういつてしどろもどろになった私を面白そうに見ていた。思わず的外れな自分の想像にこの寒さにも関わらず頬が紅潮するのがわかった。

「苦学生？ 何だよそれ」

「いや、学校も大変なのに、夜のバイトとかしてたし」

私の答えに、ますますつぼにはまったのか、こらえきれない笑いが零れていた。

「あんた、馬鹿じゃねえの？ 俺がバイトしてたのはくだらない誘いを断ったりする言い訳に丁度良かったからで、別にどっちでも良いんだよ」

また、馬鹿にされてしまった。

何だか私ってば克己くん馬鹿にされてばかりのような気がする。

負けてなるものか！ と、妙な対抗心で、何か切り返そうとしたときエレベータは17階で止まった。

克己くんは、すたすたと足早に部屋へ向かった。

私は彼に引きずられるように手を引かれ小走りになる。自分の足に躓かないようにするのが精一杯だ。

克己くんが足を止め、鍵を開け中に入ると、思ったとおりかなり高級マンションだ。玄関フロアと廊下を抜けると広いリビングとキッチンが目に入った。

一人暮らしなのに手入れが行き届いているのか、ほとんど家に居ないのか、とにかく生活感が無いほど片付いていた。

—— ……このキッチンとリビングだけで私の部屋は入っちゃうな。

「こっちの廊下の先、右手の奥が風呂だから、さっさと入って来いよ。着替えは適当に後で持っていくから」

克己くんは私を振り返ることもなく、廊下の奥を指差しつつ受話器を手を取っていた。

「え？ いや。良いよ、お風呂なんて、タオルでも借りられたら」
「何いってんだよ。風邪引くだろうが。さっさと入って来いよ！」

ごねると、少しきつい口調で繰り返された台詞に、私はしぶしぶ従った。

確かに体は冷え切っていて、すぐにでも温まりたかったのは事実だけど、それが、克己くんの部屋だとは思いつかなかった。

「ふわあっ」

凄いだろーなとは思ってたけど、思った以上だな。

私は克己くんの適当な説明を許に奥へ進み目的のドアを引いた。
脱衣所だけで……いや、もう私の部屋と比較するのはやめよう。比較対象が惨め過ぎる。

すりガラスの扉に手をかけて、ゆっくり慎重に開いた。

—— ……かちゃ。

「ほー」

浴室を見てまたまた驚いた。
ジャグジーだ。
良いなあ。

克己くんってお金持ちのお坊ちゃんなんだなあ。こんなところに一

人で住んでるなんて……一人？ 一人なのかな？ ふと通ってきた生活感のない部屋を思い出す。他に家族と一緒に住んでいる、とは、考えにくい。そう思うと自然と複雑な気持ちになった。

さむっ。

そんな思考を遮るように、ぶるっと足元からの震えに襲われた私は、つまらないこと考えてないで早く入ろう。と、入ってきたドアを閉めた。

「今日、ちょっと用事が入って。遅くなるか、もしかしたらいけないかもしれない」

別にほったらかしにしてバイトに出ても問題ないとは思うものの、何となくマスターに電話を入れていた。マスターはいつもの調子で、是非来てくださいねーと軽口叩いていたけれど、行かなくても何もいわないだろう。そういう人だ。

ことごと、スチールボードの上に電話を戻して、ふと息を吐く。そういえば、俺、ケータイどこおいたっけ……親密な関係を築いている人間も居ないから、緊急などに使われることもなく、一応持っているだけのケータイだから、よく置き場を忘れる。

親密な関係、ね……この部屋に自分以外の人の気配がしたのは引越しのとき以来だな。

ふと、なんとなくそんなことを考えてしまった。

「あつと。タオルと、着替え、と」

寝室から、適当に着替えになりそうなのを持って風呂場へ入った。すりガラス越しにシャワーの音が聞こえあいつの影が映っていた。その俺の姿に向こうも気がついたのか、

「ねえ。お湯はっても良い？」

少し高揚した感じの声で話しかけてきた。

「ご自由に。こっち、服乾かしとくぞ。後、何か飲むか？」
「うん。ありがとう」

切れ切れにそんな会話がなされ、俺は乾燥機で何とかなるものはそこへ放り込んでその場を後にした。

スープでも作るかな。

そんなことを思いついて俺は台所にたった。

—— ……遅いな。

鍋の中のスープをかき混ぜながら、時計に目をやった。
かれこれ1時間以上たっている、と、思っただが一向に出てくる
気配が無い。

—— ……つたく、子どもじゃあるまいし、何遊んでんだ？

俺は鍋のかかった火を弱めて確認しに行くことにした。

「おい。何やってんだ？ のぼせるぞ？」

揺りガラスを、どんどんと叩いて声を掛けた。しかし、中からは全く返事がない。明らかに静か過ぎる。風呂で寝てるか……もしくは、躊躇している余裕はないだろう。

俺は小さく溜息を吐くと思いついてガラス戸を開けた。

—— ……案の定。そこには湯だった碧音がいた。

かけてあったバスローブを無造作に取り上げ、湯で上がったそれを抱き上げくるんだ。

「つたく、世話がやける！」

俺は寝室に運び、誰にいうでもない愚痴を吐き続けていた。
そして、エアコンの設定を冷房に切り替え、目の前のゆでだこを

冷やした。えーっと、こういうとき他に何してやれば良いんだ？
誰かの世話を焼くことにまだ慣れていなくて、何をどうすれば良いのか、ぽんっと思いつかない。

暫らく悩んでいる間に、気がついたのか最初の一言が。

「さむっ」

—— ……こいつ！

俺は安心したというよりは呆れてしまった。

「寒くない？ 克己くん」

「ああ。ああ。寒いだろうよ！」

—— ……ああ！ もう、あったまくる！

人の気も知らないで、ぼんやり起き上がった碧音に俺は勝手に切れた。そして、碧音を寝室に一人残して鍋の様子を見に行った。

後は勝手に休んだら回復するだろう。

俺は単純にそう考えて、鍋の中身を小皿にちよつとよそって味見をした。

—— ……んん。流石、俺。

そして満足感を得た俺はそれをマグカップによそって、もう一度寝室に戻った。

「おーい？ 寝てんのか？」

さっきまで冷え切っていたはずの部屋の中は、十分に温まっていた。て、いうよりも、寧ろ、暑い。

ベッドの上でぐったりとしている碧音に声掛け、サイドテーブルに持ってきたカップを置く。殆ど知りもしない男の寝室で寝てるとか、無防備にもほどがある。呆れつつも、俺は碧音の傍に腰を下ろした。

顔を覗き込むと眠っているというよりは、苦しそうな表情を見せていた。

覗き込んでいた俺にやっと気がついたのか、碧音は静かに瞼を持ち上げてどこかろんとした視線を向けた。

「ごめん。ちょっと、寝ちゃったみたい。そろそろ、帰るよ」

そう言って、上体を起こそうとしたんだろうが、どうも体がいいうことを利いていないようだ。

大きな瞳は今にも溢れそうなくらい潤んでいた。

明らかに、熱でもあるんだろう。

頬も赤いし、この常夏な室内で少し震えているのも確認出来た。

「馬鹿いつてないで、そのまま寝てろ」

ええっと、バスローブで寝かすわけにもいかないな。そう思った俺は立ち上がり、適当に見繕ってスウェットの上下を引っ張り出した。

「自分で着替えられるか？」

碧音は俺の問い掛けに小さく頷いた。苦しいのか声は出ていない。

苦しかった。

喉も焼けそうなくらい熱かったし、頭も横になっっているにも関わらず船に揺られているようでぐらんぐらんしていた。

だからといって私は、こんなところでお世話になっているわけにはいかない。

早く起きて、タクシーでも家に帰らなくては…… ――

しかし、そうは思っているけど体がいうことを効かない。もう、いやんなっちゃう。どうしてこんなことに……。

苦しいよお、助けて

いろんな考えが私の中を駆け巡る中『P・P・P』可愛らしい機械音が小さく響いた。

「ほら、出して」

その音が鳴り止まないうちに克己くんの手が伸びていた。私はしぶしぶ脇から体温計を取り出した。

「38度5分。俺、薬買ってくるわ」

「え?! 良いよ。私、帰るし」

「馬鹿いってないで寝てろ。帰せるわけ無いだろ! 大体っ家帰っ

ても一人だろうが。それとも何か？ 彼氏でも呼べば飛んできてくれるのか？」

返す言葉も無かった。

分からない。それに、そんなの恐くて知りたくない。だからきつと私は家に帰っても、小西さんに連絡したりはしないと思う。

私は、返事の変わりに布団を頭からかぶった。

そんな私を確認してか、克己くんは短く嘆息すると静かに立ち上がってドアへ向かった。

「ああ、そうだ。他、何か食べたいものある？」

ほんの少し、いつもより気を遣うように……ほんの少し、いつもより感情のこもった克己くんの声が降ってくる。

それが何となく心地良かった。

「―― ……プリンと、桃缶。白桃じゃないと、嫌だ」

「そんなもんでいいのか？ まあ、良い。じゃあ、ちゃんと寝てろよ」

静かにドアが閉まる音がした。

その音を確認すると火照った顔を出した。自分が吐く息が熱くて気持ちが悪い。氷とか頼めば良かった。

体は冷えるが、頭は湯だったように熱い。

「はあ」

私は、ぼんやり揺らぐ天井を眺めた。本当に、今日はついてない。

ごろりと寝返りをうつと、ベッドサイドでマグカップが湯気を上げていた。克己くんが用意してくれたのかな？

私は這うようにベッドサイドまで出て、枕を支えに身体を起こすとカップを両手に包み込んだ。

「あったかい」

ほんわりと手に伝わってくる暖かさにほっとする。

いい香りがする。インスタントとかそういうのじゃないっぽい……わざわざ作ってくれたんだ。あの生活感のないキッチン使えたんだ。とか、そこに立つ克己くんを想像すると可笑しかった。

普段から、バイトで台所には立つだろうけど、それと家では違うだろう。

ちょぴつと口をつけたけど、あまり味が分からない。

でも不思議と、喉は通った。

こくんこくんと飲み干してから、申し訳ないと思いつつも甘えてベッドの中に潜り込んだ。そして、克己くんが戻ってくるまで、なんとか起きていようと思ったのに、瞼はいうことを聞いてはくれなくて、どんどん、どんどん、重たく、な、……た。

俺は家から一番近い薬局とコンビニに寄って、十分か二十分くらいで戻ったと思う。まあ、まがいなりにも医療関係に携わる者ってことで、済まそう。そう自分にいい聞かせながら、こんなことになってしまったいい訳に当てた。

グラスにミネラルウォーターを注ぎ、桃缶を器に開け寝室へ足を運んだ。ドアの前でいったん足が止まった。
妙に静かだった。

—— ……寝てるのか？

そういぶかしんで静かにドアを開いた。碧音は予想通り眠っていた。

「—— ……なんだ」

そのとき何となく胸を撫で下ろす自分がいて、また奇妙な気分になった。

サイドテーブルに置きっぱなしになっていたスプーンは空っぽになっていた。

飲んだのか？ やれやれ。

俺はそのカップを手に取り持って入った物をそこへ変わりにおい

て、一旦部屋を出た。いつ寝たのか知らないが、無理に起こすまでもないだろう。

次に戻ってきたときには、碧音は起きていてぼんやりと天井を見上げていた。

「大丈夫か」

「うん。何とか生きてる」

半分眠っているのか起きているのか、夢現なぼんやりとした返事だった。

どうやら、熱は順調にあがっているみたいだな。

「あほか。その位で死ぬか。それ食って薬飲んどけよ」

「うん。いい。いらない。気分悪い」

「ったく、胃も弱ってるのに、あんなもん飲むからだよ」

気だるそうにゆっくりと上体を起こした碧音は静かに毒づいた俺の顔を見据えて

「美味しかったよ。とっても。ありがとうね」

笑った。

—— …… 馬鹿だな。

そうとしかいいようが無かった。

呆れてその後の言葉が出なかった。

俺に気を遣ったのか？ 自分は高熱まで出しているのに、どこにそんな心の余裕が。今は自分の事でいっぱいいっぱいになっていた

として、誰が責める？　それが当然で、そうあるべきだ。人間なんて、みんな自分が可愛い。自分が辛いときになんで他人のことなんて考える余裕がある？　どうせ、舌も馬鹿になっててろくろく味なんて分からなかっただろうが……ったく！

悪態を山ほど思いつくの、俺は碧音に何もいえずに「ああ」としか答えられなかった。そんな俺に碧音は「ご馳走様」と続けた。とくんつと胸の裏あたりがなった気がする。

……そんなこと、有り得ない、気のせいだ……

私は克己くんが用意してくれた解熱剤を飲んで改めて横になった。冷却シートも貼ってくれた。

ひんやりして気持ち良い。

解熱に直接作用されないとは聞いたことはあるけど、こういうのは気分だ。気持ち良い。それだけで少しだけ楽になった気になる。人間って単純。

もう一度眠りに堕ちれば良いのに、頭の疼きがなかなか納まらずそれが出来なくて、寝返りを打つと何も悲しくないのに目頭がじんつとして、涙がじんわりとでてくる。

涙のせいでぼんやりとしかない視界の先で、克己くんが腰掛けて何か分厚い本を開いていた。

「ねえ、克己くん」

「んゝ……。どした？」

「何だか、ごめんね。迷惑かけて」

私が、あんなところで雨宿りなんてしてなかったら、今頃ここでこうして寝込むようなことなんてなくて、そしたら克己くんこんな面倒なことさせなくて済んだのに。

そう思うと申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

克己くんはどうしようもないなというような笑みを零して「ほんとにな」と口にする。

その台詞に余計しょんぼりしてしまった私に克己くんは続けた。

「あんま、つまんない氣い遣うと熱上がるぞ」

呆れたように嘆息して分厚い本を閉じベッドの隅に腰を降ろした。ぎっとベッドのスプリングが軋み身体が僅かに上下した。広いベッドの中央を陣取るのは申し訳なくて、隅っこで丸くなっていたから余計だ。

克己くんはそんな私に毎度のことながら呆れたような顔をしたけれど、特に何もいわなかった。

薬が効いてきたのか、ぼんやりする。でも頭がぎゅうぎゅうして臉を落とすと眉間に皺が寄る。それに克己くんがわざわざ時間を割いてそこに居てくれる。寝てしまうのも勿体無いような、矛盾した気持ちもあった。

だから、何か話したほうが良いかと、ぽつぽつと口を開く。

「今日ね、ホントは雨が降ること知ってたの」

「うん」

「……だから、帰りは電車で帰ろうと思っていたの」

「ああ」

口にする言葉への返答はとても適当。聞いているのかどうかすら

妖しいというのに、私はちつともいやな気分にはならなくて、どこか……というか、全体的に心地良かった。

暖かい室内も

広いベッドも

そこにある気配も

—— ……そう、その全てにほっとした。

寝込むのも久しぶりのような気がするけど、こういうときに誰かがいてくれるというのも本当に久しぶりかもしれない。

人の気配はそれだけで心地良いのだとほわりと心が温かくなる。

だから、私は無防備にも、ぼおーとする頭で今日のことを口に出していた。

熱のためか自分でも感情のコントロールがしっかり出来ない。沢山考えてるつもりなのに頭の中ではぐるぐると分けわかんなくなっている。

別に、誰に聞いて欲しいわけでもなくて、誰に言うつもりもなかった話。

口に出したらきつと。

分かってる。分かってたのに、止められない…… ——

「なんとなく、さ、なんとなく。雨に濡れても良いかなと思ってぶらぶら歩いて帰ることにしたの。そしたら、やっぱり雨は降ってきて、それは思った以上に強い雨で」

—— ……本当に今日は全く駄目だった。

もう、仕事なんてやめてしまいたかった。

逃げ出したかった。

チーフにも申し訳なくて自分が情けなくって、どうしようもなかった。

それは、本当に一瞬の出来事だったんだ。

自分でも何が起こったのか、データが飛んでしまった。

画面は真っ黒になっていてそれと同時に私の頭は真っ白になっていた。

そのせいで、あやたちまで借り出されていた。

データの修復に多大な時間と労力を要してしまった。あの時の惨劇を思い出すとどうしようもなくやりきれない思いでいっぱいになった。

「今日は、本当、ついてなくて……ついてない……」

「——…… あー、ええと、俺、仕事のこととか良くわかんないし。彼氏とかにいうほうが氣い晴れるんじゃないのか？」

私のうわ言のような愚痴に、克己くんはそっと私の頬を撫でた。

え？ と、一瞬戸惑った私は、その時初めて自分が泣いていることに気がついた。

普段なら「つまらないことってんじゃないよ」とか口にして、さらっと流されそうな話なのに、病人には優しいのか、声のトーンは酷く緩やかで落ち着いていた。

そんな克己くんを私は知らない
そんなの私の予想に反していて、こんな……こんな弱ってる時に
優しくされると

胸がいっぱいになって

—— ……涙なんて我慢出来ない、よ……。

「小西さんにこんな私は見て欲しくないから、いわない。小西さんに私の問題や揉め事を背負わせたくないから……だからっ、小西さんには知られたくない。こんな私は私じゃない……だから……見せたくないんだよ……。情けなくって、かっこ悪くて、迷惑かけて……」

一度零れてしまった涙は止まることを知らず、後から後から溢れてきてしまった。私はしゃくりながらそういつて、腕を目に押し付けて泣き続けてしまった。

私、何て恥ずかしいことをやってるんだろう。

そのくらいの思考は廻る。

でもそう思ったからといって、この涙を止める術を今の私は知らない。

克己くんが戸惑いがちに、顔の上で強く握られた私の手をそっと握ってくれた。そっと指を撫でられて僅かに力を抜くと、するりと指が絡まってくる。熱と興奮でかっかしていた私の手に、少し温度の低い彼の指が絡まって

……少し……

少しだけ……

嬉しくなつて私はまた涙が零れた

——…。

誰かに迷惑を掛けるようなことをしてはいけない。ずっとずっと
そう育てられた。だけど私は常に誰かに支えてもらわないと何も出
来ない人間で……今だつてそうなのに、ややして、そつと離れよう
とした指先を私は離すことが出来なかった。

俺は碧音みたいに誰かとそんな風に真剣に付き合つたこともない
し、相手に気を遣うくらいなら一人で居た方がましだと思っている
から……正直なところ碧音の気持ちはこれっぽっちも分からなかつ
た。

大体、女の感情は波が激しくて俺には皆目見当がつかない。

今だつて、碧音がどうしてそんなに泣かないといけないのかさつ
ぱりだ。

でも、泣かれるのは嫌だ。

何かを思い出すから……。

非力な自分が浮き彫りになるような気もするから

——…勘弁してくれ……頼むから、落ち着いて泣き止んでく
れ。

ぐつと湧いてくる感情に蓋をして、ひとつ深呼吸……それでもや

っぱり俺にはどうすることも出来なくて、何気に碧音の指先に触れる。

燃えるように熱くなっている。

全くこんなに興奮してたら解熱剤もなにもあつたもんじゃない。俺はもう一度、ふっと息を吐き、埒があかないので、一人にしてやろうと、触れた手を離そうとすると、ぎゅっと力が入った。

俺はその時、どうしてかその手を解く気になれなくて、苦笑するとそのまま碧音の小さな手に指を絡ませた。

続けられる、懺悔に耳を傾け、適度に相打ちを打つ。こんな面倒なこと大嫌いだ。他人の問題は他人の問題で、俺には関係のないことだ。関係のない場所で勝手に悩んで勝手に泣いて喚いて、格好悪く過ごせば良い。

そう、思うのにやはり俺はその手を解くことが出来なかった。碧音が溢すのは謝罪ばかりだ……。

人生や、感情の何かマニュアルでもあるのなら、今すぐこの俺に見せて欲しい。

どうして良いか分からないなんて

……俺のほうが余程……
格好悪すぎだろう

……全く…… ——

—— ……どのくらいそうしていただろう……。

碧音は暫らくすると泣き疲れたのか眠ってしまった。
薬の所為もあるのかもしれない。

俺は碧音の寝息を確認して、部屋を出た。

―― ……疲れた。風呂でも入ろう。

俺は不自然な体制で凝り固まった筋肉を解しながら直接風呂場へ向かった。

―― ……サアアアア……

「あお……ね……さん……か」

それにしてもあいつは、全くよく分からない。
泣くし喚くし、怒るし手上げるし、まあ、最後のは俺も悪かったし、何度も考えることでもないな。

今日に至っては、仕事の愚痴から始まって、彼氏ののろけ話になって、挙句俺が年下の癖に態度がでかいとか、名前にくらい「さん」を付けて敬意を表せ……とか。

「ぶ……っ。敬意？」

しまった！ 思わず思い出し笑いとかしてしまったじゃないか……？！

全く……案外、大人かと思ったら、案外、薄っぺらで。
理解不能。

―― ……たくっ何であんな奴についついかまけてしまうかなあ

！。

そういえば、前に瑠香があいつには雰囲気があるっていった。
人を包み込む、何か特別な雰囲気。

ということは、これはあいつと関わったやつみんな思うことなの
だろうか、あやも、あの小西とかいう男も。

「――・・・」

ざわりと胸の奥がざわついたことを掻き消すように、俺は否定し
て頭を振った。

こんな気持ち、不愉快だ。

結局、むしゃくしゃした気分のまま風呂から上がった俺はビールを一缶あおった。

—— ……ふう。

こんなつまらないことを、いつまでも考えていてもしょうがないレポートでも仕上げておくか。

俺は、冷蔵庫からもう一缶取り出したビールを片手に、碧音……ああ……いや、碧音さんの眠っている部屋の隣の部屋へ居座った。

ぷ……つと、パソコンに電源を入れ、ビールのプルタブを押し上げる。

起動と同時にメールの送受信が行われる。

『受信メール11』

どうせ、妙な宣伝メールだろう。

そう思いつつタイトルに目を通す。

「ん……？」

その中の一つに透からのメールがあった。

何で、携帯でなくてこっちにメールが来てるんだろう。不信に思いつつ開封した。

『克己!! ケータイ持ってるのかっ?! 反応しろっ』

冒頭に苦笑した。そういえば、ケータイはリビングに放り出したままだ。嫌がらせみたいにまただらだら透からのメールが届いているだろうなと簡単に予想がつく。

『一生に一度の頼みだ。レポートの題材考えて何か送ってくれ。俺の頭は真っ白だ。(＞△＜)』

礼には、溜香ちゃんの機嫌をとつといてやる』

「―― ……溜香の機嫌?」

何のことだ?

俺はその内容のあまりの幼稚さに、噴出しそうになるのを堪えてあてた眼鏡を定位置へ押し上げながら考えた。

椅子に深く腰をかけて、缶の淵を持って一口呷る。

「ああ」

そうすると、たった一つ思い出したことがあった。

それはあの誕生日ことだ。

そうか、バレたのか。まあ、別にバレたからといって困ることもないし、わざわざ透を通してご機嫌を伺う必要も俺には感じられなかった。

例え、どんなに溜香に軽薄な男に思われようとかまいはしなかったし、それによって、今後、溜香との接触がなくなったって俺にとってマイナスだとも思えない。

そう、そのことに、マイナスは思いつかなかった。

プラスになることも考えはつかなかった。

『送信しました』

—— …… 結局。

俺は何のメリットも思いつかなかったが、とりあえず透は助けてやった。

恩を売っても返ってくるものはやはり想像つかないが、たまにはこういうのも良いだろう。

—— …… ふう。

ひと段落した俺が時計に眼をとめると、もう、深夜1時を回っていた。

隣のあいつは大丈夫だろうか？

ふと眠る前の苦しそうな姿が目に見え、苦い思いが蘇った。

—— …… 仕方がない、俺もそろそろ寝るか。

そう思い立った俺は部屋を後にし寝室のドアを静かに開けると、あいつはまだ眠っているようだ。が寝息はまた苦しそうだ。

あれから、どのくらいたったかな。

暫らく眠っているってことはその間は下がっていたはずだけど、そろそろ、ぶり返してくるころだろうか？

目を覚まさないように冷却シートをはずして、額に手をおいた。

「冷たい……って、当たり前か」

そりゃそうだ、さっきまで冷やしてたんだから、まだ額が熱かったらこいつはただじゃすまないだろうしな。

俺は一人突っ込みをして、そのまま、熱を確認するために頬から首筋にかけて手を滑らせた。でも起きそうにもないし、眠れるなら眠っておいたほうが良い。

――…まだ、熱いな。

下がりきっていない体温に眉をひそめ、新しく冷却シートを首にも貼ってやろうかとも思ったがそれで起きては元も子もない。俺は余計なことは控えて、傍に用意していたタオルで少しだけ汗を拭ってやるだけにした。

さて、どこで寝るかな。って、別に俺がリビングで寝ることもないだろう。

ベッドはキングサイズだし、こいつは隅っこで寝てるし反対側で寝れば別段問題ない、よな？

ぶつぶつと、自分をいい聞かせるように呟いて俺はベッドに横になった。

完全に真っ暗にしてしまっただけは、夜中こいつが目覚めたときにあらぬ誤解を招いてはいけない……などと、余計な気まで遣って、間接照明だけは消さずにいた。

そんな心許ない淡い室内で、俺は苦しそうに唸る碧音“さん”を最初は何となくぼんやり眺めていた。

うーん……と、唸りながらこちらへ寝返りを打つと眉を寄せた表情が伺える。

—— ……にしても、熱のせいで火照った頬が妙に色っぽく見える。

軽くパーマがかかった栗色の長い髪も綺麗だし、実は見ようによってはこいつも「美人」って部類に入るんじゃないだろうか。普段そんな風に見ることもないから気がつかなかった。

「—— ……ん」

そんなことを考えていたせいか、急に寝返りを打たれると必要以上で驚いてしまった。

「寒いよ……」

気がついていのかそうでないのか定かではないがうなされている様に、呟いた。熱が上がってきてるんだろうな、少し身体が震えているように見える。

仕方なく小さく縮こまる碧音さんを俺は抱き寄せた。

目を覚ますんじゃないかと心配したがその心配は無駄だったようだ。

「ん…… ——」

ようやく大人しくなったかと思ったとき擦り寄ってきた。誰かと勘違いしているのか？ 俺と分かっているのか。

「—— ……小西さん」

——…前者だ。

俺は何を考えてるのか、全く馬鹿馬鹿しい、もう寝るぞ。
苛立たしさを振り払い、俺は瞼を強引に閉じた。

翌朝、目が覚めたけど。頭は冴えていなかった。
相変わらず船乗り状態だ。
気持ち悪い。

「おい。起きたか？ 会社自分で電話出来るか？」

ぐらぐらする身体を起こすと、ドア口でコーヒークップを片手に
克己くんが立っていた。

そうだった、私は昨日克己くんちに転がりこんでしまったんだ。

でも……

「電話って？」

「今日は休むっていつとけよ！ って、いつてんだよ。それとも、
俺がかかるか？」

「あ、いや。ううん。私がする」

確かに、こんな調子じゃ、出勤しても役に立たない。給料泥棒と
いわれても仕方ない感じになってしまう。

そうはなりたくない。けど、昨日のことで休んだと思われてはみ
んなに悪い。

「大丈夫だよ。そんだけ声がかわってりゃ、誰も仮病だなんて考え
ねえよ」

「……そっかなー……」

って、克己くん私の心がよめるんだろうか？

確かに、昨日とはうって変わって酷い鼻声だ。

唾を飲み込んでも喉が爛れたように痛む。

けほっ

私は、何度か咳払いをしたが、声は変わらなかった。

「俺は、ちょっと学校いくけど、昼には帰るから。寝てろよ」

「ううん。帰るよ」

「真っ直ぐ歩けないだろ？ そんな奴は黙って寝てろ。それ食ったら薬飲んで休めよ」

そういつて克己くんはサイドテーブルを指さした。

そこには冷えた桃缶の中身が器に盛ってあった。

「―― ……ありがとう」

そういうしか私に選択権はなかった。

そんな私の言葉を確認して、克己くんは部屋を出て行った。

一人残された私は、とりあえず会社で電話を入れようと携帯電話を取り出す。短縮ナンバーでコールしつつ、誰が出るのかは検討がついていた。

「どしたの？ あんた、凄い鼻声じゃない」

「うん。風邪ひいちゃって、だから……」

「ああ。良いよ、あたしがいつといてあげるわ。で、大丈夫なの？」
「平気と思う。ちよつと、熱があつて出ても役にたちそうにないからさ」

「そう、分かった。じゃあ、今日帰りにお見舞い行くよ。何かと一人じゃ不便でしょ。ちゃんと寝てるのよ」

「え？　ちよ……っ！」

私の返事を待たずにあやは一方的に電話を切った。

それにしても、どういう風の吹き回し？　あやがお見舞いなんて言葉を口にするなんて。最近私の周りがなんだか妙だ。

それに今、私は、家にいるわけじゃないしお見舞いは困る。こうなってしまうては這つてでも帰らないと。

私はぐらぐらする頭を気力でおこして、ベッドから出てきた。

「ええつと。着替え……」

ふらふらとリビングまで出てくると、昨日びしゃんこになってしまった洋服がきちんとハンガーにかけられていた。

シャツにはアイロンもかかっているようだ。

克己くんって几帳面なんだなあ。こんな子なら親も一人暮らしさせても安心だよね。

そんな余計なことを考えながら、何とか着替えをすませた。

「何か、メモる物」

お昼には帰ってくるってたし、心配掛けてもいいけないから、私は書置きを残しておくことにした。

「克己ーっ！」

「なっ!!！」

席についてぼんやりしていた俺に突然透が抱きついてきた。

「なっ、なんだよ！ 離れろって！」

「もう克己くん大好き」

調子に乗った透は頬擦りまでしてくる。

もう、勘弁してくれ、俺は今考え事をしていたんだぞ。って、何を考えていたんだっけ？

擦り寄ってくる透を突き放しつつ俺は我に返った。

「お前薄情だよなあ。俺たちほったらかしにして帰っちまうんだから」

「失礼なこというなよ。朝早かったしお前らはぐーすか寝てたじゃないか。起こされなかっただけ良しとしろよ」

「まあ、そんなことは良いんだけど、早紀がお前の連絡先聞いてたぞ」

早紀？ 誰だそれ……て、確認するまでも無いあの女のことだろう。

しかし、残念なことにその女のことを思い出そうとしたが無駄で、思い出せたのは組み直す足くらいのものだった。

うん、足の綺麗な女だ。

「で？」

「で、何考えてたんだ？ もの凄く遠くへ行ってたぞ」

「別に、何も考えてないさ」

俺の隣を陣取った透は「そっかなあ」と納得いかない様子だったが、半ば何も話す気の無い俺を諦めたのかどうでも良いのか、ふとこの間の話を始めた。

「何とかはぐらかしといたけど、どうかな。あの手の女は情報が早い。気をつけたほうが良いぞ。あと、瑠香ちゃんから何か……これか？ 何だちゃんと付けてるじゃないか」

透は、ずっと俺の腕をつかみ上げるとそういったが俺は静かに否定した。

これは碧音さんから貰った物で、瑠香に（多分）貰ったものは、その早紀って女が身に付けてるはずだ。

そうか、瑠香は俺が身に付けてないでもごねていたのだろうか？ 全く女って奴はどうして、こうなんだ。

勝手にくれておいて、それを俺がいつ身に付けようが勝手じゃないか……それを、どうのこうのと。

あいつも、俺がこれを付けてなければそう思うんだろうか？ でも、結構長いこと付けてる気がするが何かいつてきたりはしていない。

付けてることなんてきつと気にもなってないんじゃないだろうか。

—— ……そうか……。

あいつにとっては、ただそれだけの物でしかないわけだよな。い

やいや、俺にとってもそんなに価値のあるものじゃない。

ただの気まぐれだ。こんなものいつだって外すし、後生大事につけているわけじゃ……って、俺、何で自分に良いわけ並べ立ててんだよ……。

あまりの不甲斐なさにつくりと項垂れた。

「おい？」

「ああ、何だ」

「何か、お前ここんとこ、ちょっと妙だな。さては……」

ちよつと考え込んでしまった俺に、透は含み笑いを浮かべた。一体何だっというんだ？

「初恋ってやつ？」

「は、はあ？」

思わず大きな声になってしまった。

なにせ透が口にした言葉は想像以上に突拍子もなく、そこに何の根拠も存在しないものだったからだ。

「いや、何となくさあ。俺は思っていたわけだ。お前は『恋』ってのに無縁に出来てるんじゃないかと」

透は俺の肩にひじを乗せて、一人でうんうん頷きながら語っていた。

あまりの話に俺はあいた口がふさがらない。

「しかなあ。お前も人の子だったんだなあ。うんうん。今のお前は明らかに何か変わっている。それは、一年以上見守ってきた俺が保障しよう」

—— ……何の保障だ。何の？！

俺の言葉は声にはならなかった。

ただ、ただ、唾然と口をぱくつかせるだけだった。金魚みたい
という形容に当たると思う。

全く、みもふたも無いようなことばかり並べ立てないでくれ。

俺は疲れているんだ。

昨日もいろいろと、結局忙しかったし。

透のくだらないいい分を聞き流しつつ、ふと、時計に目を留めた。

——…もう、こんな時間か。

「俺、帰るわ」

「へえ？ 何で、今来たばっかだろ？」

「来たばかりなのはお前だろう。大体今日俺はレポートを提出しに
来ただけだ」

いや、その台詞はちよっとおかしいか？ 今日はずいぶんだし、講義
だってこれからあるんだし。

「まあ、待ってくれてる人がいるんじゃないか。仕方ないか。溜香ち
ゃんには俺からよくいってやるよ」

「馬鹿馬鹿しい！ 誰が誰を待ってるんだ。それに、溜香に何をい
うんだ。アホか」

たく、透のつまらない喋りに付き合ってる時間はない。俺は透に
悪態をつきながら席を立った。

「ただいまあ」

返事の返ってくるこのない、静まりかえった部屋に、つい、いつもそういつてしまう。

私はタクシーで家の前まで帰り、這うように自分の部屋まで上がった。

はあ、エレベーターでもあったら、ちよつとは違うんだけど。

ふとそんなことも思ったが、私はこのそんなアンティークな外観と内装が気に入って住んでいるわけだから、前言は撤回しておく。

何だか、克己くんの家を出てから、だんだん身体がだるくなってくる。

また、熱でもあがってくるのかなあ？ 昨日みたいにしんどいのはもう嫌なんだけど。病院にでも寄って帰れば良かった。

「でも、保険証は、家だった」

自分の実家のようにには行かない。

家の近所だったら、保険証なんてなくてもなんとでもしてくれただけど、ここでそれは望めない。それに滅多に病院になんて掛からないから行きつけなんてものないし……融通なんて利かないだろう。

実家より、ここは遥かにに都会だ。もう、いい。

私はしんどいにつまんないことばかり考えてしまう自分にスト
ップをかけて、とりあえず、パジャマに着替えて、ベッドに倒れこ
んだ。

はあ、苦しいよお。

喉が血の味がする。

鼻の奥が、つんとする……吐く息が熱い。気持ち悪い……もう、
寝返り打つ気にもならない。このまま寝てしまえ。
きつと起きたら治ってる。

私はそんなありえない期待を抱いて、瞼を落とした。

—— ……くしゃ。

俺は、ダイニングテーブルの上に置いてあった紙切れを握りつぶ
した。

『克己くんへ』

大分楽になったので、家に帰ります。借りた服は洗って返すの
でもう少しだけ貸してくださいね。

傍に居てくれて嬉しかったです。どうか、克己くんに感染^{うつ}って
いませんように

もし、体調が悪くなったら今度は私が看病するので、呼んでく
ださい。

白羽碧音』

—— ……あの、馬鹿。

あんな調子で楽になった、って、なるわけねーだろっ！
まともに家にたどりつけたのか？ タクシーで帰るくらいの頭は
あったらうから、多分大丈夫だろうけど……病院に寄るくらいは
したのか？

って、俺には関係ないか。

勝手に帰ったんだから、別に放っておけば良い。気に掛けるよう
なことじゃない。

—— ……全く。

俺は握り潰した紙切れをゴミ箱に放って、乱暴に荷物をテーブル
に置いて、リビングのソファに寝転がった。

昨夜は殆ど寝た気がなかった。やっぱり俺は誰かと一緒になん
て向いていない。

ごろりと寝返りを打って半ば無理矢理、目を閉じた。

そして定時になれば『X—クロス—』へ向かった。
今日のお勧めは何にしようか。そんなことを考えながら…… —

「良い香りですね。今日のデザートはプリンですか？」

厨房で仕込み、というほどでもないが開店の準備をしていた俺に
マスターが後ろからやんわり声をかけてくる。

「でも、ちょっと数が多いんじゃないですか？」

「ああ。2、3個持って帰っても良いだろ」

「それはかまいませんけど、克己甘いもの好きでしたか？」

その問いに俺は答えなかった。答えるとしたら、どちらでもない。
だけれど、その必要もあまりないだろう。マスターは俺の味覚にま
で興味はない。

今日は週末だから、混み合うことは予想出来た。

その予想は裏切られることは無かった。

まあ、そうはいっても店自体がそう大きいものではなかったし、
5・6組入れれば混みあってしまう。フロアーが混むと俺までが出な
くてはいけなくなるから、基本的には好ましくない。

優と違って俺は作り笑いというのが、本当に苦手なんだ。

何で面白くも可笑しくもないのに、へらへら笑えるのか不思議な
くらいだ。

そんな中、また、お客が入ってきた。

「あら、今日も混んでるのね」

「何だ。あやか」

「何だとはずいぶんな発言ね。これでも、常連さんでしょ。大事に
しなさいよ」

「で、今日はお一人で？ カウンターでよろしいでしょうか？」

とりあえず、うだうだいうあやに、マニュアルどおりに言葉を繋
いだ。

「悪いけど、待ち合わせなのよ。できれば出入り口に近いところが
良いんだけど」

そういうあやに店を見渡すとちょうど席を立つ姿が見えた。

「あそこすぐ片付けるからそこで良いだろ？」

あやがにつこり頷くのを確認して、案内した。

席に着くあやに、タイミングよく優がおしぼりを運んだ。それと
入れ違いに俺は裏へ引っ込んだ。

待ち合わせ……。か、また、違う男かな？

あやはよく“待ち合わせ”にこの店を使う。使うけれど相手が同
じだったのは碧音さんくらいだ。

「今日は不思議な組み合わせだよ」

暫らくして、注文をとってきた優が囁いた。

あやの待ち合わせ相手が到着したのか。
俺は何気なくフロアーを覗いた。

「あ、あれ？」

一番に目に飛び込んできたのは、小西の姿だった。もう一人は、
見覚えのない女が座っていた。

二人ともスーツ姿だから、仕事の帰りだろうか？

少しして、カウンターのほうであやの声が聞こえた。

「うん。その『リュイナール』で良いわ。箱にいれられる？」

「ええ、かまいませんよ。ちょっと、待っててくださいね」

そのやり取りが聞こえると、マスターがシャンパンのボトルを持
って、厨房へ入ってきた。

「克己。これ、箱におつめして。あやさんに渡してあげてください」

マスターから受け取ったそれは『リュイナール』というとても人
気の高いシャンパーニュ。黄金がかった黄色で、とても小さな気泡
が上がって繊細で味も、と、蒔蓄はどうでも良いか。

いわれたとおりに箱に詰め終わった俺は、フロアーに出てあやの
姿を探した。

さっき案内した席には二人しか居ない。

あやは、それを待つ間、カウンターの開いた席に座っていた。連
れの二人はほったらかしだ。

—— ……全く、あやらしい。

「お待たせ」

いってカウンターにラッピングの済んだ紙袋を載せる。あやはちらとだけそれを見て、口角を引き上げて、ありがとう。と、微笑んだ。あやの笑みは完璧だと思う。男が尻尾振るのも分かる。俺は振らないけど。

「で、今日はどういう組み合わせなんだ？」

思わず訊いてしまった俺に一瞬不思議そうな顔をしたがすぐにいつもの顔に戻ると

「克己知ってるの？ 静也のこと」

「あいつの、男だろ？」

「うん。そう、今のところはね。で、もう一人は弥生っていう、あの子の下についてる子よ」

「ふーん、妙な取り合わせだな」

「そうでもないわよ。だって、これからあの子のうちへいくんだもの。まあ、静也は連れて行く気なかったんだけど。あの男、妙なところで目ざといのよ。勝手に行くっていいだして。着いてきたのよ」

あんな状態のあいつのところへ、こんなメンバーでしかも見舞いはシャンパンで押しかけるって?! 一瞬俺は偏頭痛に襲われた。ぐりぐりと痛むような気がしたこめかみを押さえると、もっと頭の痛い発言が聞こえた。

「そうだ。克己もくると良いわよ」

「ええっ?!」

「マスター! 克己借りて帰っていいかしら」

—— ……待てっ！ 待て待て……！！

慌てて、あやの口を塞ごうとしたが遅かった。
ここはホストクラブじゃないんだぞ！

マスターはやれやれといった半ば呆れ顔で、ちらりと時計を見てから、あやの問いに頷いた。頷くな。俺を売るなっ！？

—— ……マスターもあやには弱いんだから。

ふっかい俺の溜息を誰も気に止めてくれない。いつから俺はこいつらのおもちゃになったんだ。

不思議な取り合わせは、がっくりと肩を落とした俺が加わってますます妙なものになってしまった。

小西静也は軽く挨拶も交わしたが、あやがうだうだいうほど悪い男にも見えなかった。そして、前を歩く三人を数歩下がって眺めていたが、ふと、あやが俺のところまで下がってきた。

「それ、何が入ってるの？」

「ん。これは、大したもんじゃないさ」

とりあえず、カスタードプリンはかすめて帰った。

「克己から見て。静也のことどう思う？」

「あ？ 別に温厚そうなタイプだな。ぐらいだろ。あんまし、知らないし。あいつが好きそうなタイプだ」

「そう。そうなのよね。全く、あのルックスといい物腰といい、碧音の好きなタイプなんだよねえ」

「そりゃ、良かったじゃねえか」

「まあまあ。すねないで」

俺の返答は極々普通だと思う。

大体、店の客の男の話なんて基本的にどうでも良いことだ。あやは、不機嫌極まりなく眉を寄せた俺の背中をぽんぽん叩き、話を続けた。

「でもね。静也の頭ん中は、あの子の恋愛観とは全く違うのよ」

「恋愛観、ねえ？」

「克己にだってあるでしょう。彼女とはこういう関係を保ちたいとかさ」

「別に。そんなこと考えたことないし。じゃあ、あやのそれは何な

んだよ」

逆に問い直した俺に「そうねー」と片手を顎に沿え考えるポーズをとった。

—— ……考えること数秒…… ——

「お金ね！」

「はあ？」

「いかにあたしを喜ばせるか。そこが一番重要だわ。あんたも参加してみる？　いくらでも貢いでくれる男は大好きよ」

悪びれる風も、隠すような風もない。

ここまで潔いというか、はつきりキツパリ告げられたら逆に好感を持ちそうなくらいだ。

呆氣にとられていた俺にあやは人差し指をつきつけ、にやりと唇の端を上げた。悪い女と書いてきつとあやと読むんだろうな。

「克己も参加する？」

「いや、遠慮しておく。それに、一般常識的にいってもお前のその『恋愛観』は間違えてると思うぞ」

はあ、あやの馬鹿な話に付き合っていると肩の力が抜ける。

そんな俺の姿をみて前に向き直るとまだ話を続けた。

何の恋愛観も持たない俺があやのことを、どうこういうことは出来ないとも思うが、一般常識的にはやはり……んー……ん……なんだろぅなあ？

「一般的なことはよく分からないけどね。あたしの恋愛観って、静也に近いと思うわ」

腕が触れ合うくらいの傍に寄って、あやはこそりと付け足した。その言葉は多少なり俺に衝撃を与える。

微かに「え」と漏らした俺に、あやは眉を寄せて不機嫌そうに続ける。

「あいつ、誰かのためにどう、なんて思わない人間よ？　自分が大好きなの。あたしみたいに」

最低よね。と続けたがそれは詰まり自分も最低だと思っているということだろうか？

「――・・・あの子は違う」

至極小さな声での呟きが聞こえなくて、俺は「は？」と問い返したが、あやは「なんでもなーい」と笑った。

「あたし、人を見る目は肥えてると思うのよね。だから、克己の望む答えはあの子のようなのが持つてると思うわ」

「望む……答え？　俺は何も望んでない」

「――・・・うん、そうね」

ふっと瞳を細めたあやは俺に何かしらの同情のようなものを、寄せているのだろうか？　こいつは時折そんな目で俺を見る。まるで小さな子どもでも宥めるように……。それがいつも俺とあやとの境界線だ。

少し離れたところにあいつの住んでいるらしい建物が確認できた。

ざーっと渦を巻いて流れていく水を見送りつつ、溜息。

―― ……うーん……

気持ちが悪い。

はぁ、もう吐く物もなくなっちゃったよ。

私は、今日一日で一体、何回嘔吐までしてしまったんだろう。
もう胃液しかでないから喉が焼け付くように痛い。

熱のせいで、涙も止まらないし。

話相手もない。

なんだか孤独だ。

自分でうがい用の塩水を作り、ガラガラとやっていると『リーン
ゴーン』と部屋のチャイムが鳴った。　　そういえばあやが来るって
いつてたんだ。ぼおっとする頭でふらふらとドアノブをまわした。

「やぁ。碧音ちゃん。大丈夫？」

ばたんっ！

開いた扉を勢いよく閉めた。

何で？

何で？

何で小西さんがこんなところにいるの？

どうして？

どうしてー……？

はっ！ 幻覚っ？！

そうか、これは幻覚に違いない。

駄目だ、私やっぱり脳に菌が入ってるんだ。

「――……よし寝なおそう」

と、ぽんっと手を打って踵を返すともう一度チャイムが鳴り、今度は「あーおーねー」と聞きなれたあやの声が響いた。

そか、あやを小西さんと間違えたんだ。

私ってばお目出度い奴。

そうそう、小西さんが居るわけない。

ちよっと辛くてしんどくて寂しいからって、嫌だな幻覚なんて。

自嘲気味な笑みを溢して私はそつと扉を開いた。

「今、寝なおそうとか考えてなかった？」

「え、え、いや、まさかっ」

先頭のあやにそういわれて私は慌てていい繕う。それをあやは軽く笑い飛ばしてから私の代わりにドアを支えた。

「ちょっと大人数になったけど、上がっても良いでしょ？」

「え？ あっ。ああ。良いよ。どうぞ……」

そういつてドアを開け放つと、やっぱり、見間違いないじゃなかった……し、一人二人ではなく、よくわかんないメンバーで来ていることに気がついた。

「よお」

最後に入ってきたのは克己くんだ。

本当にどういう組み合わせなんだろう？

そう思いつつ首を傾げドアを閉めた。

「これお見舞い」

「ん。ああ。ありがとう」

——…って…シャンパン…。

私はあやに渡された箱を反射的に受け取ってまじまじと見つめる。
何考えてるんだろう？ まあ、良いんだけど。

つまり、お見舞いは口実で一杯ひっかけに来たわけか。

「碧音ちゃんは、寝てたほうが良いんじゃない？」

「そっ！ そうですね。そうさせてもらいます」

小西さんに声を掛けられて、思わず声が裏返った。慌てて頭とか顔とか撫で付けると、擦れ違いざまの克己くんに「変わんねーよ」と突っ込まれた。

ほ、ほっというてよっ！ 急に恋人が訪問してきたら普通焦るでしょう！ 化粧もしてないし、髪だって綺麗に梳いてない…見られない姿なわけじゃないっ！

って、そう思うなら、早く引っ込んでしまおう。私は結局そこに行き着いてパーティションで仕切られたベッドに向った。

——…ああ、そうだ、その前に。

ふと思いついて、パーティションに手を掛けると、勝手知ったる他人の家。あやがちやっちゃと飲む準備をしているのを、流れ的に手伝わされている克己くんに手招きする。

怪訝そうにしつつも「何？」と歩み寄ってくれる克己くんに

「みんなにそれ開けてあげて、あと、それから……冷蔵庫の物を使って良いんだけど、その、えーっと私あまり自炊しないから……大したものないというか……」

「ごによごによと告げると「分かってるよ」と笑われた。

「病人は寝てれば良いから」

むうっとむくれたら意外にもそんな優しい言葉を掛けてもらう。え、と、目を瞬かせたらちゃんと続きがあった。

「そうそう、あんたは飲めないぞ？」

「わ、分かってるよ」

にやにやと続ける克己くんには眉を寄せる。怒らないよ。怒らない。だって、今日は小西さんが来ている。ちらりと、小西さんを盗み見てによによる自分が気持ち悪い。同じことを思ったのか、克己くんが「キモイ」と溢した。

さっさと行くっ！ と失礼な克己くんを回れ右させて、その背中を押した。

それにしても、私だけお酒にがめついと思われているんだろう。

失礼な。

確かに、惜しい気もしたんだけど。

あれ結構いいシャンパーニュだった。でも、今は飲む気もないし。

―― ……仕方ないか。

そう思い直して私は再びベッドの中に落ち着いた。

―― ……

暫らくすると、部屋に良い匂いがしてきた。

きつと、克己くんがおつまみか何か作ってくれてるんだと思う。何か買ってきたのかな……先にいったように冷蔵庫には、たいしたものはなかったはずだし。

料理をする克己くんを思い浮かべて、自分ももう少し自炊に精進しようと思ジンコだけ思った。

「碧音ちゃん大丈夫？」

そして、ごろりと寝返りと打ったところで、ひょっこりにつこり小西さんが顔を出してきた。

私は慌てて上半身をおこし、申し訳程度に頭を撫で付ける。

「ああ、寝てて良かったのに」

「はい。いや、ぜんぜん大丈夫ですから。気にしないで下さい」

私はしどろもどろになっていた。

もともと、今日なんて思考回路がショートしてしまっているんだから、役に立たないのは分かってたんだけど。

そんな私をさも可笑しげに小西さんは微笑んでいた。

はうう……その笑顔に弱いのです……。

「なあ、おい。今日何か食べたか？ お粥作っただけど。食える

か？」

そんな中、克己くんが顔を覗かせる。

きつと小西さんが傍にいたことに気がつかなかったんだろう。

小西さんを確認すると驚いて謝罪してきた。

「あつと。わりい」

「かまわないよ、悪いね。気を遣わせて」

「いや……良いんだけど……え、えーっと、あんたがやる？」

お盆に載せた小さな土鍋をちょこっと持ち上げた克己くんは、私は慌てて「大丈夫っ！自分で出来るからっ！」と声を張り上げてしまった。その声に驚いて、かちゃつと食器が僅かに鳴った。

「僕は向こうへ行ってるよ。僕がいると碧音ちゃん喉を通らないといけないから」

そんな居た堪れない私を見てか、そういつて、にこにこ笑いながら小西さんはその場を離れた。

「何、氣い遣ってんの？」

小西さんがリビングに座ったのを確認して、その変わりに近寄ってきた克己くんが不躰な質問をしてくる。

私は眉を寄せて、不機嫌そうに「別に気を遣ってるわけじゃない」と、答えたが克己くんはその答え自体、興味なさそうに「あつそ」と頷いてサイドテーブルの上に食器を載せてくれた。

柔らかくて暖かくて優しい香りがする。

「――……」

「ほら、熱いから気をつけて食えよ」

黙っていたら、わざわざ、茶碗によそって手渡してくれる。ありがとうと反射的に口にしたけど、返事はなかった。その代わりに続けられた台詞に私はこくこくと頷いた。

「プリンも作ってきたけど食う？」

「――……食う」

私の返事を確認して克己くんはキッチンへ戻った。

確かにお腹はぺこぺこだったんだ。

お腹の中全部出しちゃったし。

じっと手の中のお粥に目を落とす。ふわりふわりと登る湯気が頬を撫で、優しい気分にくれる。それと同時に、昨日から迷惑を掛けっぱなしだなという気持ちも湧いてきて、申し訳なさ倍増だ。

でもそんな気持ちを察することなく、お腹がぐうと自らの要求に素直な音を立てた。

……ぱく……。

味が無い。

舌がおかしくなっていて、味覚がほとんどなかった。仕方ないか。でも、ちよつと残念。

それにしても、何で弥生ちゃんが一緒なんだろう。

弥生ちゃんとあやって仲良かったかなあ？

急に良くなったのかな？

そして、それを確信付けるようにパーティション越しに伺えるのは楽しそうな様子だ。

—— ……良いなあ。私もあそこに加わりたいよ。

「調子が良くなったらいくらでも遊んでもらえば良いだろ」

プリンを片手に克己くんが再び入ってきた。って、いうか克己くんは心が読めるんだろうか？

—— ……むう。

思わず眉間にしわを寄せる。

声には出してなかったと思うんだけど。

「お前が考えそうなことだ」

—— …… やっぱり分かるんだろうか。

お皿をうけとりつつ、首を傾げた。

「熱はさがってるみたいだな」

食べ終わったお皿を下げつつ確認がはいった。確かにさっきまで、苦しかったのに今は何となく楽になった気もする。薬も全部吐いちゃったと思ったけど少しは効果があつたのかも知れない。このままずーっと下がって、治れば良いのに。そう思いつつスプーンを運ぶ。

あれ、このプリンすっごい滑らかでおいしい。味は良くわかんないけど。

わざわざ、作ってくれたんだ。

「ああ、良いよ。そのまんまで」

—— …… と、いわれたものの。良かったのか、本当に？

俺たちはあれから、もう1時間ほど居座って、あいつの部屋を後にしていた。

こいつらときたら、散々散らかしてそのまんまにして、出てきやがった。俺もちよこちよこは片付けていたんだが、おいつかなかつたんだ。

「じゃあ、僕は電車で帰るよ。また、週明けね」

「はいはい。さっさと帰んなさいよ」

「相変わらず冷たいなあ。泉は」

困ったように眉を寄せばやくようにそういったあと小西は俺の方を向いて口を開く。

「……じゃあ、克己くんにも世話になっちゃったね。今日はお疲れ様」

にっこりと、そして頭を下げて手を振りながら、駅への道を曲がっていった。

「で、ちゃんと、弥生はいつといたの？」

それを確認してから、あやがちよっとキツイ口調で弥生に声をかけると、一瞬弥生の肩がこわばった。

「はい。ちゃんと、謝ってきました」

「で、碧音はなんて？」

「その……もう良いよって……。あ、わたし、家あっちなんで。これで……」

慌てた様子でそれだけ告げると小走りで去ってしまった。それを見送ったあやは、やれやれと溜息を吐くと俺のほうを見た。

「昨日、碧音らしくない失敗しておかしいと思ったのよ。だからちょーっと調べて、かまかけたらあっさり落ちたわ」

憎々しげにそう告げたあやは、もう一度溜息。そして続けた

「全く……弥生が仕組んでたのよ。本当は今日出勤したら、ちゃんと話させようと思ってただけど。精神的にあの子ちよつと脆いのよね……熱出してるといいうし」

碧音さんの熱は多分雨に濡れたせいだと思ったことは伏せた。黙っている俺をどう受け止めたのか知らないが、あやはちよつと肩を竦めた。

「まあ、克己には興味ない話よね」

いや、関係は無いが興味はあった。

昨日失敗した。とか、いっておいおい泣き崩れていたやつだろ？あやの話に返事こそ返さなかったがなんとなく納得した。

「ああ。そうだ。これ」

「ん？ 何だ」

急に思いついたようにあやは握りこぶしを突き出すと、俺の手に何かを握らせた。

手の中のそれをまじまじと見つめた……

—— ……鍵？

首を傾げた俺に、あやは相変わらず不遜な態度のまま顎で俺を使う。

「早く行って、片付けという
「は？」」

「あんたねえ、あの子は今風邪で寝込んでいるのよ。動かしたらかわいそうじゃない」

てことは、これは碧音さんの部屋の鍵ということか。

「お前。最初からそのつもりで」

俺が最後までいい終わらないうちに、あやの人差し指で言葉を切られた。

「ふふ。見破れなかった。克己の負けよ。早く行って」

何が負けなんだ。

俺は一体何に負けたといわれているんだ。

腑に落ちないのはやまやまだが、確かにあの部屋をあのままにしておくことは気の毒なので、俺はしぶしぶ来た道を引き返した。

—— ……もう、寝てるかな。

さっきまで、にぎわっていた部屋は静まりかえっていた。
寝ていたとしたら、チャイムを鳴らして起こすのも悪いし、そう
いう意味で、あやは鍵を渡したんだと思うから勝手に入って良いっ
てことだよな？

俺はぶつぶつと自分にどこかい訳染みたことを考えつつ

「お邪魔します」

静かにドアを開けた。と、突然。

げほっ！ ……けほっ ……！！ と激しく咳き込む音と

「あああ……。しんどいよお……」

トイレのほうから泣き言が聞こえてきた。

少し戸が開いていて、ザア……と水が流れる音とともに碧音さん
が這い出してきた。

「おい？ 大丈夫か？」

「はれえ？ 克己、くん？ けほっ ……どしたの？ 忘れ物？」

大丈夫じゃなさそうだ。

やれやれ。

肩を貸し何とかうがいもさせて、ベッドに寝かせた。

そして暫らくすると、体温計の電子音がかすかに聞こえた。

「37・8度か。昨日ほどじゃないな。しかし、今日一日こんな調子だったのか？」

「んゝありがとう。そう、こんな調子。で、忘れ物だったんじゃないの？」

「ん？ ああ。このまんまじゃ、あまりに気の毒だから、片付けに戻ったんだよ。そしたらお前が這いつくばってたんだ」

「あはは……。そっか。悪いね。ありがとう……。私、少し寝て良い？」

「聞かなくて良いから、さっさとそうしてくれ」

そっけなく答えれば、そっか、そうだね……と力なく笑い、辛そうに目を閉じた。

―― ……さて、とりあえず、片付けようか。

リビングダイニングに散らかった、雑誌やらテーブルの上をとりあえずざっと片付けて……。とか、いそいそと片づけを始めてしまった自分にふと、疑問も感じたものの、直ぐに忘れることにした。

何でこんなことをしているのか？とか、そんなことに疑問を持つても、答えが出ないことは、明らかだったから。

それにしても、案外あの男冷たいな。

洗い物をしながら、不意に考える。週明けに……っていったんだから、明日は休みなんだろう？ 休みなんだったら、ここに居てやれば良いのに。碧音さんが自分から居て欲しいなんていえる人間じゃないことくらい、短い浅い俺にだって分かる。甘えたくても、甘えられないタイプだ。

気がついてないわけなのに、あんな優しそうな顔して、平気で

あいつをそのまんまにして帰っちゃもうんだから。

はぁ。と溜息が零れてしまった。

その溜息が何に対してのものか分からない、分からないけど、この間のことが脳裏に蘇ったことは確かだ。

そして、あやの恋愛観がどうの。という話を思い出した。

――…

へえ。こいつ洋書なんか、読むんだな。

一通りの片付けを終えて、ひと段落。パソコンデスクの傍に置かれた数冊の本に目を留めた。

クリスティー……か、ミステリー書だな。

碧音さんの雰囲気からはちょっと意外だったそれを手に取った。話題のタレント本とか、恋愛小説とかが並んでそうなイメージがあったけれど、そういう類のものは目に付かない。

ぺらぺらと手に持った本を捲りつつ、俺はベッドの隣に陣取った。その気配に気がついたのか起きていたのか「ありがとう」を重ねる碧音さんに「ああ」とだけ返し足をくんで膝に本を載せ少しだけ目を通すことにした。

「で、葉、ちゃんと飲んだか？」

「うん。大丈夫。ちゃんと飲んだよ」

「なあ、ちよっと訊いて良いか？」

ちよっとした好奇心と興味。

「ん？ 何」

「何で、あんな奴と付き合ってたんだ？ お前、ほったらかしにされてるんだぞ」

「そっかな？ そんなことないよ。小西さんは優しいよ。今日だって、来てくれたし、気を遣って早めに帰ったんだよ。その気持ちだけで充分じゃない？」

なんだその無駄にポジティブな感じは……。

何気に自分の眉間に皺が寄るのを感じる。

「それに、私は何かをしてもらいたいわけじゃないし。どちらかといえば、してあげたいんだよ。だから、今日は迷惑かけて悪かったと思ってるし」

「―― ……ふーん……」

それ以外に何もいえない。

俺は恋愛ごとに詳しくないし、興味もないけれど。碧音さんが馬鹿がつくほどの超お人よしで、超都合の良い女になりやすいタイプだということは、手にとるように分かった。

大体、あいつは電車の時間を気にして帰っただけだと思うし……別に気を遣ったようには見えないんだけどな。

そう、現実的に突きつけてやりたかったが、碧音さんは再び重たそうに口を開いた。

「昨日は、ごめんね。何か結局泊っちゃったし……そのお」

「別に何も聞かれて無いからいいってない」

「いや、その、別に良いんだけど、ね。疾しくないし。だから、そうじゃなくて、その、うん。ありがとね」

曖昧な笑顔を浮かべてそう締め括ると静かに目を閉じた。

あんまし、つまんないことを追及しても始まんないし、まあ、本人がそれで良いのならかまわないか。

最終的に、泣くのは碧音さんだと思うけど……他人の俺には関係のないことだよな。そういう関係を許しているのはこの人自身だ。

そのあと無防備にも、再び眠った碧音さんの隣でぼんやりと本のページを捲る。最終ページに栞が挟んであったから読み終わったもののなのだろう。

枕元にあった赤銅色のアンティークな時計に視線を走らせる。戻ってきてから一時間半くらい過ぎたころだ。碧音さんの枕元で短い電子音が規則正しい音を響かせた。

よく眠っていると思ったのだけど、その音への反応は早かった。

いつも気になってしょうがないんだろう。

ある意味、可愛そうな話だ。

音の犯人は携帯のメールだったようだ。

受信メールを確認した碧音さんは幸せそうに再びベッドにもぐりこんだ。

別に覗く気はなかったのだけど、開いていたし、放り出されていたので嫌でも内容は確認出来た。

「なるほど。これだけで良いのか」

やっぱし、俺には理解出来ないということが良くわかった。

アホだこいつは。騙されて泣け。

『早く元気になってね』

たった、それだけで、そんだけ幸せそうに出来るような常春の脳みそしか入ってないなら、一回全部出して入れ替えたほうが良い。

絶対だっ。

なんだか、俺は必要以上に苛々として、何でこんなところに腰降ろしているんだと、不愉快極まりない気持ちになった。

ちらりと、覗く碧音さんの後頭部を睨みつけて、もう帰ろう。そう思ったのに、なんとなく、このままにしておけないあたり、俺も、もう結構なアホだな。

PPP……PPP……

「んゝ……」

私は、いつも通りに鳴る携帯のアラーム音に起こされてしまった。

あふう。

眠い。でも昨日までよりは身体が楽になった気がした。調子が戻ってきたのかな？

克己くん帰ったんだ。ちらりとベッドの脇に視線を走らせて、ぽつと思う。

いつ帰ったんだろう？ 声くらいかけてくれたら良いのに。

一人暮らしも長いから、誰かに看病して貰うなんてこともなくて、だから少しだけ嬉しかったのが本音。心の中だけでありがとうと告げると同時に、お腹がぐう……どんだけ腹ペコなんだ私。がっくり

と肩を落とし、鳴り響くお腹の音を納め空腹を満たすため、わずかな期待を込めて、冷蔵庫を開けた。

「あった」

正直、すごい嬉しかった。

昨日のプリンがまだ残っていた。

早速それをお皿にあげた。

あ、カラメルソースは別にしてあるんだ。

その隣に置かれていた、器からスプーンでソースをすくってとりと垂らした。

「美味しそう！ 克己くんありがとう」

いただきまーす！ と、気分良く、一口目を頬張った。

昨日は食感しかわかんなかったけど、今日は味がはっきり分かる。

口の中にやんわりと広がるカスタードとカラメルの調和……

—— …… ああ、幸せ。

「ん」

と、そのとき、ふとパソコンの電源が入っているのに気がついた。私、消してなかったのかなあ、てことは一昨日から？ まさか……。

慌てて、パソコンに近づくといつもと違うのに気がついた。

スクリーンセーバーが伝言板に変わっている。

『Look at once!』

「――……?」

誰だこんな悪戯したのは。

そんなに急がせたって……もう……。

私は言葉無く、マウスを振った。

ぱっと画面が切り替わると、メモ帳にメッセージが書かれていた。
克己くんからだ。

そこには、手短に冷蔵庫の中身と――まあ、すでに確認してしま
ったけど――病み上がりにいい食事のレシピ等が書かれていた。

そして最後に …… ――

私はそれを確認して僅かに頬を緩めると電源を落とす。

思わず歌とか口ずさみそうになるのを堪えて、菓を飲むため水を
汲みにシンクへと向った。

『調子が良くなったら。また、その馬鹿面見せに来いよ。美味しいも
ん食わせてやるから』

あれから、一週間ほど何事も無く過ぎていった。
あいつの風邪は治ったのだろうか？ あやのほうは何度か店のほうに顔を出してはいるが、つれは決まりない連中だ。

「古河。大丈夫か？」

「あ？ ああ。何かあったか？」

隣にいたのは、珍しく真だった。

調べたいものがあるとかいって、それに付き合っ図書館の資料室に入っていたわけだが、山のような書籍の前に、俺はぼんやりとページを捲っていたようだ。

—— …… 「解体新書の謎」 って……。

何でこんなもん読んでたんだ？ 我ながら苦笑してしまう。

「何か悩み事でもあるのか？」

「いや、何でもない。ちょっと考え事してただけだから」
「そっか」

そういつて俯いた真のほうが大丈夫そうではなかった。

「で、お前の方が何かあったんじゃないのか？」

つい、たずね返していた。

普段ならこんなことまで触れたりはしないかもしれない気もするが何となく気になって。

やはり真も同じように感じたのか、俺の言葉に少し驚いたような顔をしてこちらを見たが、すぐにその顔は伏せられた。

そしてやや沈黙が落ちたあと「お前、瑠香のことどう思う？」そう切り出してきた。俺を見ることもなく、ぼそりと呟いただけ。体重を預けた椅子を傾かせて、ぼんやりと窓の外を見ている。だからつい

「俺に聞いているのか？」

そう聞きなおしていた。そんな俺の返答が気に入らなかったのか、真は、かたんと椅子を元の位置に戻して、不機嫌そうにこちらを向いて「当たり前だろ」と眉間の皺を濃くする。

でも、俺には真の言葉の真意が分からない。分からないから普通に首を傾げた。

「で、どうってどういう意味？」

「どうって、そのまんまだよ。だから」

「何だ、お前やっぱまだ、好きなんだろ？」

その一言に真の視線は泳いでいた。こいつも物の隠せない人間だな。

こういう奴を見ると何となく微笑ましくなる。

あいつみたいだな。

ふと、その姿を思い出しかけて『あいつって誰だよっ』と心の中

だけで毒づいた。そして、今俺のことはどうでも良い。差し迫った真の話は、至極簡単なことだと思う。

「もっかい、くっつけばいいだけの話じゃないか」

「簡単にいうなよ。だって、あいつは」

「あいつは？ 何だよ？」

「だから……」

なんでそこで口籠るのか理解出来ない。簡単じゃないってなんで簡単じゃないんだ。さっぱり意味が分からない。

何だっというんだ？ 俺はそんな真の様子を伺うしかなかった。

「―― ……まだか？」

あまりに返答が遅いので、つい、いつもの癖でつつこんでしまった。

忍耐がたりないな……。――。

「だから……今、溜香は、きつと……」

「きつと？ 何？」

「お前に興味持ってたんだよ」

「……へえ……」

―― ……しまった。

あまりに間の抜けた声を出してしまった。

真は今の俺の返答に少々腹を立てているようだ。真っ赤な顔をして俺を見ている。とはいえ、俺に怒るのはお門違いも良いところだ。別に俺と溜香はただの顔見知り程度の間柄で、個人的なものは何もない。あっちもそう違わないと思う。もし、それが違っていたとし

ても

「いや、それでも、俺が興味あるわけではないからさ」

「っ！　なんだよそれ。ていうか、お前が興味あるのは誰なわけ？　興味あるやつなんているのか？」

「俺にどうして欲しいわけ？」

どう考えても、俺は真に絡まれているとしか思えなかった。

俺に非があるとは到底思えない。かといって、それに乘っってしまうのは元も子もないし。

「どうって……。だから、お前さ特定の彼女とか作んないの？」

「彼女？」

「そうだよ。それだったら、瑠香だって諦めつくだろうし、麗華さんに絡まれることもないと思うぞ？」

「――……」

――……はあ。

俺は言葉を失った。

なんだか、腹が立ってきた。

今、真がいつてることは正しいのか？　何で俺が、そんなことをしなくちゃいけないんだ。

瑠香が好きなら自分でなんとかすれば良い。

何で人を巻き込むようなことをいうんだ。

その場を立ち去りたい気持ちを抑えて、俺は何とか堪えていた。

「そのことなら、俺もそう思うぞ」

そんな緊迫した雰囲気を崩したのは透だった。こいつの登場はいつも絶妙だ。

どこから、俺たちがここにいるのが分かったのか、二人の間に、よっこいしょと、腰を下ろして話に入ってきた。

「よくここにるのが分かったな。」

「ん？ 分かるさ。俺は克己くんのストーカーだからな」

にここにこそういつてのけると、俺の肩を抱き寄せた。

全くつまらないこといわないでくれ。

透がいうと、微妙に冗談に聞こえない。あまりのタイミングの良さに本気で疑いそうになる。

それにしても前から思うのだが、どうして透は俺に好んで寄ってくるんだろう。特に縁があるってわけでもないのに、ここに入ってからずーっと透には付き纏われているような気がする。

「で、何で、透まで俺の彼女がどうのこうのって話になるんだ？」

「俺は、真みたいな理由ではないけどな。何かさ、お前感情に欠けてるんだよなあ。何でも淡々とこなす割には何一つ真剣になってるもんがないっていうかさ。そこには……『愛』……が必要なんだよ
お」

—— …… がばっ！

「ぐえ！」

いきなり透が抱きついてきたため、俺は蛙がつぶれたような声を出してしまった。

ぬあ……透に『愛』について語られるとは思わなかった。

「ああ、そうだ。真」

俺に引っ付いたまま、真へ話は移った。まだ不機嫌を引きずっていた真は、普段よりも数段無愛想に返事をする。

「何だ？」

「お前さ。瑠香ちゃんのこと、あんまし分かってないんだな」

「どういう意味だよ」

「ほら見ろ。こんな仏頂面なんだぞこいつは」

ぐいっと俺の顔を真へ向ける。だから俺を引き合いに出すなつてば。

「そんなの関係ないだろ？」

「いや、関係あるさ。瑠香ちゃんはいいつのこの顔を気にしてただけだぞ」

「ていうか、ちょっと待て。俺の顔ってどういうことだよ」

「ほらな。こんな顔ばっかししてるだろう？ どうしてかって心配してたんだとよ。この前は、お前が来てない方を悲しんでたぞ」

ますます、腑に落ちない。

確かに、一番最初に会ったときから、瑠香が真のことをまだ好きだということは俺にだってわかった。で、俺の顔がなんだっていうんだ。

一体俺がどんな表情してるっていうんだ？ 確かに透みたいに笑ったり、怒ったりすることは多少少ないかもしれないが……それが何だっていうんだ。

それが俺に足りないっていいいたいのか？ 感情の表現なんて個人の自由だし、みんな違うんだ。

そんなことでどうのこうのと……他人に迷惑をかけるわけでもな

いはずだ。透にだってとやかくいわれるべきことじゃない。

今度は俺が不機嫌になる番のはずなのに、俺は結局それ以上の話を透から聞くことは出来ずに不完全燃焼に終わった。

―― …… ――

「うん。絶品」

俺は店に出す、サラダにかけるドレッシングを作っていた。今日はホイールトマトも使ったんだけど、これもなかなかいいかな。ちよつと辛口の酒に合いそうだ。

―― …… あいつがきたら喜びそうなんだけど。

「…… ――」

ふと脳裏に浮かんだ台詞に苦い顔になる。酒好きは他にごまんと居るだろう。寄りにも寄ってあれじゃなくても。複雑な自己突っ込み。

「克己。オーダー入ってますよ」

フロアーからマスターの声が届いた。

ひよいと顔を出すと、マスターにオーダー表を渡された。その向こうにはあやが座っていて、にこにこ手振っていた。

あいつ、毎晩飲み歩いて大丈夫なのか。
しょっちゅう顔を見るぞ。

「―― ……で、今日は飯食いに来たわけか」

「そ。ここなら、あんたが話し相手してくれるでしょ」

「話し相手が欲しいなら、優にでもやってもらえば良いだろう。俺じゃ話は続かないぞ」

オーダーの中にあつた、ワインをグラスに注ぎつつそんな言葉を交わした。

「そんなこといわないでよ。碧音が一緒だったら、何にもいわなくてもそこにいるじゃない」

「別に、そんなつもりはないけどな。まあ、あいつはあやよりは、美味そうに食うな」

「あら、あたしだって、美味しいと思って食べてるわよ。だから、良く通ってるでしょ……っていつでも、あの子には確かに敵わないかもね。幸せそうに食べるから」

そうそう。

そうなんだ、だから作り甲斐もあるし感想を聞きたくなるわけだ。辛味とか甘味とか、どのあたりが境界線なのかとか、試したくなるし。

「何だよ」

ふと、気がつくにあやが人の顔を見てほくそえんでいた。

「いやあ。克己でもそんな嬉しそうな、愉しそうな？ 顔することがあるんだなあ……って思ってた。やっぱし碧音はすごいなあ」

「だから、何で、あいつが引き合いに出て来るんだよ」

「え？ だって、そうじゃない？ 認めなさいよ。あの子に惹かれてるって」

「何で、そこに行き着くんだよ。あやがそうなって欲しいと思ってるだけだろうが」

今日は透や真と、そんなこんなでうだうだしたら、正直いってうんざりな話題だった。だから、そのまま噛み付いてしまったのに、あやは軽く肩を竦めただけで特に気分を害した風でもなく箸を進める。

「そりゃそうだけど。それだけで、あんたが変わる？　あたしの策略にはまって？」

そして、あやはますますふてぶてしい顔をして笑っていた。

「じゃあ、そのまま、あたしの策略にはまってれば良いわ。悪いようにはなんないだろうし」

「男がいるのか？」

「あら、月並みのこというのね」

「ほっとけ。常識人なだけだ。で、そいつの話だけど。風邪、治ったのか？」

とりあえず、話の流れ的にそのことを聞くしかなかった。

あやは、グラスの中のワインを回しながら、俺の話に乗じた。

「風邪？　週明けには良くなってたわよ。ここんところ、仕事の方が忙しいみたいなのよね。葉月チーフ人使い荒いんで有名で、なかなか下につく人がいなかったのよ」

「で、碧音さんに押し付けたわけか」

何となく雑用をこなしつつ、話を繋いだ。

「―― ……ああ。そう、押し付けたわけじゃないけど。あの子がやるっていうなら、役付き的には昇格なわけだから、やるにこしたことはないわよ。思ったとおり上手く使われてはいるみたいだけど。あの子ならなんとかやってのけるわ」

「かってるんだな」

「そうね」

ゆらゆらと揺れるグラスの中身を眺めつつそう呟いたあやには少し意外だった。あやは容姿もさることながら、多分、仕事も他より抜きん出て出来るタイプだと思う。

そういうやつはあまり人を立てることを知らない。

……それは、俺も、か……。

そう行き着くと自嘲的な笑みが零れた。

—— …… 疲れた。

今日は久しぶりに早く開放された。私はこのところずっと残業続きで、くたくただった。今までよりもずっと細かいことまで気を配らないといけないし、人まで動かさないといけないとなってくると、頭の処理能力が追いつかないし、そのせいで人の倍は動き回っているような気がして、精神的にも体力的にもちよつと限界。

家に帰ってもそのまま倒れこむように眠ってしまったて、朝シャワー。そして、出勤。帰宅、ばたんきゅー……これの繰り返しだった。肌にも悪い……。

はあ、と溜息を溢して、そつと頬に触れる。大丈夫？　大丈夫だよね。うん。まだ曲がってないっ！

自分に強くない聞かせる。それがとても馬鹿馬鹿しいことだと気がついて、また溜息を重ねる。駄目だな。疲れてるや。

溜息って幸せ落とすっていうし、姿勢もちよつと悪くなる気がする。見目が良いわけじゃないんだから姿勢くらいいしゃんとしてないと、ね。

こつっといつもの帰路に着こうとしてふと思ひ立つ。

明日は休みだし。

ちよつと、寄って行こうかな。

小西さんにも連絡したんだけど相変わらず返事は遅れているし、家に帰っても寝てしまいそうだから。

それに、帰って一人でご飯を食べる気にもいまいちなれず、何となく「X―クロス―」に足を運んでいた。

「久しぶりですね。お仕事お忙しかったんですか？」

マスターがにっこり微笑みながら迎えてくれた。

なんだか、その雰囲気にはっとしながら私はカウンターの隅を陣取った。

「今日は、良いワインが入ったんですよ。ええっと。『シャトー・ムートンロスチャイルド1992』ですよ。試飲されます？」

「え？ いいんですか。是非くださいな」

シャトーのムートンかあ。わくわく。

きゅっきゅとコルクの抜ける音が心地良い。

このところ、ばたばたと毎日を過ごしていたのでじっくりワインを味わう時間なんて無かった。

今日はちよつとゆっくりしよう。

私自身への御褒美といったところかな。

「ほら、つまみ」

すっとマスターの脇から克己くんがチーズを持ってきてくれた。それを確認して、マスターはその場を外した。

「大丈夫そうだな」

「うん。もうすっかり。あの時は迷惑かけちゃったね。ありがとう。助けてくれて」

「只の気まぐれだから気にしなくて良い」

―― ……気まぐれか……。

克己くんらしい言葉に、思わず笑みが零れる。

それでも私は助かったのは本当だ。

一人で堪えなくて良かったし。片付けもしなくて良かった。

それだけでも感謝に値して当然だ。

「そうだ。明日、克己くん家にいる？」

グラスを揺らしながら、ぽつと思いついて口から出た私の質問に少し驚いた顔を見せたので、私は言葉を付け足した。

「この間借りた、スウェット返しに行くよ。すっかり遅くなっちゃったけど」

「ああ。あんなの気にしなくていい。わざわざ返すほどのものじゃないし」

―― ……えええ。折角、洗濯したし。返しに行く気満載だったのに。

「いや。明日なら、家にいるから来たかったら来いよ」

「ほんとに。そかそか。じゃあ、行くね」

—— ……ん？

私は、ややあってからの返答ににこと頷いたが、ふと、やっぱり、心読まれてるのかな？ とか、思ってしまう。

ま、いいや。

あやからも考えてることがバレバレだとはよくいわれることだし。別に克己くんが特別そうだというわけでもない。私の顔が馬鹿正直なだけだろう。今更どうしようもない。

うんうん、と自己解決したところでバッグから振動を感じた「小西さんからだ」直感的にそう思って、慌てて携帯を取り出した。正面に居た克己くんに目で「ちよっとごめんね」と謝罪してから、そっと横を向いてケータイの着信を受ける。

「はい。—— ……え？ 今からですか？ はい。うん、分かりました」

正解だった。

電話の向うから聞こえてくる小西さんの柔らかい声質に、ふんわりと胸が温かくなる。仕事が終わって直ぐに掛けてくれたのか、まだ慌しそうな雰囲気が残っているけれど、それも嬉しい。

ほんの少しだけ入ったアルコールの熱だけではなく、ふわっと頬が熱くなるのを隠すように私は、益々身体を横へとずらした。

—— ……ピッ

と、ケータイを切ってバッグに滑り込ませたあと、残ったワイン

だけ頂いて私は席を立った。

「じゃあ、明日行くね」

慌しくそう告げる私に克己くんはそっけなく肩を竦める。

「何だ。もう、帰るのか？ 小西か」

「うん。そうなの」

でもそんなこと全然気にならない。久しぶりに小西さんに会えると思うと、嬉しくて顔がほころんでしまう。

同じ会社の中においても、部署が違っているとなかなか顔を合わせることがなくて、お互い忙しい。そうなると電話やメールで、というのが常になってしまう。我慢しなきゃいけないところなんだけど、私はやっぱり顔を合わせて話したい。

だから、余計に浮き足だってしまった。

荷物を抱えた私は、出入り口のところでマスターに一言お礼をいって、店を後にした。

気がつけば約束の場所まで小走りになっていた。遠くに小西さんの姿が見えて、浮き足立つともっともっと早くなる。

「お待たせしましたっ」

少しだけ上がった息を整えながら小西さんの前に立てば、柔らかい笑みが向けられる。

「ゆっくりで良いっていったのに、走ってきたの？」

「え、ああ……えっと、気がついたら走ってました」

なんだか凄く恥ずかしいような気がして、私は赤くなる頬を隠すように顔を逸らしてそう告げれば、小西さんにくすくすと笑われてしまう。

「食事どうする？ 何か食べた？」

そう口にして自然と小西さんが隣に並ぶと、ゆっくり歩き始めた。冷たい風に混じって、ふわりと甘い香りがする。お酒？ かなあ。

ちらりと隣を仰ぎ見れば、小西さんと目があった。小西さんは、ふと気がついたように「ああ」と溢して私の手を取った。大きな手に包み込まれるとほっとする。手が繋ぎたいって意思表示ではなかったのだけど……そう取ってもらえたことは幸運かな。

「小西さんは、もう、食事済んだんじゃないんですか？」

「え？ どうして」

「甘い香りがするから、お酒かなと思って……」

気がついたままを口にすると小西さんは苦笑して空いた手で前髪をかきあげた。

「ごめんね。付き合いで少し飲んでたんだ」

「良いですよ。私もX―クロス―で少し飲んでいたところだったんです。家に帰ったらばたんきゅーってなっちゃうと思って」

にこにこと口にすれば「最近忙しかったもんね」と笑顔を向けられる。

結局、私たちは家の近くのお店で料理をテイクアウトして部屋に戻った。明日、私は休みだけど、小西さんはそうではないようで、あまり連れまわしては可哀想かと思ったから。それに一緒ならどこに居ても私は嬉しい。

「そういえば、イルミネーションが綺麗なところがあるって同僚に聞いたんだ。碧音ちゃん好きだよね、そういうの」

今度行ってみようか？ と続けられて私は二つ返事で頷いた。その返答に、小西さんも微笑み返してくれて、次に休みがあうのはいいつだったかなーとケータイをいじる。

私はその隣に腰掛けて、グラスに注いだ麦酒をちびりと傾ける。グラスまでキンキンに冷やしておいたから冷たさが喉に痛いくらいだ。真夏でもないのに……。

冷たいと眉を寄せた私の頬に小西さんの大きな手がかかる。その手に促されて隣を仰ぎ見ると、とても近い場所に小西さんの顔があった。

空いた手が私の手の内からグラスを抜き取ってローテーブルに載せる。

「ん……冷たい」

軽く唇が触れ合って、私の下唇の上を舌が這うとそういつて微笑まれる。反射的に謝罪を口にしようとしたけど、それは声にならなくて……。

「直ぐに暖かくなるよ」

いつて、小西さんの暖かな舌先が口内に割りいつてきて、冷えた舌を絡め取る。頬を滑っていた手のひらは頭の後ろに回り強く引き寄せられ、深く、深く絡みつく。

―― ……ぽすっ

ソファにゆっくりと押し倒された私は、小西さんの首に腕を絡めて離れてしまわないように強く抱きついた。

ピンポンピンポンと五月蠅いチャイムで目が覚めた。

昨日は遅かった。だから、朝はゆっくりとするつもりで……ぼーっとしつつ何度瞬きしてもいまいち目が覚めない。それなのにチャイムは諦めない。五月蠅い。誰だ。何もこのチャイムも部屋中に響き渡る必要もないだろうに……。

ベッドサイドにおいてある時計を確認して、ぽすっ顔を枕に埋めた。昼はとっくに過ぎていた。

―― ……そういえば……。

ふと昨日の碧音さんを思い出した。今日くるっていった。このしつこいインターホンは碧音さんだろう。一応“約束”してしまっていたわけだし、居ると思ってるんだろうな。

俺は一度深く深呼吸してベッドから抜け出した。

ぼんやりとしたまま、リビングまで出てきてインターホンに出る。

「悪い。今起きたんだ」

『そうなんだ』

……あれ？

そのときやっと、はつきり目が覚めた。

スピーカーから聞こえた声は、あいつではなかった。

聞き覚えがあるような、ないような。

——……一体誰だ？

何で、俺の家を知っているんだ。

時計はもう13時を過ぎていたし、碧音さん以外と今日約束したつもりはない。わけの分からないやつを部屋へ通すのは絶対に嫌だ。

仕方なくその誰かを、追い返すために俺はロビーへ降りていくことにした。

「おはよう」

悪い。思い出せない。

そうは思っても、そんなことを口にするとは出来ない。

ロビーまで降りた俺に声をかけてきた女を、邪魔になるからマシヨンの外まで連れ出したのは良いが……さっぱり分からない。何とか思い出そうと上から下までとりあえず目を走らせた。

「もしかして、私のこと忘れちゃったわけ？」

返す言葉も無かった。

あからさまに苛立ちを隠せないでいるその女のことを俺自身思い出そうと必死だったのだが。

「あの日は、あんなに優しくかったじゃない。なのに、その後連絡はないし、友達も貴方の連絡先も教えてくれないし」

「―― ……悪い」

当たり前だ、あいつらはそんなに馬鹿じゃない。

他人にそう安々と他人の個人情報を漏らしたりはしないはずだ……。それなのに今こいつはここに居る。あとでもつけられたんだろうか？ 時々あるんだよな。本当、勘弁して欲しい。

寝起きで虫の居所の悪い俺は、大きく溜息をつき「で、何？」と先を急がした。

私は、お土産片手にご機嫌だった。

今日は多少冷えるけど、空はうんと高く清々しいくらい晴れ渡っていた。

気分が良い。

けど、ちょっと迷子になってもいた。

「確かこの辺だったんだよね」

小さな声で独り言。徒歩圏内だったのは確かなんだけど、あの日は動揺してたし、帰りはタクシーだった。住宅街だから、一戸建てはもちろんだけどマンションも多い。こういうところは土地勘がないと自分がどこを歩いているのかよく分からなくなってしまう。

はあ、と溜息を一つ吐き。きろきろとしていると、先の角から克己くんの声が聞こえた。

「だから、どうして?!」

「悪かったっていつてんじゃないか」

—— …… なんだか。間が悪そうだなあ。

明らかに、揉め事中的ようだ。私は角から出たところで足を止めた。

すらりとした、長身。後姿の綺麗な女の人と揉めているようで、

女の方はかなりな御立腹だ。

これは出直したほうが良さそうだなあ。

くると方向転換して、きた道を帰ろうとした。

「何余所見してるのっ?!」

「いや、なんでもないからあんまり大きな声ださないでくれ」

「何? あの女が知り合いなわけ?」

—— ……びくっ!

なに? なに? なに??

矛先は私に向いてしまったのかな?

カツカツカツと、ピンヒールがアスファルトを蹴る音が聞こえた。

仕方なく私は振り返る。

—— ……わあ。綺麗な人。

あやまでとはいかないけど、モデルさんみたい。でも、凄く怒ってるみたい。思わず非現実的な現状に、あさってなことを考えてしまう。

どんっと肩を押されて詰め寄られる。本当に私が克己くんと無関係だったらどうするつもりなんだろう? 八つ当たりも良いところだと思うんだけど……。

「あなた誰よ!」

「え? いや、ええ?」

それでもあまりに突然なのと、その女性の気迫というか勢いに気
圧され、しどろもどろになる。

「その人には関係ないだろ。他人にまで迷惑かけるなよ。悪いけど、
俺はお前が考えてるような男じゃないし、全く覚えもない。もう、
帰ってくれ」

苛々とした強い足音を立てて克己くんは歩み寄ってくると、ちら
りところちらを見ることもなく、対峙した女性に告げる。

—— ……二人とも怖い。

なんだか怯えが入ってしまったて、行くことも引くことも出来なく
なった私は、ただただ呆然と立ち尽くしてしまっていた。そのこと
に気がついたのか、克己くんは一步だけ私の方へ進み出て、がしり
と手首をつかみ、ぐいっとマンション側へと引っ張った。

「あんたも、さっさと通り過ぎちまえよ！ ほらっ」

—— ……わわっ！

バランスを崩しかけて、おたおたした私と擦れ違い際「先に行っ
てろ」届くか届かないか、分からないくらいの声で克己くんは呟い
た。

「—— ……もう、我慢できない……」

常軌を逸した声が聞こえた。私はこれまでこんなに強い怒気を感じ
たことはなかったし、低く唸るような声はとても正気だとは思え
なかった。

カチカチ……ッ……。

「克己くん！ 後ろっ！」

「！！」

私は一瞬声を失った。

聞き覚えのある音に、まさかと顔を上げれば、陽光を受けて煌いた白刃が克己くんの腕を走り鮮血が散った。

我が目を疑ったが、彼女が手にしているのは普段私も使うこと多い、普通のカッターナイフだ。でも、道端で、しかも人を相手に使う代物ではない。

それなのに、その刃は克己くんに向けられて……。

ぽっ……ぽっ……っ

克己くんの腕を流れ落ちる赤い血が路面を黒く染める。

それを目の当たりにして、彼女はやっと自分のやってしまったことに気がついたのか、慌てて手にしていたカッターを投げ捨て、驚愕の表情を見せ、泣きながら踵を返してさってしまった。

—— ……カッ……ーン。

去り際、何かを落としていった。

痛みは少ないのか、克己くんはその落し物に歩み寄って腰を折ると拾い上げた。どうやら、シルバーの指輪のようだ。

「ああ。早紀だったのか」

小さくそう呟くと、こちらへ向き直り、マンションへ入っていく。

「克己、くん？」

「早く来いよ」

どうすれば良いのか分からなくておどおどした私を顎で招く。私は慌てて克己くんのあとに続いた。

全く、酷い目にあった。

反射的に避けたので、傷は深くは無かったが刃物で切られたため、多少なりとも血が流れる。それに、浅くても傷口はズクズクと鈍く痛む。

痛む腕を押さえながら、ふと、透がいつていたことを思い出した。確かに透のいう通り怖い女だった。

エレベータの中に乗り込んだ俺の後ろに続いて、碧音さんもおずとおずと乗り込んできた。

当たり前の反応だとは思うけれど、動揺は隠しきれないようだ。胸の前で組み合わされた手が、小刻みに震えている。

「おい。大丈夫か。驚かして悪かったな」

「—— ……うん。私は何ともないよ。腕……大丈夫？」

何ともないわりには声が震えてるぞ。

よっぽど怖かったんだな。そう思うと少し可笑しかった。

「笑い事じゃないよ！ もし、もっとひどいことになってたらどうするの?!」

思わず笑ってしまった俺に、切り替えし声を張り上げた碧音さんの目は呆れるほど本気だった。

—— …… ったく、そんなに本気になるなよ。大したことなかったんだから。

ま、それもらしいといえbraしいのだろうけど。

真摯な眼差しを受け、不意に抱き寄せたいような気持ちにも駆られたが、両手とも血だらけだ。だから、それは叶わなかった。

それからあとは無言で部屋に向った。何とか平常心を取り戻そうと、頑張ってるんだろうなーと、どこか他人事のように考える。

ちらりと碧音さんを見てもこちらに気がつくことはない。きゅつと苦しげに下唇を噛み締めて足元を見つめている。

なんで俺より、碧音さんの方が傷付いた顔をしているのか。考えたら可笑しくてまた笑ってしまいそうだったから、俺は碧音さんから顔を逸らした。

「ええっと。克己くん、消毒液とか無いの？」

そして、部屋に入るなり、その台詞だった。

「無い。こんなの洗っとけば良いって。で、それ何？」

荷物の中身は確認するまでもなく分かったが、もう一つ後生大事に抱えてるそれは何かわからなかった。

「ああ。これはね。『ジュ・アンジェ』のチーズケーキ。これすごく美味しいんだよ。でもね。いつもすぐに売り切れちゃうから、なかなか手に入らなくて、今日はどうしてもこれを持ってきたかったから、2時間も並んじやつたんだ」

…… チーズケーキ食べたさに二時間。

俺には到底わからない感覚だ。絶対嫌だ。それなら自分で作るほ

うが良い。

即座にそう思った。そう思ったけど……碧音さんはそうは思わないだろうな。すげー嬉しそうだし、尻尾でもあったら盛大に振り回していそうだ。
ぷ。

その姿は容易に想像が出来て、俺は笑いを噛み殺してから話を続けた。

「じゃあ、俺は傷口洗って着替えてくるから、その辺ので、何か淹れといて」

「あ、ああ、うん。分かった。あの、あそこに置いてあるサイフォン使っても良い？」

「良いけど、インスタントもあるぞ」

一通りのものは揃っている。その一つにサイフォンもあるけれど、俺はあまり使わない。なんとなく面倒臭いというのが先にたってしまうから。だから、簡単に済ませたので良いという俺の言葉にも、良いの良いの。と、にこにこしてそういいながら、俺はしっしと追いやられてしまった。

—— ……まあ、良いか……。

俺はシャツのボタンを外しつつ、洗面所に向かった。

その場を離れる克己くんを見送ってから、私はそこら辺にあるものを適当に持ち出して、買ってきたケーキをのせた。

やっぱり、美味しそうだ。ここのケーキ食べるの久しぶり。

自然と緩む頬は仕方ない。私は現金なのだ。気分良く、珈琲を淹れはじめた。

はつきりいって、料理とかちょっと苦手だけど、珈琲と紅茶を淹れるのだけは、そこそこ自信と定評があった。

私はそのためのお湯を沸かしつつ、ぼんやりと揺れる炎を眺めていると不意にさっきのことが頭を過ぎる。

あんなことドラマとか漫画の中で起きることで、現実的じゃないと思っていた。二人の間に何があったのかまでは分からないけれど、越えてはいけない一線でもあったと思う。

それにしてもあの綺麗な子、克己くんと同じ年くらいなのかな。よっぽど好きだったんだなあ。好きな気持ちというのは理解出来ないでもない。出来なくはないけど、でも、刃物は持ち出しちゃ駄目でしょ。うん。それはやっぱり犯罪だし。

―― …… 犯罪、だよねえ？

克己くんは何でもないといっているし、きっと通報なんてしないで良いんだと思うけど、でも、無罪放免でほったらかしにして良いのかな？

あれじゃ、根本的な解決にならないよね。

解決できないんじゃない、また繰り返すかもしれない。ちゃんと話し合いを……話し合い、といっても、まあ、無理かな……もっと距離と時間を置いてから。じゃないと、ね……。

「おい。湯沸いてるぞ」

「あっ！ わわっ」

つい考え事に熱中してしまった私の横から、にゅっと手が出てきて火を止めた。

片手を私の肩において、多い被さるように腕を伸ばすものだから、驚いて大きく肩を跳ね上げてしまった。

ちらりと背後を振り仰げば「何？」というような視線を向けて首を傾げた。

「手伝うか？」

「ううん。大丈夫。あ、それより、その傷。やっぱり簡単にでも手当てしたほうが良いよ。私、絆創膏持つてるからそれ貼ってあげるよ」

「それは、別にどっちでも良いけど、それをするか珈琲淹れるかどっちかにしたほうが良いと思うぞ」

するりと克己くんの腕の中から抜け出して、バッグの中身をこそごそとしていた私に、さらりと克己くんの突込みが入ってしまった。

—— ……ご尤もです。

「じゃあ、まず。ここ座ってよ」

とりあえず、傷の方を優先することに決定して、ダイニングテーブルの椅子に腰掛けさせた。

シャツの袖をまくると痛々しい傷口が見えた。

「痛そう」

「まあ、痛いな」

相変わらずの実もふたもないような会話が交わされる中、私は絆創膏を貼り付けた。

「—— ……貼りすぎじゃないか」

「そ、そんなことないよ。ほら、傷口に洋服があたったら痛いじゃない」

ありったけ貼った。

だって、浅いとはいえ結構長い傷だったんだもん。

私がいつてることもまんざら間違いじゃないんだから。

「剥がすときの方が痛いと思うぞ、これじゃ」

捲くった袖を直しつつ、ぶつくさ。それでも最終的には、まあ、良いけど……と済ませるところは、らしい気がする。

「男の子が細かいことぶつぶついわないの。そのまま大人しくしてなさい」

それでも、いまいち納得してくれない、克己くんに一喝して私は珈琲を淹れることにした。

サイフォンに静かにお湯を注ぐと柔らかな珈琲の良い香りが辺りを包んだ。

ふんわりとその香りに包まれて、その中で気分が落ち着いていくのを感じる。

こういう時間は好きだ。

本当は、ちゃんと話を聞いてちゃんに対応してあげるべきなのだと思うけれど、私なんかが踏み込んではいけない部分のはなしだろうからと、知りたい気持ちを飲み込んだ。

現に克己くんは、もう何事もなかったように、落ち着いている。傷さえなかったら、白昼夢みたいなものだったと思ってしまいうくらい、普通だ。

聴くタイミング。それをどこかで見つけたら……くらいにしてお

こう……。

「はい。どーぞ」

静かに目の前に置かれた珈琲カップを見つめて軽く揺らす。ふわりと立ち昇る独特の苦味のある香りに、胸を撫で下ろした。

碧音さんは俺の正面に腰を下ろして、ちょこんと手を合わせるいただきます。と口にしてさっさとケーキにフォークを運ぶ。

よっぽど食べたかったんだな。とか、少しは落ち着いたようで良かった。とか、そんなことを考えてしまっていた自分に複雑な気分になる。

「克己くん。食べないの？ 美味しいよ」

若干逃避気味になっていると、ニコニコと自分の分を食べきった碧音さんが顔を覗き込んでいた。

「あつと、食べる？」

反射的に、皿を押してそういった俺に碧音さんは、ふるふると首を振った。

「ううん。いらない。それは克己くんに食べて欲しくて買ってきたんだもん」

そして、そうやって両手で包み込んだカップを覗き込んだ碧音さ

んは、明らかに我慢していた。

その様子が可笑しくて笑いがこみ上げたが俺に「食べて欲しい」というのもきつと本心だろう。

俺はその気持ちを汲むことにしてフォークを手を取った。

「お、美味しい」

「でしょう」

得意気だ。

別にお前が作ったわけじゃないだろうに。でも、この珈琲も美味いかもしれない。

調子に乗りそうだから口にするのは控えて心内だけでほくそえんだ。

「あっ！　こんな時間」

「何だ？　用事でもあったのか？」

俺が食べ終わるかどうかくらいに、急にそう叫んで立ち上がった。

「ううん。えっとね、そのく……好きだったドラマの再放送があるの。見て良い？」

「――……勝手にしてくれ」

呆れた。

遠慮というものもこいつには存在しないのか。誰にでもこのテンポで接しているんだろうか。

俺の返事を聞いて、嬉しそうに席を離れるとリビングのTVに電源を入れていた。

—— ……まあ、良いか。楽しそうだし。

そんな後姿を見送って、仕方なく俺は片づけを始めることにした。

「あ、片付けあとで手伝うよ」

「いーよ。ちょっとだから。直ぐ終わるし」

「だったら、一緒に見ようよ」

「ああ。後でな」

ソファの背から身を乗り出して声を掛けてくる碧音さんを適当にあしらって、小さく溜息。

—— ……はあ

結局いつもこうやって俺のペースは崩されるんだ。

とはいっても不思議と気分を害されることはないと感じてしまう自分自身の感情の方が余ほど不可解だ。

—— …… ——

「妖怪食っちゃ寝」

そんなつまらないことを口にしてしまった。いや、それもこの状況では仕方ないと思う。一体どれだけの時間が経ったっていうんだ。例の见たいといっていたドラマの再放送はさっき始まったばかりだというのに、ソファの上ですやすやと寝息をたてている。

俺に対する危機感ゼロか？

それはそれで微妙に傷付く。

「おい。碧音。碧音さん。碧音ちゃん」

こりゃ、駄目だな。

見たかったのに。と怒られそうだったので、起こそうと試みてぺちぺちと頬を叩いたが、目の覚める気配はない。

仕方ない、後で騒いだって知らないからな。

気持ち良さそうに眠る碧音さんを複雑な気持ちで見下ろして、淹れなおした珈琲をローテーブルにおいてその隣に遠慮なく腰を下ろす。

ぎっとソファが沈んだくらいでは、やはり目を覚まさなかった。

暫らく目を閉じた碧音さんを眺めていたが、それがとてつもなく意味のない好意であることに気がついて苦笑した。

そして、脇においておいた、読みかけの本を手にとりページをめくる。

それにしても、早紀の奴どうして、俺の家をつきとめたんだろう。部屋の番号まで知ってたわけだから、なかなか侮れないな。

「彼女、か……」

どうして、彼女……恋人というほうが適當なのか？　なんて必要なんだろう。

別に一人でも生きていくことに不自由なんてしないだろう。

なのに何故わざわざ、ただ一人の誰かと時間を共にすることが必要なんだろうか。そこに一体どんな意味が存在するのか。

“ろくな恋をしていない”　そういわれたこいつは、何故新しい恋に走るのだろうか。

嫌な思いも沢山しただろう

沢山泣いたりもしただろう

我慢もしてきただろう

「—— ……ん」

本を捲る手を止めるとやっぱり俺はまた、碧音さんを眺めていた。

その視線に気がついたのか、丁度タイミングが良かったのか……碧音さんは「ん」と小さく唸って目を覚ました。

「ふぁ。寝ちゃったよCM長いから。って、もう半分以上終わってる」

欠伸をしながら身体を起こして、ぶつぶつ文句をいつている。

CMって、んな長くないだろう。勝手に一人で寝こけてるお前が悪い。

「克己くん」

「あん？ 俺は起こしたぞ。起きなかったのはお前の勝手だろう」

案の定、起こさなかった俺への不満を溢されるのだろうと思い、先に口にしたが、的を外したのか「え？」と可愛らしく小首を傾げたあと、ふるふると首を左右に振った。

「そんなこといってないよ」

「ふーん。じゃあ、何だ？」

重ねて問い掛けた俺に、碧音さんは「何でもない」そういつて視線はTVに移した。

何がいいたかったんだろう？

まあ、別に本人がそれで良いのなら言及するつもりもないが。

「ねえ、克己くん」

しかし、どうも、いわなくては気が済まないらしい。

呆れたように嘆息したあと問い直した俺に碧音さんは少しだけ逡巡したあと「えっと、その」といい辛そうに続ける。

「何だよ」

不機嫌そうに眉を寄せて凄んでも、碧音さんは気にならないのか
恐がる様子はなく「うん」と頷いた。

「さっきの子。どうして、あんなことになったの？」

そして、いきなり確信に迫るわけか。俺は言葉に詰まった。理由は簡単。俺にもわけがわからないから。説明しろといわれても説明できない。

「克己くんって、特定の彼女とかいないの？ あの子はそういう関係じゃないんでしょう？」

こいつもその話か。

その話には飽き飽きしているんだお前まで持ち出すなよ。不機嫌に眉間の皺を濃くすると、碧音さんは、はたと気がついたのか「違う違う」と顔の前で両手を振った。

「怒ったんだったらごめんね？ 別にそのことが悪いとか、そんなことじゃないんだけど。前にさ、私、克己くんのこと怒らせちゃったことあったよね」

「あったか？ そんなこと？」

「うん。私が、ひっぱたいちゃった日。誰のことも本気で好きになつたことないんじゃないか。とか偉そうなこといつっちゃって」

「ああ。そんなこと、あったな」

そんな話の流れであんなことになったんだったかな。
もう、俺の記憶には凄く前の事のような気がする。

「実際のところ。その辺どうなの？」

「どうなのって？」

「誰かを好きになったことある？　ってこと」

「どういつもこいつも一体俺に何の文句があるっていうんだ。そんなことばかり聞きやがって。」

俺は益々むっとしていた。

「じゃあ、あんたのいう『好き』ってなんなわけ？　どういうのが好きで。というのが嫌いなんだよ。俺が、納得行くように説明してくれ」

怒るつもりはないが、思わずきつい口調になってしまう。

そんな俺の顔をまじまじと見つめていた、碧音さんは少し目を細めた。

その表情はひどく優しく、慈愛を含んでいて、それを向けられた自分がひどく子どものような気がした。

「そうだね。『好き』って、どういうことなんだろう。その価値観とか、感じ方ってやっぱり人それぞれだと思うけど、私は大切にしたい人のことかな。守ってあげたいと思うし、何よりも信じてあげたい……そう思うことかな」

「で、裏切られるわけか」

「人が真面目に答えてるのに、実も蓋もないようなこといわないですよ。それに裏切られるって表現はちょっと違うわ。その相手が私を大切に思っただけで傷つけないから『嘘』をつくのよ。だから、その裏切りは優しさなわけ」

骨の髄までお人好しで出来てるのかこいつは……。そんな風にい

われると続ける言葉が見つからない。見付からないけど、こういう奴は馬鹿を見る。何度も何度も、きつと……。今だって……盲目過ぎる。男を見る目はあやのほうが断然上だろう。経験値が違う。そして、俺は同性を見る目がある。こいつは……ただ馬鹿みたいに相手の言葉を鵜呑みにしているだけだ。とても御しやすい、馬鹿な女。馬鹿だ……何も知らずに笑っていられる。

「俺がもし、好きだといったら？」

「え？」

「小西と別れなくても良い、俺とも付き合って欲しい。そういったらどうする？」

ちょっと意地悪をいつてみた。こいつは何も知らない、知らないからその気持ちは揺らが無い。俺の言葉に碧音さんは小動物のような丸い瞳を瞬かせこちらの真意を探ろうとしている。

悪いけど。俺はポーカーフェイスは得意だ。なんでも顔に出る碧音さんとは違う。本心なんて探らせない。そのくらいの処世術は持っている。

「ここにあんたを連れてはいるのは嫌じゃない。他のやつならパスだ」

でもこれは本当。

偶然が重なって仕方なかったとはいえ、今日は嫌なら断れなかったわけじゃない。それなのに俺は断らなかった。

「それって、俺が碧音さんのこと“好き”だからだろうか？」

誰かに好きなんて冗談でも口にしたことはない。今、演技としてもそんなことを口にする自分に寒気がする。それでも俺は碧音さんの反応が気になる。どう、交わすのか興味がある。俺は本気じゃない。でも、疑わない碧音さんはきっと俺の言葉を信じてくれる……信じて、くれる？ それは何かを期待しているようで、不思議な響きを持っていた。

困惑する。自分で思ったことが奇妙すぎる。

それじゃあ、まるで俺が誰かに信じて欲しがっているみたいだ。

嘘も、本当も……。

動揺した俺は碧音さんの視線から先に逃げてしまった。

そんな俺にようやく碧音さんは現実に戻ってきたのか、ふふっと笑いを溢した。そして、ゆっくりと子どもを諭すように口にする。

「それは、違うよ」

違うと重ねられ、俺はもう一度碧音さんの顔を見た。碧音さんは真っ直ぐ俺から顔を逸らすことなくずっと見ている。黒目の大きな

瞳に困惑気味な俺の顔が移っている。

「克己くんって、一人っ子でしょ」

「―― ……そうだけど？」

俺の心中を見事に察することなく、脈絡のない台詞を吐いた碧音さんに曖昧に頷く。実子は確かに俺だけだ。俺は一人で育った。

「だと思った。私ね、克己くんより一個下くらいの弟がいるの、だからかなちよつと親近感もちゃって。ちよつといろいろとずうずうしかったね。もしも克己くんが、私を大切に思ってくれるならそれはきつと姉弟が欲しかったんじゃない？」

―― ……姉って感じかよ。全く。

当たり前のように紡がれたその台詞に酷い違和感を覚える。

「ふーん……じゃあ、俺の気持ちは姉を慕う情だというわけだ」

あんたにとって俺は弟だと？ と重ねれば、間もおかずに

「うん」

屈託のない笑顔で答えられてしまった。全く持って情けない。俺は静かに手にしていた本を閉じた。もうさめてしまった珈琲が入ったカップの隣に本を置く。

弟？

弟ってなんだよ……。

胸の奥がざわざわとざわついて、熱くなる。

にこにことなんの気負いもなく俺の次の言葉を待っている碧音さ

んに、正直ムカついた。

「でも、実際はそうじゃないわけだ」

「―― ……え？」

俺の中で何かがはじけた。

華奢な肩を掴み、ぐっと押せば簡単にぐらりと傾く。

「ちょっと、克己、くん？」

「俺は碧音さんの弟じゃない。そう、思うのはあんたの勝手だけど、今自分がどういう状況なのか、良く考えたらどうだ」

碧音さんの視線は泳いでいた。

どうして、俺がそんなことをいうのか全く分からないという顔で見つめていた。俺に組み敷かれた碧音さんは両腕の自由も奪われているというのに、驚きすぎて身動きすることすら忘れてしまっている。

「冗談やめてよ」

ようやくと口にした声が震えている。マジだけど？ と好戦的に口角を引き上げれば碧音さんはようやく暴れたけど……そんなものに大した抵抗力はない。

「克己くんってば！ 離してよ！」

「嫌だっていったら？ 一人暮らしの男の部屋へ一人で入り込んだのは、碧音さんのミスだろ？」

それでも尚、俺の手を振り解こうと腕に力が入っていたが、到底、

俺の力にはかなわない。

「それは、克己くんを信用してたから！」

「簡単に男を信用するもんじゃない」

「―― ……っ!」

俺は正論をいっている。間違っていない。間違っているのは目の前の馬鹿な女だ。間違えている。間違っている。

間違すぎて何も見えなくなっているのは、俺じゃなくて、あんなだ。あんたを見ていると苛々する。苛々しすぎて、壊れてしまえば良いと思ってしまおうくらい……。

「やめてよ……」

掠れる声でそう告げる碧音さんを無視して、無理矢理、碧音さんに唇を重ねた。ぎゅっと固く閉じられていた唇をこじ開けて強引に割ってはいる。

もちろん、噛み付かれたらこっちの方がダメージはデカイと思う。でもそうされない自信もあった。碧音さんは人を傷つける術を知らなさ過ぎる。自衛の本能すらあまり働かないだろう。

俺の予想通り、大した抵抗も出来ない碧音さんの手首を片手で捕まえて空いた手で顎を固定する。重ねた唇を軽くずらして、口内を深く食る。

それから強い抵抗もなく、碧音さんの両手に入っていた力は抜け、かわりに大きな瞳から大粒の涙が、はらりと頬を伝いソファをぬらした。

―― ……ずきっ

痛い。

きりきりと痛む。胸が……。

「克己、く、ん。ごめん」

当然のはずの涙に動揺した俺は、いつの間にか碧音さんの手を解放していた。なぜ碧音さんが謝ったのか分からない。分からなかったのに……それはすぐに理解出来た。

—— ……ごつつ！

「っ！！」

—— ……ひどい……ひどい、よ……。

私は家路を急ぎながらも涙が止まらなかった。
すれ違う人たちが私を振り返っていることに気がついて、この涙は止めることが出来なかった。

心の中に「ひどい！」と克己くんを攻める気持ちと、確かに男の子の部屋へ一人で入った自分の浅はかさを後悔する気持ちが入り混じって、自分自身考えが全く纏まらなかった。

ただ、心臓は口から出そうなくらいバクバクいていた。

『簡単に信用するものじゃない』

そういった克己くんのことを考える頭の中もドクドクと強く脈打って、ひどい頭痛がした。

唇に残る感触と唇越しに味わった珈琲の苦味が、私の心を揺るがして止まなかった。

じわりと袖口に血が滲む。それほど強い力ではなかったと思う。思うけれど、真新しい傷口に受けた衝撃はかなり大きかった。

「いってえ……」

ぎゅうっと、腕を押さえて身体を小さくする。

俺は、何てことを……。

慌ててバッグとコートを手に取り逃げ出した碧音さんの気配が完全に消えてしまっても俺は顔を上げることが出来なかった。

何をやっている。

俺は何をやっているんだ。

どのくらいの間、俺は放心状態にあったんだろう。

「ひどいよ……」

部屋を出る間際、そういった碧音さんの言葉が頭の中を木霊して俺の中の罪悪感を掻きたてた。

確かに酷いことをした。

そこらの女ならあのくらい何とも思わないかもしれない。

あわよくば最後までいっていたかもしれない。しかし、相手はあの碧音さんだったんだ。

確実にあいつを傷つけた。

……俺はあいつの信頼を裏切った。

これは、優しい『嘘』とはわけが違う

—— ……俺は、酷いことをした……。

微かに残る唇の感触に俺は涙が出そうだった。こんなに、心が苦しいと思ったのは一体いつ以来だろう。

人を傷つけるくらいなんともないと、考えていたのに、明らかに俺はあいつを傷つけたことにショックを受けていた。

我ながら、参った。

いつもと変わらないはずの一人きりの部屋の中がやけに広く感じた。

—— …… ——

あんなことをしてしまうなんて。

やっぱり、こういう場合は謝らなければいけないのか？

このところ、俺はそのことばかり考えていた。講義もバイトも心ここにあらず。謝るか謝らないか頭の中でぐるぐると迷走していた。そして、こんなことでも相談する相手が

「なあなあ。最近口もきいてくれないのか？」

こいつしかいないあたり、俺の人生も寂しい限りだ。

いつものように俺に纏わりついてくる透に俺は何となく話す気になっていた。

今日は良い具合に麗華の姿が見えない。

あいつがいると簡単な話まで、もつれてしまうから、出来るならば同席は避けたいものだ。

「世間ではクリスマスが近いっていうのにお前は」

「クリスマス……か……。もう、そんな時期だな。と、最初にいつとくがそのあたりはバイトに行ってるからな。誘うなよ」

「え………」

明らかに何か、たくらんでいたようだ。

身体全体で脱力していた。

「で、何か話したいことあったんじゃないのか？」

透はちゃらちゃらして軽そうに見えるものの実は割りと人を見ている。そして、他人の機微にも敏感で俺としてもそのあたりだけは評価に値すると思っている。

ちらりと、透の顔を見ると、にこりと笑われた。なんでもいえといわんばかりのその表情に、張り詰めていたものがなんとなく和らぐ。

分からないことは聞く。とても初歩的なことだと思う。

それまでそんなことを必要としなかった自分はとてもちっぽけだ。

俺は、一つ大きな深呼吸をしてから「あのな……」と口を開いた。

「白羽さん。大丈夫？　このところミスばかりよ。ほら、一部で良いつていったのに」

「——……え？」

気がつく、葉月チーフが隣に立っていて、さっきコピーした書類がとんと置かれていた。

「えっと、どうかしましたか？」

きっと、何か話しかけていたんだろうけど……ちっとも耳に届いていなくて聞き返した私に、チーフは呆れた顔を見せたが「ま。良いわ」そういつて自分の席に戻ってしまった。

「何かあったんですか？ 白羽さん」

「ああ、弥生ちゃん」

その後に続いて、弥生ちゃんが私の隣席の椅子を持ち出して座り話しかけてきた。なんでもないよと微笑めば、それ以上は深く突っ込んでこない。今の私からすればとてもありがたかった。そして、それは実はメインの話ではなく私と話をするきっかけに過ぎなかったように、直ぐに話題は変わってしまう。

「そうそう。あの、ショットバーの子。何ていったかな？」

「克己くんのこと？」

「そう、その克己くん。結構イイ線いってましたよね」

「――……」

「今度、お店のほうに会いに行きましょうよ」

そういつた弥生ちゃんは屈託のない笑顔をしていた。私は、是非も答えることは出来ずに口籠る。弥生ちゃんはそのことも気に止めることなく話題はどんどん変わっていく。昨夜のテレビ番組とか、昨日買った雑誌の話とか……。

私はそれに相槌を打ちながら、頭ではあの日のことでいっぱいだった。

傷、治ったかな。

必死になってしまっていたとはいえ、傷口をあんなに強くひっぱたくことはなかった。相当痛かったと思う。

刃物傷は見た目よりずっと痛みが強い……。

気にはなる気にはなるけれど、だからといって、もう一度会うのも少し怖かったし。

それにどんな顔して会えば良いのか分からなくて、私が悪かったのかもしれないし、私が謝ることなのかも知れないし。

だとしたら、なんていって謝ったら良いのか、ちっともわからなかった。

弥生ちゃんのマシンガントークを聞きながら小さく溜息。ちらと扉へと目を向けると助け舟が来ていることに気がついた。

「ちょっと、ごめんね。その話は、また今度」

そういつて私は席を立ち、手招きを部屋の前でしていたあやの元へ駆け寄った。

きつとランチのお誘いだろう。

私の腹時計がそういつていた。

「それはやっぱり『LOVE』だな」

—— …… はあ。

こいつに話すんじゃないかった。
意気揚々とそう発言した透に、俺はほんの少し話したことを後悔した。

「今“またか” って思っただろ？ それは違うぞ。克己くん」

—— …… 勝手に俺の心をよんでんじゃないよ。

机に肘をつき俺は項垂れていた。

「だってよ。お前がそんなことくらいで、落ち込んでるなんてらしくないじゃないか」

「そんなことくらいって」

「そんなことだよ。ファーストキスとか、いうんじゃないだろうにさ、その相手も」

「まあ、それはそうだな」

透のいうことも一理ある。

しかし、俺は無抵抗な相手にだな……。口に仕掛けてその台詞は飲み込んだ。

碧音さんショック受けてるだろうしなあ。泣いてたし、というか俺が泣かせたんだけど。そんな考えが俺の頭の中をぐるぐると回って、何一つ答えなんて出せる状態ではなかった。

そう答えが見付からない。だから透に話したんじゃないか、真面目に答えろよな。

「で、その相手ってこの奴？」

「そんなこと、知ってどうするんだよ」

「ん？ 興味あるだけだけど」

透はつまらないことに噛み付いてしまった俺にきょんとしていた。

「まあ、お前は知らない奴だよ。店の客だしな」

「ああ。前にカフェの前であった、何かほんわりした子のことか？」

—— ……がつんっ！

「い、ってえ！！」

考える間もなく答えられてしまったのに驚いて組んでいた足を机にぶつけてしまった。

「そんな、焦せんよ。まあ、凶星なのは分かるけどさ」

「お前覚えてるのか？」

素直な疑問だった。ちらっと会っただけだ。いや、明確には遠目で見ただけだと思う。あのときは俺一人が輪を外れたはずだったし……。俺は打ったひざを大仰にさすりながら聞き返した。

「女の子の顔は忘れないって。結構かわいい子だっただろ？」

「可愛いって。年上だぞ。とりあえず」

「何だ、お前結構、月並みなこというんだな」

「だから常識人なんだよ」

なんだか、前にもこんな会話誰かとしたような気がする。

「ふうん。良いんじゃないか」

「何が、良いんだ？」

感慨深げに頷いている透に眉を寄せる。そんな俺に透は物分りの悪い子どもを諭すように話を続けた。

「お前が悩んでるってことは、それだけその子のことが重いわけだろ。その気持ちを『好き』だと解釈しても良いんじゃないかっていうんだよ。現に謝ろうかどうしようか迷ってるわけだしな。ほら、それがもし麗華さんや、瑠香ちゃんだったら、お前悩んだか？ それに早紀にはもっと凄いことしてんだろ？」

もっと、凄いことって……失礼なことというなよ。いや、まあ、何をしたか覚えていない以上何ともいえないけどな。

考えても見なかったが……確かに麗華や瑠香だったらなんとも思わなかったかもしれない。

早紀にも何とも思わないし。正直あんなことをされていい迷惑だというくらいの感情しか湧かない。早紀に関しては、まずいことをしたのは確かなはずなのだけれど。

思わず傷を負った腕をさすった。

碧音さんだったから、彼女だから忘れることも出来ずに気に病ん

でいるんだろうか？ 申し合わせなければきつともう二度と会うこともないだろう相手だ。いつもの俺なら……どうでもいいで、済ませられることのはず、そのはずだった……。

あやと二人でオフィスビルを出ると、町はクリスマス一色に変わっていた。

良いよね。

クリスマスって一年のうちで一番好きなイベントかもしれない。自分の吐く息が白くなっているのを見ると本格的に冬になったことが確認出来る。冬の寒さは人恋しくさせる。

「ねえ、今日、夜開いてる？」

あやのいつものお誘いだ。

私はやれやれと思いつつ首を横に振った。

どうしても、今そんな気にはなれない。出来ることなら、小西さんと一緒に居たいくらいだ。なんとなくあれから私から連絡を取れていない。いつも通りの短いメールのやりとりはあるものの、私は今小西さんの顔を真っ直ぐに見る自信があまり持てない。

私は悪くない。そう思っても、私に全く非がなかったわけではないだろう。

「ええ。どうして？ 良いじゃない。付き合ってよ」

「今日は勘弁して。そんな気分じゃないんだよ」

「じゃあ、どんな気分なわけ？」

ちよつと意地悪そうな笑みを浮かべたあやが突っ込んでくる。
別に、こうって理由はないんだけど。

どうせ待ち合わせに『X―クロス―』を使うんでしょ。行きたくないんだよね。

――…今はまだ。

「そんなに、弱った顔しないでよ。良いわよ、別に。そんな日もあるでしょ」

かなり弱った顔をしていたんだろう。

そんな私を見てそういいながらあやは腕を絡ませてきた。

あやのこういうさっぱりしたところが、すごく楽に感じる。訊かれたくないことは、無理に問質したりはしない。

でも、訊いて欲しいことはしっかり、聞いてくれる。

そんなあやには無駄がないんだろうな。

ほっと胸を撫で下ろした私は、あやに仲良くしてもらっていて、幸運だなと思う。私はやっぱり人には恵まれている。どこに居るのかわからない神様にもお礼をいたくなって、ふっと空を仰いだ。

「克己。あんた、あの子に何かした？」

「何かって、何だよ」

店に入るなりそういったあやに、俺は何とか動揺を隠し返事をした。あやは暫らく俺の真意を探るような瞳を向けていたが、はあと嘆息して肩を竦める。

「そう。何もないなら良いのよ。マルガリータ振ってもらえる？」

「ああ。分かった」

—— ……何も聞いてないん、だよ、な？

どこか腑に落ちない表情を隠しきれないものの、あやは俺がそれ以上何かをいうとは思わなかったのだろう。そういいながらカウンターに腰を下ろした。

俺は少しほっとしていた、その気持ちは何を表すのかは分からなかったが、とにかく俺は難を逃れたんだと確信した。

もし、碧音さんがあやみたいなのタイプだったら……あんな隙はないだろう。

あやは軽そうに見えて、ガードが硬い。だから余計に馬鹿な男はそのガードを解こうと躍起になる。あやのての上で踊らされていることにも気がつくことなく、好きなように。

怖いよな。女って……あやを見ているとつくづく思う。

それから私は普段と何ら変わらない生活を取り戻していた。

町は日に日に年末独特の盛り上がりがあり活気付いていた。

そんな12月は本当は気ぜわしくてあまり、人から好まれるようなものではなかったが比較的私はそんな雰囲気が入っていた。

何だか、新しい年が明ける。

その気持ちだけでわくわくして心躍る気持ちだった。

そして、クリスマスを一週間後に控えたある日。

久しぶりに小西さんとデートに出かけていた。

大好きないつものお店で夕飯を食べて、前々から見たいといった映画にも出かけた。そして、前に話してくれていた夜景も見に連れて出てくれた。色とりどりのイルミネーションが、綺麗で、吐く息は白いのに暖かすら感じてしまったほどだ。

デートらしいデートなんて本当いつ以来だろう。お互いにこのところ忙しかったから余計にそう思うと感慨深い。

この日私はいつになく充実していた。

でも、そんな私とは裏腹に小西さんはなんだか落ち着かない様子だった。

「ええっと。小西さん何かありましたか？」

ワインバーでグラスに注がれたワインに目を落としていた小西さんに耐えかねて私は聞いてしまった。

今までの経験上。こういうのは雰囲気で分かっていた。

きっと、彼は私にいいづらい話があるに違いない。

そしてそれは、私にとって喜ばしくないことであることは必至だった。今日がとても楽しかったから、余計に強く感じる。

「いや。何でもないよ。もう少し飲む？」

小西さんの目はいつもより柔らかかった。その瞳がやけに切なくて、私はいろんな覚悟をしていた。

大丈夫。大丈夫。

私は大抵のことには慣れているし、珍しいことじゃない。私は好きでいることしか出来ないから、だから、相手にとってとても重いのだ。良く分かってる。だから、それに耐えかねたら必ずやってくるもので……。

そう思って、私は出来るだけ、小西さんが私に話したいことを口にしやすいように努めて明るく振舞った。これまでの感謝も込めて。

「はい。いただきます。でも、これ高いやつですよ。カリフォルニア・ナパの『グロス』でしょ？」

「良いの良いの。今日は特別だから。でも、詳しいんだね碧音ちゃん」

「あつ、と。こんな調子じゃ、うわばみみたいに思われちゃいますね」

今日は特別……特別な日。

——…——

私は息をするのも苦しくなっていた。

そのせいもあって、ワインが進んでしまう。が、酔わない自分も少々憎らしい。

そして暫らく居心地の悪い沈黙が流れて、後ろ手に聞こえるジャズの生演奏をやけに五月蠅く感じる頃、それは思いの他あっさり告げられた。

「え？　今なんていったんですか？」

私は不意に話を始めた小西さんの言葉があまりに唐突で、頭の中で整理がつかなかった。

小西さんは微笑んでいた。今まで見る以上に綺麗で優しくて。

「もう一度いうの？　恥ずかしいな」

「えっと、いや……あの、ごめんなさい」

あまりの動揺に思わず謝ってしまい、頭の先まで血が昇ってきくと顔は真っ赤になっているだろう。

「謝らなくて良いよ。僕のほうが突然いったから」

「——…はい」

「だから、ええっと」

言葉に詰まった小西さんは小さく咳払いをして、それから姿勢を整えた。

「結婚して欲しいんだ」

そういつて、私の前に置かれた小さな箱は開けられた。

小西さんの言葉と、目の前に置かれたそれで、頭の中はますますパニックに陥ってしまった。落ち着け私。小西さんは今なんていったの？ 私は何をいわれたんだろう？

「え、ええと、もう一回」

「え？」

「い、いえ、その、だい。大丈夫です」

全然大丈夫じゃない様子の私に小西さんは、悪戯が成功したときの子どものような楽しげな顔をしている。結婚っていえば婚姻？婚姻ということは何？ 誰と誰が？ 私？ 私、だよ、ね？

どうしよう、意味が分からない。

「碧音ちゃんの涙は始めてみたな」

そう声を掛けられて初めて気がついた。私の視界は揺らいで涙が溜まり、溜まりきらなかった分が、はらりと頬を伝っていた。

泣くつもりなんてなかった。

しかも小西さんの前で……。

でも、そんな気持ちとは裏腹に目から零れ落ちる涙は止まらなかった。

小西さんはそんな私を見てどう思ったのかは分からない。優しい微笑をたたえたまま、ハンカチを取り出すと涙を拭ってくれた。

「僕はまだ、碧音ちゃんの怒ったところも、悲しんでるところも見たことないけど。……て、今は、悲しいわけじゃないよね？」

私は言葉無くしきりに首を縦に振った。

「なら、良かった。だから、その、一緒にいたいんだ。碧音ちゃんといると何だか、落ち着くんだ。ちゃんと、信用されてるって実感できるし。ええっと」

ただただ、泣くことしか出来ない私に、小西さんの言葉は詰まっていた。

—— ……堪えなきゃ。

そう思うと余計に止まらなくなる。

店内は薄暗くて、声を荒げて喧嘩をしたりしているわけではないから、私が泣いているのに気がつく人は少ないと思う。それでも、ゼロではなくて……ちらほらと向けられる視線に、なんとか唇を噛むけれど、どうしようもない……。

「何か、驚かせちゃってごめんね。大丈夫？」

優しい言葉

気遣わしげに頬に触れる指先

「返事は今すぐじゃなくて良いから。えっと、そうだな。X'mas イヴなんて良いんじゃないかな？」

声をなくしている私を攻めることも詰め寄ることもなく、優しく言葉を重ねながら、ゆっくりと答えを待ってくれる。

「ああ、でも、後一週間しかないか」

私は小西さんの一言一言に首を縦に振ったり横に振ったり忙しかった。

結局私は、小西さんの言葉に甘えて、その日に答えを出すことはせず、答えはイヴまで持ち越すことにした。もちろん、私は「Yes」と答えたかった。でも、大切な決断をする際は、時間を置く。というのが家訓のようなものだ。小さい頃からどこか抜けている私に慎重になれというものであったのだらうと思うけど、今も可能な限りは守っている。

「えっと、お茶でも」

「ううん。ありがとう。でも、今日は帰るよ」

家まで送ってくれる間も、小西さんは一人で話をしてくれていた。私が部屋の鍵を開けるのも忘れていると、ちょんちょんと私を突いてくすくす笑う。わたわたと鍵を開けて、もう一度寄っていかないかと聞いたけれど小西さんは、にこにことして首を振った。

「今日もとても楽しかったし、僕もまだ緊張しているから……」

家に帰って飲みなおすよ。と締め括って私の肩を抱き寄せると、ちゅっと可愛らしいキスが降ってきた。ほわんと私が頬を染めるのと同じように、珍しく小西さんの頬にも朱が差す。

じゃあね。と手を振って階段を降りていく小西さんが見えなくなるまで見送ると、私は部屋の中へと入った。とりあえず、玄関で躓いて膝を打ったことは、この際仕方ないと思う。

私は崩れるようにソファに身体を沈めて打った膝を擦りつつ膝を抱える。

「結婚。結婚だって……」

ぽつ、ぽつと独り言を溢すと、じわじわと何か熱いものが込み上げてくる。てっきり別れ話だと思っていた。私と別れたいと思う人が居ても、結婚したいと思ってくれる人が居るとは思わなかった。そんな風に思ってくれる人がいるんだと、そう思うだけで、舞い上がってしまう。

私は片方の腕で膝を抱えたまま、バッグに腕を伸ばし、一時預かりとなったアクセサリーケースを引っ張り出し、膝の上でぱかっと開く。

きらきらと幾重にも光を放つそれは、私には物凄い宝物のように思えた。試しにはめてみようかとも思ったが、そんなこともなかか勿体無くて出来なくて。

やっぱり眺めているだけだった。

これまで考えたこともないけれど、誰かと寄り添って生きるってどんな感じだろう。

朝起きたときも、眠りにつくときも、大好きな人の傍らで……私にとってそれはとても満たされた時を刻んでいくものに思えた。永遠に変わらないものの、そんなものを夢に見るのは私くらいだと昔あやにいわれたことがある。でも、そんなあやでも、そういった私を晒ったりはしなくて「あると良いね」と顔をほころばせてくれた。

だからきつと、きつと、あやは私の次に喜んでくれると思う。

あやは少し小西さんを警戒していたようだけど……あの小西さんの穏やかな表情を思い出すと、ただの杞憂にしか思えなかった。

「今日も、待ち合わせか？」

週に二度も三度もここを待ち合わせ場所にするあやに、少々呆れ気味の俺は思わず嫌味の二つもいいたくなる。

「うん。でも、今日の相手はあんたも待ちかねてる子よ。ホント久しぶりでしょ」

なるほど……ていうか、誰が誰を待ちかねてるって？　さらりとそういつてのけたあやに一抹の疑問を心の中で投げかけた。

でも、それで、いつも待ち合わせのときは、カウンターは避けるのに今日は自らそこへ腰掛けたわけだ。カタカタと振ったシェイカーの中身をグラスに移すとあやの前に差し出した。

「ほい。フローズンカシス」

「ありがと。でも、この間まで何度誘っても付き合ってくれなかったのに、何かあったのかしら？」

「さあ？　俺にはわかんねえよ」

あやのいうことは分からないが、確かにここ一ヶ月ほどここへは顔を見せていない。

きっと、もう二度と足を運ばないだろうし、顔を合わせることも

ないだろうと俺自身諦めていた。謝るかどうかいろいろ考えたところで、本人と顔を合わせないと意味がない。

しかし、あやの話を聞くと今日は自分からここを選んで、誘ってきたというし……確かに疑問だ。

「何があったのかと思って、珍しく先に到着しちゃったわ」

ホントあやって碧音さんのこと好きだよな。

いつものあやからはそんなとこ想像できなくて思わず笑ってしまう。

「良し。忘れ物はないよね」

バッグの中身を一通り確認した私は、最後に例の箱もそつと忍ばせて部屋を出た。

足取りは軽かった。

小西さんに返事を出す予定の期日は明後日に迫っていた。私の中の答えはもうすでに出ていた。

そのことを私はどうしても、誰よりも先にあやに伝えておきたかった。

少しも不安がないといえは嘘だけれど、きっと大丈夫。そう自分にいい聞かせて頷いた。

きっと、笑顔で

—— ……おめでどう…… ——

そういつてくれるはずだ。

私は僅かな不安とそれ以上の期待を胸に『X―クロス―』へ急いだ。

久しぶりに足を向けた雑居ビル。

エレベータを降りたところで、ガラス越しにカウンターに座るあやの姿が確認出来た。

珍しいな。私より先に来てるなんて。

そのあやの話し相手をしているのが優さんなのにほっとしている自分がいることに、ふと気がついたが私は足を止めなかった。私がここを選んだんだから、別に克己くんと顔を合わせても構わない。そう思っていたはずなのに、会わなくて済むのならそのほうが良いかもしれないか思っていた。

「今日は早かったんだね」

「って、あんた来るなり失礼ねえ。あたしだって、いつもいつも遅れるわけじゃないわよ」

一言目に悪態をついたが、にこやかにかわされ私は隣の席に陣取った。でも、あやは基本的に遅れてくる。それが標準だ。

「で、今日は何事？」

「その話は、一杯飲んでからにしようよ。優さん、私は、えっと……シンガポールスリングでも、もらおっかな」

人差し指をくるくると回しつつそういった私に、にっこりと微笑んで頷いてくれた。

ふう、と息を大きく吐いた。

なんだか、ちよつと緊張してしまう。

「優。克己に何か作ってもらって、お腹空いてきたわ」

「何でも良い？」

「良いわ。任せる。あと、連れが来たのも伝えておいて」

私の様子を見てか、突然そんなことをいったあやに少し焦ったが、別に焦るほどのこともないかと、思い直して、もう一度大きく深呼吸した。

今日はここのお客様さんだ。

克己くんはお店の人だし一対一になるわけじゃない。なったとしても私が気に病むことはない。この間のはちよつとした悪戯の延長線的なものだろう。私は結局そう思うことにした。機会があれば謝るけれど、特に克己くんが気にして居ないようなら私も気にするのはやめにした。

オーダー表を持って、優が厨房に入ってきた。

「あやさんのお連れさん。今見えたよ」

「ふーん……で、何で、そんなこと俺にわざわざいうわけ？」

にこにこオーダー表を渡しつつそう付け加えた優に思わず、眉を寄せて苦々しく問い返す。優はそんな俺を特に不審に思った風もなく、軽く「ん？」と肩を竦めて答えた。

「だって、あやさんが君に伝えてくれってさ」

「あっそ」

「まったく、あやの奴。」

—— ……やっぱし、出て行かないとまずいよな。

でも何だか気が重い。

はあ、と溜息を落としつつ、優の持ってきたオーダー表に目を落とす。そこには、いつもの優の女っぽい丸っこい文字で大きく『何でも』と書かれていた。

—— ……何でも……

がつくりと肩も落ちた。いうほうもいうほうだけど、それをそのままここまで運んでくるのもどうかと思う。気心が知れた常連相手に、時々あることとはいえ……

晴れない気分を何とか落ち着かせ、オーダー表にある『何でも』を作ることにした。

適当に見繕って作った。茄子とひき肉のスパゲティー（トマトベース）はとりあえず今日のお勧めだ。

さてと、一つ大きく深呼吸した俺は覚悟を決めてフロアに出た。そして、そこで目にしたのは意外なものだった。

「あたしは絶対に許さないから！！ 信じられない！！ そんなこと真に受けてOKでもしたんじゃないでしょうね?!」

あやの罵声だった。

俺も驚いたが、その罵声の矛先になっている碧音さんはもっと驚いているようだ。目を大きく見開いて驚愕の表情を隠せない。

「いや……まだ、返事は、してないけど、明後日には……OKしようか、と……」

返答もしどろもどろだ。

「断んなさいよ！ 絶対！！ OKなんてしたら、あんたは本当にただのお人よしの上に馬鹿をつけるわ！ 馬鹿よっ！ 馬鹿っ！！ 大馬鹿者よっ！！！！」

「あや、どうして？」

「どうしてですか？！ そんなのわざわざ説明する必要ないわ！とにかく、静也は駄目よ！ 絶対に！！」

「―― …… あや」

碧音さんは今にも泣き出しそうだ。

表情が硬直している。

碧音さんの気持ちはあやだって痛いほど分かっているんだろう。

下唇を噛み締めて後から出てきそうな言葉を、必死に堪えているのが分かった。

―― …… ――

暫らく、緊迫した沈黙が続いた。本人たちはもちろん、運なくその様子を見守る羽目になってしまったほかの客も固唾を呑んで見守っていた。店内に流れている緩い音楽だけが空気を読むことなく変わらないう。

そして、どのくらいの沈黙が続いたのか

「少し、落ち着きましたか？ もし、そうなら座っていただくとは有難いんですが」

沈黙を破ったのはマスターだった。

二人の前にそっと、ミネラルウォーターを置くと柔らかく微笑んだ。二人ともカウンターに載せられた水をちらりと見て、やはりまだ黙す。しかしその状態に先に音を挙げたのはあやで、そのまま、ぷいっと席を外し店を出た。

からんからんっと少し乱暴にベルが鳴り。その音が店内から消えてしまうと、ほかの客は時間を取り戻したように、我に返りそれぞれの時間に戻った。

碧音さんはあやの後を追わなかった。

いや、追えなかった。

一瞬、かたんつと腰を上げたが思い留まった。今追いかけてもきつと堂々巡り。そう、判断したのかもしれない。

—— ……きつとそれは正しかったんだろう。

「どうして、どうしてなの」

うわ言のようにそう呟きながら頭を抱え込んでいた。

「克己。それ、冷えちゃうよ。あの子に早く運んであげなよ」

その様子に、ただ、立ち尽くす俺に優が静かに声をかけ促した。顔を上げない碧音さんの前でマスターはワインのコルクを抜いている。

気前が良いな。ボトルでサービスするつもりだろうか？ そんなことを考えつつ静かに近寄った俺に、そのボトルを手渡すと小声で呟いた。

「今月分からひいときますね」

なるほど。俺のおごりか……ま、良いけど。

つうつと、グラスの淵を滑って滑らかに注がれるワインを、いつもなら眺めている碧音さんは、まだ、顔を上げてはくれない。泣いているのかどうかすらこちらからは伺えない。

俺にはそれがどうしようもなくもどかしかった。

「碧音さん。ワイン、飲む？」

俺の掛けた声も届かなかったらどうしようかと妙な不安に襲われた。どうして自分がこんなにびくびくとしているのかも分らない。でも、俺のそんな不安は唯の杞憂で……碧音さんは重たい頭を持ち上げると、悲しそうに微笑み小さく頷いて、俺の手の中からグラスを抜き取った。

何もいわないまま、そっとグラスに唇を添える。

赤い液体を、少しずつゆっくりと口に含んでから上下する喉を、俺は緊張感もなくぼんやりと眺めてしまっていた。

まるで恋人を待つように、楽しげに碧音さんの到着を心待ちにしていたあやを思うと、あの僅かな間に何があったのか気にならなくもない。

でもそれは、唯の客を相手に踏み入って良い距離感ではなく。

俺は、お代わりというように差し出された空のグラスにワインを注ぎ足すくらいしか出来なかった。

二本目のワインを開けたとき、私は口を開いた。

「あや……泣いてた」

「え？」

「私、あやは喜んでくれると思ってた。でも、泣かせてしまった。私、あやのあんな顔初めて見た。あんなに取り乱したあや……初めて見たよ」

しかし、そういった私の声は震えていた。涙すら零れはしなかったけれど、それを堪えるのは胸をえぐられるように苦しかった。

どうしても私には分からない。

あやがどうしてあんなに頑なに、小西さんを否定するのか。あんなふうに否定されてしまったのは、私の心に迷いが出る。

「克己くんも……前にどうして小西さんと付き合っているのかって訊いたことあるよね？ あれ、どうして？ どうしてそんなこと訊いたの？」

「—— ……別に、俺は理由なんてないけど」

「けど、何？」

「さあ、何だろう。もう忘れたよ」

克己くんは明らかに返答に困っていた。克己くんもあやと同じ様

に何かを知っているんだろうか？

何かを知らないのは私だけで、私はそれを知らなければいけないのだろうか？

そんなことを考えると、私は大人気ない自分に気がついて、言葉無くグラスの中のワインを飲み干した。

「私は、大丈夫だから、そんな心配そうな顔しなくて良いよ」

「そんなつもりは……」

いって克己くんは言葉を濁すけれど、明らかに心配してくれているのは分かる。私が黙って飲んでいる間も、そして今もカウンター越しにいてくれる。別に一人になってもなんてことないんだけど、それでもそこに居てくれたことは嬉しかった。

でもやっぱり甘えるべきでもないと思う。思っているからこそ

「仕事に戻ってあげて。二人とも急がしそうだから」

そう促した。私の台詞に克己くんは賑わっている店内へと視線を泳がせたあと

「―― ……あんまし、飲むなよ。これで最後だぞ」

といって、空になったグラスにそっとワインを注いで克己くんは傍を離れた。

私は、大きくグラスの中身を揺らす。ゆらり、ゆらりと揺れる湖面は濃密な香りをふわりと立ち昇らせる。その香りに、双眸を閉じ大きく深呼吸。お腹の底からじわりと熱くなる酔いを覚まし、少しだけ新たに口付けた。

そして、バッグの中から箱を取り出し、中身を確認すると重たい

溜息が漏れた。

理由は分からない。でも、あやの説得にはもう暫らくかかりそうだ。

小西さんには悪いけれど、私はそれを避けては通れないと思う。うん。と決意新たに、私は、また、ぐいっとグラスを呷った。

「おや……。もうこんな時間ですね」

人氣が引いてきた店内を見渡したあと、マスターは時計に目をやりそう呟いた。

「優。あいつに何本出した？」

碧音さんの座っていた席から空になった瓶を回収してきた優を捕まえた。優はひらひらと瓶を振りながら

「僕が出したのは、二本だけだよ？」

「二本?!」

って、あいつ……。大丈夫なのか？
慌てて碧音さんの方を確認した。

—— ……駄目だ。完全に目が据わってる。

「あれは、一人で帰るのは無理ですね。きっと、立てないんじゃない

いですか？ 克己が送ってあげてくださいね。片付けは私と優でやっておきますから」

「はぁ？ 何で、俺が送らないといけないんだよ」

「何でって、貴方しか彼女の家を知らないでしょ？ ということは、必然的にそういうことになるじゃないですか？」

マスターは、どうしてそんなことを聞くのかというように、平然とそういつてのけた。

そういわれたら、その通りだと思うから二の句は告げない。

いや、でも普段ならタクシーとか呼んで乗つけて終わりだろ？

店員がわざわざ送り届ける必要はないし……やらないだろ、そんなリスクの高いこと。

思いつつ何やら訳知りが顔のマスターを苦々しい気持ちで睨み付けたものの、マスターの態度は変わらない。それに……確かに、あれをそのまま。というわけにもいかない。俺にだって、わずかばかりでも存在している、罪悪感が沸く。

—— ……仕方ないな。

はあああつとふっかい溜息をついてから、するするとカフェエプロンを外して帰り支度を始めた。

「おい。碧音さん。聞こえてるかー？ 目え開いてるか？ 帰るぞ」

フロアに戻ったその時は、すでにカウンターに突っ伏していた碧音さんの肩を数回叩いた。「……ん」と、小さく反応はあったが、それ以上は動くこともままならないようだった。元来酒に強い奴は自分の限度を良く知らない。良く知らないから際限なく飲む。それ

で、こうなるわけだ。

「立てるか？」

—— ……まあ、こんな時間だ。

外に行く人も少ないだろう。

着てきていたコートを羽織らせて、動けそうに無い碧音さんの片腕を首に掛けて反動をつけるとおぶった。

思ったよりは重くない。これなら、何とか家まではもつか。

「じゃあ、あとお願いしますー」

「はいはい」

一応声を掛ければ、フロアを片付けていた優がにこやかに手を振ってくれた。

そんなことを、考えながらとりあえず店を出た。

「ありがとう。何か、またお世話になっちゃってるねえ……」

熟睡しているのかと思ったら目は覚めていたようだ。人通りの少ない道に出て歩き始めると、寝言のような小声で呟いていた。

本当になんで俺はこんなところにばっかり居合わせるんだろ。溜息吐いたって仕方ないだろ。

「だから、あんまし飲むなっていっただろう。全く馬鹿だな」

「—— ……どうせ、馬鹿だよ。みんな人のこと馬鹿馬鹿いつてさ」
「はいはい。人の背中で愚痴るな。大人しく寝てろ」

酔っ払いの愚痴なんて聞くに堪えない。大体ループで同じことをいい始めるのが定石だ。そして、翌朝覚えてない。

「う……ん……。ありがとう」

“ありがとう”ね。本当に、精々感謝してくれ。一体いつから俺は巻き込まれ体質になったんだ。ほぼ、確実にこの人に出会ってからだ。

苦々しく肩に乗っかる顔を見たが、髪の間から覗く赤くなった肌しか見えない。

碧音さんは今、小西との結婚とか悩んでいるらしい。

その原因は、小西本人ではなく、あやとは決別したくはないという気持ちからだろうけど……別に悩むほどのことはない。どうせ婚姻関係なんて紙切れ一枚の問題だろう？ 少なくとも俺の周りはその

の程度だ。そんなものだけで繋がっているものに大した価値はない。したいなら試してみ、駄目ならまた書類を提出すれば良いだけの話だ。

それでも、こいつは、そういうわけにはいかないんだろうな。そんな形だけのものだど理解出来ない。馬鹿だからな。

それに、小西のことを信じている。

きっと、誰がなんといおうと、その気持ちは変わらないだろう。それがこいつのきつと良いところで、あやが好きなどころで、俺に疑問を投げかけるところなんだ。

裏切りまでを優しい嘘だといったのけるこいつは……そんなに強い女なのか？ もし、人づてではなくて裏切りを目にしてしまったら、こいつはどうなってしまうんだろう。

いつもなら俺にとってそれほど重要視しないことが、脳裏に蘇り苦い気持ちにさせる。良くあること。そのくらい普通で、大した事ではないはずだ。それなのに、俺までどこか罪深い気にさせられる。本当に、調子は狂いっぱなしだ。

俺は間近に聞こえる静かな寝息を聞きながら、いろいろなことが頭の中をぐるぐると回っていて、うるさかった。

——…——

思ったとおり暫らく歩いても、通りの人気は少なかった。

ちらりほらり、歩いてる輩は酔っ払いかカップルくらいなものだ。そういえば、この先の通りを抜けたほうがこいつんちには近いよな。

でも、ちょっと、抵抗があるか。

そう、その通りは夜になると煌々と生きてくる、ホテル街だった。ちょうどその通りに差し掛かった俺は、何となくそちらへ目をやった。ここばかりは、人気がないとはいいいがたいな。一瞬だけ、通り抜けるかどうか迷って足を止めたが、やはりいつもの道を通ることにした。

「ふう、よっこいせ」

やっぱり、寝てるやつをずっとおぶってるのはきついな。そして、再び歩き始める前に、下に下がってきた碧音さんの身体を持ち直した。

「……ん……？」

その振動でうつすら意識が戻ったようだ。

「あ、悪い。起こしたか？」

いや、別に悪くない。悪くはないが、反射的に謝っていた。俺は苦笑したが、碧音さんからは返答がない。それどころか、その碧音さんの身体が一瞬にして、ぎくりっと凍りつくようにこわばった。

—— ……俺は気がつくのが遅かった。

「克己くん。降ろして」

いつもからは想像もつかないような低い、静かな声だった。俺はそれに従わないわけにいかなくて、腰をかめそつと碧音さんの足を地面に降ろした。

重いだけだった身体は、同時に暖を与えてくれたらしい。急

に背中がひんやりとして、物悲しくなった。そして、俺の背中から離れた碧音さんは2・3歩前に出て、振り返らないまま……

「ありがとう。ここからは、一人で帰るから」

と、告げる。

「いや、でも……。足元平気か？」

「うん。もう、酔いは覚めたから……。気にしないで。今日はありがとう。じゃあ……」

いい終わるかどうかわらないで、碧音さんは足早に足を進めた。

その足取りはさっきまで立てないほど酔いが回っていた奴とは思えないほど、しっかりしたものではあったが、逆にそれが俺を不安にさせ、そのまま一人で帰らせるわけには行かなかった。

今しがた目にした光景は、きっと俺が想像する以上に、碧音さんの心には重たかったはずだ。もしも、家に帰らないでおかしい行動に出てはいけないという、不安もあったが、正直、気の利いた台詞の一つも出てこなくて、どうして良いのかわからなかった。

碧音さんは、時折足を止めては深く溜息を吐き、少し考え事をするように俯いて、暫らくするとまた足を進める。そんなことを繰り返しながら何とか、家までたどり着いた。

部屋に入るまでは安心出来ないと、俺はドアをくぐるまで見送った。

―― ……俺ってば、ストーカーみたいだな。

ふと、そんな考えが頭をよぎったが、閉められたドアの向こうから聞こえてくる鳴咽を感じ取ると、そんなことは、もうどうでも良くて、俺の心はかき乱された。

部屋に戻ってまで、声を殺して泣かなくてはいけない碧音さんの優しさと思うと、いかに小西を信頼していたかということを痛切に思い知らされて胸が苦しくなった。

「――・・・っ」

呼び鈴に手を伸ばしかけた。

これを押して、まだ鍵の掛かっていない扉を開いて、どうする？ その自問の答えを導き出すことが出来なくて、俺は押すのを思い留まった。まともな恋愛すらしたことのない俺が、今のあいつにかけてやれる言葉なんて、安っぽいものしか思いつかなかったから。

そんな自分の不甲斐なさを責めながら、俺も帰路に着くことにした。

音もなく後ろ手に扉を閉めた。

吸い込まれるように、ぴたりと外界と遮断されると、私はひざがかくんと折れて立っていられなくなった。

—— ……分からない、分からない……分から、ない。

玄関にしゃがみこんだ私の身体中が心臓になったようにうるさく脈打つ。

そして、アルコールの回った身体はやけに熱くて苦しくて。悲しいのかどうかも分からない。現状把握も間々ならないのに、瞳から溢れてくる涙も止まらなくて、それが余計に息苦しくて、呼吸が止まってしまうのではないかと錯覚しそうになる。

私が目にした光景は本当に、本当なのだろうか白昼夢とかいう代物であって欲しかった。

でも、どんなに酔っていたとはいえ、意識ははっきりしていたし、身体感覚もあった。夢が見られるような状況じゃなかった。

—— ……あれは、誰？ 私は貴方のそんな愉快そうな顔を見たことない……本当に、貴方なの……。

両腕で抱え込んだ身体がぐくぐと震えてどうしようもなかった。一筋の明かりも差し込まない部屋の中が、妙に広く、冷たく、寂

しく思えた。

今まで自分が信じてきたものがなんだったのか、分からない。

いいわけもきつと聞けない。

目にしてしまったものを 否定も出来ない。

そして、私は……それを受け入れられない……

「……つく……あ……あ、あ……」

声にならない声を上げ、私はただただ泣くしかなかった。

R R R……R R R……R R……

『はぁい……』

「何だ、寝てたのか？」

『その声は、克己く？ どしたのお？ ああ、分かった！ 今日ほ

ごめんねえ。お店で騒いじゃってさ』

「いや、別にそんなことはどうでも良いんだ」

『じゃあ、何？ 碧音にでも頼まれたの？ ……て、そんな器用なこと出来ないわよね。あの子は』

—— ……さっきまで、寝ていたわりにはよく喋るな。

俺は部屋へ戻るなり、荷物を放り出し携帯だけを握り締めてソフ

アに落ちると、あやに電話していた。

「あゝ……いや。うん。俺が個人的に電話しただけだ」

『ふうりん。珍しいこともあるものね。で、何が訊きたいの？ あたし、疲れてるから、手短かにしてよね』

俺にそんな口をきくのはこいつぐらいだ。いいたいこといいやがるなあ……。

こちらに何があったかも察することなく、いつもと全く変わらぬ調子にどこか安心しつつも、どこか不満に感じる。

「ああ。じゃあ、遠慮なく単刀直入に聞くぞ」

『はいはい』

「小西。他に女がいるのか？」

その一言に電話の向こうのあやは固まっていた。

「俺、前にもちらっと見かけたんだけど。気のせいだと思ってたんだ。そんなふうな奴にも見えなかったし、もし当人でも別にどうでも良かったし」

『――……』

「なあ、あや？ 訊いてるのか？」

暫らくの沈黙を破ってあやは口を開いた。

『ええ。いるわ』

「――……知ってたのか？」

『知ってたわ。あの男、女癖だけは悪いのよ』

「知ってたのに、あいつにはいわなかったのか？」

『――……ええ。いわなかったわ』

あっさりそう認められ。碧音さんのことを溺愛しているように感じていたあやの言葉とは思えなかった。

「どうして。どうしてそんなこと」

うわ言のように問い掛けた俺への答えはあっさりしたものだっただった。

『だって、いったって碧音は信じないわ。あの子は静也のことを信じていたのよ。……ねえ、それで今それを聞いてくるってことは、あの子も目にしたの？』

その言葉に俺はあの一瞬を思い出さずにはいられなくて、苦しかった。

碧音さんの視線の先にいたあいつの姿……。

ホテルから知らない女の肩に腕をまわし、その女は小西の腰を抱いていた。それは、逃れようの無い現場で、その雰囲気はそこで何が行われたのか隠しようの無い瞬間だった。

『見たのね。そう……良かったわ』

—— ……良かった？ 何が良いんだ？！

何も答えられない俺の返答をそうだと受け取ったあやは、しみじみとした調子で「良かった」と重ねた。

碧音さんは確実に傷付いていた。声を殺して咽び泣いていた……それでも、あやは良かったというのだろうか。

—— ……何が、

どうして……――。

俺にはわからない。あやは他人の俺から見ても碧音さんを溺愛していたと思う。大切に、特別に思っているように見えた。それなのに……

『大丈夫？ 克己まで、そんなにショック受けること無いでしょ？
全く、恋愛音痴はこれだから』

受話器の向こうで、あやのぶつぶつ呟く声が、なんていつているのか良く聞き取れなかった。

「何で、知ってたんだ？」

『何でって、最初の相手があたしだったからよ』

「え？」

あやの答えに驚いて自分の耳を疑った。

『ていうか、正確にいうとちょっと違うわ。逆ね。あたしが静也と付き合ってるときに、あの子も付き合い始めたのよ』

「え？」

『あの時のことは良く覚えてるわ。碧音が嬉しそうにあたしにいったのよ。「小西さんの彼女になったんだよ」ってね。本当に嬉しそうで、あたしは何もいえなかった。いわない代わりに、あたしはさっさと手を引いたけど。あいつの無類の女好きは変わらないのも事実知っていたわけだから、結婚だなんだと今日みたいな日が来るくらいだったら、あの時話しておくべきだったと後悔していたとこよ』

はあ……と重い溜息が聞こえてきた。

『でも、あの子。事実を知ったのよね』

「ああ。苦しんでるはずだ」

『うん。きっと、そうね』

お互い、その後の言葉を必死に探していた。

「どうするかな。あいつ……」

『心配？』

「そりゃ、少しは……」

『うん。だよね。でも、きっと大丈夫。あの子は乗り切るわ。あの子は、強いもの。あたしや、あんたよりもね』

強い……か。

確かに、強いかもしれない。

ああ。

あの瞬間、あいつの強さを少し目の当たりにしたような気がした。ちよっとひっかければ折れてしまいそうな二本の足で、しっかりと真っ直ぐ立って歩いていた後姿。

—— ……本当、逞しすぎる。

そして、その瞬間俺は少し、切なくなった。

太陽が登るとかなり頭がすっきりしていた。

お天気も上々だ。

いや、ちよつと寒いけど。

昨日の私は世界で一番不幸に見舞われた様に落ち込んでいた。

でも、考えてみれば、あれが初めてというわけではない。大体、分かっていたことだ。自分がどれだけ詰まらない女か、なんてことだから、これもいつも通り、そして私が導き出す答えもたった一つ。

私は馬鹿だから、もう、どうしようもないのだ。

悩むだけ無駄。

自嘲的な笑みを溢して、いつも通りに会社に向う。ほんの少しまだ目ははれぼったいけど、休憩ごとに冷やしていけば、夜には少しはましになるだろう。

私は小西さんのことが好き。

あやのことも好き。

だから、本当にどうしようもない、私の考えは変えられない。

今朝方私は小西さんにメールを打っておいた。

会社の最上階の展望ラウンジで仕事が終わったあと、待ち合わせ

……ということでは……。

「んんゝ……っ！」

大きく深呼吸して、私は出社した。

『まあ、あんたに任せるから何とか上手く慰めといてあげてね』

とかなんとか、勝手なこといいやがって……。

俺に一体何が出来るんだよ。

昨日から俺はそんなことで頭がいっぱいで、気が散ってしょうがなかった。誰かを、慰めたり元氣付けたりなんて、俺は今までしたことないし。

一体どうしてやったら良いのか、全く見当がつかない。

そもそも、なんで俺が……と思われないのに、はつきりノーといえなくて、ずるずると……。オカシイ、俺はもつとハッキリした人間だった筈なのに。どうしてあやには気圧されてしまうんだ。

それに、今日はあいつが小西に返事を出す日だろう。

答えは、一体どっちに傾くんだろう。

あの様子では、どっちに折れるか俺には分からない。

「女って、何されたら元氣になるかなあ」

「おい?! 克己? 大丈夫か?」

—— ……しまった。

つい考えるあまり、つまらないことを口にしてしまった。

真が目を真ん丸くして俺を見ている上に、透には激しく揺さぶられてしまっている。

ていうか、休みに入ったのに学校に付き合ってるんだから、感謝して欲しいぐらいなのに、この扱いは何なんだ。

「き、気持ち悪くなるからやめてくれ」

「ああ。悪い。心ここにあらずかと思ったら、急にうわ言のように不気味なことから、つい、驚いたんだ」

無茶苦茶に揺さぶるからむせてしまった。

「で、誰を元氣付けるんだ？」

「あゝ……いや。何でもないんだ」

心配そうに俺の顔を覗き込んで尋ねてきた真に、何て説明して良いのか分からなくてそう答えてしまった。それに、真面目に説明しようものなら、真は俺よりも真摯に頭を傷めそうだ。

真はそれでも俺から話を掘り下げたそうだったが、あっさり透がスルーして俺に、なあなあ！ と、纏わりついてくる。

「克己。今日バイト休めよ。イヴだぞイヴ。仕事しにいくなんて、お前くらいじゃないのか？」

確かに、今日バイトには行かない予定だった。昨日の帰りにマスタ―にはいっておいた。

しかしそれは、こいつらのためじゃなくて、もっ！ もちろん、あいつのためでもなくて、だな……いや、ただ、だるかったから……とか、そう！ だから休んだんだ。透に付き合う気は頭から無か

った。

「だってよお。真だってさ、今日は瑠香ちゃんと会ったよ。俺一人ぼっちや〜ん」

「え？ そうなのか？」

透のぼやきに驚いて、思わず真に目を移した。

「いや、まあ。そんな感じだ。ちゃんと、話とこうと思ってさ」

照れくさそうにそういつて顔を赤らめて、席を立った。「ちょっと、悪い」そういつて俺達から離れた。どうやら、バイブレーションに設定してあった携帯がなったようだ。

「イヴに一人ぼっちなんて、寂しいよお」

「はいはい。でも、俺は今日は付き合えないんだよ。我慢しろ」

「はあ〜……。小春ちゃんとデートなの？ 克己ちゃん」

「小春？ 誰だよ、それ？」

透が突然、謎の女の名前を挙げたので思わず怪訝な顔をしてしまう。

これ以上問題のある女を増やさないでくれ。

そんな俺に悪びれるふうもなくにやにやと答えた。

「例の克己の愛しちゃってる子だよ」

「ダレ？ 碧音さんのことか？」

「なるほど。碧音ちゃんっていうのか。変わった名前だけど。うん。そんな感じかもな。名は体を現すってか？」

「いや、愛してないしっ！」

思わず全力否定したあとで、やっと透にはめられたことに気がついた。透は、そんな悔しそうな顔をしてしまった俺をみて、声を上げて笑っていた。

何だか、今日は時間が経つのが早かった。

もっとゆっくり、じっくり流れてくれれば良かったのに、一人でぼやきながら一足先に仕事を切り上げ、展望ラウンジへ上がっていた。

この階には、展望フロアのほかに、カフェと小さなフランス料理のお店があった。基本的に私はイタリア料理の方が好きで、あまりここへ足を運ぶことはなかった。

夏場ならまだまだ明るいこの時間も、もうすっかり日は落ちていた。

オフィスビルの最上階から見下ろす眼下は、冬場というかクリスマス独特のイルミネーションでにぎわっていた。

その様子を、見下ろしていると、心は風が吹き抜けていったように、冷え冷えとした。

これから、私は一体どうなってしまふんだろうか。

私の出した結果は「吉」とでるのだろうか「凶」と出るのだろうか……自信はなかった。

でも、心は決まっていた。私はどうしようもなく融通が利かない。

日中もそのことで頭がいっぱいで、考えまいと努力してもそんな

のは、無駄でしかなく、大きくため息が漏れてしまう。
しかし、逃げるわけには行かない。なんといっても、これは私の人生の分岐点なんだから。

ぼんやりと待ちぼうけしていると懐かしい気分になる。私は待ち時間をそんなに苦に感じたことはない。

「よし。完璧」

俺には他に思いつくことが無かった。

誰かのために何かをするなんて、これが初めてだったし、こんなもので良かったのかどうかも分からない。

でも、少なくとも俺が出来ることといったら、こんなもんだ。

そう一人で納得した俺は、今夜は冷え込むだろうと予想して、出るだけ厚着をして部屋を出た。特に約束を取り付けているわけじゃない、会えるとも限らない。だから、どっちにしても待つことになるだろう。

そして向かった先は、あいつの会社のあるオフィスビルだった。碧音さんの家の方で待っても良かったのだけど、昼間あやからメールがあって、そこで待てということだったから。

そうやって、考えると実際問題、今足を運んでいるということは、あやの「策略」とやらに結果的にはまってしまっているだけで、そこに俺の意思があるのかという問題になってくると、どうなんだろう。

そんなこと、いくら考えても今の俺に答えなんて見つからないだろう。だったら、いっそなんだっていい。あやの策略にはまってるんじゃないか。そんな気にすらなっていた。

俺のマンションから、そこまではそんなに離れてはいなかった。今夜はクリスマスイヴというのも重なって、街のイルミネーションはまぶしいくらいだ。そんな街中を行きかう人々は、今日、このときを惜しみなく楽しんでいるようだった。

この遊歩道の先に見える、ビルが目的地なのを確認して、俺はその傍のベンチに腰を下ろした。

「―― ……さむっ」

座った場所も冷たかったが、風が吹くと刺されるような刺激に襲われた。

―― ……頼むから、早く出てきてくれ。でないと、俺は凍死しちまうぞ。

思わず泣き言が入ってしまう。

『15分以上連絡がなかったら、好きなようにしてて良いからね』
初めて待ち合わせをした日、小西さんはそういつてくれていた。
私も、それを守っていれば、いつも待ちぼうけのようなことはし
なくても良かったのだけど。

ここを、離れてすぐ来たら
すれ違いになったら

そう思うと、私はいつもそこを離れることが出来なかった。
今日は、時間の約束なんてしていない。

だから、何時になるか分からない。私は好きで早めに待ち構えて
いるわけだし。文句をいっていく先もいう必要もない。

「碧音ちゃん」

つまらないことを思い出していたら、いつもの柔らかく心地良い
声が聞こえた。

振り返ると少し息の上だった小西さんが視線の先に居た。

私の心臓は、とくんつと一度跳ねたあと鼓動を早めた。思いのほ
か、早い到着と、これから自分がハッキリさせなくてはいけないこ
とを考えると、握った手が少し震えていた。

私のそんな心を知ってか知らずか、小西さんはいつもと変わらない笑顔で歩み寄った。

「それでも、急いだんだけど。やっぱり、碧音ちゃんにはかなわいな」

「今日は、暇だったんですよ」

これは本当だ。

葉月チーフはこういうイベントが大好きで、今日はノー残業デイトと決め込んでいて、終業時間と共にそそくさと引き上げてしまったのだから。

「ええっと、どうしようか。ここで、良いの？ 碧音ちゃんの好きなお店で良かったんだよ？」

「はい。大丈夫です」

私は、頑張って……頑張って笑顔を作った。

「そう？ じゃあ……」

「『チロル』の方で良いですよ」

『チロル』というのは、カフェのほうで、その手作りシフォンケーキはなかなかの評判だった。

でも、社内ということもあって、あまり足を運ぶことが少ないのも正直なところだから、実際そこへ行くのは暫らくぶりだった。

店内は、アンデルセンの童話にでも出てきそうな可愛らしいディスプレイに、今日という日が重なってますます華やかな飾り付けになっている。

—— ……可愛いけど、ちょっとくだいな。

緊張のあまり、つい、どうでも良さそうなことを考えてしまう。とりあえず、私たちはお店の奥の窓際の席を陣取った。

見晴らしは良い。

相変わらず眼下はきらきらとまばゆい限りだ。

「何だか、ちょっと緊張しちゃうね」

店員さんに注文を済ますと、その時置かれた、水を両手に包み込むようにもって小西さんが呟いて、少し固い表情で微笑んだ。

……ちくり……

心が少し痛んだような気がする。

私は心臓が口から出そうなくらい緊張していた。

小西さんのことは好きだ。

本当に好きで、

大切にしたいくて、

信じていたかった。

彼のすることには、一つ一つ意味があって、それはきっと私が悲しむようなものでは、きっとないと確信していた。

でも、その私の考えは、浅はかだったのかもしれない。

甘かったのかも、しれない……。

しかし、もしそうだったとしても、そう信じてきた自分を否定す

るのもどうかと、私は迷った。

そんな私は、俯いていた顔を上げて、小西さんと視線を合わせた。彼は、真っ直ぐ綺麗な瞳で私を見つめていた。いつもの、私の大好きな彼がそこにはいた。やっぱりあれは気のせいで、今の前姿が本物なのかも……そう思いたくて仕方なかった。

でも、私は膝の上できゅっと拳を握り、自分の希望を打ち消した。

「えっと」

そして、私は、何とか声を絞り出した。

体中が熱気を帯びてくるのが分かる。あまりの緊張のため、私はもう一度大きく息を吸い込み深呼吸した。

『ホントは、静也のほうが離れていくと思ったのよ』

俺は、あの日あやと交わした会話を思い出していた。

何か考えてないと、時間が長く感じて仕方なかったから。

『あいつ、あんな顔してるけど、人一倍負けん気が強いよ。だから、彼女が自分の上に立つなんて、考えられないの。実際のところ、あたしがチーフになってすぐだったしね。あの子に手を出し始めたのは』

「結構、小さいな」

『ふふ。克己もそう思う？ あたしも、そう思うわ。ほんとに小さい奴よ。だから、あたしは別れて正解だったし、碧音の傍だって、

あの時の移動で、離れていくと思ったのに』

「なるほど。それでか」

『ああ、もちろん何度もいうけど、あの子の実力だって伴ってたのよ。それがさ、あんな結果を招くなんてね』

受話器の向こうから聞こえる、あやの溜息は重たかった。

「プロポーズ……か」

『——……そうね。静也、もしかしたら、気持ちだけは結構本気だったのかも、ね？ それでも、あたしは許さないけど』

碧音さんのようなタイプはきっと結婚に幸せを感じるだろう。だから断る理由なんてひとつもなかったはずだ。子どもの頃には、本気で「可愛いお嫁さん」を将来の夢にして、それを今でもどこかで持っているタイプだ。

「あら、克己くんじゃない？」

物思いにふけていたから声が掛かるまで全く気がつかなかった。声がしたほうに目をやると、そこには女が立っていた。寒そうに両手をこすり合わせながら俺の反応を待っているようだ。

こいつは覚えている、確か。

「弥生……？」

「良かった。覚えてたんだ」

俺の返事を聞いて、嬉しそうに弥生は近づいてきた。

——……ああ、覚えているさ。

人を平気で陥れるような怖い女。覚えておかないとどうなるかわかりやしない。

「誰か、待ってるの？」

「別に」

「ああ、あやさん？ あやさんだったら、もうちょっとかかるわよ。確か、打ち合わせがあるとかいって、怒りまくってたから」

「―― ……あ、そう」

別に、あやに用は無い。

そのため俺の返答はかなりそっけないものだった。そんな俺をどう思ったのかは知らないが「じゃあ、折角のイヴだし風邪ひかないようにね」といい終わるのが早いのか、足早に立ち去るのが早いのか、早々に通りすぎていってしまった。

預かっていた指輪を、バッグから静かに取り出しテーブルの上に乗せた。

その様子を小西さんは静かに見守っていて、私の返事を待っているようだった。

「私、小西さんのこと好きです。とっても」

「—— ……うん」

静かに、私の言葉に耳を傾けてくれる彼を見るのが辛かった。

私なら、前置きなんて要らないからっ。とがつつきそうなものなのに、小西さんは私が続きを口にするのを静かに待ってくれる。

冷静で沈着。

常に熱に浮かされているようだったのは、私だった。

私は胸に手を当てて大きく喘ぐ。何度深呼吸しても、息苦しくて堪らない。

「でも、私は、小西さんに必要ないみたいです」

「—— ……え？」

「結婚は、お断りします」

「—— ……ね、ちゃん……」

小西さんの声は聞こえていたが、聞くわけには行かなかった。彼の声を聞いてしまっては、今、彼の顔を見てしまっては、私の決心に迷いが出る。私は急いで続きを並べた。

「ほんの一瞬でも、そう思って、そう考えてくれただけで、嬉しかったです」

「碧音ちゃん」

「私ではないほうがきつと良いですよ。私、我侂だし、嫉妬深いし。良い子でいるだけじゃすまなくなっちゃう……！ 小西さん、モテますから」

「碧音ちゃんってば?!」

「きつと、他に……」

—— ……もう、駄目だ……。

「ありがとうございました」

絶えられなかった、私は一礼して、その場から逃げ出した。
私がこの間目にしたことは口にするわけには、いかない……彼が傷付く……そうも思ったし追求してもしなくても、私の気持ちは変わらないし、事実是不変。どんな理由があっても煮え湯を呑んだ腹は納まらない。

—— ……ウイイ……ン……

静かにエレベーターの扉は閉まって、そのまま、音も無く階下に降りて行った。

彼は追いかけてこなかった。ということは多かれ少なかれ、断られる理由に心当たりもあったということだろう。

私自身、来て欲しかったのか、どうなのか、本当のところ自分でも答えを出すことはままならなかった。

ガラス張りのエレベーター内は周りを見渡すことが出来る。

もう、人気はない。

オフィスが入っている階は、もう薄暗くなっていて少し不気味だ。

不思議と、涙が出なかった。

もちろん、何とか堪えたというほうが確かではあるけれど、でも、今一人こうしていても、いろいろと考えることはあっても泣けないでいた。

大泣きして、大騒ぎして、盛り上がったら、もつとすっきり楽になれるのかもしれない、でも……。

—— ……ガタンッ

小さな衝撃と共に、扉は開いた。

私はきちんと向き合って、この事実を飲み込まなくてはいけない。

さて、これから、どうしようか。

今日はイヴだし家に帰っても、一人きりだ。一人では、今居たくない。自分が惨めになるだけだ。

でも、頼りのあやはこんな日にオフなわけないだろうし。

「ぼさっとしてたら、こけるわよ」

「—— ……あや」

薄暗い正面フロアの入り口に立っていたのはあやだった。

あやは、いつもと変わらず華やかな笑顔だった。

その顔をみると、私も何とか笑顔が作れた。

「目が笑ってないわよ」

「そっかな」

「そうよ。馬鹿ねえ」

こつつとあやのヒールが床を弾く。

そんな私を、どう思ったのか定かではなかったが、そういったあやは、静かに私を抱きしめていた。香水の良い香りがした。甘く華やか。とても豪華な香り。あやにぴったりだ。

「嫌味の一つくらいいつてやった？」

小さく呟くあやの声に、私は首を横に振った。あやは、馬鹿ね。と繰り返しくすりと笑いを溢す。

「別に恨み言の一つや二つ、いつてやれば良かったのに。すつきりしないでしょ？」

「――…良いの。別にたいしたことじゃないし。これで良かったのよ。ところで、こんなどこにいるの？」

「あんたの馬鹿面拝むために、わざわざ、待ってたのよ」

わざわざ待ってた、そういったあやに少し笑った。

「ま、ほんとにちょっと顔見たかっただけだから、これから、あたし用事あるし」

「え、ええ？」

てつきり、今晚は付き合ってくれるのかと思った。

ほんとにそれだけだったなんて。らしいといえばらしいけど。あからさまにがっかりした私の肩をにこにこしながらぽん叩きながら、

「思ったより、大丈夫そうで、安心したわ。外寒いから早く行ったほうが良いわよ」

「なーんか、意外と冷たいね」

そんな悪態を二人でつきながら、正面玄関の自動ドアをくぐった。遊歩道の反対側の車道に一台の高級車が、止まっていた。

「あれ、ちょっと早いな」

腕時計を確認しつつ、車の脇に立っていた男の人に軽く手を上げた。

「じゃ、また明日ね」

「ああ……。うん」

いつも、通りの挨拶のみで、あやはそちらにかけていった。

その場所に一人残されてしまった私は、走り去るあやを見送って、ぽつんと立ち尽くす。

当然のように訪れる孤独。

仕方がないよね。今夜はイヴだし、女の子一人でいるのはきつと私くらいだ。

ちらりと顔を上げると、並木にきらきらとしたイルミネーションが輝き、楽しげな人々が行きかう姿が、目に映った。

――……。はあ。仕方がない。帰ろっか。

そう思うしかなかった。

もし私が小西さんを許して「うん」と、頷いていれば私も今頃は

あの浮かれきった人たちに混じることが出来たのだろう。

でも、私はそんな刹那的な喜びは永遠に続かないことを良く知っている。

これは私が選んだ選択だ。

これで良かったと自分にいい聞かせて、私はその道へ歩み出た。

自分の吐く息が白く、胸に入ってくる空気は冷たかった。でもようやく呼吸を取り戻したような気がする。胸のつかえが取れて、やっと四肢に酸素が行き渡る気がした。

—— …… ああ！ もうっ！ おっそい！！

もう、待ってられるか！ 凍死するぞ。

大体。約束もしていないのに、待ってるなんて変質者のすること
だろ？！

俺何やってんだよ。あやにこれ以上踊らされて堪るかっ！

こんなに、待ったのは生まれて初めてだ。我慢ならなくなった俺
は勢いよく立ち上がった。

「あれ？ 克己くん」

タイミングが良いのか、悪いのか、いつもの素っ頓狂な声が聞こ
えて、そちらへ視線を移すとうとうやっと待ち人來たり。碧音さんが
そこには立っていた。

じつと表情を伺うに、泣いた後もないようだし、でも、一人みた
いだし。

—— …… どうなったんだ？

いきなり現れた碧音さんを前につい、言葉を失ってしまった。不
思議そうに見上げてくる小動物的な瞳に、うっと詰まる。

「こんなところで、待ち合わせでもしてたの？ 風邪ひいちゃうよ」

何もいわない俺に碧音さんは心配そうな顔で、問い掛けてくる。
他人の心配している場合じゃないだろうが……本当に馬鹿。

「――……だよ」

「ん？　なんて？」

「だから、あんた待ってたんだよ」

これを、いわないと待ち損のような気がしてつい白状してしまった。

その一言を聞いた碧音さんはますます、不思議そうな顔をして俺を見上げて、瞳を瞬かせる。その瞳に、街路樹に掛かったイルミネーションが映りこんで、きらきらと綺麗だった。

「まあ、細かいことは良いとして、寒いし。早く行こう」

俺は、碧音さんの手をとって、半ば強引に足を進めた。

「え？　何が良いの？　何で、私を待ってたの？」

俺に引きずられるように足を進める碧音さんは、後ろから質問攻めをしていた。そんなことに答えろといっても、何て説明しろっていうんだ。

「あ……っと、あれだ。今日は、イヴだし。今あんたは暇だし、一人だし。俺も暇で一人だから。そういうことで、良いじゃないか」「どこ行くの？」

「あ……っと。どこか、行きたいところ、ある？」

「ううん。特に思いつかないけど？」

「じゃあ、俺の部屋」

その一言で、碧音さんの足は止まった。察するに……――

「いや、もうあんなことしないから。悪かったよ。あの時は」

とりあえず素直に謝ってみた。しかし、碧音さんは無言で、俯いてしまった。

「ええっと。もう一回。もう一回だけ、信じてもらえないか？」

思い切って低姿勢に出てみた。

これには、ある種の自信が有った。

この人はきつと信じて欲しいと願う奴を意味もなく切ったりしない。暫らく顔は上がらなかったが、仕方ないなと前置いて顔を上げたときには、

「行こっか」

と微笑んでもらった。断られるかもしれないということを、微塵も頭に入れていなかった俺は何とか胸を撫で下ろした。

私の手を握っていた克己くんの手は冷たかった。

一体いつからあんなところに居たんだろう。そのうえ私も待っていたなんて、案外克己くんだってお人よしじゃない。そう思うと何

だか可笑しかった。

「おい？ 入らないのか？」

そんなことを考えてる私に、ドアを開け放って克己くんは待っていた。

「ああ、ごめん……あれ？ 誰か居るの？」

「いや、誰もいないけど？」

玄関に入ると、誰も居ないはずのリビングから、微かに明かりが確認できたような気がしたんだけど？ そう思いつつ、私は腰を下ろして、レースアップブーツを脱いでいた。その横に克己くんがスリッパを用意してくれる。

「よっ」っと、やっぱりブーツって脱ぎ着が面倒だね。何とか、ブーツを玄関の脇に並べて振り返ると、そこに克己くんの姿は無く、美味しそうな良い香りが漂ってきていた。

「わあ。どうしたの？ これ、克己くんも結構クリスマスとか楽しんでじゃうち？」

リビングのドアを開けると歓喜の声を上げた。

テーブルの隣に置いてあった、白いクリスマスツリーが物凄く綺麗で、冷え切っていた私の気持ちをほんの少し暖めてくれたからだ。

「そんな風に見えるか？」

「……見えない？」

「だろ。じゃあ、ま。座れよ。シャンパンでも飲もう」

そういつて克己くんは私に椅子を引いてくれた。
何だかちょっと、感じの良いレストランのようだ。

—— ……ぽん…っ

コルクはクロスでふさがれていたため、小さな音を立てただけだった。

グラスに注がれるそれは、やや黄金色がかっていて、注がれる衝撃でいっそう細かい気泡が上がり綺麗だった。細い脚を持ってゆらりと揺らせば、気泡にクリスマスツリーの明かりが反射して、キラキラしている。

「これ、この前、飲みそびれてた『リユイナール』だよ。マスターがくれたんだ」

「わぁ。そうなんだ。飲んでみたかったんだよねえ」

嬉々として私はそれに口をつけた。

美味しい。

洋ナシのような白い果実の香りが、ぷんとして、口の中で柔らかく広がっていく。

私が、シャンパンに舌鼓を打っている間に、克己くんが、ダイナーの準備をしてくれた。

そして、一通り克己くんの手料理をご馳走になった。おいしかった。前菜から始まって、ちゃんとした、コース料理のように用意してくれていて、どれも残さず食べられる量で……。

はぁ、きつと克己くんは、良い奥さんになるよ。

——…って、良い奥さん？　では問題かな。

そんなことを考えて思わず笑ってしまったら見咎められた。

「何一人で、笑ってんだよ。気持ち悪いな。そうだ、ケーキも焼いたんだ。食う？」

「うん。食う」

「まだ食うのか？　そのうち、転がった方が早くなるぞ」

克己くんが、食べるかって訊いてきたくせに。感じ悪いんだから。とはいっても、ケーキを切る克己くんはどこか楽しそうだ。

一人で鬱々と過ごすことになっただろうことを想像すると、ここに来て良かった。克己くんに予定がなかったということは些か信じがたいけれど、それでもこうして時間を割いてくれたことは素直に嬉しい。

一夜限りのお姫様気分。ってところかもしれないな。

ふふっと一人ほくそえんで、私はまたグラスを傾けた。

「美味しい？」

「うん。美味しい」

ほんと、よく食うよな。痩せの大食いとは、よくいったもんだ。まあ、どれも美味そうに食うから食わせ甲斐もあるけどな。

幸せそうにケーキを食べている碧音さんを眺めつつ、俺は残り少ないシャンパンを空けた。

「で、あやにでも、頼まれたの？」

「え？」

突然の質問に、ちよつとどきつとした。

「いや、まあ」

そして、咄嗟に上手いい訳も思いつかなくていい淀む。そんな俺に、ふふっと笑いを溢した碧音さんは訳知り顔で頷いた。

「やっぱり、そうか。ごめんね。何か心配かけた上に迷惑かけちゃったね」

「迷惑は今始まったことじゃないからな」

—— …… ああ、しまった。

思わず、悪態がついてしまうこの口が憎い。

「っと、話のついでだが、どうなったか聞いても良いか？」

「今日は、やけに遠慮気味だね。別に、隠すようなことでもないし、良いんだけどね。あっと、何か飲むものもらえる？」

「ん？ ああ。ワインでいいか？ それとも、ノンアルコール？」
「ワインで良いよ」

「まったく、酒好きはこれだから。」

「やれやれと、思いつつワインのコルクを抜き、グラスに注いだ。
小さく「ありがとう」と紡がれる声に、こくんっと頷く。」

「うん。小西さんのことはね」

「ああ」

「断ったのよ」

「そうか」

「訊いた割りに、あっさりひくよね？ まあ、仕方ないんだよね。
付き合ってるだけだったら、私も、あのくらい謝ってくれば許す
んだけど」

「……へえ。碧音さんでも許すんだ。」

「俺の勝手な印象だが、碧音さんはそういうところに潔癖な気がした。」

「でもさ、結婚とかってことになるって一生でしょ。『酒とタバコと女はやめられない』っていつもあやがいつてるしさ」

「……あや。また、おっさんくさいことを。」

「私も、それって当たらずも遠からずってとこだと思うし。だから、仕方なかったのよ」

「小西はそれで納得したのか？」

「さあ、どうかな。私結局いいたいようにいって逃げ出しちゃったから」

「逃げたって」

「言葉のままだよ。自分のいいたいことだけいって、立ち去ったの。だって、それ以上私は彼と話すことはなかったし、何をどう説得や、説明されても、きつと受け入れることは出来ないんだもん」

そんな話を淡々と、何の感情も込めないように語る碧音さんに胸が詰まる。こんなことをそんな風に語れるようなタイプの人間には思えなかった。だから余計、苦しく辛そうに俺の瞳には映った。

片手にしたグラスの中では、ゆっくりと静かにワインが波打っていた。

「おい、大丈夫か？ 気分悪いのか？」

心配そうな克己くんの、声が頭に響く。
うーん。

最近どうもお酒に弱くなってきたのだろうか。そんなに飲んだつもりはないというのに、頭がぐらぐらする。

「一人で、こんなに飲んだらアル中になるぞ。立てなくなるのも当

然だし、ったく。ほら、掴れよ」

こんなになって、最初のシャンパンとワインを……ん？ 一体何本飲んだっけ？

何だかふわふわする頭を起こして考えたが、よく覚えていない。

私は、克己くんを抱えられるようにして、部屋を移動した。

「よっこいせ……と、あんな椅子に座ってたら不安定だろ。ここにも、座ってろ。横になるなよ。吐くぞ」

寝室のベッドの上に座らせて貰った私は、冷えたタオルも渡された。

「ありがとう」

「ああ、もう良いよ。俺はあっち片付けてくるから、良い子にしてろよ」

そういわれて、小さく頷いたが、頭を動かすとぐわんぐわんしてちよっと辛かった。

そんな私の様子を見て、克己くんが溜息を吐きながら、部屋を出て行ったのが気配で分かる。行かないでといいそうになる自分の声を殺すのに尽力した。

全くもって、我ながら情けない。

どうしてこう……。

はあ……冷えたタオルが火照った顔をひんやり冷やしてくれて、気持ちが良い。

でも、今日は、あやに頼まれたとはいえ克己くんが居てくれて良

かった。今日一人で居るということに私は耐えられたかどうか自信がなかった。

週末は散々だった。

もう、これ以上涙なんて出ないだろうと思うほど、泣いたし。目は痛かったし、顔はむくんでたし。表になんて出れるような姿ではなかった。

私の選択は本当に間違っているのか？

私の出した答えは正しかったのか？

今日はそのことで自問自答繰り返し返してばかりいた。これから先、あんな人もう、現れないかもしれない。私の選択は間違っていたかもしれない。そう思いたくなくて、なるべく自分は正しかったんだと思い込んでいた。

それなのに、こうして部屋で一人になって、考えることといったら、私は馬鹿だったのだろうか。ということと

「――…駄目だ。眠い」

このところ、十分な睡眠の確保が出来なかったから、急に睡眠に襲われてしまった。

克己くんは横になるなどいわれたけれど、どうもその約束は守れそうに無い。

ベッドが私を好きだといっている。私においでおいで、つて……
 していて……

—— ……ぽすっ

私は静かにベッドに身を沈めた。ベッドのスプリングが柔らかく私の身体を受け入れてくれる。

凄く気持ちが良い。

このまま、瞼を落とせばきつと次に目をあけるときは朝だろう。

だから、駄目だと分かっている。分かっているけど……瞼の仲が良すぎて、引き離せない……。

眠りたくはない、眠りたくは……夢に、見るのは、分かっているから。

それにしても、よく飲んだな。まあ、この間に比べたら、そんなでもないか。

「これも、もう良いか」

きらきらと光っていたツリーの電源を抜くと、急に部屋の中が寂しくなったような気がした。さっきまで、碧音さんは何の話をしていたんだっけ。

これといった話でなくてとめどない話を一人でずっと喋っていた。今はもう、その声も聞こえない。

そう思うといやに部屋の中が静まり返っていることに気がついた。といっても、基本的にいつもは、こんなもんだ。だからこれが普通。そうは思うものの今日は特別静かなような気がする。

「あいつ、生きてるかな」

今日はかなり酔ってたみたいだからな。いや、今日も……か。

俺は一通り片づけを終わらせて、碧音さんの様子を見に寝室へ戻った。部屋の前に立つと、妙に静かなのに気がついた。

そう思うと急に不安になって、ばんっ！ と乱暴にドアを開けた。

「—— ……なんだ。寝てたのか」

姿を確認すると、安堵の思いで胸を撫で下ろし、様子を伺いに近寄った。

あんなに激しくドアを開けたのに目が覚めないとは、よっぽど寝入ってるんだな。

静かに碧音さんが眠ってる隣に腰をおろした。微かに、ベッドがきしんで、目が覚めてしまうかと思ったが、平気そうだ。

「――……っ」

寝言か……？

何かいったような気がして、顔を覗き込んだ。

うなされているのか？ 眉間に皺が寄せられているように見えるし。

「おい？ 泣いてるのか？」

頬に涙のあとが窺えるように見えて、悪い夢でも見ているのかと思うと思わず俺は手を伸ばした。軽く頬に触れても目を覚ます様子がない。

眉間の皺は尚濃くなるばかりだ。

「おい。起きろ。大丈夫か？」

妙な焦燥感に襲われて、ゆすってしまった。

一瞬、びくつと身体を強張らせたが、何とか目は覚めたようだ。ぼんやりとした目で、俺の姿を確認しているようだった。

「あ……れ……？」

「あれ？　じゃ、ねーよ。大丈夫か？　夢でも見てたのか。泣いてたみたいけど」

「う……ん。大丈夫。泣いてなんて……夢なんて……」

夢の続きでも見ているように呟きながら、上体を起こした。暫らく無言で、俯き目頭をぐぐーっと押さえたあと、ほうと一息ついて顔を上げる。

「ん。大丈夫。さて、一眠りしたし、そろそろ、帰ろっか」

「帰ろっかって。平気なのか？」

「何が？　大丈夫だよ。もう、立てると思うし。そんな酔ってないよ」

にこりと、そういった碧音さんに胸の奥がざわつく。俺がいたことくらい、分かりそうなものなのに、はぐらかすように微笑まれると子どもは黙っているといわれているような気がする。

「そっちじゃなくって」

つい、不機嫌そうな声を出してしまった俺に、碧音さんは気分を害するようなことはない。表情を崩さないまま「今日のここと？」と口を開く。

「―― ……大したことじゃないんだよ。うん。一つの恋が今日終わった。ただ、それだけなんだから。それに……私が、選んで、私が、考えて、出した終わりなんだから」

自分の膝頭を見つめつつぽつぽつと溢す。そして、顔を上げた碧音さんはやっぱり笑顔で……

「ね？ どこにも、誰にもいっていくところなんて、ないんだよ。だから、私は大丈夫」

俺はそれを直視することが出来なかった。

そんな風に、割り切れるわけじゃないか、割り切れないからあんなに無茶な飲み方して……本当は苦しくて辛くて泣きたいんじゃないのか？

俺は一瞬にしているんなことを考えたが、どれも口にすることは出来なかった。

克己くんは黙り込んでしまった。

きっと、いろんな言葉を搜して、なんていって良いのか、まとまらないんだろう。

そう思うと、ほんの少し、愛しいような申し訳ないような気分になって、こっちのほうが、苦しくなる。

言葉って……難しい……。

—— ……だから、何となく……。その優しさに縋りたくなった……。

「甘えても良い？」

「え……？」

「もし、まだ、帰らなくて良いといってくれるなら、もう少しだけ」「もう少し？」

「傍に寄っても構わない？」

手を伸ばした先に誰かがいてくれるのは嬉しい。特に自分の感情ですら良く分からなくなってしまうときはそのうだ。

私にも分からない。

私は、今、何を思っているんだろう。

自分からなくしたものの大きさに気がついているの？

何も分からないし、何も考えられない。

だから、触れてくれる腕が欲しくて、温かさと安らぎが欲しかった。

「つて、ごめん！ 私、何いってんだろ」

ぼんやりとそんなことを考えていたら、とんでもないことを口走ってしまったような気がする。私は慌てて取り消すと立ち上がった。いくら人恋しいからって、巻き込む相手を間違っている。というか、ここまでしてくれただけでも有り難い話なのに、私、どこまでずうずうしいんだ。

真っ赤になった顔。火が出そうとはこのことか……。

「良いけど。脱いだほうが良い?」

そんな私をからかうように笑いながら、やっと克己くんが口を開いた。

「いやいやいやいや、そのままが良いよ」

頭と手が千切れるんじゃないかと思うほど激しく否定していた。

「つて……え、良いの?」

「そんなことで、良いんなら」

そういつて目を細めた克己くんは、いつもとは違ってとっても柔らかな表情をしていた。

私は、まだからかわれているんだろうか?

「で、でも、その、えーっと、彼女さんに悪いし」

「いないの知ってるだろ。嫌味か」

「いえ、違いますけど……」

「ほらほら、ぎゅっとしてやるから」

克己くんはどこか楽しそうに笑いながら、ベッドの端に腰掛けて、ばんぱんと自分の隣を叩いた。

じりつと後ずさりそうになった私に、ぐんつと腕が伸びてきて私の手を掴まえてしまう。

「何、怖がってんだよ。自分でいい出したんだろ？」

「うゝ……。そうだけど……」

まだ、私は酔ってるんだろうか、頭の中に心臓があるように、どくどくと五月蠅かった。

「まったく、そのくらいでそんなに緊張したらこっちまで緊張が移っちゃうだろうが」

いつつ、克己くんは私の腕を掴んだまま、ベッドの上に上がってしまう。もちろん、私はそれに引きずられるわけで……ぽすんっ、ころんっ、履いていたスリッパが床の上に転がってしまった。

そして、そのまま枕を背もたれにして、座りなおして私の腕を引き寄せた。

克己くんが立てた片方の膝が私の背もたれになり、お腹の上を長い足が横断する。完全に掴ってしまった。あわあわとしている私の腕を解放すると、片方の腕で肩を抱き、空いた腕でそっと頭を自分の方へと引き寄せてくれる。

—— ……とんっ……

と、腕の中に収まった私の耳元で克己くんの心臓の音が聞こえる。

規則的に、優しく耳に届くそれに静かに目を閉じて聞き入ると、さっきまで頭の中まで移動していた私の心臓を元の位置に戻してくれた。

「で、このままで良いわけ？ どのくらい傍に寄るのが希望？」

そんな私に克己くんの無粋な言葉が耳に届く。私は苦い笑いが込み上げたがそれを押し込んで呟いた。

「―― ……これで十分。少し話をしよう」

克己くんの背中に腕を回し、胸の中に顔を埋めた。それにあわせるように、克己くんの腕が私の後ろで組まれた。印象的に、慣れるなと思ったものの……

暖かくて、穏やかで心地良い。

人のぬくもりに甘えてしまう私は、やっぱり馬鹿だと思う……。

でも、もう暫らく感じることはないと思っていた暖かさは、麻薬のように私を虜にする。

「あや……知ってたんだよね」

「ん……？」

「小西さんのこと。だからきつと、あんな風だったんだよね」

「いって欲しかったか？」

突然、あやの話から入った碧音さんに恐る恐る尋ねた。友達だったらいって欲しかった。そう思っているんじゃないかと思った。因みに俺も知っていた。でも特に気にしてなかった。

やや黙したあと、碧音さんは小さく首を左右に振った。

「あやは、正しかった。あのときの私に何をいっても、きっと確認できないことは信じたりしなかった。逆に、どうしてそんなことをいうのかと、あやのことを否定してしまったかもしれない。やっぱり、あやが正しかったと気がついたときには、もうあやには近づけなくなっていたかもしれない」

そこまで、話して小さく溜息を吐いて、言葉を続けた。

「あやは、私以上に私のことを知っていたんだと思う」

次いで、もう一言……

「克己くんもね」

「え」

「知ってたんだよね」

俺はかける言葉を探しても、見つからなかった。

ぽつりぽつりと俺に告げる言葉は俺には重たくて、何ていってやれば、こいつが救われるのか思いつかなかった。

そして、暫らくの沈黙が続いた。

後ろに回された腕に時折力が入るのを感じても、身体はなんともないけれど、心が軋んだ。きつとまだ、気持ちに整理のついてないところがあるのだろう。そんなの当たり前、だよな。多分。

俺は誰かに真剣になったことなんてないから、碧音さんの気持ちを本当の意味で分かってやることは出来ない。し、分かる。なんて軽率なことを口にはいけないと思う。

だから、ただ、碧音さんの好きなようにさせ、同じように回した腕に力を込めた。ワインのせいかな、くちなしの花のような、芳醇な甘い香りがする。

十分に待った。

落ち着けば、もう少し踏み入ったことも、本音も聞けると思った。
でも碧音さんは、全部飲み込んだままだ。
痺れを切らすのはやはり俺らしい。

「――…他には？」

「え？」

「他にいうことはないのか？」

突然の俺の言葉に、顔を上げた。

視線が少しの間絡んだが、すぐにもとの位置に顔を埋めてしまう。
そして、また少し腕に力が籠った。

「私って……馬鹿だよ」

一言漏らせば、涙は堪え切れなかった。

そうだ。私は馬鹿なんだ。だからいつもいつも同じ様な結果になって、毎回今度こそって思うのに、結局…… —

「私が、つまらない女だから。みんな離れていっちゃう」

気がついたら誰も傍に居なくて、そう、そんなことは分かった。楽しい時間なんてそうそう続くものじゃないことくらい。私にだって、分かっていた。私は、本当に馬鹿で、そこしか見えなくなつて、きつとみんな重たくなっちゃって、だから……。

私は一人になる。

あやのように美人でもないし、葉月チーフのように頭が切れるわけじゃない。長所なんてないつまらない女で……きつと一生こんな人生しか待ってないんだ。

そんなこと考えなくなかった、自分が惨めになるだけだし苦しくなるだけだし、割り切らなくてはいけないことなのくらい分かった。

—— ……でも、頭から離れなかった。

「―― ……つく、私が、もっと、良い女だったら、小西さん、だ
って……ひっ……く、私が……」

今まで考えまいとしていた分、一気に頭の中に浮かんできて、涙
が出て止まらなくて、肩で息をしてしまう。

心が苦しい。

馬鹿な自分が好きになれない。

こんな自分大嫌いだ。嫌い、嫌い、嫌い

胸が痛い、心が痛い、悲鳴を上げているのに、誰も、助けてくれ
ない。

誰か、誰か、誰か……私は誰の名前を呼べば良いんだろう。

とても、辛い……情けない……格好悪い。

どうすれば、裏切られなくても済むんだろう、信頼に応えてもら
いたいなんて、過ぎた望み、なのかな。

「碧音さん……」

早く、この涙を止めないと克己くんが困っている。

早く……早く……

焦ると余計に気持ちが高ぶり、息が上がってしまう。喉の奥が、
ひーっひーっ悲鳴を上げる。

「落ち着け。ほら、ゆっくり息吸え」

そんな私の気持ちを察してか、ぽんぽんと背中を叩きながら呼
吸を合わせてくれる。

―― ……すうう……はああ……。

2. 3度息を大きく吸うと、少しだけ落ち着いた。それを見計らって背中を擦ってくれる。
暖かくて大きな手。

「……………ご……………めん……………」

「あんま馬鹿なことってんじゃねーぞ。温厚な俺も怒るぞ」

「え？ 誰が……………温厚……………？」

「俺だ俺」

そういつて、克己くんは憂鬱な私とは違ってどこか、すっきりしたように笑った。そして、ぎゅっと私を抱きしめて、私の頭をぽすぽす叩いて言葉を続けた。

「誰が、つまないなんていったんだよ」

「……………」

「まあ、馬鹿は馬鹿だけだな」

ぐすっ……………ひどい……………。

「良い女の基準なんてそれぞれだろ？ 世界中に一人くらい、あんなを良い女だって思う奇特な奴、いても可笑しくない」

——……………それは一体どのくらいの確立で出会うことが出来るのだろう？

星に手を伸ばすより遠い気がする。

「大体、というか、本当、あんたが悪いっちゃあ、悪いと思う」
「え」

「優しいのは良いけど、限度ってもんがあるんだよ。あんまし、甘

やかすと普通の男は駄目になるな」

だって、私も優しくされたいし、出来れば怒りたくはない。
何だって許してあげたいし、信じてあげたい。

そう思うことは間違っていないと思うのに、私はいつもこうなってしまうのだから……間違っている、んだということも分からなくもない。

私は今きつと酷い顔をしていると思うけれど、続きを促すように克己くんの腕の中から顔を上げた。瞬きをすると目尻がひりひりと痛む。

「まあ、今までののは当たりが悪かったとでも思えよ」

ああ……そうだ……。

碧音さんが全てを信じたいと本気で思っていることだって分かる。分かるけれど、そんなこと現実的には無理なことなんだ。俺はそのことを、どうしても上手く伝えることは出来そうに無かった。

どうしてそんなことをいうんだ、とでもいいたそうに碧音さんは俺の顔をまじまじと見つめていた。

時折、瞬きと同時に涙が頬を伝っている。

大人になっても、そんな純粹な部分を今だ持ち続けている碧音さんを見ていると心臓の裏側辺りがぎゅっとなって苦しい。

こういう気持ちを言葉で表すとしたらそれは「愛しい」というそれだろうか。

「碧音さん」

「―― ……うん？」

碧音さんの頬に伝う涙を手で拭いつつ声をかけた。

「キス、して良いか？」

俺の問いに目を大きく見開いて、微かに唇が動いたが声は出ていなかった。

返事は待たなかった。

どうしても、そうしたいという衝動は抑えられなかったから。

また、前のように拒絶されても構わない……と思う反面、今なら大丈夫な気もした。弱いところに漬け込むのは良くないと思うが、触れたいと思う気持ちの方が勝った。

「―― ……ん……っ」

碧音さんから小さく声は漏れたが、つき離されることはなかった。むしろ、そんな俺に応えるように背に回った手に力が入った。

そのまま、彼女をベッドに静かに押し倒し繰り返し口付けた。

額……瞼……頬……

唇を伝って……項に……喉もと……。

アルコールの残っている肌は、直ぐに朱色を帯びて艶を出す。
服の上から、そっと身体を撫でると、ぴくりと強張ったものの強い抵抗はなく、窺うように顔を覗き込めば首に細い腕が絡められ引き寄せられた。

「……ん、う……」

僅かに開いた唇から舌を差し入れ、逃げられないことを良いことに深く強く味わった。

時折、漏れるどちらのものか分からない、熱気を帯びた吐息に妙に高揚した。

ぷつ、ぷつつと、碧音さんのシャツのボタンを外し、合わせ目から手のひらを侵入させて、そっと触れると、ただ、触れただけなのに微かに漏れた声は熱く濡れていて、ほんの少し引つかかっていた^{たが}膣を簡単に外していった。

はらりとめくれた中からは、女性らしく柔らかくしなやかにくびれが姿を見せた。

ベッドに沈む碧音さんは素直に綺麗だと思った。

シーツの上に波打つ長い髪も、俺を見つめる大きな瞳も、物言いだけに薄く開いた唇も、そして洋服の上からでは見ることの出来なかった白い肌に、想像以上に柔らかな流線をかたどった肢体。

世間一般的に“良い女”と称される女を抱いたことがないわけじゃない。ないわけじゃないけれど、そのときのどの感覚とも違って、

俺は生まれて初めて……心からそれを求めた……。

彼女の心も、身体もすべて……そう……何もかも

—— ……欲しいと思った。

「悪い、許して」

そう、許しを請うてでも触れたいと、そう、思った。

—— ……時は聖なる夜を迎えようとしていた。

—— …… 不思議な気分だった。

本来、こういうときは、決まってそいつの部屋か、ホテルかのどちらかだった。

何故と問われれば、その後に来る間がたまらなく嫌なんだ。

何かを話すわけでもなく、するわけでもなく。ただそこに居るというだけの時間が……ウザったくて仕方ない。

そんな俺の感情とは対照的に女はやけにそういう時間を好む。だから、時間を気にする必要のある場所を選でいたわけだけど……。

「—— …… ん……」

小さな声を出して寝返りを打った碧音さんの髪を撫でる。細くて柔らかい髪は指の間をすると抜けて行き心地良い。

元より他人を家に上げていることのほうが不思議だ。俺としては有り得ない。それなのに

—— …… こんな時間も、悪くない。

そんなことを思う自分が余りにらしくなくて、脳裏に過ぎったその言葉に自嘲的な笑みを零した。

しかし……そう感じさせる力がこいつにはあった。

こいつは今、どんな気持ちなのだろう。

誰かの気持ちを推し量る、なんてこと今まで考えたこともなかったから皆目検討もつかない。

大した事じゃない、そういったのは本人だ。しかし、その大した事じゃないことで、あんなに苦しんでいたのも間違いない。

一人で居たくなかった今日だから、拒絶されなかったのか。それとも、今日がクリスマスだからか。

こいつなら、後者もありえるな。
考えると何だかおかしかった。

でも、隣で気持ち良さそうに眠っている碧音さんを見ると、そんな細かいことはどうでも良いような気がしていた。

今さえ良ければ……。

それは俺の基本思考だ。大切なのは今だ。明日でもなければ、昨日でもない。

しかし正直なところ、今日は今日で終わって欲しくはなかった。明日にも、明後日にも……少しでも長く続いて欲しいような気がしていた。

そう思う、この気持ちは、どうすれば良いんだろうか。

俺はそんなことを考えていると、いつの間にか眠っていた。

——…——

「——…まぶしい」

小さな機械音を響かせる時計を止めた俺は朝日の差し込む窓に、遮光カーテンをかけた。

ふと心配になって振り返ったが、碧音さんはまだ、夢の中らしい。もう少し、寝かせておくか。とも考えたが、今日は平日だ。

「起こしたほうが妥当だな」

ポツリと呟いた俺は、すやすやと良い子に眠る碧音さんの顔を覗き込み、鼻をつまんで口付けた。

―― ……そして数秒。

「―― ……っふ、んーっ!!」

がばっ!!

突然の夢からの覚醒に、心臓がはたと高鳴っていた。

そんな私を見てか、隣で子供のように楽しそうに笑う克己くんが座っていた。久しぶりに穏やかで優しい夢を見ていたような気がするのに……その内容がちっとも思いつけなくて少し悔しい。

―― ……ああ、そうか。

昨日は……克己くんと一緒だったんだっけ……。

「頭、痛……っ」

ずきずきと、頭がうずくので、こめかみに指を当てて唸った。

「そりゃ、あんだだけ飲んで、あんだだけ動けば頭も痛いだろ」

―― ……動けばって……。

その一言に、突然昨夜のことが脳裏に蘇り顔が紅潮したのが分かった。

「もうっ！ つまんないこといわないでよ！ ただの二日酔いよ！
」

手元にあった枕をつかみ投げつけたが、軽く受け止められ、投げ返された。ぼふっと顔を直撃され息がつまる。

「避けるよ。そのくらい」

むせこんだ私に、笑いを堪えきれない克己くんはくつくつと笑いながら立ち上がり、ドアノブに手をかけた。

私はその様子をぼんやりと眺めて、克己くんってこんな風に楽しそうに笑う子だったかな？ と、ふと思う。

いつでも斜に構えてて警戒心が剥き出しで誰にも踏み込んで欲しくない一線を引いていて、でもどこか寂しそうで……。それが克己くん……

「そうだ。朝飯食う？」

振り返りつつ、そう訪ねられたので返事をしようと思ったが、私のお腹の方が反応が早かった。

「分かった分かった。だから、その腹黙らせとけよ。今日、仕事だろう？ 風呂でも入ってこいよ」

そういうと克己くんは部屋を出た。

「―― ……また、笑ってたな」

枕を抱え込んだまま私は、ベッドにまた倒れこんだ。

はあ。

それにしても、私っては何やってるんだろう。

私ってば、こんな奴だったかなあ。

そりゃ、克己くんのこととは嫌いじゃないけど。

弟みたいなもんだし。

「うゝ……」

自分でも良くわかんないよお。

ごろごろと、ベッドの上を転がった。

「遊んでないで、さっさと起きろ！」

「はあい」

なかなか、寢室からでてこないから、もう一度、様子を見に来た

克己くんに一喝入れられてしまった。私は、ぐりぐりとこめかみを押さえて、頭痛を堪えながら寢室を出て浴室へ向かった。

勝手知ったる他人の家……迷うこともない。

「朝から、よく食うよな」

俺は唯一、碧音さんに入れてもらった珈琲を傾けつつ、ぼやきに似た暴言を吐いていた。

「朝は食べないと駄目なんだよ。そのくらい克己くんだって知ってるでしょ」

「知ってるとか知ってないとかじゃなくて、それを実行するやつが居る時点で不思議だ。二日酔いのくせに」

「そっかなあ」

少々不服そうな表情は見せたが、碧音さんはそれを言葉にはせず代わりにトーストを口に運んだ。

「ええっと、薬飲んでいくか？ 頭痛いんだろ？」

「うん。貰っとく」

碧音さんの返事をまってソファの後ろにある、引き出しをがたがたとさせ、取り出した鎮痛剤を碧音さんの横に置くと、そのまま隣に腰掛けた。

「碧音さん」

「……なあに？」

俺の声がちよっとこわばったのに気がついたのか、手に持っていたトーストを皿に戻し、俺のほうに向き直った。その目はいつもとなんらかわらない、綺麗で真っ直ぐな瞳だった。

俺は、一度大きく深呼吸して、呼吸を整えた。

「一緒に暮らさないか？」

「―― ……へ……？」

突然そんな話を切り出した俺に、碧音さんは目を白黒させて、珍しいものでも見るようにマジマジと見つめた。

「ここに、居て欲しいと思うんだけど。駄目か？」

そのまま、言葉を付け加えた俺を見て、碧音さんは少し目を細めた。

この表情は前にも見たことがある。

いつもは童顔なくせしてこういう表情をさせると、この俺にも大人を感じさせる。どきりと胸が弾み、合否を問う時ですら特に緊張したことのない俺を緊張させる。

つと碧音さんは脇においてあった、珈琲を一口口に含んでゆっくり流し込んだあと、口を開いた。

「克己くん」

「ん……？」

「あのね。一緒に暮らすっていうのは、大変なことなんだよ？ 今日急に話を始めて、はい。そうしましょう。とはいかないの。分かるよね？」

「―― ……ああ」

俺の冗談のような発案を、碧音さんは真っ直ぐ受け止めてくれていた。

普通なら、冗談で笑い飛ばされそうな発言で、自分でも思うくらい突飛なのに。俺はきつと碧音さんのこういうところも気に入っている。

「で、駄目だと？」

「だから、駄目だとか、駄目じゃないとか、そんなこと急に決められないし、住むなら住むで、いろいろ決めなきゃいけないこともあるし、ほら、家賃のことや、光熱費とかの、お金のこととか」

「じゃあ、嫌か、嫌じゃないか。今はそれでも聞きたいんだけど？」

何だか、子供を宥めるような口調にまどろっこしさを覚えて、俺は柄にもなく結論を急いだ。

克己くんの目は本気なんだと思う。

いろいろとあったから、嘘を見抜く力には自信はなかったけど、今の克己くんの言葉には嘘はないと確信に近いものがあった。

そんな、克己くんを前にしていると、心の中がきゅう……となった、何だか苦しかった。

だから、私は

「駄目でも、嫌でも、無いよ」

—— …… 克己くんがそう望むなら。 克己くんが、私を必要としてくれるなら……。

そう答えることしか出来なかった。本当に、私、駄目な女の見本かもしれない。

でも、その答えを聞いた克己くんは、ぎゅっと私を抱きしめた。恋愛感情なんて抜きにしても、自分の中で男前だと思っている人にそうされると、身体が緊張し頬が熱を持つ。

「か…… 克己くん？」

「良かった！ はぁ……こんなこというの初めてで、無茶苦茶緊張してたんだよ。何か、いろいろ難しいこというから、どうしようかと思った」

折角ブローした私の頭をくしゃくしゃにしながら、一気にそういつた克己くんは普段の雰囲気とは違って、まるで子供みたいで可愛かった。

一旦、家へ帰ろうかと思ってたけど、克己くとあんな話になってしまったので、そんな時間の余裕はなくなってしまっていた。

職場へ急ぐ中、私は、何となくさっきまでのことを考えていた。

今まで、いろんな人と付き合ってきたけど、一緒に暮らしたい。

そういわれたのは正直なところ、初めてだった。

家事もろくろくこなせないような女が家にいても、邪魔なだけだろうということはゆうに想像出来た。その点で行くと、克己くんは、家事一般もきっちりこなすし、私にやらせようとか、そういうあれは無いのだろう。

でもだからってどうして私？

それならそれで、もっと良い人が居るはずだし、わざわざこんなお荷物背負う必要はないと思う。

「帰りに、店の方にあやとでも来いよ。美味しいワインと飯でも用意しといてやるからさ」

笑顔でそういった克己くんは、キスで私を見送った。

出会ったころのふてぶてしい態度の彼はそこには存在していなかった。

一体、どういう風の吹き回しなんだろう。私は、からかわれているだけなんだろうか、それとも、大人のくせに情けない私を見ておけなくて？

今の私たちの関係は何だろう？

恋人ではないし、友達……というには深く踏み込みすぎているような気がする。

いや、世間的にはそういう関係だけの友達というのもありだということも聞いたことがある。克己くんだって今時の子なんだから、そういうこと、なのだろうか？

でも、それならやっぱり私である必要はない……よね？

比べる対象がないから分からないけど、ずば抜けて床上手というわけではないと思う。

確実に克己くんはモテるタイプだと思うし……渦巻くのはそんな疑問ばかりだった。

はあ……

と吐いた溜息がほわりと白く浮かんで冷たい風に攫われていった。

— … —

「ちょっと！ あや！！ まだ、仕事中！」

お昼の休憩にもならないうちに、突然やってきたあやは、私を引っ張って部屋を出た。

ずるずると引きずられるように休憩室に連れ込まれ、そこに設置されたソファに座らされた。

「何飲む？」

「ああ。牛乳屋さんのコーヒー」

同室に設置してある自販機に小銭を入れつつきいてきたので、条件反射で答えてしまった。

カコンッ……。

紙コップが軽い音を立てて落ちてきて、珈琲を注ぐとあたりに甘い香りが漂った。

こんな中途半端な時間にこんなところでサボっているのは私達ぐらいのものだ。出来上がったコップを私に手渡すと、あやは隣に腰掛け、煙草に火をつけた。

「あれ、あや煙草やめたんじゃないの？」

「ん？ そんなこといったっけ？ まあ、良いじゃない。そんなこと」

ま、そんなすぐにやめられるもんじゃないのかもね。私は吸わないからその辺のことはよくわからない。

—— ……ふっふっ。

と、一息白い煙と一緒に息を吐き捨てたあやは、まじまじと私を見つめた。その視線に耐えかねて、私はおずおずと問い掛ける。

「な、何かなあ？ あやちゃん」

「昨日と服が変わってないわ」

ぽつり。

そう呟いたあやにどきつとした。

その様子に感付かれたのか、にんまりと笑ったあやは私の肩をぽんぽん叩いた。

「慰めてもらったわけだ」

「あっ、あやあ」

—— ……そんな、実も蓋もないような言い方しないでよお。

「あらら。ごめんごめん。真っ赤になっちゃったわねえ。可愛いんだから、碧音ちゃんてば」

「も」

「あたしは、お勧めだけどね」

「え……？」

「克己のことよ」

私の手の中から珈琲を抜き取ると、一口飲んでぽつりぽつりと話

し出した。

「悪かったと思ってるわ。静也のことは」

「―― ……うん」

あやのこんな真剣な声、聞いたことがなかった。人は誰でも、誰にも見せない顔を持っていると思う、その一面を今少し垣間見ているような気になった。

私が、傷付くと同じ様にあやもいえないということに、傷付いていた。心を本当に痛めてくれていた。

「ありがとう」

「え？」

「私のこと、ずっと心配してくれてたんでしょ。私全然気がつかなくて、ちっともそんなあやの気持ちわかってあげられなくて。どうしてなのか本当に分からなくて……」

上手く説明出来なかったけど、でもどうしてもお礼がいたかった。

あやにも……克己くんにも……。

「で、どうだった？ 上手かった？」

「え？」

「だから。昨夜のことよ」

「あやっ!!」

人の台詞をあやが聞いていたのかどうか定かじゃないけど、上手いことはぐらかされたような気がした。でも、それでこそ、いつも

のあやなのかもしれない。私は確信に似た何かを得て、人の顔を覗き込んでにやにやするあやの頭を小突いた。

「あ、そうだ。克己くんが夜、店の方においでっていったんだけど。いける？」

「ん？ 今夜……よね？」

こんな日にあやの予定がオフなわけもなく、当てにしないで返事を待った。あやは暫らく考えていたが、ずっと携帯を取り出して電話を始めた。

「で、どうなったんだ？」

昨日の夢から覚めないような状態の俺を家から引っ張り出したのは、いつものこいつらだった。

わざわざ、聞く必要もないようなことで、俺は呼び出された。

真の緩みきった顔を見れば、昨日どうだったかなんて、容易に想像付くだろうに、透は直接確認したくてうずうずしているようだ。

「あ、ああ。丸く収まったってとこかな」

余程嬉しかったんだろう、へらへらとだらしない顔で答えた真の様子を見ていると何だか馬鹿馬鹿しいというか微笑ましかった。

「だろ？ 瑠香ちゃんって、ぼおってしてるからさ、お前が気にす

るようなところにまで、目はいかないんだよ」

「ぼおっとは余計だ」

「でも、瑠香ちゃん可愛いもんなあ。良いなあ。真、二回目もOK
してもらってさ」

「――……まあな」

「おい！ 聞いたか克己！！ まあなだつてよ。かあ！ やつてら
んねえ！」

――……バサバサッ！！

あまりにも、透の部屋の状態が厳しかったので、ごそごと片付
けてやっていたのに、のっかってきたもんだから集めた雑誌をあた
りにばら撒いてしまった。

「あ、悪い。大丈夫か？」

「分かった。分かったから。俺から降りろ」

はあ。

ここを、何とかするのは無理なようだ。どうせ、ちょっと片付い
たところで、何分それが保たれるのか保障があったもんじゃない。

溜息交じりでそういった俺の言葉は全く無視なのか、透は俺の首
に腕を絡ませていた。

そして、耳元でぼつり。

「それで、克己くんは碧音ちゃんとは、どうなったのかなあ？」

「――……！」

思わず、透の絡みつく腕を払いのけた。

「あらあら〜？ 克己くん顔が赤いわよお」

にやにやと、透が人の顔を覗き込んでくる。俺としたことが、こんなことに、動揺してしまった。情けない。

「べ、別になんにもない！」

「え？ 何、古河ってなんかあったのか？」

「だから何もないって」

興味津々に話に入ってくる真に、すばやく返答する。

「まあ、それはおいおい聞くとして」

—— ……何だよ。おいおいって。

掻き雑ぜるだけ掻き雑ぜて、さっさと話題を変えてしまう透の自由人っぷりは称賛に値すると思う。

「今日、克己バイト入ってるっていったよな」

「あ？ ああ」

「なあなあ。そこで、X'masパーティとかできないか？」

—— ……また、くだらないことを考えて。本当に馬鹿騒ぎするのが好きな奴だなあ。

透の提案に少々呆れていたところに、携帯が鳴った。引っ付いて離れない透を足で引き剥がし、電話に出る。

「あ、そうですか。じゃあ、今からそっち行きます」

2. 3言返答して俺は電話を切った。興味深げに二人の視線が集まるのを邪魔臭く思いながら、ぱちんっと携帯を閉じて、ポケットに押し込む。

こいつらに付き合っている暇は本当になくなってしまった。

俺はそこらに散らかっている、雑誌にちゃちゃっと電話番号を控えて、透に渡した。

「これ『X―クロス』のマスターの電話番号だから、やりたかったら自分で何とかしろ。俺はちよっと、行くところが出来たから」
「ええ〜。帰っちゃうの？　って、お前の紹介っていつでも良いのか？」

―― ……こいつ、本気なのか……。

まあ、俺の紹介だろうがなんだろうが、そんな話きつとOKしないだろうから、別にかまわないだろうと思ひ、俺は「好きにしろ」と頷いて部屋を出た。

「良かったの？ 約束断って」

「ん？ 断ったわけじゃないわよ。数時間遅らせただけ。だって、あんたたち見てるほうが楽しそうなんだもの。逃す手はないわ」

—— …… 楽しそうって。

そういつて楽しそうに笑うあやを横目に、私は少々不安を感じていた。私たちは、約束どおり『X—クロス—』に向かっていた。

もう、暗くなった空を見上げていると、ひんやりとした空気が肺の中に入り込んできて、体の芯から冷やしていく気がした。

「これが終わると、もう年末だねえ。今年は雪降らないのかなあ」

「あれ、あんた知らないの？ 昨日の夜、ちよっと降ってたのよ。積もったりまではしなかったけど」

「ええ?! そうなの」

「そうよ、でも、昨日のあんたには、そんなこと関係ないか」

そういつて、あやはににこと微笑んだ。

でも正直にここにやにやに見える。確かに外を見る余裕も何もなかったのは本当だし、そう思うと私も後ろ暗い。何ともいい返す言葉も見つからなかった。

通い慣れた雑居ビルの前につき、エレベータに乗り込んで『X—クロス—』のある階に下りたのだが、お店の外に貸切の札がかけられていた。

「あれ、貸切になってるねえ」

「折角きたんだから、克己に電話してみなさいよ」

そういわれて、携帯を探りだしたがそのとき重大なことに気がついた。

「あ、私、克己くんの携帯の番号知らない」

「ええ？ あんたってば、どこまで、おまぬけなの。良いわよ、あたしが知ってるから」

呆れ顔でそういったあやは、自分の携帯を取り出し、連絡を取ってくれた。って、あやの携帯って一体何件登録されてるんだろう。そのグループ分けも一体どうなっているんだろう。

そんなことを考えていると、ちゃっちゃと、話を終わると同時に、店のドアを克己くんが開いて出てきた。

「寒いだろ。早く入れよ」

「そうよ。凍えちゃうじゃない、紛らわしいことしないでよ」

悪態をつきながら、あやがそのドアを潜った。

その後に続いて私が店内に入るのを見計らって、静かに克己くんはドアを閉めた。その態度に別段変わった様子もなく、ここへ入るまで正直、少し緊張していた自分にちよっと恥ずかしくなった。

きっと、大したことではなくて、きっと今朝の気まぐれだったのだろう。話が纏まらなければ、あっさりと流れていく程度のこと。真剣に取り合うまでもなかった、のかな。そう思うと胸に苦い思いが湧いてくる。

「貸切」の理由は、店内の半分くらいで、学生？ かなくらいの

子達が、楽しそうにパーティと洒落こんでいることにあったようだ。

でも、何か、どっかで見たことあるようなメンバーだなあ？

「悪いな。うちの学校の奴らがどうしても、っていうから。マスターは許さないと思ったんだけど、何だか今日、妙にマスターの機嫌が良くて、難なくOKが出たんだよ」

カウンター席に着くと、おしぼりを手渡しながら克己くんが状況を説明してくれた。ふうん、だから、見覚えがあったのかな。何となく納得して、私は、まだ暖かいおしぼりにホッと一息吐いた。

「それなら、私別のところで」

「なんで？」

「なんでって、貸切でしょう。部外者がいたら嫌でしょう？」

別に他意もなくそういったのに、克己くんは尚不思議そうに首を傾げる。

「どうせあたしたちなんて見えてないって、大丈夫じゃない？」

あやにこつんと肘で叩かれて「そう？」と腰を落ち着ける。まあ、確かにこの状況で一人二人増えてても大人しくしてれば気にもならないか。

「で、昨日の続きみたいになるけど、適当に持ってきたんで良い？」

「続きねえ？」

「五月蠅いな。あやがそうしろっていったんだろ。文句あるのか？」

俺の言葉に少々絡んだあやに、言葉を返すと「いいえ」と一言返事が返ってにんまり、ほくそえまれてしまった。

ちらりと、碧音さんのほうを見たが、全く耳に入っていないようで、幸せそうにおしぼりで両手を包み込んでいた。

ほんと、微妙に抜けてるんだよね……。

小さく溜息を吐いた俺は、そのまま、どちらの返事も聞かないまま、奥へ引っ込んだ。

「克己。お友達が呼んでるよ」

裏で、碧音さんたちに用意しておいた、料理を温めなおしていたら、優が俺を呼びに入ってきた。あんな、奴らほっとけば良いんだけど、ここで騒がれて、マスターに迷惑をかけることになってしまっは俺も居づらくなる。

「これ、頼めるか？」

「いいよ。あやさんたちに？」

「そう。順番は、あっちから順に出して行ってやって」

「はいはい。でも、今日のマスター機嫌良いよね」

「ああ。そうだな。貸切なんて思わなかったしな。何か良いことでもあったんじゃないか？」

「克己みたいに？」

—— ……何？

突然の優の一言に一瞬身体がこわばった。俺、何か変なこといつたか？　したか？

目を白黒させてしまった俺を面白いものを見るように、眺めながら優は言葉が続けた。

「克己も可愛いところあるんだね」

「なっ！」

「ほらほら。早く行かないと、お友達が待ってるよ」

ころころと笑いながら、優は俺をフロアーへ促した。不本意にも顔が紅潮してしまう。まったく何か納得行かないな。しぶしぶ、俺はいづらの所へ向かった。

今日のメンバーは多かった。十人以上はいるだろうな。知ってる顔といえば、いつもの奴らくらいのもものだけど。人の顔と名前は、余程頻繁に会うか印象深いかじゃないと覚えられない。みんな同じに見えるし、必要性も感じない。

「ほら、克己もここ座れよ」

透に腕を引っ張られ隣に腰を下ろしてしまった。

「て、溜香も来てたのか。ああ、真も一緒なんだな」

見慣れた顔の中に二人の姿を見つけて何だかホッとした。そんな俺に二人はお互いに顔を見合わせた後、俺に向き直って微笑んだ。丸く収まって、本当に良かった。二人を見ていると微笑ましくなるのはどうしてだろうか。

「あのう。古河さん、私、春奈です。初めまして」

「ああ、そう」

にこやかに俺に近づいてきた、春奈という女にそっけなく返事をする、差し出されたグラスも受け取ることなく席を立った。

「俺は、まだ仕事中なの。分かる？ 透も邪魔すんなよ」

「へーへー。分かりました。じゃあ、店員さん。シャンパン追加お願いします」

さらりといった俺の嫌味を軽く笑い飛ばした透に、少し感謝してその場を離れた。カウンターに戻ると碧音さんの姿がなかった。

「あれ……?」

思わず漏れた言葉を、あやが見逃すはずもなくすばやい返答があった。

「トイレよトイレ。心配しなくても、帰ったりしてないわよ」

「誰も、そんなこと、聞いてないだろう」

「で、あたしの計画通りになってしまった、感想でも訊こうかしら?」

くすくすと小さく笑い声を上げながら、あやは俺の答えを待っていた。今日もあやは頭の先から足の先まで完璧でいつもこいつはソツのない女だ。

さて、どう答えたものかな。俺は暫らく沈黙してしまった。

「ま、良いわ。あんたの口から聞かなくても、あんたの顔見れば分かるような気がするし。大事にしてやってよお。いっとくけど、あたしの唯一の女友達なんだから、泣かせたり傷つけたりしたら」

続きをいい止まって、にこにこ。

そのにこにこが薄ら寒くて恐い。別に酷いことをするつもりはない。大体、自分から折れるなんて俺にしたら天変地異の前触れというほど珍しいことだ。

「—— …… ああ、分かってる。ていうか、どういう顔なんだよ」

「さあ、ね。今日は、克己のおごりでしょ? なんととってもあやちゃんは恋のキューピットなんだからさ。ほら、もう一杯ついでち

ようだい」

「……フツー社会人が学生におごらせるかあ？　ったく」

ワイングラスをあけたあやが、ゆらゆらと俺の前でグラスを揺らしてみせた。仕方なくグラスをうけとって、そこへワインを注ぎ入れた。

まあ、今日は最初からそのつもりだったし、別に良いんだけど。しかし、こいつも酔ってんのか？　ころころ、よく笑うな。あやって、もっと大人な感じだったような気がしたんだけど。

もしかして、喜んでいるのだろうか？　含んだ笑みでもなく作られた笑みでもなく、思わず漏れてしまうようなそんな喜び？

「あ、私にもお願い。」

そして、席に戻った碧音さんは、ほんのり赤い顔を緩ませていた。

「やっぱし、あんな無愛想な子でも顔さえ良ければもてるのねえ」

あやが、何かを確信したように呟いた。

確かに、そうなんだろう。後ろに集まっていた、女の子がかわるがわる、ちょこちょこ追加を頼みにカウンターまで足を運んでいる。

「克己も、もうちょっと、愛想笑いでもしてあげれば、あの子達も喜ぶでしょうに」

「そうだねえ。体中から『いっぺんにいえよ』って台詞が滲み出るもんねえ」

「まあ、そのほうが、あんたも安心できて良いでしょ」

「なっ！ 別に私は、克己くんと付き合ってるとかそんなんじゃないんだから！」

にんまりと私に問いかけてきたあやに慌てて反論した。

そう、別に付き合うとか、付き合わないとか、そんな話になったわけじゃないし、それに私は……。――。

「何？ 静也と別れたばかりなのを、気にしてるの？」

その一言に小さく頷いた。

そんな私に、あやは「やれやれ」と小さく溜息を吐き言葉を続けた。

「別にあんなやつのこと、気にすることないわよ。それに、失恋の特効薬はやっぱり、新しい恋ではないかな？ 碧音くん」

「もうっ。茶化さないでよ」

―― ……ぱしっ。

にこにこそういつて、私に人差し指を突きつけたあやの腕を軽くはたいた。何か、今日のあやって、ちょっと子供っぽい。酔ってるのかな。そんなに飲んでないと思うんだけど、って、私と比較したら駄目だね。

「ま、あんたのことだから、勝手に必要ない障害を沢山作ってんだろうけど。こういう、波に乗るってのも悪くないと思うわよ」

「―― ……」

—— …… こういう波……ね。

あやは、私の返答を聞かずに席を立った。

「あたしは、次の予定があるから、あんたそれ飲んで帰っというてね。克己のおごりらしいから、残したら悪いわよ」

笑顔でそういいながら、私の肩を軽く叩いて、その手をカウンタ―にいた克己くんにも振りつつ店を出て行ってしまった。

飲んで帰れって、これさっきあげたばかりで、八割がた残ってるじゃない。

はあ、何で学生ばかりの店内に私は一人で、ワインを飲んでないといけないのよ。私一人部外者なんて益々居心地が悪いっていうのに。

そう思うと、少し機嫌が悪くなった。

ったく、さっきからちよこちよこと鬱陶しいな。ていうか、マスターと優の姿がさっきから、見えないけど何やってんだ？

二人の姿を探して俺は、裏へ顔を覗かせた。

「居ないと、思ったら。こんなとこで何やってんだよ」

調理台の上でシャンパンを、今日あいつらのために仕方なく作ったオードブルの残りをつまみに、いっぱいひっかけていた。

「今日は、皆さん克己のお客様でしょう。ちゃんと、お相手してあげてくださいね。私たちはここで今日はお休みです」

につこりと笑みを湛えながら、マスターがいう台詞に同乗するよ
うに「よろしくねえ」と優が小さく手を振った。

マスターのいうことは間違っていないような気がしなくてもない
が、優は違うだろう。全く、手伝えよ。

—— …… あ。そうだ。

今日は、ブッシュ・ド・ノエルを焼いてきたんだった。

昨日は、生ケーキだったから、今日はロールケーキにしようと思
って、ええっと。

冷蔵庫から、それを取り出した俺は、カウンターで一人になっ
ている碧音さんのところへ運んだ。

「おい。何やってんだ」

人が目を離れた隙に、さっきまであやが座っていた席に透が座っていた。

「お？ おかえり。何それ美味そう」

「お前のじゃねーよ。さっさと、戻れ。冗談が過ぎると、本気で怒るぞ」

「いあん。克己くんてば、怖いんだから。怒られると怖いから、かえろっと。じゃあね。碧音ちゃん」

ひらひらっと、手を振りながら、透は自分の席へ戻って行った。そんな、あいつを碧音さんは笑顔で見送っていた。

—— …… 全く、油断もすきもない。

「あいつ、何か変なことってなかった？」

「うん？ 別に挨拶ぐらいだよ。でも、どうして私の名前知ってるんだろう。克己くん仲良いの？ あの子と？」

「別に、仲が良いってわけでも、ないけど。いつも絡んでくるんだよ。全く」

ぶつぶついいながら、持ってきたケーキをカットしていた俺を、碧音さんは笑顔で見ていた。

ま、気分を害しているわけでも、なさそうだし。良いか。

「そうだ。今日俺の顔なんかおかしいか？」

「へ？ なんて。普段と変わんないと思うけど」

—— …… だよなあ。

優もあやも、何だっというんだ。
意味深な言葉ばかりかけてくるから、顔になにか書いてるのかと思っただ。そんなはずなのに……。

「美味しい？」

「うん。美味しい。克己くんって、何でも作れるんだねえ」

「一緒に暮らしたくなかった？」

「べ、別に食べ物で釣られたりしません！」

本当に美味そうに食べながらそういった碧音さんを、からかうつもりでいったんだけど。俺の方が冗談が過ぎたようだ。

碧音さんから、笑顔を消してしまった。

「あぁっと、悪い。そんなつもりじゃなかったんだ。その……何か飲むものだろうか？」

「ううん。良いよ。これ食べたら帰るから、克己くんもみんなに参加しないといけないでしょう？」

全く持って、一言多いんだよな俺も。

「参加は、別にする気はないけど、最後まで付き合わないといけないから。今日は遅い」

「そう？ お疲れ様」

そういつてくれた碧音さんの言葉には、心がこもってなかった。今まで、碧音さんからこんな感じを覚えたことはなかったのに。きりきりと腹の奥の方が痛む。

もしかしくなくても距離を置こうか思われてるのか？ 俺。

ちゃんとした、説明と理解をと思ったのに、透たちに呼ばれてしまふ。そんなもの無視して当然なのに、碧音さんがそんなことをさせてくれるはずもなく、俺は、渋々奴らの相手に回った。

―― ……こつつ。

私は、静かに空っぽになったお皿の上にフォークを置いて、席を立った。克己くんはお友達の相手が忙しそうで、邪魔してはいけないかとも思い私は一人店を出た。

「ちょっと待てよ。どうして、何もいわずに帰るんだよ」

エレベーターがあがってくるのを待っていると、克己くんが駆けつけてきた。少し、顔が赤くなっている。飲まされたのかな。

「忙しそうだったから、悪いと思ったの」

「ああ？　悪くねーよ。黙って出て行くほうが、嫌だ」

よく考えたら、私、克己くんが酔っ払ったとことか、見たことないな。まあ、お酒も強そうだし、酔っ払ったりはしないと思っていたのだけどその実弱いのかもしれない。

「おい。上がってきたぞ」

「ああ、ごめん」

ぼんやり、そんなことを考えてたからエレベータのドアが開いたのにも気がつかなかった。

先に乗り込んだ克己くんが、ドアを抑えながら、待っていたので慌てて乗り込んだ。

エレベータの中の密室は妙にひんやりしていて、息が白かった。

「て、何で克己くんまで、乗ってるの？」

「ん？ 別に。見送りサービス」

「ははっ。何よそれ」

あんまり、つまらないことをいうので、思わず噴出してしまった。

「―― ……良かった」

「え？」

「怒ったのかと思った」

「怒る？ どうして、私が一体何に？ どこに腹を立てるの？ どうして？ だって、どこにも……え………？」

―― ……ぽふっ。

まくし立てるように一息にいった私をどう思ったのか分からないけど、克己くんは私を抱き寄せて少し笑っていた。

「克己くん？」

「いや、なんでもない。ちょっと、可愛いな、と………思っただけ………」

「うん？」

語尾が小さくて上手く聞き取れなかった。

聞き返したのに克己くんはただ笑ってるだけだった。返事のないまま、エレベータのドアは開いて、見送って貰った。

白い息を吐きながら、空を見上げると星が見えなかった。通りが明るすぎるせいもあるのかもしれないけど、なんだかちよつと寂しい感じがして、私は小走りになった。

早く。早く家に帰ろう。そう思いつつ、急いだのに

「これ……何？　どうしたの？」

私は、部屋へ戻って唾然とすることになる。

空き巣にでも、あつたんだろうか？
借金のかたに根こそぎ？

って、借金なんてないない。

じゃあ、私は、酔っ払って他の部屋にでも入ったんだろうか？
部屋のドアから、頭を出し、ドアの横にかけてあるプレートで番号を確認する。

—— ……間違いない。

じゃあ……これは？ 一体……？

部屋の中は、空っぽで、寒々しい空気がそこには流れていた。

「ああ、白羽さん。今帰ったの？ お仕事忙しいのね」

「え？ あ、はい」

動揺しまくっている私に、ご陽気に声をかけてきたのは、この大家さんだった。

年齢はよくわからないけどぼっちゃりとした、その体系に何となく、安心感のあるおっとりとした感じの人だ。旦那さんと二人でこの一階に住んでいる。

「それにしても、急なお引越しだったわねえ」

「え？ 引越し？」

「わざわざ、合鍵返しに来てくれたんでしょ？ 今は便利ね。本人

が居なくても、引越し屋さんがやってくれるのね。ああ、ちゃんと女の子ばかり、来てたから大丈夫よ」

大家さんが、一体何を私にそんなにも楽しそうに話しているのかよく理解出来なかった。

引越し？　なんだそれは。私にそんな予定は全くなかった。何より私は、ここを気に入っていた。ちょっと古いけどそこにだって、愛着を感じていたのに、今日明日で引っ越してしまうなんてこと微塵も考えてない。

「それにしても、白羽さんに弟がいるのは聞いてたけど、あんなに二枚目、ああ、最近はいケメンっていうのかしら？　だとは思わなかったわ。あたしが、後10歳若かったらほっとかないわね」

——…弟？　二枚目？　ええ？

「はい。これ新しいとこの鍵預かったわ。で……」

白い封筒を私に手渡すとかわりに私の手に握られていた、部屋の鍵を抜き取られた。

事態を把握できないまま、私はその封筒を静かに開けた。

「——…あ」

「うん？　大丈夫？　ちゃんと、場所分かるの？」

封筒を開けたまま、硬直してしまった私に、大家さんが心配そうに声をかけてきた。

「え、ええ。分かります」

「そう、じゃあ、大丈夫ね。では、お世話になりました」

深々と頭を下げる大家さんにつられて、私も頭を下げてしまった。そのあと大家さんは「じゃあ、もう遅いから。気をつけてね」と軽いいながら、自分の部屋へと帰って行ってしまった。

部屋の中は空っぽだし、鍵も返してしまったし、私にはこの鍵の部屋へ向かうしか、選択肢は残されていなかった。

外の冷たい外気で、血の昇った頭を冷やしながら、小走りで私はそこへ向かった。星の出ていない空からは、ちらほらと白い結晶が落ち始めていた。

しかし、そのときの私には、そんなことを気に留めるほどの余裕はなく、もちろん、身体に残ったアルコールは冷め切っていた。

はあはあと息を切らして、辿り着いた先は、見慣れた部屋だ。

―― …… だから「今日は遅くなる」なんてこといったのね。

正直、頭にきていた。

本人の了承もなく勝手にこんなことをして、本来なら、何かの罪にでも問われるんじゃないの？

ぽちっと、部屋に明かりをつけると、ダイニングテーブルの上に、置手紙と、プレゼントらしき包みを発見できた。

―― …… くうっ！ こんなに勝手なことをしておいて、こんな形で謝るつもりなの？

イライラとする気持ちを、落ち着かせその紙を開封した。

—— ……け、携帯番号……だけ？

あまりに、簡潔すぎて乾いた笑が漏れた。
全く、何考えてるんだろう。

溜息を吐きながら、そばの椅子へ腰を降ろして置手紙の傍の箱を手にした。別に宛名もないけれど、この状況からして、私宛だろう。というか別に違ってもこのくらいしたって良いはずだ。私は怒っている。

自分で自分にそう免罪符を渡して、真っ白な箱にかけられた真っ赤なりボンを解くと、リボンと同色の宝石ケース。中からはプラチナのクロスペンダントが姿をあらわした。隅には小さなカードがあって、メリークリスマスと私宛だと書かれてある。

そっと、中身を取り出して、しゃらりと翳す。シンプルだけど、素材が良いのだろう。質感があり、しっくりと肌に馴染む感じた。そして、室内の僅かな光彩を反射させてキラキラと煌くプラチナに、思わずうっとり瞳を細めてしまう。

「可愛い」

—— はっ！

しまった。

思わず怒りを忘れるところだった。私ってば、意外に現金なんだから。慌てて、ネックレスを元のように寝かし、開けたケースの蓋を閉じた。

とりあえず、何もすることもなく、克己くんも帰ってくる様子もない。

仕方ない、お風呂でも借りよう。

外は寒かったし、身体も冷え切ってしまったている。ゆっくり、湯船にでもつかりながら、これからどうするか考えるのも悪くないかもしれない。

勝手知ったる他人の家。とはよくいったもんだ。すたすたと浴室へ向かう中、ふとそんな言葉が思い浮かんだ。

もう、そろそろ家に着いた頃かな？

ふと、時計を見るとそんな時間になっていた。ちよつと、様子を確認するため家へ電話をかけてみる。

R R R …… R R R …… R R R …… R R ……

十回以上コールしたのだけど、碧音さんは受話器を上げることはなかった。

まあ、人んちの電話が鳴っても普通は出ないか。

じゃあ、携帯に。

……といつても番号が分からない。というか書いて残しておいたんだから、あっちから電話してきても良いだろ。

むすつと鳴った形跡のない携帯を睨みつける。

ことを、仕出かしたあとで別段、後悔等々しているわけではないが、本当に碧音さんはうちに来ているのか一抹の不安があった。

—— ……はあ。

まだ、帰りそうな気配を見せない、透達を横目に俺は溜息を吐いた。

「浮かない顔だな」

そのまま、カウンター席の一つに腰を下ろしていた俺の隣に、グラス片手の真が据わった。

「別に、何でもない」

「まあ、透もこういうの好きだからな。仕方ないだろ」

「それに、俺が付き合わされるいわれはないと思うんだけどな」

「そういうなよ。そんなに、嫌な気にはならないだろう。あいつは、お前のこと気に入ってるからな」

くすくすと、笑いながらそういった真は嬉しそうだった。一体どの辺りに喜んでいるのか、よくわからないが……。

本当、どうして、透が俺を気に入っているのか知らないが、嫌われているわけじゃないのは確かだろうし、まあ、良いか。

「克己も飲んで良いですよ」

一体いつから、そこに居たのか、俺の前に、ことりとグラスを置いて、マスターはスノーホワイトを振り、グラスに注いでくれた。

「外、雪が降ってましたよ」

「え？ ホントに？ どうりで、今日は特別冷え込むと思った」

ちらりとグラス張りの外を見たが、街の明かりがつよくて、はっきりとは確認できなかった。

今夜は長い夜になりそうだな。

—— ……こくん。

「マスター。甘いこれ」

「そりゃそうですよ。これは、卵白のリキュールで……」

はあ、マスターの蒔蓄を聞きながら外を眺め、まだまだ続きそうな宴の終わりを心待ちにした。

「はあ。気持ち良かった」

ここのお風呂は本当に気持ち良いよね。私んちのお風呂よりずっと広くて、足も伸ばせるし。って、のんきに構えてる場合じゃなくて、私は怒ってるんだった。ついつい、怒りを忘れるところだった。

でも、ずっと怒ってるのも、体力がいるよね。

そして、私は勝手にお宅訪問を始める。

そのくらい別に良いだろう。

こっちが、寝室でしょ。

こっちは……かちゃ……書斎……か。

隣の部屋を、開けると天上までの本棚にびっしりと本が並んでいた。その前の、細長くて大きな白いデスクの上にパソコンが置いてあった。

—— ……そういえば、私のパソコンは？

そうだ。私の部屋は空っぽになってたのに、その荷物は一体どこにいったんだろう。

静かに部屋のドアを閉めて、きょろきょろと辺りを見渡した。残った部屋は、廊下を挟んだ反対にある部屋と、さっきちらっとみたウォークインクローゼットだけだから、きっとここだよな？

人ん家を、ごそごそとやっぱりちょっと悪いとも思ったけど、克己くんだって酷いことしてんだもん。

このくらい良いよね。と、自分で自分を擁護し納得させながら、疑わしい部屋のドアを開けた。

そこには、もう一つの書斎が存在した。強化ガラスで出来た、デスクの上には見覚えのあるパソコンが座っていた。

間違いなく私のものだ。

と、その横には二人掛けのソファと小さなテーブルも置いてあった、ラックには本とワインセラー、その隣に、グラス。って、私は、そんなに酒飲みか？

まあ、間違えてはないから良いけど。って、

「ん……？」

デスクに近づいた私の目に留まったのは、またまた、一枚の紙切れだった。そこには

『接続OK』

とだけ、書かれていた。克己くんの性格出てるな。

簡潔すぎでしょ、これじゃあ。

ぽちっと電源を入れるといつも通りに立ち上がった。ネットワークにも接続してあるようだ。なるほど、これがOKといたいわけか。

ってことはプロバイダも変わったのかな？ うーん。聞かないと分からないな。

とりあえず、その他のものは寝室の方にもあって、一通りの貴重品（？）の位置は確認出来た。一安心して、リビングに戻った私は、克己くんの帰りを待つことにしたんだけど……。

一体いつになるんだろう？

盛り上がっていたX―クロス―を思い出して、なんとなく気の長い話になりそうだと思った。

「克己。大丈夫ですか？」

カウンターで突っ伏していた俺の肩をマスターが揺らした。ぼんやりする、頭を起こして辺りを見回す。残骸は残っていたが、人は散っていた。

「あれ？ あいつら帰ったのか」

「ええ。克己のこと起こしてたみたいですけど。よく眠っていたみたいです」

「そっか……っと。片付けしないと」

カウンターの椅子から立ち上がると一瞬ふらついた。俺そんなに、飲んだっけ？

「良いですよ。今日は疲れたでしょう。片付けは私たちでやっておきますから。また、明日お願いしますね」

「……あー……うん、悪い。そうさしてもらおう」

確かに、今夜は疲れた。

マスターの優しさに甘えることにして、帰り支度をした。その間、携帯にも目を留めたが、着信もないようだ。

碧音さんは何やってるんだろう。

自分でまいた種には違いないし、何度も思うように後悔はしてない、でも、正直不安になっていた。

あやの方が、先に帰ってしまったていたし、路頭に迷っていたら。って、そんなことは、ないか。でも、部屋に来ていない可能性はないわけじゃないし。

外に出ると、うっすらと路面に雪がかかっていた。それを見た瞬間、背筋が寒くなって、身をこわばらせた。

一気に酔いが覚めるかと思ったが、まだ顔は熱い。

—— ……早く帰ろう。

兎に角、帰ってみれば何もかもハッキリするわけだから、それで良いか。

そう、自分にいい聞かせて帰り道を急いだ。

—— …… ——

マンションの下からでは、部屋の明かりなんて確認出来るわけもなく、俺は玄関フロアでとりあえず部屋の呼び鈴を鳴らしてみた。

『—— ……』

—— ……無音。

インターホンにでる気配はない。

もしかして、本当に来ていないのだろうか。だとすると、一体どこへ行ってるんだ？

一気に血の気が引いてくるような感じに襲われた俺は、慌てて自

分の持つ鍵で部屋へと急いだ。

——…カチャ。

微かにドアの開く音がして、私は目を覚ました。どうも、リビングのソファの上で眠ってしまっていたようだ。

まだ、夢うつな自分の頭を無理矢理起こして、上体を持ち上げた。

玄関で、人の気配がする。

きつと、克己くんが帰ってきたのだろう。

ああ、そうだ。私は、怒ってたんだ。

一瞬、出迎えに行かなくてはいけないものかと、腰を上げそうになったが、座りなおした。私がわざわざ「おかえりなさい」と迎えると思ったら大きな間違いだ。私だって、怒るときは怒る。

「ああ」

私の姿を確認してかどうか知らないけど、帰ってきた克己くんは、何かをいうわけでもなくそう声を漏らした。

すたすたと、歩み寄って来る気配を後ろに私は振り向かなかった。

「——…ちよっ!」

隣にどっかりと、腰を下ろしたかと思うと、無言のまま抱きしめ

られて押し倒されてしまった。私は思わず息を詰めたけど克己くんから漂うアルコールの香りに眉を寄せる。

「お酒臭い。克己くん酔ってるの?」

その問いに答えることはなく、人の耳元で大きく息を吐くとその延長のような息声で

「―― ……良かった」

そう安堵の声を漏らした。

その後は、何をいうでもするでもなく克己くんの動きは止まってしまった。

「ちょ、克己くん? 克己くんってばっ」

がくがくと肩を掴んで揺すっても反応はない。

「うそ……寝ちゃったの?」

もちろん、私の声に反応はない。

かわりに聞こえてきたのは彼の寝息だった。

―― ……やれやれ

帰ってくるなり、これで私は怒るタイミングをなくしてしまった。何とか克己くんの腕の間から逃げ出すと、小さく溜息を吐いた。

「真っ赤な顔しちゃって」

ソファの上で、すやすやと眠る彼は、まだまだ子供のようなあどけなさも併せ持っているように見える。

「幸せそうな顔して」

ぷにぷにと頬をつついても全く動きはないくらいだから仕方ない。そう思い立った私は、寝室から毛布を引っ張ってきて、とりあえず克己くんにかけておいた。

「今日のところは、休戦ということにしといてあげる」

さっきまでやんでいた粉雪が、やんわりとした月明かりの下に、しんしんと降り積もっていった。

ホワイトクリスマス夜の夜は静かに更けていく。

——……っ

寝苦しさに目を覚ました俺は、一瞬どうして自分がリビングのソファで寝ているのか理解出来なかった。

「……?」

——……何で、毛布なんてわざわざ持ち出して寝てたんだ？
帰ってきたとこまでは……あ、そうだ……

急に思い出して身体を起こすと、すぐに確認したいことは確認出来た。

俺の足元の方に腰掛けたまま、毛布の隅っこに包まって彼女は眠

っていた。気持ち良さそうに規則正しい寝息をたてて。

「ベッドで寝てれば良いのに」

そんな碧音さんを見て、微笑ましい気分を感じつつ彼女が目覚まさないように抱き上げると、寝室に移動した。

碧音さんは一度寝たらなかなか起きないタイプらしい。

ベッドのスプリングが沈む感触に身を振ったものの、目を覚ます気配はなかった。

そっと、髪を梳いても、目元にキスをしてもしも起きない。

起きないと分かっているにも、出来るだけ静かにその隣に身体を滑り込ませて、静かに瞼を落とす。誰かの気配を心地良いと胸を撫で下ろす日が来ると思わなかった。

外はまだ夜明け前の静けさを維持していた。

「……っ……くっ」

昨晚の雪がうつすらと残った通りを眺めながら、暖かなカフェでお昼を取っていた。

私の話を聞いて、あやは声を殺して笑っている。

いや、必死に堪えているのは分かる。

分かるけど。

伏せた顔では笑顔は見えないが、肩が小刻みに揺れている。こちららはこれでも割と真剣に悩んでいるというのに、失礼極まりない。

「あっはは。駄目。もう、我慢出来ないっ！」

「もう、そこは無理でも我慢してよっ！ 笑いたいのも分かるけど、こっちは本当に大変だったんだから！！」

堪えきれなくなって大笑いしているあやを小突いた。

「だって、おっかしいじゃない。本当に克己らしいわよ。若いって良いわよね。直情的で。あっはは」

—— ……じゃあ。その若さに当てられてしまったような私は、どうすれば良いのよ。

ふう……。

私の口からは溜息しか出なかった。

それから、少し笑いの収まったあやは、ぽふっ。っと私の頭に手を置いて一言。

「良いじゃないときには流れに逆らわないのも一つの手、それで良いのよ。とりあえず、ね？」

「―― ……あや。同居させてくれる気一切ないのね？」
「ない」

一秒も考えてくれなかった。

きっぱりとそういつて綺麗に、にっこり微笑むとあやは席を立った。確実に人事だと思って楽しまれている感が抜けない。

「ほら、お昼終わっちゃうわよ。会社戻ろう？」

しかし私もあやにせかされて席を立った。このカフェから会社まではほんの十分ほどの短い距離だったけど、その間、口を開くことの出来なかった私にはとても遠い距離にも思えた。

「ああ。そうだ、住変すんだら、住民票取っというてね。保険とか書き換えとくから。口座の方もやっとくから、年明けには手続きしといてね」

「―― ……」

はあ。

別れ際に突然、現実問題に引き戻してくれるあやに、小さく手を

上げて返事を返すと、私はエレベータを降りた。

結局、朝はばたばたとしていて、まともに話なんて出来なかった。戻っても、どうせ克己くんはバイトに行っているだろうし、そう考えると、ゆっくり話が出来るのは、私が冬期休暇に入ってからのように思える。

昨日のことは、結局良く思い出せないでいた。
まあ、別段。怒っているようでもないようだったので構わないだろう。

「古河くん」

冬休みには入っていたが、レポート作成のため、俺は大学の図書館にいついていた。そんな俺に後ろから声をかけてきたのは、講師の吉野さんだ。

彼女のことはよく知っていた。

聞きたくなくても、透が逐一彼女のことを報告してくるからだ。身長から体重、果てはスリーサイズに、足のサイズまで、あいつは熟知していた。まあ、いわゆる憧れの先生とでもいったところだろうか？俺には、どこにでもいる美人顔の講師にしか、見えないがな。

吉野講師は、振り返った俺と目を合わせて、にっこり微笑むと俺に数枚の用紙が挟まれたファイルを差し出した。

「なんですか？　これ」

「悪いんだけど。お父様に、承認のサインをいただいてきてもらえないかしら？」

―― 親父に？

その一言を不信に感じ、俺はばらばらとその書類に目を通した。

「これって……」

「まあ、平たくいえば、実習許可みたいなものね。本来私が行かなくっちゃ行けないんだけど。私、明日からちよっと、旅行にでるのよね。だから、この休み中で良いから、お願いしたいのよ」

「嫌です」

きっぱりと断った筈なのに、吉野講師の笑みは崩れない。つき返した書類を受け取る素振りもない。両手を後ろに回して、にっこり……。

こ、こいつ。

「―― ……勘弁してくれよ。どうして、俺が」

「あら、お正月くらい、うちに帰らないの？」

正直、俺は家に帰る気なんてなかった。

でも、碧音さんは帰るんだろうか。元旦くらい、里帰りとかしそうだけどな。

「ね。だから、お願い。頼んだわよ。それがないと、来期みんなが困るから。じゃあね」

「あ！　おいっ！！」

その用紙を前に、僅かに考え込んでしまった俺の不意をついてほしいことだけいうと、吉野講師は逃げてしまった。

なんて、無責任な女なんだ。

「やれやれ」

小さく溜息を吐くと、俺は、再び本に目を戻した。

考えたってしかたないちよつと実家に帰って、サインさせれば良
いだけだろう。それにしても、面倒なことを引き受けた。気が重
いことには変わらない。俺がどのくらい実家に帰ってないか、なん
て、知らないよな。

—— …… はあ。

今日は、やけに時間がたつのが早かった。

考えることが沢山ありすぎて、一体何から考えたら良いのか……。結局一日何をしていたのか、はつきりしない。ロッカールームで、コートを着込んでいると、あやもちょうど入ってきた。

「早いよね」

「あやこそ。今日も、予定でもあるの？」

「そうねえ。予定、か……」

いって意味ありげに微笑んでから、のんびりと続ける。

「作っても良いけど、最近、ゆっくりしてないから今日はエステにでも行って、帰ろうかなあ」

帰り支度をするあやに皮肉めいていったのだけど。軽く交わされてしまった。

「はあ。昨日あやが家に居てくれたら、私は克己くんちに転がり込むこともなかったのになあ」

「あらら。碧音ちゃんは、こうなったのはあたしのせいだでもいいいたいのかしら？」

思わず出た私のぼやきに、にんまりと笑うと私の顔を覗き込んだ。

—— ……別に。

あやのせいだなんていったりはしないけどさ。

ちょっと、今思っただけだよ。そう思うと、何だか子供みたいな愚痴をいってしまった自分に恥ずかしくなって、目をそらしてしまった。

そんな私の様子をみて、ぽんぽんと私の頭を叩くと帰り支度を続けながら、話を続けた。

「そういえば、克己の住んでる……ってあんたも、住んでんだったわね。そこって、なんてマンションなの？」

—— ……いや、住むかどうかは。

そう、口にしかけたけれど、もう、どうせ無駄な足掻きだと思い、飲み込んだ。

「確か『ルイス・キャロル』とか何とか書いてあったような気がする」

「ああ！ やっぱり?! そうじゃないかと、思ってたのよ」

私の返事を聞いてぽんっと手を打つと、あやは勢い良く振り返った。目はかなり生き生きしている。

「高級マンションじゃない! あそこ、賃貸マンションじゃないわよ。確か分譲だったわ。はあ、克己って金持ちの息子なのは知ってたけど……これは相当ね。碧音!」

「え?」

一気にそこまでいうと、ぐいっと私の両手を取り、

「仲良くしましょうね」

と、一言。

一体何を狙ってるんだろう？ 思わず乾いた笑が私の口から漏れる。

と、そのとき、携帯が音を伝えた。

その音に二人ともが反応して、携帯を取り出すと、あやのほうがあたりだった。

電話に出たあやは、何度か頷くと、すっと私に携帯を差し出した。

「え？ 何？」

「克己からよ。ったく、携帯の番号くらい教えときなさいよね」

—— …… あはははは。

そういえばそうだった。

私は昨日知ったけど、私は教えてなかったんだっけ。確かにあやの不満は尤もだ。「ごめんね」小声であやに謝ると携帯を受け取った。

電話の用件は本当に大したことなくて、今日の夕飯の話だった。

いや、私たちには、もっと話し合わなくてはいけないことが、ありそうなものなのだが……。結局いつもどおりの会話がなされてしまった。

「碧音さんって、いつから休み？」

普段と何ら変わりなく、碧音さんに『X―クロス―』で食事をとってもらいつつ、空になったグラスにワインを注ぎながら尋ねた。俺のその問いに、顔を上げると、ちよつと考えて「今週末からだよ」と一言返すと、グラスに手を伸ばす。

「実家とか、里帰りするわけ？」

次の問いに一瞬碧音さんの動きが止まったように感じたのは気のせいだろうか。

「いや、実家には帰るつもりはないけど。駄目……かな？」

「駄目じゃないけど、碧音さんのことだから、毎年ちゃんと帰ってるのかと思った。でも、違うんなら良いんだ」

「何かあった？」

「ん？ 何かってほどじゃないけど、ドライブがてら、ちよつと俺の実家に付き合ってもらおうかと思ってさ」

何か考えがあったわけでもないが、年末なんて特別用事もないし、良いかと思っただけだったんだけど、碧音さんはかなり驚いたような顔をみせた。ぱあつと、まだ殆ど飲んでないのに、頬を朱色に変えると、グラスを慌てて取り落としそうになって支えなおす。

大丈夫かと問い掛ければ、全然平氣と返される。声が裏返っているといったほうが良いだろうか？

小首を傾げたところで、ふと思いつた。

「ああつと、大丈夫。どうせ、実家には誰もいないだろうから。ちよつと、書類に実印がいるから、それをとりに行くだけだし」

「―― ……っ！ ああ、そっか。そうだよね！ 当たり前だよ。それ以外に一体何があるっていうんだろう。嫌だな。あはは、うん。良いよ」

わざとらしすぎる……というか面白すぎる。

俺は溢れてくる笑いを押し留めるのに必死だったが、目の前の碧音さんは「そっか、そうだよ」と重ねつつ、ほっと胸を撫で降ろしたように肩の力が抜けたのが、目にとって見えた。

いくら俺でもそこまで突然じゃない。

……あ、いや、あまり説得力はないけれど……

こほんっ。

思わず自分の突発的な行動を思い出して、ワザとらしく咳払いをしてしまった。

風邪？ と可愛らしく首を傾げる碧音さんは、やっぱりらしすぎる。

あれから、決まったことといえば、高熱費と食費を私が持つってことくらいだった。

部屋はあやのいった通り、持ち家だったようで、その辺のことは分からないということだった。だから、今のところ私にはどうすることも出来なかったわけで、根掘り葉掘りは流石に諦めた。

それに年も押し迫ってきたということもあって、どうしてもその手の手続きは年明けまで伸ばされた。

—— ……結局、押し切られたままになってしまふことになってしまったんだけど。

それはそれ、なんとか、割り切れない部分も割り切って共同生活をするようになった。

そこで、全ての家事全般を克己くんにやらせても悪いと思い、食事の後片付け——とはいっても、食器洗い乾燥機がやってくれるので下げてくるくらいなだけで——とか、掃除等々は私がすることにして、今、やっとその夕食の後片付けが終わったところだ。

「—— ……よし」

最後にテーブルを拭いて片づけを終えた私は、珈琲を淹れる事にしてサイフォンにお湯を注いだ。

まあ、一人分入れるのも、二人分淹れるのも変わらないので二つカップを用意して椅子に腰掛けた。

―― ……今年もいろいろあったなあ。

ふと、そんなことを考えて、溜息を吐いた。

そんな一年の締め括りにこんな大きな事件が起きてしまうなんて、私は幸か不幸か落ち着かない限りだ。

明日からは、やっと、冬期休暇に入るわけだし、少しはゆっくり考えることが出来るかな。

こぼこぼと、カップに満たされる琥珀色の液体から昇るほろ苦い香りをゆっくりと吸い込み、胸を撫で下ろす。お酒も好きだけど、珈琲も好きだ。バリスタになれるとは思わないけれど、それに近い知識が欲しいくらいだ。

シンクまでお盆を取りにいくのが面倒で、両手にカップを持って廊下を進む。

部屋のドア越しに微かにキーボードを叩く音が聞こえていた。刹那、邪魔にならないかと、不安にもなったけど折角淹れたんだし。それに邪魔なら邪魔だと克己くんなら気負いなく口にするだろう。そう思うことにして、思い切ってドアをノックした。

―― ……コンコンッ

「ん、何？」

中から返事が聞こえてきたので、ドアを開けようと思ったけど、気がついたら両手はカップでふさがっていた。

私ってば、本当に何やってんだろう。えっと、右手にカップを寄せて、いや、ちょっと溢しそうだ……あつついし……一度戻って、いや、それじゃ、ピンポンダッシュと変わらない……。

あとの返答がなかったため、痺れを切らした克己くんが、かちやりとドアを開いてくれた。

「ええっと、休憩でもしない？」

何とか、ドアを開けようとしていた私は、実に間抜けな感じに映ったのだろう。そんな私を見て小さく笑った克己くんは、両手に持っていたカップを両方受け取って中へ入った。

「私、居ても大丈夫？」

「ん？ そのつもりで、二つ持って来たんだろ？ その辺座れよ」

折角気を遣って聞いてあげたのに、身も蓋もないような返答をされてしまった。

「冗談だよ。ほら、折角淹れたのに冷めるぞ」

ちょっと、不機嫌そうにデスクの向かい側においてある2Pソファに腰をおろした私に、カップを渡した克己くんは面白そうに笑っていた。

―― …… 笑い事じゃなんだけど。

で、当の克己くんはというと、カップの中身をすすりながら、パソコンの前に座りなおしていた。

「克己くんって、目悪いの？」

「いや、そんなに悪いってこともないけど、ちょっとだけな」

普段かけていない眼鏡を宛がっていた克己くんは、少し恥ずかし

そうに微笑むと眼鏡を外して、目頭を押さえた。

「ふ〜ん。眼鏡かぁ」

「ん、何？」

「頭良さそうに見えるなぁと思って」

「―― …… ばっか。俺は頭良いんだよ。碧音さんがしたってそう見えるとは限らないぞ」

飲もうとした珈琲を噴出しそうになりながら、克己くんは大笑いしていた。

「―― …… べ、別にかげようかなんて、いつてないでしょ。私、目は良いんだからね」

「いいたそうだったけどな」

そしてひとしきり笑ったあと克己くんはまだ溢れてくる笑いを飲み込むように口元を押さえて

「明日にでも、行ける？」

と、前置きもなく、私に確認を促した。もちろん、直ぐに何の話かは察しがつく。

「行けるけど、そんなに笑うことないじゃない」

―― …… 全く……失礼極まりない……。

「でも、私がついて行って良いの？ ご実家にご迷惑掛からない？」

当然の心配をした私に克己くんは間髪いれずにきっぱりと答える。

「掛からない。ただのドライブだと思ってくれて良いって。気が引けるなら車で待っていてくれても良いから」

「そか……うん。分かった」

それ以上それについて言葉は交わされることなく、私はカップの中身を飲み干して、サイドテーブルの上に乗せた。

—— ……カタカタカタカタ。

部屋の中には俺の叩くキーボードの音しか響いてはいなかった。本当にさっきまで、なんやかんやといいながら、本棚をあさっていた碧音さんは、ソファの上でお休みのようだ。

良く寝るよなあ。真面目な話。

「おい、風邪ひくぞ。寝るんなら、ベッドで寝てろよ」

ぺちぺちと、軽く頬を叩くとうっすらと目を開けたが、すぐにその瞳は閉じられてうわ言のように告げられる。

「克己くんは？ 寝ないの？」

「いや、俺はもう少ししたら寝るから、先に寝てろよ」

「じゃあ、良い。ここで寝てる」

—— ……お前は子供か。

まるで子供の「ねくじ」だな。

俺は小さく溜息を吐いて、何とか碧音さんを寝室に運び、再びデスクに腰掛けた。

—— ……ピーー……ッ

「最悪……。何でここで固まるかな」

はぁ、散々だな。画面の暗くなったパソコンを眺めて深く息を吐いた。そのとき不意に、さっきのカップが目にとまった。

碧音さん。もしかして、寂しかった、とか？

そんなことはないか。今まで一人暮らししてたんだもんな。

一瞬頭の片隅によぎった感情を否定しつつも、俺はそれ以上レポートの続きをする気にもなれず、結局寝ることにした。

—— …… ——

シャワーを浴びて寝室に戻れば、碧音さんは運んできたときとほぼ同じ状態で横になっている。寝相はかなり良い。

布団を挙げて、滑り込むようにするりと隣に寄り添えば、こちらへことんと寝返りを打った。

「碧音さん」

頬に掛かった髪を流しながら声を掛けても、目を覚ましそうにない。

警戒心の常でないその表情は、俺を少しだけ不機嫌にさせる。

さっきまであった眠気はどこかにいつてしまった。無防備すぎるその頬に、瞼に口付けてもくすぐったそうに、口元を緩めるだけ。何か甘い夢でも見ているのだろうか？

「……ふーん」

面白くない。

そつと首筋に唇を寄せて軽く食み、それでも反応が鈍いから、強く吸い付いた。

「んう……ん」

これで流石に、夢の淵から目を覚ました碧音さんは、声にならない音を漏らし首を逸らす。白く曝け出された喉元になお吸い付けば喘ぐような、でも掠れた声が漏れる。

この時期なら、大抵のあとは洋服で隠れてしまうから気兼ねしなくて良い。

「あ、……つつみ、くん？」

「起きて、碧音さん。しよう」

ぷつぷつとパジャマのボタンを外した隙間から手を差し入れて、腰を撫で引き寄せて、唇を重ねる。軽く歯を立てて吸えば答えるように首に腕が絡みつき、引き寄せられる。深く強く誘い込まれる口付けは、とても官能的で胸が高鳴り苦しさすら覚える。

他人と肌を重ねることは多々あったが、こんな風に感情的になることはなかったから、正直いつも自分自身に戸惑う。でも、それを悟られたくはないから、いつも強引に組み敷いてしまう。

それがまるで子どものようで、
少しだけ自己嫌悪だ……
――。

翌日遅い朝食を済ませた私は、マンションの玄関口で克己くんを待っていた。

てつきり、電車で行くんだと思っていたのだけどドライブになるらしい。

私は、もちろんペーパードライバーも良いところなので、まだ免許を取って間もない克己くんが運転した方が、無難だろうという結果に達し、今に至る。

ぼんやりと、そんなことを考えていると、私の前にセダンがゆっくりと止まった。シルバーメタリックなそのボディは何か、かなり高級そうだ。

—— …… 誰に借りたんだろう。もしかして、持ってたとか？

目の前に止まった車を前にして、一瞬いろんな考えが頭の中をよぎった。つい、ドアに手を掛けることも忘れていたら、助手席の窓が静かに降りた。

「早く乗れよ」

「ああ、ごめん」

思わず止まってしまった時間を取り戻して、私は慌てて乗り込んだ。

ばたんつとドアを閉めたところで、克己くん「ちょっと、」と

腕を引かれ運転席側に身を乗り出す。

克己くんの冷たい手が首筋に触れて首を竦めた。

「じっとして」

笑いを含んだ声で告げられて、くつと息を詰める。そして、襟元を正すと髪を一束前に流して、そっと離れた。

「……もしかして、見えてた？」

「ん。次は気をつける」

う……。

生真面目にそう答えられて、私は椅子に座りなおすと赤くなる顔を隠すように膝頭を見つめる。そして、かちやりとシートベルトを締めたところで、車は静かに走り始めた。

克己くんの家は、高速に乗って小一時間のところだった。

街中からほんの少し離れていたただけなのに、たどり着いた先には、落ち着いた閑静な住宅街が緩やかな坂道の両脇に広がっていた。

その坂道を登りきったところで、車は静に止まった。

「―― ……わぁ」

想像以上にご立派な家……いや、もう、お屋敷。が、どんと構えてあった。

外門が静かに開いてそれを潜って進むとシンメトリーで作られた庭が広がって、奥の立派な建造物も、ぴしっとしたシンメトリー調で、きつとどこかの有名なデザイナーが設計したのだろうな。

—— ……はあ。うちの家とは正反対だなあ。

うちの家なんて、これでもかといわんばかりの日本家屋だから、完璧に近い西洋建築への憧れは正直強かった。

—— ……キッ。

玄関の前で、車は静かに止まった。

「すごい、家だねえ」

「そうか？ 馬鹿みたいに無駄に広いだけの家だぞ。まあ、とりあえず入ろうぜ」

大きな玄関の扉が仰々しく開くと、これまた、中の内装にも目を見張るものがあつた。

物凄く物珍しくて、ついついきよろきよと行儀悪くしてしまう。

そして、広々とした玄関フロアの奥の一つのドアが開くとその先から、スーツ姿の男の人が姿をあらわした。

誰も居ないといっていたけど、お父さんかな？ それにしては、ちよっと若い？ ような気もしないでもないけど。

その男の人がにこやかに、歩み寄ってくると克己くんは、私の視界からその人が見えないように立ち位置をずらした。

少々人見知りの気のある、私にはそうしてもらえたと大変ありがたかった。

「ああ、お帰りなさいませ。克己様。お電話でも下さったらお迎えにあがりましたのに」

「必要ない。どうせ、親父は居ないんだろう？」

「ええ。本日は、英国の方へ……学会が……」

「あんたが、ついて行ってないってことは、そういうことなんだろう？　　ったく、いい歳して……」

—— ……そういうこと？　　どういうことだろう？

普段の不機嫌さに拍車の掛かった調子でそういう捨てた克己くんの台詞をほんの少しだけ不思議に思ったけど、どの家庭にも一つや二つは問題があるんだろうと思って、あえて聞くのはやめた。

「珍しいですね。克己様がお客様をお連れになるなんて」

私に気がついたその人は、にっこりと微笑みつつ私に軽く会釈した。私も慌てて襟元を押さえて頭を下げる。

「はじめまして。橘　一臣といいます。克己様のお父様の秘書を勤めさせていただいています」

「あ、えっと。白羽　碧音です。はじめまして……橘さん」

—— ……あああ。私ってば気の利いた言葉の一つも出てこないよ。

にこやかに握手を求めてきた彼の手を握ると、次の言葉が何一つ思い浮かばなかった。

「ほら、俺の部屋いくぞ」

そんな私に助け舟を出してくれたのは克己くん。固まってしまった私と橘さんとの間を割って、二階へ続いている、階段へ歩いて

いった。

私は橘さんに軽く会釈して、慌てて克己くんの後を追った。

「ふわっ。外観だけでなくって、部屋も広いんだね」

二階の廊下の中ほどにあった、観音開きのドアを開けるとそこは高級ホテルのスイートのようなところだった。

いや、まあ、庶民の私は泊まったことないですけどね。テレビで見える程度です。

「んあ？ まあ、無駄に広いだけだな。普通に考えて一人にこんな空間必要ないだろう。もう、ここも誰の趣味か分からない部屋になったしな」

「――……？」

「て、そんなことは良いんだよ。疲れたろ？ 何か飲むものでも持ってくるから、そこらに座ってるか、そこいらへん漁ってても良いぞ」

「え？ 良いの？」

「ああ。別段みられて困るようなものもないしな。それに興味深げな顔をしてるし」

――……あはは。

すっかり、読まれてしまってるな。

そこまですうと、克己くんは私一人を、部屋に残して、出て行ってしまった。

「本当に、珍しいですね。克己様が誰かをお連れするなんて」

「別に俺が誰を連れて帰ってこようが関係ないだろう。それに、俺は親父みたいな節操なしじゃないからな」

「お父様のことをそのようにいうものではありませんよ」

「はいはい。分かった。分かった。ああ、これサインしといてやって、学校で預かったんだよ」

俺は橘の小言を聞きながら、吉野講師に預かった例の書類を渡した。

橘は秘書である上に、親父の代理人でもあったから、彼の許可があつたら別段書類に問題が生じることはないだろう。

「お茶でもお持ちしましょうか？」

「いや、かまわない。俺が用意するから」

「―― …… 相変わらず、私には何もさせていただけなのです」

物悲しげに眉をひそめて微笑んだ橘を見ると、少々心が痛んだが、茶ぐらい自分で淹れられる。大したことじゃない。

「そういうんじゃない。気にするな。いつものことだから」

「―― ……」

基本的に家に親父が居たためしはなくて、運が良ければ橘が居た

くらいだ。

殆どはハウスキーパーのおばさんが“お留守番”をしているはずだ。

だから、今日は橘がいただけでも、運が良いということだな。

真剣な面持ちで、俺から受け取った書類に目を通して橘を置いて書斎を出た。

「相変わらず、無駄に広いだけの家だな」

廊下にでるとひんやりとした空気が流れた。

これだけ、広いのに人が一人や二人しか住んでいないのだから、それは仕方ないといえばそれまでだ。

俺はその足で台所に向かうと、紅茶の缶をあさった。

―― ……カモミールくらいで良いか。

俺が家に戻ったのは、数年ぶりだ。

今のマンションが建ってから、ずっとあそこに住んでるし。普段誰も居ないこんな家にたって、不便なだけだ。それにここに思い出なんて呼べるような代物は何一つない。切り捨てても痛くもなんともない……。

そのはずなのに、変わらない場所というのは俺の気持ちを重苦しくさせる。さっさと用事を済ませたら家に帰ろう。

俺の帰る場所はここじゃない。

ティーポットにお湯を注いで、お盆に乗せると部屋へ戻った。

「―― ……で、何を見つけたんだ？」

部屋へ戻ると、碧音さんはソファに腰を降ろし何かを真剣に見ていた。

「んー。克己くんが子供の頃のアルバム」

「ふーん。そんなもんあったか？」

碧音さんがアルバムを広げている隣で、ティーセットを置いてポットの中身をカップに移した。ハーブの良い香りが立ち上ってくる。

「この人、克己くんのお母さん？」

「どれ……？ ああ、それは違う。んー？ 誰だっけ？ もう忘れた」

指差した先にあった写真は俺が小学校に上がる頃のものだった。真新しいランドセルをしょって、ふてくされた顔で若い女と写っていた。

「忘れた？」

「ああ、何回か変わったからな。産んだ母親は俺がまだ、小さいときに死んだんだと。だから、本当の母親はよく覚えてない」

「―― ……っと。ごめん。何か、変なこと聞いちゃったね」

「別に気にしてないから、かまわない」

思わずつまらないことを口にしてしまった俺に、碧音さんは慌ててそのアルバムを閉じた。本当に、気に止めるほどでもない。大した事じゃないのに……変な奴。

そう思うと、不思議な笑いが零れる。

＊＊＊

—— ……つまらないこと聞くんじゃなかったな。

克己くんの淹れてくれた紅茶を飲みながら、何ともいいがたい沈黙が流れていた。柔らかい味のするはずなのに、なんだか苦いような気がして、なかなか喉を通り過ぎてはくれない。

その雰囲気になれた私は、ローテーブルにティーカップを戻して、ふっと立ち上がった。

「どした？」

「おトイレ。借りて良い？」

克己くんに説明を受けて、私は部屋を出た。

「迷うなよ」

出掛けに一言そういった克己くんが妙に面白くて笑いがこぼれてしまった。

廊下にでると、本当に人がいないんだなと思い、静まり返った廊下が妙に長く感じた。もちろん、いくら広いといっても迷うことなく、無事にたどり着いて、部屋へ戻る途中。

橘さんと鉢合わせてしまった。

「ああ。白羽様。先ほどはどうも」

穏やかな物腰でそういうとにっこり微笑まれ、私もどうもと腰を折る。それだけで、擦れ違って立ち去る筈だった。その筈なのに、橘さんは私の隣にならんで、歩みを進める。手には書類ケースが握

られているから、用事というのはそれだったのかな？ と推測する。

「あの」

「はい？」

「不躰なのですが」

一緒に並んで、廊下を歩きつつ2、3言言葉を交わしたあと、何ともいい出しにくそうな前置きを始めた。何となく橘さんが私に聞きたいことは予想がついた。

「あの。克己様とは、こういったご関係なのでしょうか？」

―― …… やっぱり。

きっと、あそこで偶然に私と会ったのではなかったのだろかな。と、思いつつ小さく溜息が漏れた。『どういう関係』かと聞かれても。

私は返答に困った。何て答えて良いものか。

恋人？

友達？

同居人？

あのときから私たちは何も変わっていない。

変わっていないはずだ。無意識に首筋に触れ自分の肩を擦る。克己くんは痕を残すのが好きなようで、昨夜、体に刻まれた新しい痣は痛みは全く持たないけれど、鈍く熱を持ち情事からの時間経過を感じさせない生々しさを持っている。

でも、だからといって、どれもぴんとこないような、何ともはっ

「遅いと、思ったらやっぱり迷ったのか？」

なかなか戻ってこないと思ったら、ドアが開いて、入ってきた碧音さんが橘と一緒にだったので思わずそんな言葉が出た。

「いいえ。ちょうどそこで、お会いただけですよ。ね。白羽さん」
「—— ……うん」

碧音さんは俺の方を見ていなかった。

「橘、何かあったのか？」

「いいえ、何もありませんよ。こちらに、署名したので宜しかったですね。お父様には私の方から、後ほど伝えておきますね」

「ああ。頼む」

俺は腑に落ちない気持ちを抑えて、橘からそれを受け取った。俺がサインの確認を済ませて頷くと、橘は部屋を出て行った。

「さて、こんなところに長居をする必要もないだろう。帰ろうか、碧音さん」

「うん。そうだね」

そのときの、碧音さんの返事は、いつもと変わりなかった。さっきのは俺が感じたのは、タダの気のせいだったのか？

まあ、碧音さんのことだ、隠し事なんて器用なこと出来ないだろうから、そのうち自分から何かいつてくるだろう。

そう自分を納得させて俺たちは部屋を出た。

家を出るのがちょっと遅かったため、もう空は赤から黒へと変わる間くらいになっていた。

「何か、食べて帰る？」

「ううん。克己くんが作った方が良い」

「そうか？ 家、何かあったかな」

にこにこそういわれてしまつては、真っ直ぐ帰るしかないだろう。

俺は車を走らせながら、殆ど反射的に冷蔵庫の中身を思い出していた。

「ただいまあ」

「て、誰もいないだろ？ あ、もしかして、一人でもいつてた口？」

ロングブーツのファスナーを下すために玄関に座った私の横を、けらけらと笑いながら克己くんは追い越して行った。

「ねえ、克己くん。何作るの？」

玄関に座ったまま、奥に引っ込んでいった克己くんに叫んだ。ひよっこりと、その先から顔を出した克己くんは

「冷凍の魚介類があったから『ペスカトーレ』でも作る」
「そっか。じゃあ、白ワインが良いよね。何かあったけ？」

私の質問に答えるために、克己くんは一旦顔を引っ込めたが「赤
しかないぞ」と答えが返ってきた。

「バッグ取って。私、買ってくるよ」

「何？ どうしても白が良いのか？」

先に持って入ってくれていた、私のバッグを持ってくると不思議
そうに聞いてきた。

「うん、今日はそうしたいの。他に足りないものない？」

「あゝ……。多分、大丈夫だと思う」

「そっか。じゃ、行ってくるね」

「ああ。気をつけて」

そういつて軽く私を引き寄せると、おでこにキスをくれた。

にっこりと微笑んで、手を振った克己くんに軽く手をあげて、エ
レベーターのところまで走った。ちょうど、あがってきていたエレベ
ーターの乗り込むと、両頬に手を当てて頬の熱を取る。

克己くんって、最近よく笑うようになったと、つくづく思う。

会った頃なんてほとんど毎回怒っていたのが嘘のようだ。

でも、怒らなくなったのは私も同じかもしれない。

小西さんと別れて、まだ、一週間くらいしか経ってないけど。そ

んなに思い悩むこともなくなった。彼と付き合つてるときのほうが毎日辛かった。

たくさんいろんなことを考えて、悩んで、苦しくて……何より不安だった。あんなに優しいし、良くしてくれているはずなのに、不安を感じていた私は何か察していたのかもしれない。どこか私の手の中をすり抜けていってしまうような、私では掴まえてはいられないような、そんな不安が常に付き纏っていて、私は寄り添っている間以外は常に不安定だった気がする。

でも今は克己くんがそんなことを考える時間をくれないのは確かで、そしてそれは、彼なりに気を遣っているのだろうことも確かだった。

—— ……でも。

こんな平和で平凡な時間も、長く続かないことを私は、今日改めて実感した。

私の中の、克己くんへの気持ちは、自分でも驚くほど大きくなっていた。相性というのは本当に目に見えない形でそこに存在しているのか、克己くんの隣は私にとってとても居心地が良い。

でも、信じて良いものか、まだ少し迷っていた。それに…… ——

「—— ……遅いな」

下ごしらえも終わって、あとは仕上げるだけなんだけど、時計を見ると、碧音さんが出て行ってからもう一時間近くなっている。

一体どこまで買いに行ったんだ。

こんなところで、迷うわけもないだろうに……。

仕方なく、俺は一度脱いだコートを着こんで探しにでることにした。忙しなくマンシヨンの玄関ホールを抜けて店の並ぶ通りに急ぐ。碧音さんは案外すぐに発見することが出来た。

マンシヨンのすぐ傍にある雑貨屋のショウウィンドウに釘付けになっただけだった。

「何か、欲しいものでもあるのか？」

暫らく後ろに立っていても気がつかない碧音さんに痺れを切らせて声を掛けた。

何を考えているのか、ガラス越しに映っている俺の姿には全く気がつかない様子だった。そのせいで、声をかけた俺に物凄く驚いた顔をみせた。

「あ！ いや、その。何でもないよ」

「寒いだろう。ほら、帰るぞ」

なんでもない。そういつた碧音さんの目は赤かった。

別に泣いていたわけでもなさそうなのに。

どうしたんだろう？

泣きそうだったんだろうか？

そうは思ってもこれまで他人にそんな気を掛けたことはなかったから、どう接して良いかも分からない。

俺はわけもなく湧いてくる不安を、かき消すように碧音さんの手をとって歩き出した。数歩大股で歩き出して直ぐに、碧音さんの歩幅に合わせる。俺にとっては酷くゆっくりに感じるけれど、急ぐ必要は今何もない。

「何か、あったのか？」

「―― ……ん？ 何もないってば」

「ふー……ん」

結局、碧音さんが何を考えていたのかわからないまま、部屋へ戻り食事の準備を済ませて、テーブルに着いた。

買ってきたばかりのワインのコルクを抜くと、グラスに注ぎ手渡す。

今日は珍しく、静かな食卓だった。

かちやかちやと、皿とフォークが当たる音がやけにうるさく、部屋に響いていた。

どうしようもなく、居心地が悪かったが、聞いてもきくと碧音さんは何もいわないだろう。いつてくるのを、待つしかないんだ。

分かっていたけれど、その時間が俺には、とても長くて……とても、もどかしかった。

食事が終わっても、碧音さんは席を立とうとしない、仕方なく片付けは自分ですることにして、俺は席を立ち空になった皿を運んだ。

—— ……ザアアアア……

手に暖かなお湯がかかる。

「ねえ。克己くん」

「—— ……んー？」

やっと、碧音さんが重い口を開いた。

きゅっ、と水道を止めて振り返ると、碧音さんの俺をまっすぐ見つめる瞳と重なった。碧音さんのその目をみると、心なしか俺は緊張した。

「あのね」

「うん？」

見つめていた瞳は伏せられた。軽く下唇をかむ仕草を見せる。

「私、克己くんのこと」

「―― ……うん？」

両膝の上においてあった手に力が籠ったのが見て取れた。

そしてまた、大きな瞳が俺を写した。

「克己くんのこと、信じて、良い？」

―― ……びっくりした。

あんまり、深刻そうな顔をしているから何をいい出すのかと思えば……

ふっ。と、緊張のほぐれた俺は思わず笑ってしまった。そして、返事をするために、俺は碧音さんの隣の椅子へ腰掛けた。

その様子をずっと、目で追っていた碧音さんは俺が座った方へ向き直った。

「それで碧音さんは、俺になんて言って欲しいんだ？」

俺もいい加減ズルイが、碧音さんの質問だって十分にズルイと思う。

そんな捨て犬みたいな目で見られて、信じて良いかだなんて、良い以外どう答えろっていうんだ。即答しそうな自分を抑えるのにとど

れだけの労力を遣っていると思ってる。

でも、俺の切り返しに不安げに瞳を揺らす碧音さんを見ると、ちよっと拙かったかと罪悪感が湧いてしまう。

俺ばかりこんなの、絶対、ズルすぎる……。

—— ……私、何ていって欲しいんだろう。

分からなかった。

どうして、そんなことを聞いてしまったのか、口にしてしまったのか。

自分でもよく分からない。

ただ、確認したかった。

私はなんなのか。どうすれば良いのか。

「碧音さんは、俺のこと信じられない？」

「—— ……分かんない」

「そうか。分からないか……」

分からない。

思わずそう答えてしまった私に、克己くんは悲しそうに目を細めると話を続けた。

「まあ、俺も正直分からない。『好き』って、どんなことなのかよく分からないしな。でも、碧音さんのことは大事に思ってるし。傍

に居て欲しいし、同じ空気を吸っていたい。そして、何より……」
「――……？」

そこでいったん言葉を置いた克己くんは、大きく深呼吸を一つした。

「俺も、碧音さんのことを信じたいんだ」

――……信じたい。

そんなこといわれたのは初めてだった。みんな信じてくれているものだと思っていた。

でも、私がどうしようと、迷っているのに、克己くんが信じてくれるわけもなかったんだ。「疑わしい」ということがまだなかったから、こうやって、口に出さないと分からなかったけど。

何度も変わる家庭環境の中で、克己くんが誰かを信じるということに、一体どれほど、不信感をもっていたかということに、私はもっと早く気がついてあげるべきだった。

「私も……」

「――……うん」

「私も、信じたい」

そう、信じられないわけじゃなくなって、ずっと信じたかったんだ。でも、今までのことが私の気持ちを曇らせて、

これで良いのか？

このままで、良いのかと？

疑問ばかり投げかけていて。

信じたい。

そう思う気持ちを隠してきた。

「馬鹿だな」

そういった声も暖かくて、ふんわりと柔らかく抱きしめてくれる腕も、胸が苦しくなるくらい温かくて、優しくて……。

堪えていた気持ちが溢れてきて、どうしようもなくって、私は涙が零れた。

「そんなこと、考えてたのか？」

「……うん」

—— ……それだけじゃないけど。

私は、それを口にすることは出来なかった。

私が、克己くんを信じるということは、必ず訪れることへの心の準備が必要だということになってくる。

だから、私は、迷って迷って迷ったうえで

それでも、今の私は、この克己くんの腕を離すことは出来そうにない。例え、傷が増えたとしても。

そう。

そういう結果にたどり着いたんだ。

――…どうか、神様お願いします。

私の、この平和で平凡な時間をほんの少しでも、わずかでも、長く、感じさせていてください。

そう、願うしか私にはどうすることも出来なかった。

“好き”という魔法の言葉はしまって、曖昧なままのこの関係を私は続ける決心をした。

きゅつと背中に回った腕に籠る力に答えるように、俺も腕に力を込めた。

“好き”とか“愛している”とか馬鹿の戯言のように繰り返してきた。だから余計にその言葉の持つ意味が分からなくて、簡単に言葉に出来なかった。

ただ、この人だけは、俺が初めて“信じたい”そう思った人に違いはなくて…その先に“愛”があるなら、いつかきつとキチンとそう口に出来る日がくるだろうと、それこそ…俺は、馬鹿みたい、に、信じ始めていた。

— 1 —

—— んー……？

今朝もいつもどおり、良い匂いで目が覚めた。でも、今朝のはちよつと違うかなあ。

私は寝ぼけ眼のままリビングの方へ出てきた。その先には、早起きした克己くんがエプロン姿でお鍋をかき混ぜていた。

「おはよう。何作ってるの？」

—— びしっ！

「おはやくない！」

振り向きざまに、おたまを突きつけられて突っ込まれてしまった。いわれてちらりと時計に視線を走らせる。

—— ……て、ああ……10時過ぎてるんだ。そりゃ早くはないな。あはは……。

曖昧に微笑んだ私は「それで？」と質問の答えを促した。克己くんはもう一度お鍋に向き合おうと完結に応えてくれる。

「おせちの準備してるんだよ」

「ほう。おせち？」

ひよっこりと覗き込めば煮豆だ。つやつやと綺麗。

「まあ、二人だからそんなにたくさん作らないけど、何かリクエストあったらいいぞ？」

「んー。栗きんとん」

手を伸ばしかけた私の手の甲を、ぺしっと叩いてその場を離れると克己くんは話を続ける。私は叩かれたことを無視して一つ摘む。美味しい。

「だから摘むなよ。ほら、さっさと、顔洗って。栗の皮を剥く。―― ……了解？」

振り返った克己くんに、どん。と、ダイニングテーブルの上に、栗と皮剥き機を、ぽんっと乗せて私の顔を見た。

「了解」

と私は軽く返事を返して顔を洗いに洗面所に向かった。それにしても、本当、克己くんって、まめだよねえ。世の主婦だって、家でおせち作ったりしないだろうに。

いつものことだが、感心しながら、歯ブラシを咥えた。

「―― ……出来た。もう、無理手が痛いよ」

—— ……はあ。碧音さんに頼んだ俺が馬鹿だった。

「……分かった。もう良いから」

俺からは溜息しか出なかった。結局、ボウルの中身を確認したら10個あるかどうかだ。

まあ、栗の皮はぐのは結構大変だけだな。

「私、お飾りとか買ってくるよ。ね？　そうしよう」

少しは申し訳ないと思ったのか、ぽんと手を打つと、そういつてコートとバッグを手に持った。

「何か買い忘れない？」

「こっちは大丈夫だけど、人が多いから、気をつけろよ。後、遅くなるなら連絡いれろ」

「——ん。了解。」

この間のことがあったので、ちょっと素直だった。「行ってくるね」とにっこり、微笑んで、部屋を出て行った碧音さんを確認して、俺は続きに取り掛かった。

—— ……そんなこんなで、正月三が日は平和そのもの、最初こそばたついたものの、同棲生活も安定して平和だった。

ぼんやりと、お正月の特別番組を眺めながら、私は冷酒をすすっ

ていた。

克己くんはといえば、バイトに出ている。今日から『X―クロス―』は営業を始めるらしく忙しいようだ。

昼間から、呼び出されて、あわただしく出て行った。

「――……退屈」

どこに回しても特番ばかりで、あんまり面白くない。その上、手酌酒とあってはますます面白くない。私のぼやきは独り言に変わっていた。

――……RRR……RRR……RRR……

ちょうどその時、携帯が鳴った。

あやからのお誘いだろうかと、ほくほく顔で手に取ると、発信元は「公衆電話」だった。一体誰だろう。不信任を隠せないまま、しつこくなる電話に痺れを切らして電話に出た。

『遅いじゃない?! 何やってたの? 碧音ちゃん!』

その一方的な会話の声にどこか聞き覚えがあって、ほんのり、酔っていた頭が急に冴えた。

「ま……ま、真葛^{まぐず}さん?!」

『そうよう。碧音ちゃんてば、今年も帰ってこないんだもん、心配しちゃうじゃない』

どうにも気の引き締まらないテンションは相変わらずだ。私は寝転がっていた身体を起こして、面倒臭いという体を隠すこともなく返答する。

「――…で、何の用事？」

『冷たいなあ。んん。今日はさあ。碧音ちゃんのこと心配で遊びに来たのよ』

調子の良いその語り口調。私は、真葛さんの突拍子もない話に半ばめまいを覚えつつも、気を取り直して、気持ちを保った。

「あのねえ。真葛さん？　遊びに来た…って？　何？　今どこにいるの？」

『ん？　駅だよ。ちょっと、観光してから、そこ行くね』

「ええ？！　駄目だよ。私、もう、あそこに住んでないし」

『え？　じゃあ、どこに住んでるの？』

「――…ええっと。友達のとこで同居させてもらってるのよ」

嘘でもないけど、咄嗟に同棲しているなんて言葉は避けた。

『ふうりん……。良いよ、どこでも、寝られるから』

「――…え、ちょ、泊まる気っ？！」

『それじゃ、また後で電話するわね』

「ちょっ――！」

――…そういう、問題じゃない。

いいなかったがそれをいう前に、電話は切られていた。
これは弱った。

さて、どうしたものか……。

私は、酔いのさめた頭を働かせて、とりあえずもう一度受話器を握りなおした。

「良かった。今年は日本にいるのね」

『はい？ 今は、海外だって携帯使えるのよ？』

「え？ いないの？」

私が、電話をかけた相手はあやだった。このところ、年末は決まって海外にいつているので、正直捕まるとは思っていなかった。

『はいはい。居ますよ。日本にね』

「何だ。意地悪いわないでよ」

とりあえず、あやに事の次第を説明して、ひとまず受話器を置いた。

—— ……ん？

正月料理っぽいものを、2・3品用意しておこうと思い、下ごしらえをしているときにエプロンのポケットの中で携帯が鳴った。着信音で相手は分かる。碧音さんだ。退屈したからと、電話をしてくるような可愛らしいタイプではないから、何かあったのだろう。

「何かあった？」

受けた早々、そう口にしたら案の定だった。

『克己くん。あのね、ちょっと申し訳ないお願いが出来ちゃったの。本当に申し訳ないんだけど』

「うん？ 何？」

慌てた感じの声に俺は一抹の不安を覚える。

『あのね。私の実家から真葛さんがくるのよ』

「—— ……うん、それで？ 真葛さんって誰？」

『ああ、私の母親のことなんだけど。でね、彼女が泊まりたいって』

—— ……なんだ。そんなことか。

身構えていた分、拍子抜けだ。

碧音さんのことだから色々散々手を尽くしてもどうしようもなかったのだろう。最終手段として仕方なく。というのが強く伝わってくる。

「ああ。泊まってもらえば、良いだろう？」

『―― ……う、ん。それでね』

俺は腑に落ちない気持ちを抑えて、ぴっと携帯を切った。

話の内容は何となく分かった。分かったけど、いまいち、合点がいかない。

いかないけど、碧音さんがそうしたいというのなら、俺には何をいうことも出来ない、とも思う……し……。

俺、何か駄目か？

「はあ……。相変わらず、碧音ちゃんの淹れる珈琲は美味しいわね」

結局、本気で何度もホテルに泊まることを勧めたのだけれど、真葛さんの勢いに押されて泊めることになってしまった。あらかじめ、そうなることも想定して呼んであった、あやと三人でリビングでくつろいでいた。何だか妙な気分だ。

「あやさんも、ごめんなさいね。この子が二人のところに転がり込んでいるなんて」

「いえ。良いんですよ」

「真葛さん。そんなことは良いの。で、どうして、こっちに来たの？
突然。何かあったんでしょ？」

—— …… そうなのだ。

私は、どうしてもいろいろ考えると、克己くんと一緒に暮らしているということ、真葛さんにいうことは出来そうになかった。学生だからとかそういう理由ではなくて……なので、申し訳ないことというのは、そういうことだった。

あやに、私の代わりをしてもらう……そのことで、もちろん、克己くんが機嫌が良いわけがないのも、分かる。けど、今の私には、そうしておくことしか思いつかなかったんだ。

「うーん。別に何も無いわよ。親が娘の心配して、何が悪いの?!」
「分かったわ。弘雅さんひろまさと喧嘩でもしたんでしょ?」

あんまり、得意満面にそんなこというから、すぐに分かってしまった。

真葛さんは私の指摘に、勢いよく立ち上がったのに力なく座り込んでしまった。

「何? 弘雅さんって?」

あやの基本的な質問が飛んだ。

「父親だよ」

あやの言葉に静かに答えると溜息を吐いた。夫婦喧嘩は犬も食わないとはよくいったもので、うちの二人の喧嘩も、そんな感じなんだろう。兎に角、今日はもう仕方ないとして、家に電話をいれて、明日弘雅さんに、迎えに来てもらおう。

うん。それが良い。

私は一人納得して力強く心の中で頷いた。

「まあ、良いよ。じゃあ、真葛さんは先にお風呂でも入ってきたら？」

「ええっ?! 喧嘩の理由も聞いてくれないの?!」

「聞かないよ。ほら、早く」

「あ、あたし聞きたい」

しまった、ニコニコと笑顔のあやが興味津々で、首を突っ込んできた。

――……家が賑やかだ。

マスターに客が来ることを話して、早めに引き上げた俺は、玄関を開けてちよつと躊躇した。

一体何人増えたんだ? いや、二人だろ? あやと、碧音さんの母親と……で……。何で、こんなに賑やかなんだ?

俺は恐る恐る廊下を抜け、リビングへ続くドアを開けた。案の定、三人の視線が集中した。

「おかえり、克己」

先頭切って立ち上がったのは、あやだった。

「―― ……うわっ。そっくり…」

そんなあやの後ろ手に居た二人を交互に見つめて、思わず声が漏れてしまった。笑っちゃ駄目だ。

親子ってこんなに似るものなのか？

思わず呟いた俺から、申し訳なさそうに視線をそらすと、碧音さんからも

「おかえり」

という、小さな声が聞こえた。

「今日、何か早くない？ 『X―クロス―』まだやってるでしょ？」

「ん？ ああ、碧音さんの親が遊びに来てるっていうから、早めに切り上げたんだ」

あやの質問に答えつつ、着ていたコート類を脱ぐと、真葛さんとやらの小さく頭を下げた。真葛さんはそんな俺に気を悪くする様子もなく、にこやかに自己紹介をしてくれた。

中身もきつと、似たり寄ったりなんだろうな。

そう考えると妙に可笑しい。

「克己。お腹すいたわ。あたし今日何も食べてないのよ」

―― ……ったく。あやのやつ。すっかり、彼女気取りだな。ん？ いや、あやはいつもこんな感じか。

「何か作る。待ってるよ。……で、真葛さん？ で、良いですか？」
「ええ」

「何か、嫌いなものとかあったら聞きますけど？」

とりあえず、ないとは思ったが、聞いてみたが予想通りの答えだった。

にこにこそういった、真葛さんは、本当に仕草まで似ていた。

「ほら、真葛さん。二人の邪魔になるから、あっちで、座っててよ」

そういうと、碧音さんは真葛さんをリビングのソファまで、文字通りずるずると引っ張っていった。

克己くんはどう思ってるんだろう？ 私がこんな風に真葛さんに説明してしまったこと。

やっぱり、面白くはないだろうし怒ってるよね。

フツー気分悪いよね。やっぱり。

私でもそうだ。

でも、きっと私なら口に来ない。一人で内に籠る嫌な女だ。

私は、みんなの前に置かれたグラスに静かにシャンパーニュを注いでいる克己くんの姿を、ぼんやり眺めながらそんなことに頭を巡らせていた。

—— …… ルイ・ロデレール社のシャンパーニュかあ。何だか、豪勢だなあ。

目の前で注がれてゆく、ほのかに黄金色に輝くそれは小さな細かい気泡によって混ぜられていて、そのまま、私まで混ざってしまった。ええ良いようなそんな気にさえなっていた。

「あ、美味しい。克己くんって、料理お上手なのね」

「そうですか？ 口にあって良かった」

真葛さんの言葉に、にっこり笑って答える克己くんは、私にとってちょっと怖かった。克己くんの愛想笑って、貴重だ。店に出てい

ても殆ど無表情で接客する子なのに。

でも、その日に用意された、チキンの香草焼きは確かに絶品だった。

おせちにあきた、私の胃にもすんなり入ってくれる。

「克己。コシヨウとって」

「ん」

「ああ、シャンパンももう少し欲しい」

「はいはい」

何だか、複雑。あやと、克己くんの間で交わされる言葉は、何となくカップルっぽい。

いや、違う。嫉妬とかじゃなくて、いや、その、そうじゃなくて、なんというか、私、そんな会話したことないなあ……とちよっと思っただけだ。

自分でまいた種なので、そのことについてなにもいうことは出来ないんだけど。

そんな二人を微笑ましく眺めていた、真葛さんが口を開いた。

「あんたも、早く彼氏作ったら。二人に、悪いでしょう？」

「ああ。そうだねって、悪いって気持ちがあるなら、真葛さんこそ、ホテルにでも泊まってくれたら良かったのよ」

大体、娘に彼氏作れという前に普通なら、部屋を探せというだろう。真葛さんはちよつと普通の斜め四十五度くらい上を見ている。

「酷いわ。そんなこといわないでよ」

「あたしは結構好きよ。真葛さん。だって、あんたと同じじゃない」

さもおかしそうに、私たちを見比べてあやは笑っていた。

ちらりと克己くんのほうも盗み見れば口パクで「そっくり」と重ねられた。

む。面白くない。

親子なんだから、多少は似ていたとしても、そんな笑いをとるところまで面白いようなことはないと思うんだけど。

全く。

私は、グラスのシャンパーニュを飲み干しながら、座りなおし多少荒く息を吐いた。

真葛さんが風呂へ入っている間に、俺は手早くベッドメイキングをしていた。ていうか、つまんねえ雑談してないで、お前らも手伝えよ。

俺は口に出すことのない愚痴を内心溢しつつ、ベッドを整えている。

「碧音さんと、真葛さんは、寢室（こしむろ）のベッド使ったら良いだろ。あやには、碧音さんの部屋に、簡易ベッド用意するから」

そう声を掛ければ、他愛もない話をしていた碧音さんが「克己くんは？」と首を傾げる。そんなの聞くまでもなく決まっているだろ

うけど、一応説明。

「俺？ 俺は、リビングのソファでも寝るから良い」

「風邪ひいちゃうよ」

「別にあたしは良いわよ。一緒に寝る？ 克己」

あやの台詞に、俺とあやは同時に碧音さんを見ていた。ぼふっと音が鳴りそうなほど瞬時に真っ赤になった碧音さんに思わず噴出す。

「あんま碧音さんからかうなよ」

「え？ いや、今のは、克己くんが……」

わたわたした碧音さんにあやがあっさりと答える。

「ううん。碧音をからかったんだけどね？」

それ以外にないだろ。苦笑して、肩を竦めると最後に残していた枕のカバーを取り替える……というか俺相当マメじゃね……。いや、良いんだけど。

「でも、何で素直にいわないの？ 真葛さんなら、そんなに、反対とか、しそうなタイプじゃないじゃない」

ベッドの脇に腰掛けて雑談を続けていた二人が、俺も気になっていた話題にいつも簡単に触れたので、つい聞き耳をたてる。これは仕方ない。当事者なんだから。

碧音さんはその質問に明らかに、動揺していた。

「いや、ほら、ちょっと変わってるでしょ。それに、弘雅さんって結構厳しいから。うち、普通の家とちよっと違うのよ」

「ふーん。まあ、普通と違うのは、あんた見てれば分かるけどさあ」
「そうそう、って……それどういう意味よ……」

あやのやつ。話をそらしたな。意図してあやが話題を逸らしたことが若干憎らしくはあったが、これ以上引っ張っても碧音さんを困らせるだけで、今これ以上碧音さんがこのことについて話すことはないだろう。

そう、見切りをつけた俺は最後の枕をぼふっと定位置において、二人を残したまま寝室をあとにした。

そして、黙々と残っていた夕食の後片付けを始めてしまっていた自分がつくりと肩を落とす。

俺って、貧乏性なのだろうか。

いつの間にか、所帯染みてじっとしていられなくなってしまったる自分にふと気がついた。

俺が部屋を出て程なくすると、二人はあとを追うようにリビングまで出てきていた。

リビングに戻ると、碧音さんはまず携帯を片手に、うろうろ……そして、やっと決心がついたのかどこかに電話していた。

別に立ち聞くつもりはなかったけれど、そこから普通に話をするから、普通に聞こえる。

「もしもし、弘雅さん？ ああ、ごめん清明きよはるだったの。何か、暫らくきかないうちに、弘雅さんそっくりになっちゃったねえ。それより、弘雅さんになってもらえる？」

—— ……実家か。

俺は、何だか理由もなくホッとしていた。

「あや。珈琲でも飲むか？」

「貰う。それにしても、TVもつまないわねえ。特番って、代わり映えしないから、あたしあんまり好きじゃないのよ」

ぶちぶちと、返事の返ってこないテレビに向かって文句をいっているあやの前に、珈琲カップをセットして、珈琲を注いだ。

そして、柔らかで暖かな香りが辺りを包む中……——。

「弘雅さん——！」

—— びくっ！

突然大きな声を上げた碧音さんに、俺とあやは顔を見合わせて、思わず肩を強張らせたあと、笑ってしまった。そんな俺達に気がついて、ちよつと顔を赤らめて背を向けると、声のトーンを落とした。

もう、遅いつて。

それより、厳しい父親じゃなかったのか？

「弘雅さん、あのね。こっちに真葛さんが来てるのよ。分かってるの？」

『碧音ちゃんか。久しぶりだね。たまにはこっちにも帰ってきてよ。清明も寂しがってると思うよ。本人は強がってるけどさあ』

ううう。頭痛くなってきた。

こっちは真葛さんのことで手一杯なのに、相変わらずの弘雅さんのおつとりのんびりとした話口調に少々苛立ちを覚えて、まだ、のんびり話をしていた弘雅さんの言葉を切って強引に話を続けた。

「明日！ 必ず迎えに来てね。分かった？」

『うん。分かったよ。ごめんねえ。碧音ちゃん。真葛ちゃんが迷惑かけてるみたいで』

「みたいじゃないよ！ 迷惑っ。大迷惑なのっ！ 分かる？ あ、じゃあ頼んだよ」

真葛さんが、浴室から出てくるのが見えて、私は慌てて電話を切った。

「なんか、すごい。ゴージャスだった！」

出てくるなり、少し興奮気味にそういった真葛さんを見ていたら、何だか同じ様なことを自分もいったような気がして、ちょっと恥ずかしくなった。

同じことを克己くんも思ったのか、視界の隅で一人で肩を揺らしていた。

「ほら、先に休ませてもらおう。うろろうしてたから、真葛さんも疲れたでしょう？」

「はいはい。分かったわよ」

「あや、克己くん。先に休ませてもらうね。今日は本当にごめん」「おやすみい」

また、真葛さんが必要のないようなことを話し始めてはいけないと、私は無理矢理、真葛さんの背中を押して寝室へ向かった。

碧音さんたちが寝室に消えたのを待っていたかのようにあやは口火を切った。

「で、どんな感じ？」

「どんなって？」

何を問われているのか分からないわけではないけれど、あえてはぐらかせば、あやはくすくすと笑ってローテーブルに載ったカップを奥へずらし

「お酒のほうが良いわ。何かない？」

自分の要求を述べる。あやは、どこまでもマイペースだ。

「ブランデーで良いだろ」

仕方なく、俺は後ろを振り返り、リビングのコーナーの棚に置いてあったブランデーをとり、テーブルに載せると、立ち上がり氷とグラスをとりキッチンへ移動した。

—— …… がらがら。

グラスに直接氷をいれるとあとは自分でやれとばかりに、グラスを手渡した。

あやは特に文句をいうでもなく、受け取るとグラスに飴色のブランデーを注ぎ、からからと、グラスを揺らす。

俺はその隣に座り、あやの姿をまじまじとみたが、相変わらず綺麗だという以外の言葉は浮かばない。

「あんたは、何だか、丸く収まっちゃってるけどさ。あの子の方はまだ、複雑なのかしら？」

—— …… ぽつり。

一言、そういったあやの言葉はその言葉の意味以上に俺に重たくなのしかかった。正直、きつと複雑なのだろう。

だから、碧音さんはどうする術も見出すことが出来なくて、こうなってしまうんだ。碧音さんにとって、俺はまだ、そこまで確立された何かにたどり着いていないのだろう。

そう、考えると心のどこかが、ざわざわと騒いでいた。

「あらら。黙っちゃったわね。良いのよ、別に」

「何が？」

「うん。良いの。休み中もちょっと心配だったけど、碧音。大丈夫だったみたいだから、休みの間に顔が見られて良かったわ」

「そう、か」

あやはそうだったが、碧音さんはこここのところちょっと妙なときがある。

あの日、実家から帰った……そうきつとあの日から、たまに心ここにあらず。といったように、遠くを見てるときがある。

そのとき一体何を考えてるのか、今の俺では分かることが出来ない。

分からないから、分きたいのに……その分かる術が見つからない。

小さく溜息を吐いた。そんな俺を見てか、あやは微かに目元を緩めた。

「良いのよ。分かうとする姿勢がきつと、大切なんだと思う。分かることが出来るか、出来ないかはまた別の話。でしょ？」

「やけに道徳的なことをいうようになったな」

「ふふ。碧音の受け売りよ。あたしの言葉じゃないわ。じゃ、ご馳走様。あたしも寝るわね」

にっこりと、そう話し終わるとあやはその場を立ち、碧音さんの部屋へ消えていった。

俺はその姿を見送ると、空いたグラスにストレートで注いだ。
今夜はまだ、眠れそうにない…… —

いつもなら、隣には克己くんが眠っているのに、今日は真葛さんが横になっていた。

何だか、子供の頃のように少し可笑しい。

「子供の頃みたいね」

どうやら、真葛さんも同じことを考えていたようだ。

「そうだね」

零れた笑いをそのままに頷くと真葛さんは不意に真剣な顔になった。

「どうして、碧音ちゃんは、うちを嫌うの？」

そして、かけられる問い。もう、何度目だろう。そして私の答えも代わらない。

「—— ……別に。別に嫌いなわけじゃないよ。嫌いなわけじゃないけど……。何だかいられなかったの。ごめんね」

うん。そうなんだよ。

別に自分の実家に恨みがあると息苦しいとか、そんなんじゃない

って、何でだかは分からないけど、いられなかった。田舎だったからとか、そういう理由ではなかったのだけだ。

そんな私の気持ちを知ってか、知らずか、真葛さんは優しく私の頭を撫でた。

もう、子供じゃないんだけど。

そうぼやきたい気持ちもあったけれど、まあ、良いかと許せてしまうのは真葛さんの特権だと思う。そんな私に気を良くしたのか、真葛さんはぽつりぽつりと話を続ける。

「良い人たちね。あやちゃんも、克己くんも」
「うん」

いつだって、私は人に恵まれている。だからそれだけは自信を持って頷ける。

「あたし、思ったんだけど」
「うん？」

「別に本当のこと、いっても良かったんじゃないの？ 怒ったりしないわよ。お母さんは」

—— ……どきっ。

真葛さんの一言に、私の心臓は止まりそうなくらい驚いてしまった。

私は驚きすぎて、次の言葉が出なかった。そのことを察してか、真葛さんは話を勝手に続けてくれる。

「見れば、分かるわよ」

そういつて余裕の笑みを浮かべた。

「最初は、碧音ちゃんにあんな格好良い彼氏が出来るとは思わなかったから。あやちゃんの彼で納得行っただけ、そうじゃなかったみたいね」

「いつ、分かったの？」

私の声は物凄く、細く、小さな声になってしまった。

顔は茹蟄のように真っ赤になってしまっているだろう。こんな時期なのに、エアコンも止めているのに、暑い。

それが、面白かったのか、真葛さんはくすくすと、笑っていた。

「食事をしてたときよ」

「え？」

食事のとき？ 私にはそれがどうして、分かるきっかけになったのか想像できなかった。

「ほら、あやちゃん。雑談以外に克己くんに、いろいろ注文してたじゃない？」

「何？ 胡椒とってとか？」

「そうそう」

確かにいつてたけど、それがどうして、分かるきっかけになったのかまだ私には分からない。食卓では普通の会話だと思う。

「碧音ちゃん気がついてなかったの？」

「何を？」

「どうして、碧音ちゃんがそれを口にしないで良かったのかってこ

とよ」

—— ……まだ、分からない。

私の頭に浮かぶのは疑問符ばかりなのだけれど、どうすれば良いのだろうか？

「まったく。碧音ちゃん、鈍いわねえ。それが当たり前になってたんじゃないの？ だから、気がつかないのよ」

「え？ え……何が？」

「克己くんが、戻してくれてたのよ。貴方が使う順番に……。何もいわなくても、食事が続けられるように、手の届く場所に」

—— ……あ

「これって、簡単なようだけど、複数で食事をする場合、結構大変なことだと思うわよ。それだけ、克己くんは碧音ちゃんのことを良く見てくれてたのよ」

「—— ……ああ、そうか……」

そっか。

だから、私は今日のあやのような会話したことがないなあって思ったんだ。そんな簡単な答え、私は全く気がつかなかった。克己くんが、私を見て、ちゃんと気にかけてくれて……。ああ、だから……。そう合点がいくと、ちょっと嬉しくて胸がじわりと温かくなり、顔が綻んでしまう。

けれど、その暖かな気持ちは、やっぱり直ぐに萎んで……

—— ……たとえそれが本当だとしても。

「でも、それがばれてしまっても、私はいうわけにはいかなかったの」

私が、克己くんを“彼氏”だとか“恋人”だとか紹介するわけにはいかないの。もう、決めたことだから。

何度も何度も頭で理解してきたことだけれど、私はいつも苦しくなって、きゅっと下唇を噛むと双眸を伏せて首を振った。

真葛さんは、何かを察することが出来る人だから、私の触れて欲しくないことまでは探ってこない。だから、今も、どうして？とは決して聞き直さない。

「―― ……そう。いろいろ、あるのね」

「……うん。いろいろ」

それ以上は、話す気になれなくて、私は、チクチクと痛む胸を堪えて真葛さんに背を向けてしまった。

「疲れたら、帰って来なさいよ。その場所はいつでも、あるんだからね」

「―― ……」

優しく、そういつてくれた真葛さんに、私は返す言葉も無く、

ただ、ただ

頷くだけだった……。

結局、真葛さんが帰ったのは、翌日の夕方だった。

碧音さんの父親が駅まで迎えに来たらしいので、碧音さんは一人で送るといったのだけど、それを、あやが許さなかった。で、俺も碧音さんの父親というのにも、興味があって丁度バイトに出るついでもあったし、結果的にみんなで見送りに行くことになってしまったわけだ。

「弘雅さん！ 遅いっ！」

『弘雅さん』そう、碧音さんに呼ばれた中年層の男性は碧音さんのいう『厳しい父親』とは到底いえそうにない、もう見た感じから温厚そうな物腰の穏やかそうな人だった。

碧音さんに、遅いと怒られても少し困った顔をして笑っただけで、いい返すそぶりもなかったことも、そのことを事実だと裏付けているようだ。

そんな、やり取りを見て、また俺はあやと顔を見合わせて笑ってしまった。

「また、碧音ちゃんは弘雅くんにそんなこといって。ほら、弘雅くんも、びしっといってやんなさいよ」

「真葛ちゃん。謝るのは、君の方でしょう？ ちゃんと、二人にもお礼いったの？」

心地よく耳に入ってくるような、そんな声で碧音さんの父親は真葛さんに促すと、こちらに視線を向けて、深々と頭を下げた。

反射的に俺もあやも、頭は下がっていた。

そんな様子を見て、慌てた碧音さんが、俺とあやの肩を叩いた。

「謝るのも、お礼をいうのも、こっちなんだから、二人が頭下げないでよ！」

そういった、碧音さんの顔は真っ赤だった。

「さあ、そろそろ、お暇しましょう」

「うん。そうだね」

ホームの時計に目をやって、そういうと電車に乗り込んで行った。

「あ、そうだ。克己くん」

電車のステップで足を止めた真葛さんに呼ばれて歩み寄った俺は最後に真葛さんと、2・3言交わしてドアは静かに閉まった。

今回は何となく、碧音さんの育った環境が見え隠れしたような気がして、ちょっと得をした気分で俺は二人を見送った。

駅から出るまでに、あやにはお誘いの電話が入ったようで、電車が走り去るのを見送り、表に出ると一台の高級車に乗り込んで、俺たちのことを気に留めることもなくさっさとどこかへ行ってしまった。

あや、本当にどこまでもマイペースなやつだ。あいつにだけは振り回される男になりたくない。

「ねえ、克己くん」

「ん？」

「真葛さん。何ていったの？」

思っていた通りの質問が飛んできたので、俺はちよつと可笑しかった。つい、笑いが零れた俺に碧音さんは凄く焦った様子で重ねる。

「何？ 何か変なこといわれた？！」

「あゝ。いや『碧音ちゃんをよろしく』っていわれたただだよ」
「―― ……う、そっか」

結局、隠しきれていなかったことに、もっと驚くかと思ったけど、碧音さんの反応はそうでもなかった。

それから碧音さんは何もいわなくて、何か考え事をしているようだったから、俺はそんな碧音さんに一緒に『X―クロス―』へ行くことを、提案したが返事は……

「ううん。家に戻るよ。克己くんこれから仕事バイトなのに、ごめんね……少し、疲れちゃった」

そういつて微笑んだ顔が、なんだか泣いているようで俺はそれ以上引きとめられなかった。

「碧音さん？」

「うん？」

別れ際呼び止めても続く言葉が見付からない俺は、ほんつとーにコミュニケーション能力値が低いのだと痛感する。

「……いや、その……なんでも、ない。え、と。早く帰るから」

「うん。頑張ってね」

にこりと見送られその笑顔にほっとする。

良いんだよな、俺……間違っていない、よ、な？

この自問自答も最早日常茶飯事になっていた。

私は、克己くんと分かれて、とりあえず家に帰った。

誰も待つもののない部屋は、薄暗い上に一人家に入るとやけに広く感じた。何となく、克己くんが「無駄に広いだけ」と実家のことをいっていたのが分かる気がする。

特に空腹も感じなかったし、明日から仕事始めだ。とりあえずお風呂にでもはいるう。

そう、思い立った私は、ゆっくりと半身浴を行い……ぼんやりと橘さんとの話を思い出していた。

……つう……。

静かに頬を伝ったものは、涙だったのか、それとも、ほんのり乳白色に色づいたお湯が細やかな気泡にはじけてちったものだったのか。

自分でも良く分からなかった。

特に、悲しかったわけでもない。

辛いわけでも、

苦しいわけでも、

——…きつと……ない。

「ふう」

ぼーっとする頭を、おこしてお風呂から上がった。

ドライヤーの熱が暖かい。何のメイクもしていない私の顔はやけに情けなく鏡に映っていた。

碧音さんのことが気にならないといったら嘘だけれど、店に入れば嫌でもそちらに集中しなくてはいけなくなるわけで、仕方なく俺は色々と答えのないことを悩むことを辞めて仕事に従事した。

そんな中、店にふらりとやってきた透は、挨拶もそこそこにカウンターの一角を陣取って、いつも通り知り合いならと許される感覚で接客に出る。

「珍しいな」

「ああ」

小さな返事しか、返ってこない透はいつもと全く違っていて、俺自身どう対処したものか、判断がつかなかった。何かあったのか、訪ねようかとも思ったが、そんなことを気にするのは恐らく俺らしくない。

逆に笑い飛ばされてしまうのは、目に見えていて、俺は喉まででかかった言葉を飲み込んだ。

「はあ……。良いよなあ。克己は」

「何が？」

深く深く、体中の酸素を出し切るような、溜息を吐いてカウンタ―に突っ伏した透に、俺は問い返した。

カウンターテーブルと仲良くなった腕の間から恨めしように、俺

の顔を一瞥して、再び視線をカウンターに戻した。

「俺も、彼女が欲しい。真だつてよお。最近付き合い悪いしさ。年末始なんて、みんな、やれ旅行だ！ 里帰りだ！ で、誰もいやしねえしさ。克己だつて、クリスマス以来、連絡取れないしよお。お前ちゃんと、携帯持ってたかあ？」

「何だそんなことか、お前女友達とやらは、腐るほどいるだろうが？ それで、良かったんじゃないのか？」

—— ……そんなこと。

俺にとってそれはそうとしか、いいようがなかった。が、どうも本人にはそれが気に食わないらしい。

「ちつ。まあ、克己には分かんないだろうけどさ。良いけどな、お前のそんな疎いところも、もう慣れたしな。……というわけで、今日は俺に付き合つて、お前も飲め！」

「仕事中」

何が、というわけなのかさっぱりで、とりあえずはぴしゃりと断つたが、きつと断りきれないだろうな。通るの強引さは時にあやのそれに匹敵する。全く。

私は、今回のことを克己くんに聞き咎められるのが怖くて、いつもより早い時間にベッドに入った。明日から仕事が始まって、いつもと変わらない生活が戻ってくる。

変わったことといえば、暮らす部屋が変わったのと、隣にいる手が、ほんの少しの間で全く違う相手に変わってしまったということ。

その両方とも私にとっては大きな変化だと思われたけど、今はこんなに落ち着いている。

私の心は穏やかだ。

一人でいても悪い夢を見ることもない。食事が喉を通らないということもない。

―― ……私は、克己くんに救われている……

だから、私が彼に何かしてあげられることがあるとすれば……

そう思った瞬間。

目頭が熱くなるのを感じた。

でも、幸せな時を得てしまったら……それを失うときの苦しみを同時に覚悟しなくてはいけない。

これから、私はその覚悟をゆっくりと、そして確実に固めていかななくてはいけない。

私を助けてくれた、彼のためにも。

そう、決意を新たににして、私はゆっくりと瞼を落とした。ゆるゆると波間を漂うような睡魔の波は、ほんの少しのアルコールの手を借りて、私にゆったりと覆い被さってくれる。

そうやって、私は静かに眠りに落ちていった。

案の定。透の愚痴は、的を得ないまま延々と続いた。解放されるころには日付を跨いでいたと思う。

ふわぁ……俺は出てくる欠伸を噛み殺して、もう遅いから少しだけ息をひそめて――そんな以前なら絶対必要なかった気を遣いつつ――玄関の鍵を開ける。

碧音さんは、部屋の明かりを落としても、廊下の照明だけは落とさなかった。間接照明だけで良いと、この間いったのに、それでは嫌だと断られた。

―― ……暗いところが怖い？

笑いながら聞いたのに、碧音さんは突っかかってきた。当たっていたのかもしれないし、寂しいのかもしれない。

ふと、靴をそろえながら上がっていると、いつものようについた照明を見上げて思い出してしまった。

ていうか、ここが点いてるってことは、もう寝てるのか。

どうも俺の身体は、碧音さんほどアルコールに強くは出来ていないらしい。

透の愚痴に付き合っただチビチビと、口にしていたけれど、そんなに飲んだつもりはないが、ふわふわと調子が良い。

はつきりしない頭を、何とか奮い立たせて寝室までたどり着いた。

ドアを開けると、碧音さんの静かな心地よい、寝息が聞こえてくる。

もう、結構前から寝ていたのか？ サイドテーブルの上において

ある、小さな照明をつけると部屋の中がほんのり明るくなった。

—— ……風呂は朝にしよう。

そんなことを考えつつ、マフラーとコートを脱ぎ、ベッドの脇にあるソファにほおって、着替えを済ませた。

「—— ……ん」

と小さく寝返りを打った碧音さんの顔を覗いたが、目は覚めていないようだ。

そのとき、少し気になることに目が留まった。

—— ……泣いてたのか？

はっきりと、残っているわけではないが、微かに目じりを伝った跡が伺える。

俺の知らないところで、何かを考えて、傷付いている。

そう思うと、切なかった。

と、同時にどうして、その「何か」を話さないのか？ という疑問にも、ぶつかってしまう。

いわなきゃいわないで、構わないはずなのだがそれを理解しろと思われていても、理解できるほど俺は大人ではない。

隣にそっと入り込み、その頬を撫でると微かに意識が戻ったようだ。

「—— ……おかえり」

薄明かりがまぶしかったのか、薄っすらと開きかけた瞳を再び閉じてポツリとそう呟いた。

俺は「ただいま」と返す替わりに、小さく声を出したその唇に口付けた。

「ん……。――……。克己くん、飲んでる？」

――……。返事はしなかった。

静かに口付けを繰り返し、ボタンに手を掛ける。力の弱い手が、怪訝そうに押し留めようと僅かに抵抗したけれど、無視した。

「ちよ、と……。――……。んう……。」

克己くんは優しく私の頬を撫で、静かに頬から首、そしてボタンの外されたパジャマが肩から滑り降りた晒されてしまった肩口に唇が触れていく。

その行為は、夢から覚めきっていなかった、私の頭をはっきりと目覚めさせるには十分でじわじわと身体中が熱を孕んでくると、苦しい吐息が甘く変わる。

克己くんは何もいわなかったけど、その身体のいたるところに繰り返される口付けは、言葉よりダイレクトに苦しげなその気持ちを伝えた。

「―― ……ねえ……」

「んう？」

「―― ……泣いてた？」

「ん……え……なに……」

ふいに視線を合わせると、ほんのり頬を紅潮させた克己くんの眩きが降ってきた。私は一瞬何を問われたのか分からなくて、克己くんの瞳の中で逡巡したけれど、私が答えを紡ぎ出す前に、

「一人で、泣くな」

切れ長の瞳を悲しそうに細めて、そういつてくれた克己くんに胸が締め付けられた。

そしてそれと同時に、私は急に克己くんが愛しくてたまらなくなつた。

だから、私も……

―― ……返事はしなかった。

うつすらと開いた唇から、するりと割り入って舌を絡めると、ほんの少しアルコールの香りがした……今夜、私はその香りと味に酔いしれることにした……。

―― ……時折漏れる、熱気を帯びた吐息の中……絡み合う腕が……身体が……言葉以上のものを感じ、そして伝え合った……。

「—— ……ん。頭いてえ」

頭の痛みに耐えかねた俺は、もがくようにベッドで寝返りを打った。と、同時に……

「しまった!! 寝坊した」

突然戻った意識に後押しされ、俺はベッドから飛び起きた。遮光カーテンの隙間から陽光が漏れている。

今日は、碧音さんの仕事始めだったのに。

そう思った俺は慌てて隣を確認したが、もう既に、碧音さんの姿はそこにはなかった。部屋を見渡すと、隣のソファの上に、彼女のパジャマがかけてある。

何だ、一人で起きたんだな。

俺は、ほっと胸を撫で下ろすと、二日酔いの頭を何とか起こして寝室を出た。

廊下に出ると、珈琲の良い香りが鼻腔を擽る。これは、碧音さんのオリジナルブレンドの香りだな。柔らかくて丸い香りがする。

ふと、そんなことを思いつつ、こめかみを押さえながらリビングまで出てきた。

「おはよう。克己くん。その顔は二日酔いでしょ？ 珈琲でも飲む

？」

「――…ああ。もらう」

仕事が喜ばしいのかどうなのか、今日は朝から、はっきり目が覚めているようだ。にこやかに、俺を迎えると椅子を勧めた。

「あ、と。何か作ろうか？」

椅子に腰掛けるのを躊躇した克己くんは、そうやって私の顔を見つめた。

「大丈夫だよ。トースト焼いて食べたし。もう、出かけるから」
「なら、良いんだ」

苦虫を噛んだような顔をしつつ克己くんは、そういうと腰を下ろした。

やっぱり克己くんは表面的なものとは裏腹にとっても優しい。自分が辛いのだからもつと休んでいても良いはずだし、私に付き合うことなんてないのに……。

「珍しいね。克己くんが二日酔いに悩むなんて」
「碧音さんが、離してくれないから酔いが回ったんだよ」

――…なっ！

ぶわっと身体中の熱が顔に集結する。

「わ！ 私は別に、克己くんが夜中に起こすからっ！」
「はははっ……いてて……。照れなくても良いだろ」

突然突拍子もないことをいうもんだから、年甲斐もなく大声を上げてしまった。

一気に沸騰した頬の熱を取り去ることも出来ないまま、私は椅子にかけてあったコートを、取り上げるとバッグを無造作に取り上げて玄関へ向かった。

靴を履こうと玄関の脇にバッグを置くと奥から克己くんの声が響いた。

「珈琲はあ？」

「っ！！」

人のこと最後までからかって！

確かに飲むかと聞いたのは私だけど、いつもなら自分で何でもやっちゃうくせにっ！ 絶対私が玄関でしゃがむ頃合いまでまって声を掛けたに違いない。

克己くんは時々意地の悪いからかい方をする。

「―― ……っ！ もうっ！」

私は、キッチンに戻り、無造作にサイフォンからカップに注ぐと克己くんの前においた。

「じゃあ、私は行って来るからね」

吐き捨てるようにそういった私を呑気な笑顔で見つめると、突然

思い出したように声を上げた。

「……そうだ。夕飯何が良い？」

「え……と、イタリアン」

反射的に答えてしまった。それが可笑しかったのか克己くんはくつくつと笑いながら続ける。

「で、何？」

「パエリア」

「そりゃ、スペイン料理だろう」

「……っ……じゃあ、スペイン料理で」

可愛くない。可愛くない。可愛くない。

うちの弟と同じくらい可愛くないっ。

むすりと頬を膨らませたまま、私は足音高く玄関を出て行った。

碧音さんのいつものボケっぷりに突っ込んだら、ふくれっ面のまま、出て行ってしまった。

俺は、その後姿を見送ると、残された珈琲カップに手をつけた。緩やかに立ち昇る湯気が、珈琲のクセに苦味をアピールしてこない、丸い香りを漂わせる。

休みが終わるまでに、吉野さんに頼まれた書類でも、持っていないとか。

で、帰りに買い物して、パエリアかあ……トマトベースが良いかなあ……。

そんなことを考えつつ、冷蔵庫の中身を思い出していた自分に気がつき何だか可笑しかった。

ちらりと、自分の腕を見やると例のブレスレットが大人しくそこへ収まっていた。

今思えば、このときには、もう特別だったのかも知れないな。

なんとなくそんなことを考えて、一人気恥ずかしくなり、俺は残りの珈琲を呷った。

寒いと思ったら、昨日は雪が降っていたみたいだ、歩道の端に薄っすらとまだ残っていた。

ここらへんの雪は積もってもたいして綺麗とは感じられない。空気が汚れているせいかな、あまり雪が白く見えないから。

地元なら寒いときはとことん寒いし、周りに何もなければ一面銀世界になる。畑と道端の境界線があやふやになって、落ちることも……ない。そんな間の抜けたことはやらない。うん。

それにしても、もっと、歩きやすい靴で来るんだった。

ショートブーツで出てきてしまったので、歩きにくくて適わない。今日は、仕事始めなので、大したことはないはずだし、残業抜きで帰宅出来るだろう。だから、帰りに雪に降られるってことはないと思うんだけどな。

でも、その前に社長の挨拶とか、聞かされるんだよねえ。今年の方針とか、プロジェクトの発表とか、それが結構な時間をとって、社員には辛い限りだし。そのあと社報で回ってくるから、二度手間感が拭えないんだよね。

去年は確か、そのために2・3時間大ホールに閉じ込められていたことを思い出して、私は少し気が重くなった。

「おはよう。何、新年早々、肩落としてるのよ」

――…ぽんっ

そんな私の肩を叩いたのは、あやだった。

「おはよう。今日は早いね」

「失礼ねえ……。別にいつも重役出勤してるわけじゃないわよ。それに、今日は朝の準備があるから、あんたたちより、忙しいのよ」

私の言葉に、笑いながらそこまでいうと「お先に」といって足早に追い越していた。

そっか、今年の予定をロビーの電光掲示板に表示させなくちゃいけないから、今日あやは忙しいんだよねえ。

のんびりとあやの後姿を見送りつつ、私は足元に気をつけて慎重に会社へと向った。

10時ごろに家を出た俺は、とりあえず学校へ向かうことにした。

もう日も高くなりつつあるのに、まだ路上の雪は溶けきっていない。冷え込むわけだ。俺は足早に目的地へ向かった。

まだ、休みは終わってなかったが年末同様、学内には割りと人気があった。このくそ寒い中、グラウンドを走っているクラブの奴らを横目に、研究室のある校舎へ急いだ。

がらっ。

軽くノックをして、静かに引き違い戸をあけて部屋へ入ったが、部屋にいたのは初老のおっとりとした感じの井川教授だった。

俺は個人的にこの人が割りと好きで、雑然とした机の奥からゆっくりと立ち上がって「どうかしましたか？」と訪ねてくれた教授に思わず目を細めた。

「突然すみません。吉野さんは今日いらっしやらないんですか？」

そう聞いた俺をどう勘違いしたのか教授は「君もかい？」とでもいわんばかりに微笑むと

「先ほどまでは、いらしたと思うのですがねえ。今はいませんねえ。何か、用があったんですか？」

良く分からない、返事を返されてしまった。

俺まで、吉野さんのファンの一人とでも思ったのだろうかことは明らかだった。

別にそれを否定する必要もないので、とりあえず彼女から頼まれていた書類を差し出すと、本当に用事があったことに驚いたのか、細められていた目を一瞬見開いたが、すぐにいつものおっとりとした表情にもどった。

「渡しておきましょうか？」

「そう、ですね。じゃあ、頼みます」

特に彼女に会う必要は俺にはなかったから、それで充分だった。俺の手の中から、そのファイルを受け取ってくれた教授に軽く会

釈をして、俺は部屋を後にした。

このまま帰ってもすることないし、図書館にでも寄っていくかな。

昨日の雪雲がなくなり晴れ渡った空を、ふ……と見上げて足を進めた。

延々と社長他上層部の話は、半日近くに及んでいた。とりあえず、葉月チーフに頼まれていたので、メモを取ってはいるんだけど、これでもやってなかったら、きっと寝てただろうな。

「今年、一番のプロジェクト事業として、海外支店の拡大に力を注ぎたいと思っている。そこで、この統計から」

壇上から、常務の今年の主要プロジェクトの内容が説明されていた。この説明が最後になりそうだった。

—— …… 海外事業…… か……。

そういえば、英国支店の方には小西さんも行きたいっていったな。

プロジェクトメンバーに小西さんもはいつてれば良いのに……。

素直にそう思っていた矢先、メンバーの発表がなされていたが、残念ながら小西さんの名前は挙がっていなかった。

結局、私たちが会場から解放されたのはお昼前だ。

チーフの計らいで、ちよつと早い休憩に入ることが出来た私は、とりあえずあやのところへ足を運ぼうかと思ったが、今日は情報処理室は忙しいだろう。

その中で、チーフが抜けるわけにもいかないだろうし。仕方なく、私は一人でランチを取りに出ることにした。

「白羽さん。一緒に良いですか？」

ぼんやりと、エレベータに乗り込んだ私の後ろを追いかけてきたのは、弥生ちゃんだ。にこやかに乗り込んできた弥生ちゃんに、私は小さく頷くとドアは音もなく閉まった。

「小西さん。今年も残念でしたねえ」

「……え？」

「海外事業の話ですよー。どうして、一緒にあげなかったんですかあ？」

私は、弥生ちゃんのいつてる意味が分からなかった。

どうして、海外派遣の話で私の話まで出てくるんだろう？ 思わず、そんな疑問に駆られて怪訝な顔をしてしまった。

「どうせ、このまま、付き合ってたら『結婚』とかも考えたんじゃないんですか？」

「……」

答えられなかった。

「どうしたんです？」

言葉無く頷いた私の顔を覗き込むように、弥生ちゃんの言葉が降ってきた。

—— ……うん。

私もそのつもりだったんだよ。本当に……。

そう、声に出していいなかった。

でも、いえなかった。

私は「何でもないよ」と首を振って、静かに止まったエレベータから下りた。

「さて、何か、食べたいものがある？」

「パエリアの美味しいお店見つけたんですよ。行きませんか？」

「ああ。駄目。パエリアはパス」

「どうしてですか？」

「夕飯の予定なの。だから」

弥生ちゃんの残念そうな顔に僅かながらの罪悪感を感じながらも、結局近くのカフェに入ることにした。

「それで、さっきの話なんですけど。どうしたんですかぁ？」

今年の冬はココアが身体に良いつて話が伝わって、二人ともそれを飲んでいた。

一口すすって、一息吐くと、弥生ちゃんはさっきの話を戻してきた。

隠したって仕方のないことだし、きっとそのうち黙っていてもばれてしまうはずだ。

私は小さく溜息を吐くと、そのあとひとつ深呼吸。かいつまんで

小西さんとは別れてしまったことを告げた。

最初その話を聞いた弥生ちゃんは、物凄く驚いた表情をみせたけど、それ以上の理由も何も聞かなかった。

きつと、弥生ちゃんも気を遣ったのだろう。

「でも、一緒するってどういうことだったの？」

こんな話になる発端を思い出して、今更とはいえつい訪ねてしまった。

「別れた」ということを聞いたからかどうなのか、少し戸惑ったような仕草を見せたので、私は続けて話してくれるように促した。

「――……あの、ですね。白羽さん、知らなかったんですか？」

「何を？」

「ですから、あのプロジェクトの参加資格ですよ」

小さく首を横に振った私をみて小声で「やっぱり」と呟くと、弥生ちゃんは話を続けた。

「派遣される本人のこと、対外的なことを考えて、妻子同伴だったんですよ」

「――……え？」

「だから、独身者ではその資格がなかったんです。それで、そういう話が出たんじゃないかなあつと、思ってた聞いたんですよ」

――……知らなかった。

私のカップを包み込む両手は微かに震えていた。

「古河くん」

ぼんやりと、図書館でテキストをめくっていた俺に声を掛けたのは、行方知れずになっていた吉野さんだった。

今日は休みが終わりに近いせいか、ここには人が少なくそのせいか、しんと静まり返った室内に、静かに歩みを寄せる彼女のヒールの音が高く響いた。

「ありがとう。ちゃんと、もらってくれたのね」

にっこりと微笑みつつそういって、俺の隣に腰を下ろした。そして吉野さんは、俺の手からひょいとテキストを抜き取った。

「――・・・用事は済んだだろう？ 邪魔するなよ」

子どものような行動をとった彼女に、ついそっけない言葉をかけてしまった。

「古河くんって、案外几帳面よね。それに、人が話してるのにこんなものから視線を外さないなんて失礼じゃない？ 私に対して」

「――・・・そうか。悪かった……で、他に用事でもあるのか？」

「ああ！ もうっ！！ 感情薄いわねえ」

「いや、俺の感情が薄いとかどうのこうのいう前に、あんたこそ、質問に答えろよ」

一体何がいたいのか、全く検討のつかない彼女に、少々苛立ちを覚えた俺はなるべく相手に飲まれないように言葉を返した。

「別に、何でもないわ。ちょっと、お礼をいいに声掛けただけよ。全く……そんな綺麗な顔して、淡々と話さないでよ」

綺麗な瞳を柔らかく細めると、吉野さんは俺の顔に手を伸ばした。ふわりと、ふれた彼女の身体からは、柔らかいフローラル系の香りがした。

「――……で？　俺は誘われてるわけ？」

軽く意地悪な質問をした俺に、くすくすと笑うと吉野さんは伸ばしていた手を引っ込めた。

「別に、そうとってもらってもかまわないけどね。丁度いろいろと、上手くいなくて、気分良くないし。でも、やめとくわ。何だか、古河くんに染まっちゃったら痛そうだから」

――……痛そう？

俺は聞き返したかったが、その時間を与えてはもらえなかった。そこまでいった吉野さんは、やんわりと微笑み俺の頭を撫でるとそのまま、立ち上がり部屋を出て行ってしまった。

痛いってことは、傷付くってことだよな？

傷つける？

俺が？

碧音さんを……？

どうして？

その答えは今の俺には到底得ることは適わなかった。

俺には、その問いに答えるだけの経験がなかったし、何よりも、考える時間をそこで絶たれてしまったからだ。

「何だ。克己こんなとこに来てたのか？」

「ああ。それよりお前、よく俺のいるところがわかるな」

いかにも、通りかかったようにひょっこり現れた透に、正直本気で驚いていた。

「ん？ 大好きな克己くんのいるところくらい……って……ここ、吉野さん来てたか？」

いつもの返答が帰ってきそうだったが、途中で、話が変わったようだ。

俺にもたれかかりつつ、そう訪ねてきた透に嘘をつく理由もなかった俺は素直に頷いた。

「いたけど、どうしてわかったんだ？」

「――……ん？ ああ。香水だよ。吉野さんの香水って自家製でな」

「自家製？」

「ああ。調香師だっけ？ か、何かの資格みたいなもってて、自分だけの香水を作ってるんだよ。で、ここにその匂いがしたからさ。克己くんの辺りからあゝ」

そういつて絡みつく透に感服しつつ、苦笑いを浮かべた。

「で、いつだ？」

「何が？」

「吉野さんがここ来たのいつ頃？」

急にトーンの下がった透に驚きつつ、俺はついさっき、透と入れ違いぐらいだったのを伝えた。

「そ、か、じゃあ、俺行くわ。今日は、お前の相手しに出てきたんじゃないし」

俺の答えに、いくばくか肩を落とした透は、図書館を後にした。俺も廊下を走っていく透の影をガラス越しに見送って席を立った。透の様子が少しおかしかったのにも、気になったが何より吉野さんがいった言葉の方が俺にとっては引っかかっていた。

―― ……俺は何かを見落としているんだろうか？

—— ふう……。

私は、憂鬱だった。

正直、そんなことも知らなかった自分にも腹が立っていたし。そのことを、あの時小西さんはいおうとしていたのかも知れないと思うと、その場を逃げ出してしまった自分が情けなくもあった。

過ぎてしまったことをどうこういう気にはならないけど、でも、どうせ角を曲がるなら最後まで話を聞いてあげても良かったかもしれない。

彼は、今までのこと全てを清算するつもりだったのかもしれない。

その話を、しっかり聞いてあげる心の余裕が、どうしてもあのない私にはなかったんだろう。

私って心が狭すぎる。

でも、耳を傾けたからといって、私の気持ちは本当に揺らいで変わったのだろうか？

そんなことを考えつつ、資料室から持ち出したチューブファイルを数冊片手に私はエレベーターが開くのをまった。

「あら、碧音。どうしたの世界中の不幸を一身に背負ったような顔してるわよ」

ドアが開いたことに気がつかなかった私に、あやの声が響いた。その言葉に苦笑しながら、中へ乗り込んだ。

あやの問いに答えなかった私を不思議に思ったのか、あやはそのあと言葉を続けなかった。なんともいえない、沈黙を破ったのは私だ。

「あや、あの、さ」

少々、躊躇い気味に声を出した私の話を察したあやは、私を見ることなく上がっていく、階数を目で追いながら答えた。

「良かったのよ。これで……何も迷うことないわ」

「やっぱり、私が知らないってことも……小西さんの考えも……知ってたんだね」

「まあね。あの広報誌作ったのあたしだもの」

二人の間に流れた空気は息苦しくて、一分一秒でも早くここから、出たかった。

「そっか」

この一言が私の精一杯だった。

静かに開いたドアを潜る私に、あやが小さく手を振るのが視界の片隅にうつった。

でも、私は振り返ることが出来なかった。

＊＊＊

夕飯の買い物を済ませ、家に戻ったのはもう夕方だった。

今日のバイトは遅番だし、時間はもう少しある。その間に、夕飯の下ごしらえをして、休み明けに提出になっている、レポートの続きでもやろうか。

俺が出掛けるまでに帰ってきたら良いんだけど。

最近何となく、俺は一人の食事というのが、寂しいものだとし感じるようになっていた。

そんな自分の変化が可笑しくてむず痒くて、一人で思い出し笑いをしながら、キッチンに立つ。

＊＊＊

今日は仕事始めということもあって、残業もなく退社することが出来たというのに、冬の日が落ちるのは早く、あっという間に辺りは真っ暗になってしまった。

あまり気分も良くない。早く帰ろう。克己くんの美味しい夕飯が待っている……って、私これ、完全に餌付けされてるよね。

……仕方ない。玄人裸足で美味しいんだもん。

落ち込む気分を何とか上昇させ、私は帰り道を急いだ。

「碧音ちゃん」

「え……」

そんな私に掛かった声は、聞き覚えのあるあの声だ。とても耳によく馴染んだものだ。

それなのに、反射的に私の身体に緊張が走った。恐る恐る、振り返った私の視線の先にいたのは、間違いなく小西さんだ。

「途中まで、一緒しよう」

白い息を吐き、にこやかに駆け寄ってきた小西さんは、私の了承を待つこともなくそういつて隣に並んだ。

「碧音ちゃん、休みどうだった？ ゆっくりできた？」

「―― ……はい。何とか……色々ありました」

「色々……うん、そうだね、色々」

私は並んで歩く彼の姿を見ることが出来なくて、自分の足先をにらみつけたまま、こくと頷いてごによごによと続ける。

「その、私、この間すいません、途中で、その」

あまりに急なことだったので、言葉なんて浮かんでこない。とてもじゃないが、心臓がきゅうきゅう悲鳴を上げている。

そんな中、ちらりと盗み見ると小西さんはいつも通りの微笑を湛えていた。何だかその表情はそんなに昔に見たわけではないのだけど、とっても懐かしいような気にさえなってくる。

私がとても好きだった表情だ。

遠く離れてしまったもののはず、自分で手放した筈なのに、胸が

とくん、とくんつと高鳴り熱くなる。

未練がましいとでも、いうの、かな？

「じゃあ、今からでも聞く？」

「―― ……え？ あ、それは」

表情一つ変えずに、意地悪な質問をしてきた小西さんは、動揺した私を見て楽しそうに笑った。

「冗談だよ。もう僕の代わりを見つけた？」

何の気もないように、ふとそう訪ねた彼に私は何も答えられなかった。

代わり……そんな風にいつて欲しくなくて、でも否定するだけの言葉がなくて……

ただ、胸が苦しくて、声が出なかった。

「相変わらず、碧音ちゃんは正直だね。そんなとこ、好きなのにな」

ふわりといつもの香りが近くなる。少し前まで、私を捉えて離さなかった香りだ。じわじわと胸が焦げる。

私は慌てて、じりつと距離を取り

「―― ……っ、あの、私、ここで失礼します」

逃げ出した。

本当はちゃんと話すべきなのかもしれない。

少なくとも、克己くんは小西さんの代わりではないことは確かだ。別に私は克己くんを小西さんの代役だなんて考えてもいなかったし、二人に共通点なんてないと思う。

そう確信を持っていたものの、そうはっきりと告げることも出来なくて慌ててその場を離れることが、今の私の精一杯だった。

かつかつと歩道を弾く足音は一つ。

彼は追いかけてはこない。

追いかけてこない。

いつだって、私が追いかける立場だった。
それが不安だった。

それが、とても…… — —

—— …… あ、帰ったかな？

書齋にいた俺は、ふと玄関のドアが開いた気配がして時計に目をやった。

今日は早いみたいだな。

いつもよりほんの少し早い帰宅を確認しつつ、俺はキーボードを打つ手を止めた。

—— …… コンコン。

タイミングよく、ノックの音が響いたので「お帰り」と声を掛けると静かにドアが開いた。

その先に居たのは、もちろん碧音さんだったけど、なんだか様子が違う。寒いところから、帰ってきたというのに、紅潮しても良さが嫌な顔はどことなく青いような気がする。急いでいたのか息も上がっているのに……ざわざわと胸の奥がざわついて、嫌な予感がする。なんだか怖い。

玄関を入ってすぐ、ここへ足を運んだのか白いピーコートも着込んでまだ。

「碧音さん？」

俺は不安げに声を掛け、椅子から立ち上がると、眼鏡を外して机

上に無造作に載せる。

「どうか、した？」

そう訪ねた俺に小さく首を振って、駆け寄ってきた彼女はそのままの勢いで抱きついてきた。

「――……」

「なあ、碧音さん？ どうした？」

彼女が纏った冷たい空気が俺の体温を奪っていく。ぎゅうっと回された腕に力が込められ、少し苦しいくらいだった。それなのに碧音さんは

「どうもしない。どうもしないよ」

そう重ねる。

――……ふう。

どうもしなくて、自分から抱きついてきたりしないだろう。全く。

そう思ったが口にするのは、留まった。

いや、留まったというよりは口にすることが出来なかった。

俺をひしと見上げた碧音さんは、腕を首に回して、ぐいと引き、そのまま唇を重ねた。勢いに押されて、後ろ手にしていた本棚に背を着いた。

――……ばさばさ……っ……

不安定に本棚に置かれていた数冊の本が床に落ちる。碧音さんはそんなこと微塵も気にしない。というか気がつかない様子で、噛み付くように強引なキスを重ねる。

「……んっ、んう、ちょ、ちょっと待てっ！ ほら、コートぐらい脱いだら？」

本当にどうしたっていうんだ？ 一言でいうなら“らしく”ない。

「碧音さん？」

「……ヤダ」

「え」

「克己、抱いて……今すぐ！」

弱り果てた俺の顔をすぎるように見つめた碧音さんの口から出たその言葉に、どんっ！ と強く心臓が跳ねた。

どうして？ というのが当然の問いだと思う。けれど、俺にも当然碧音さんにも聞き返す余裕はなかった。

ぎゅうっと強く抱き締めて、深く唇を奪う。漏れる吐息に、もつとと強請られてより深く、強く……。

「……っは、あ……あつ、み、」

切なげに漏れる声が狂おしい。

いつでも基本受け身な碧音さんに、求められることが素直に嬉しい。

他人にあんなに求められることが、鬱陶しかったのに……必要と

されるのが素直に、嬉しい。

—— ……さああああ。

克己くんをバイトに送り出した私は、シャワーに打たれていた。
暖かなお湯が身体を伝っていくのをぼんやりと眺めながら、自分の言動を思い悩む。

「—— ……これで、良かったんだよ」

ぽつりと、自分にいい聞かせるように呟いた私の頬には水が流れるけれど、それがシャワーのせいなのか、自分が涙を溢しているのか、分からない。分かりたくない……。

だって、悲しいわけでもない、
今が嫌なわけでもない。

克己くんのは好きだし。

彼が想ってくれる様に私だって大切に想っている。

—— ……でも……。

小西さんのことは嫌いじゃない。

そう。

その気持ちが私のなかでぐるぐるとしていて、彼の夢と将来を、

あの一時の私のわがままで駄目にしてしまったのではないかという不安で、どうしようもなかった。

愛されている。

そう実感できれば、こんな思いどうでもよくなるんじゃないかと思った。忘れられるんじゃないかと思った。

でも、結局、私はまだうじうじと、悩んでいた。

がつっ！

「あ、いったあゝ」

ぼんやりとしたまま、シャワーを止めようと手を伸ばしたら、思いつきり手の甲をコックにぶつけてしまった。

じわりと、赤く染まった甲からぽたりと血が落ちていった。

――…痛…。私、何やってんだろう。

お風呂場で、流血するとなぜか止まりが悪い。

後から後から、流れ落ちてゆく血を眺めながら小さく溜息を吐いた。

駄目だ。

駄目だ、駄目だっ！！

こんなこと考えても埒が明かない！

小西さんには悪いけど、あのときの私は、彼を許すことができない

かった。

そう、許せなかった。

たった、それだけの理由ではあったんだけど、あの時の私にはそれは最強的に強い決断理由の一つになっていたんだ。

私は、小さく握りこぶしを作ると、一人で力強く納得した。

「私は間違っ
てなんかないっ！」

馬鹿み^{かぶり}たいに大きな独り言を吐いて、ぶるぶると水を被った犬のように頭を振った。

店に入れば、閉店ギリギリまで人は途絶えない。

それなのに、つい、考え込んでしまっていて手が止まっていた俺にマスターから「まだですか？」と声が掛かる。

「もう出来ます！」

慌てて返事をして、手元へ集中を戻す。

今日の碧音さんは驚くほどおかしかった。結局、その理由は聞けなかったけれど、あの様子ではいうつもりもないだろう。

『克己、抱いて……今すぐ！』

必死な碧音さんの姿が思い出されて、ふわりと胸が熱くなる。

まあ。

たまには襲われるのも良いか。

そして俺は、この後その理由を知ることになるとは、微塵も想像していなくて……そういえば、今日初めて、呼び捨てにされたような気がする。

「くくん」も卒業したのだろうか？

なんて、呑気にそんなことを思い出し、ほくそ笑んでしまっていた。

— 1 —

—— …… やっぱり。あやには謝ったほうが良いかな。

私は、携帯を片手に迷っていた。

別に小西さんのことは私が勝手に知らなかったというだけで、あやには何の罪もないし。実際広報誌にはちゃんと記載されていたわけだから、それに目を通していなかった私のほうが今回は悪い。

小さく溜息を吐くと覚悟を決めて。あやのアドレスを開き通話ボタンを押した。

—— ツー…… ツー…… ツー……

「話中か」

謝ろうと決心したのに電話は話中で繋がらなかったことに、どこかほっと安堵している自分がいることが、ほんの少し情けなかった

「克己……。気持ち悪いから、一人で思い出し笑いするのやめてくれる？」
「っ！」

てつきり、裏には俺しかないと思っていたのに、予想外にそこには優が妙なものを見るように俺を見ながら立っていた。

優と目が合って、急に頬が紅潮した。

俺らしくもないようなことをしてしまったことが、かなり照れくさい。しかも優に見咎められるのは、ちよつとキツイ。

そんな俺を確認して「まあ、どうでも良いけど」と小さく肩をすくめると、優は手に持っていた食器を流しに置き、洗い始めた。

「表の方は大丈夫なのか？」

「うん。今日はお客さん、比較的少ないみたい。もうすぐ、閉店だし、ぼちぼち、片付けとかないとさ」

「じゃあ、変わるか？ 優、表片付けてこいよ」

俺がフロアに出るのが嫌いなのを分かって、優は小さく笑うと、ちゃっちゃとかけてあるタオルで手をぬぐって、場所を俺に譲った。簡単に汚れを落として、食洗機に並べる。

「こっち、片付いたけど？」

新しいオーダーもなく、片付けの済んでしまった俺は、カウンターの方へ顔を出した。

優は残った数人の客の相手をしつつ、空いたテーブルを拭いていた。

マスターは、といえば、静かに、ワイングラスを磨いて満足そうだ。いつもの、のんびりした店内の空気に、ふと安心し落ち着く。

今日はこのまま、閉店まで行くんだろうか？

カラン。

俺がそんなことを考えていると、ドアが開いて一人の客を招き入れた。入ってきた客には見覚えがある。

というか、忘れるはずも、間違えるはずもない、小西だ。

あの日以来、こいつの顔を見たのは久しぶりだった。そんな俺に気がついたのか、いつもどおりの温和な顔を微笑ませて「もう、閉店？」と声を掛けてきた。

「いや……まだ、大丈夫。今日は一人？」

俺の問いに顔色一つ変えることなく、小さく頷くとカウンターの奥へ進み、腰掛けた。

間の悪さを感じた俺は裏へ引っ込もうと思ったのだけど、マスターがそうさせてはくれなかった。

「お知り合いなら、私が、何か作ってきますよ」

ぼんぼん……

と俺の肩を叩くにつこり微笑んで俺の前を通り過ぎた。

もちろんマスターが俺の諸事情なんて知るわけもなく、あくまで好意として気を遣ってくれたのだろうけど今の俺には少々重たい。

しかし、放っておくわけにもいかず、俺は小さく息を吐くと、気を引き締めなおして小西の前に立った。

「久しぶりだね」

「――……ああ」

俺の手の中からおしぼりを受け取りつつ、小西は前となんら変わりのない口調で話しかけてきた。

それにしても、どこかの帰りなのか薄暗い店内でも小西の顔はほんのり赤らんで見えた。

「何か、振ろうか？」

「うーん……そうだなあ。何でも良いよ。君の好きなので」

何でも良いといわれても、俺がこいつに何かって……。

常連でもないのに特に思いつくはずもなく、とりあえず、俺はシエリーのコルクを抜くことにした。

「――……碧音ちゃん元気？」

そっと、前にグラスを置くと同時ぐらいにその質問が飛んできた。

「――……」

小西が一体どこまで知っているのかも分からないため、どう答えたものか思索してる間に、小西の方が話を繋いできた。

「いや、碧音ちゃんから、聞いたんじゃないよ」

――……ということは

「あや、か……」

ぽつりと呟いた俺に、グラスの中のワインをゆっくりと揺らしながら小西はこくと小さく頷いた。

あいつ、口が軽いタイプではないのに、よっぽど嬉しかったんだな。

「まあ、僕は振られちゃった身の上だから、何もいえた義理じゃないけどね」

——……………本当にな。

正直、こいつの顔を見ると碧音さんの辛そうな顔しか思い出せないから物凄く不愉快だ。ふうと隠すこともなく俺は溜息を吐いた。そんな俺に気分を害した風もなく、小西はグラスを見つめたままゆるりと口角を引き上げた。

「いや、別に今更どうのということもないから良いんだけどね」

——………何が、いいたい？

俺は、小西の含みのある物言いをする心中を探ろうとしたが、まだつかめないでいた。

ことりと隣から、静かに付出しを差し出しつつ、マスターは最後の客が店を出たのを確認して、俺に小西の隣を勧めた。

もう、今日は閉店までの客は見込めないだろうと踏んだんだろう。

その言葉に甘えて、俺はフロアに出てエプロンを外すと、小西の隣に座った。そして、そんな俺の前にマスターはグラスを置くと、ワインを注ぎいれてその場を後にした。

「あんなところで、会うなんてね。悪いことは出来ないもんだ」

—— ……何？

「あの時、気付いていたのか？」

「ああ……まあ、場所が場所だったし。君も一緒だっただろう？
その場でどうのというのも存外無理な話だったし、あとで弁解すれば良いとも思ったんだ。碧音ちゃん優しいし、僕のいうことなら何でも頷いてくれるからさ」

—— ……でも、碧音さんは許さなかった。

小西の愚痴のようなおしゃべりに付き合いつつ、グラスの中身を飲み干して継ぎ足した。

「それにしても、まさか、その弁解の余地ももらえないとは驚いたよ。君がいたからかな？」

「—— ……関係ないだろう」

小西と別れ話をするまで、碧音さんの頭の中には、憎らしいことに今俺の隣に座ってるこいつしか居なかったんだから。

俺の気持ちも分からなかったし、別段あらかじめ何かを吹き込んでいたわけでもない。

決断は、碧音さん自身が考えて、きちんとけりをつけたんだ。俺にはそれに対する強い確信があった。碧音さんは見たほど他人に頼るのが上手くない。

そんなことくらい、まだ付き合いの浅い俺だって分かる。小西だって分かっている筈なのに「関係ない？」と肩を揺らした。

「そうかな……。でもさあ……。あれって普通に考えたら、お互い様って感じじゃないのかなあ？ あんな時間に碧音ちゃんだって、君と一緒にいたわけだから」

「あの日は、いろいろあって彼女が酔いつぶれてたから、仕方なかったんだ」

今更、あのときのことをどうのこうの俺がいったって仕方ないから、特に触れるつもりもない。とりあえず碧音さんの名誉だけでも守ればそれで良い。

「丁度良かったんだけどなあ」

「――……。？」

「ん……。？ ああっと、知らないよね。僕、来期から、海外事業部への栄転もほぼ確定していたしそのために、英国支社行きも決まっていたんだ。でも、一つだけ条件を満たしていなかったからね」

あーあ、残念。とカウンターに両方の肘をつき、グラスを包み込んだ小西は、ふうー……。と溜息をグラスに注ぎ込んだ。

R R R……R R R……R R……

やっと、あやの携帯が繋がったのに胸を撫で下ろして、受話器があがるのを待った。

『はいはい？ どしたのお？』

「あや、私だけど……その……」

向こうにも分かってるってことは、私もわかってるんだけど、つい毎回、確認してしまう。そんな私を面白そうに笑いながら、あやはいつものように「分かってるわよ」といった。

『で、どうしたの？ 何かあった？』

「いや、そういうわけじゃないんだけど。その今日なんか、私感じ悪かったなあ……って思ってたその」

『え……？ 何、それで、わざわざ電話してきたの』

あやはますます楽しそうに笑った。

『でも、あんたが気がついてないって知ってて、あたしはいわなかったわ。だから、責められても無理もないでしょう』

「そんなこと」

『あたしはあんたが知らなくてほっとしたわ。知ってたら、あんたは犠牲になりかねない』

「――……犠牲？」

『そうよ。あんたなら、自分が我慢して、許すことが出来れば、あいつの望みが叶う。そう考えてきつと、首を縦に振ったでしょう？ あたしが、何をいったって聞き入れたりはしなかったとも思うしね』

「――……」

――……あや

あやは優しい。

私には、到底見通すことも出来ない先にまで、気を配って、考えてくれて。

『あらら？ ちょっと感動させちゃったかしら？』

「もうっ！ そんなこと、ないよ……でも……」

『うん？』

「ありがとね」

『これで良かったとは、限らないかもしれないでしょう？ だから、良いのよ』

ちよつと、照れくさそうにそう付け加えてくれてたあやが妙に可愛らしかったけど『良かったとは限らない』そういったあやの言葉に暫し瞑目し、それでもやっぱり良かったのだらうと感謝した。

—— ……がしゃんっ！！

静かに音楽が流れる店内に不釣り合いで無機質な轟音が響き渡る。

「克己っ！！」

俺にはマスターの止めに入った声は届かなかった。
気がついたときには、利き手がやけに痛くて、唇の端から血を流した小西が、ふらりとよろめきながら立ちあがったところだった。

そして、それを支えるように、マスターがあいつの眼鏡を拾い上げたあと、そっと肩を貸していた。

「克己、座って」

ただ、呆然としてしまった俺の肩を、優に半ば押さえ込むように力を加えられ俺は力なく元の席に座らされていた。

「すみません。大丈夫ですか？」

俺の後ろ手でマスターが小西におしぼりを渡していた。

「ほら、克己も。手赤くなってるよ」

「いいって、別に」

優に冷たく冷やされたおしぼりで左手を包まれると、微かに拳に痛みを感じた。

結構、加減なしにやってしまったことにそのとき初めて気がついた。

「病院。行けますか？」

「―― ……いいえ。大丈夫です。少し座ってれば」

二人のやり取りを盗み聞きしながら、小西が大したことなさそうで少し胸を撫で下ろしたのも本当だけれど、大したことなかったならもっと殴っておけば良かったとも思ったことも本当だ。

「克己、少し飲みすぎだよ。迎え呼ぶ？」

そういつて強引に人の顔を覗き込んできた優に驚いて反射的に「

ああ」と頷いてしまった。

そんなに、飲んだつもりはない。

でも確かに、頭はぐるぐる………というか、ふつつつと煮えたぎっているようだ。

あやとの電話を切った直後だった。握ったままの携帯が音を出して驚いた。

—— …… 克己くん …… か。

ディスプレイの表示から、相手を確認しつつ、ぴっと通話ボタンを押す。

「はいはい？」

『あ、と。もしもし？ X—クロス—の優ですけど……』

—— …… ええ?!

確かに克己くんだったのに、動揺のあまり次の言葉がなかなかでなかった。

『克己の携帯借りてます。えっと……？ 分かります？』

「—— …… あ、はい。大丈夫です。で、何かあったんですか？」

『あった、というか。あの……』

「ごによごによどこかい辛そうな優さんの声に首を傾げつつ続きを待つ。」

——……びっ。

優さんは時折言葉を選びながら、何とか用件を私に伝えた。とりあえず携帯を切った私は無造作にバッグに入れ込んで、着替えるため寝室へ向かった。

——……珍しいな。克己くんがそんなに酔ってるなんて。

半ば信じがたいような話だったけど、わざわざ優さんがかけてくるくらいだから本当なのだろう。

すばやく身支度を整えた私は慌てて家を出た。

白い息を吐きながら、私は真っ暗になった街道を走っていった。

『X―クロス―』まではそう遠い距離でも、なかったのでそれほど時間はかからない。

「本当に大丈夫ですか？ 車、呼びましょうか？」

「いいえ。本当に大丈夫です。アルコールがまだ残っているんですよ。心配なさらないでください」

小西は勢いつけて立ち上がったのか、一瞬よろめいたのが目に入った。

「克己。何かいうことはないんですか？」

カウンターに突っ伏していた俺にマスターの少しきつい口調が届いた。俺は重たい頭を持ち上げて、ようよう小西の方へ視線を向け

た。

—— …… いたいこと？

「彼女は、もっと痛かった」

「克己！」

俺の一言に、マスターは顔色を変えたが、小西は、静かに微笑んでいた。

「分かってる」とでもいいかげな大人な態度は益々俺を苛立たせる。

俺の名を呼び嗜めるマスターは、尚も俺に謝罪を要求していたが、俺はどーせ子どもなので無視した。

結局、休むことなく走りきった私は、かなり息が上がってしまっていた。

肩で息を切るように、エレベータの前にたどり着きボタンを押した。

エレベータは思った以上に早く降りてきて、いつもとなんの変わりもなく静かに扉が開いた。

「—— …… 小西さん？」

—— …… どうして？

静かに開いた扉からすっと出てきたのが、間違えなく小西さんだったことに、私は一瞬言葉を失い動揺した。

珍しく、眼鏡は胸ポケットに入ってたままになっていて、素顔の彼がいつもと変わることない穏やかな笑顔を私に向けたが、何もいうことなく静かに通り過ぎていった。

「あのっ。その傷……！」

「早く、行ってあげて」

彼の口元の傷と頬の腫れを見逃すわけはなかった。

急いで引き止めた私に、尚一層優しく微笑むとそう一言だけ残し、その後はもう振り返らなかった。

—— ……克己くん……

ざわざわっと私の心はざわついて、まさか……！ とは思いつつも、あまりにも良くないことが私の頭の中によぎっていた。

そんな不安を抱えていたためか、なかなか、エレベータの階数が進まないように感じる。苛立ちを覚えつつも何とか、エレベータはお店のある階で静かに止まった。

扉が開くのを待ちきれず、閉まったままの扉を苛立たしげに、ぱすぱすと叩く。そして、そんな私の慌てた心とは反対にゆっくりと開く扉から、私は流れ出るように急いで飛び出した。

ウエルカムベルがやけに五月蠅く鳴ったような気がして、俺は頭を上げた。

早かった割りには身奇麗にした、碧音さんが少し眉間にしわを寄せていつもより乱暴に俺に近づいてきた。

微かに石鹸の香りが残っていて、もう寝るころだったんだろうと思うと少し申し訳ないような気持ちになった。

別に一人で帰れないわけでもなかったんだけど。そう思って謝罪を口にしようとしたら、それより早く碧音さんが口火を切る。

「克己くん！」

「……うん？」

いつもにもなく、きつい口調の碧音さんに驚いて、うなだれていた頭を正した。

—— ……ぺちっ！

俺が正面を向くのが早かったか、碧音さんの両手で顔を挟まれるのが早かったか、良い勝負だ。真っ直ぐに俺を見る碧音さんの瞳に写る俺は馬鹿みたいに虚をつかれている。

普段は、彼女を纏っているふんわりとした空気が冷たく熱い。俺は確実に怒られていた。

「ダメじゃない！ 人様に手を上げたりしちゃ!!」

「—— ……」

別に褒められるようなことをやったとは思ってない……思っていない。

だけど、責められるようなこともしていない。

「克己くんだって、痛かったでしょう？」

「――……」

俺は何も悪くない ……――

「克己くん……？」

悪いことなんて、

碧音さんに責められるようなことなんて、何もしていないのに……

否定したいのに、その言葉すら思い浮かばないくらい、俺の頭の中は真っ白になった。

褒められたいわけじゃない

唯、護りたかっただけなのに……何も伝わらない

誰も、俺のことなんて分からない。

分かってはもらえない

碧音さんすら、俺を拒絶する

それが、とて、も、とても、イタイ……――

私から、視線をそらした克己くんは、私の声が聞こえているのか？ 聞こえていないのか？ 分からないくらい無反応だった。

私は暫らく問い掛けたまま、克己くんの反応を待った。

彼の左手は暗がりの中でも分かるくらい赤くなっていたし、少し擦り剥いているようにも見えた。

きつと、小西さんの眼鏡にでも当たったんだろう。

水仕事のあとだと思うから見た目以上にきつと痛みが伴っているはずだ。

「ねえ、克己くん？」

「—— …… 離せよ」

傷の手当てをと思った私の声に、今まで耳にしたことのないような、感情の籠もっていない冷えた声で呟いて克己くんは私の両手を払いのけた。

一瞬よろめいてしまった私は、隣の椅子に何とか支えられ持ちこたえた。

よろめいた私に、克己くんは、はっ！ とした様子で刹那後悔するように見たけれど、何もいわない。

私が体勢を立て直すのを確認して、よろりと席を立ち、無言で上着を羽織ると店を出て行った。

からんつと静かにベルが鳴って、その音で始めて私は我に返った。

「大丈夫ですか？」

我に返ったものの身じろぎ一つ出来ないでいる私に、心配そうな優さんの声が聞こえた。

「えっと、はい。大丈夫です。その今日は迷惑かけちゃったみたいで、すみませんでした」

「良いですよ。何かあったんでしょう。普段そんなことをするような子じゃないですし。何より貴方のせいではないでしょう？ それより、早く行ってあげてください」

姿勢を正し頭を下げた私に、マスターはそう優しくいうと外へと促してくれた。

その言葉に甘えた私は、エレベーターが階下に下がっていくのを確認して慌てて隣の階段を駆け下りた。

「ちょっと！ ちょっと待ってよ！！」

私が追い掛けるのも、

声を掛けているのも、

気がついていないわけではないのに、

克己くんは振り返ることもなかった。

克己くんの歩幅と私の足ではどう考えても分が悪い。

到底、追いつかないことを確信した私は家に帰ってから話を聞こ

うと追いかけるのを途中で諦めた。

—— ……でも、どうして？

明らかに、克己くんは怒っていた

私、そんなに悪いことをいったのだろうか？

優さんの様子もおかしかったし、マスターだって『普段は……』
っていったし何よりも、小西さんの顔には傷がついていた。

これは、私も確認した事実だし。

私は、私自身動揺していて考えの纏まらない頭をフルに使いながら、足早に帰路を目指し、家路を急いだ。

そしてその道のりで答えを得ることは出来ないまま、マンションまで辿り着いてしまった。

克己くんは、ちゃんと帰ってきているだろうか？

そのことに一抹の不安を感じながら。
階上へと登っていった。

「あった……」

玄関に靴は並んでいた。

ちゃんと、帰ってはきたみたいだな。

そのことに、ほっと胸を撫で下ろし、彼の部屋へと足を運んだ。
克己くんはまだ、怒っているのだろうか？ そんな緊張を抑える
ため、一旦深く深呼吸して、部屋をノックした。

「克己くん」

—— ……コンコン。

「克己くん？」

—— コンコンコン……

何度となく同じことを繰り返したが、返事はなかった。
でも、人の居る気配は確かにあるわけだから……私は、無視されているだけだろう。

ふむ……よっぽどだな……。

—— ……ガチャ。

「—— ……あ！ っと」

強行手段だとは思ったけれど返答を待たずに、ドアノブを下げた私は、一瞬、どきっとした。

開かない…… ——

そういえば、今まで使うことがなかったから忘れていたけど、各部屋にはきちんと中から鍵がかかるようになっていたんだった。
初めて、開くことのないドアを前に私はいいい知れない不安とショックを受けていた。かすかに指先が震える。

まさか。

こんな風に拒絶されてしまうことがあるとは思ってもいなかった。

「克己くん、話くらい聞いてよ……。ねえ、克己くん？」

返事の返ってくることもない、
開くこともない、

ドアの向こうに私はすでに泣き言のように呟いていた。

—— ……コンコン。

「—— ……くん」

ドアの向こうから、呼び掛けてくる声が徐々に泣き声のように、か細く勢いのないものになっているのは俺にも分かっていた。

でも、俺の気持ちは未だ治まらない。

別に酒が回っているわけじゃない。

碧音さんに対して腹がたって、仕方ないというわけでもない……きつと……多分……。

でも、このはけ口のない感情は、俺の心の奥のほうにどっしりと重く腰をすえていて、立ち上がろうとしなかった。

「克己くんってば！ 話、聞いてよ……っ」

しかし、一つだけ繰り返されるこの台詞には、正直腹が立っていた。

そして、痺れを切らした俺は掛けた鍵を開けて静かにドアを開く。その先には、案の定、今にも泣き出しそうな不安げな表情で、碧音さんが立っていた。

こんな顔をされてしまったとは思わず抱きしめたい感情にかられてしまうあたり、俺もいい加減甘い。

「―― …… 克己くん」

「いっとくけどな」

「うん」

「最初に話を聞かなかったのは、碧音さんだからな」

「―― ……」

その一言への返答を待ったが、碧音さんは口元が微かに動いたが、声にはなっていないかった。

その代わりに大きなまん丸の瞳から、

―― …… ほろり

と、一筋涙が伝った。

俺はこれ以上の返事は期待出来ないと思い、再びドアを閉めて鍵をかけた。

―― …… コツ

俺の後ろ手にドアの向こうから、微かに音が聞こえたが俺が再びドアを開けることはなかった。

声を出すことが出来なかった。何もいえなかった。

―― …… 最初に話を聞かなかったのは……私……。

本当だ……

克己くんが怒っても仕方ない。
私は、彼に何も聞かなかった。

理由も……何も……。

そして、何よりそのことに気がつけなかった。

……情けない…… —

あまりに情けなくて声も出なかった。
ただ、ただ、涙が零れた。

—— ……ごめんなさい…… —

そういわなくてはいけないのは、私だ。
それなのにいえなかった。
声が、出なかった……。

ドアは閉められてしまった…… —

開くことのない、ドアにおでこを、こつんとあてて俯くと、ぽた
ぽたと涙が廊下を濡らした。

「—— ……っ……」

ドア越しにでも謝ろうと、話を聞こうと思うのに、思うように声
にはならなかった。

本当に、どうしようもなく

私は馬鹿だ…… ——

ぎゅうつと扉と仲良くなった顔の隣に置いた拳に力を入れる。痛いくらい、強く、強く……

どうして俺が、こんな煮え切らない気持ちを抱えなくてはいけなのか？ そもそも、どうして、こんな気持ちになる必要があるのか。

どうして、小西がいったことにあんなに腹が立ったのか……
いつものように、放っておけば……良かった。

いいたい奴にはいいたいように、いわせておけば、良いだけだったのに、

どうして、あのときの俺はそう出来なかったのか。

俺はそんな疑問を限りなくエンドレスに近い状態で、自問していた。

「都合が良い」そんな言葉も流せたのに、どうしても、流せなかった……というか、そんなこと頭で考える前に手のほうが先に出ていた。

酔いが回っていた証拠なのかな。

ぐるぐると、頭の中が整理できないまま、パソコンの画面が省エ

ネモードのなってしまった。

そういえばそろそろ講義も始まる……というか、研修があったなあ……。

どこだっけ？

つい、何にも考え付かなくて、今、関係ないどうでもよさそうなことを考えてしまう。

これって、現実逃避？ そんな風に思うととても子ども染みて感じた。

—— ……静かになったな？

ふと、ドアの向こうから物音がしなくなったことが気に掛かった。

もう、諦めて部屋に帰ったのか？

なら、都合が良い。

風呂にでもはいるう。

そう思い立った俺は、机から身体を離しゆっくりとドアを開いた。

「—— ……何だ」

ドアの外を確認して思わず笑ってしまった。

結局、泣き疲れたのかドアの横で、座り込んだまま静かに寝息をたてていた。

よっと、隣にしゃがみこんで、顔を覗き込んだが、どうやらしっかり眠っているらしく、起きる気配はなかった。

—— ……こんなところで、寝てたら風邪ひくぞ。

ふっと口の端から笑みが零れ、顔に掛かっていた髪を後ろへ流してやる。

それでも、反応はない。

もうこうなったら、目は覚めないだろうな。

片腕を俺の首にかけて、何とか抱き上げると寝室へ運んだ。

「—— ……よっ、と」

静かに横たわらせて布団を掛けた。ふんわりと、ベッドに身を沈めた碧音さんは何事もなかったように穏やかに眠っているように見える。

それなのに小さく寝返りを打ったあとは、普段刻まれることのない眉間に深く皺が入り、唇が動いている。

どうやら、何かいってるようだ。

目を覚まさないようにそっと耳を近づけて、息をひそめた。

「……さ、い。ごめ…ん……」

—— ……まだ、謝ってるのか？

はは…… ——

「もう、分かった。良いよ、怒ってない」

長い髪を、脇に流すと眉間に寄ったしわが緩んだように見えた。

碧音さんはこんなに、真っ直ぐなのに……
いつだって、きつと……

ただ、それだけなのに、あいつは

『受身だけの女なんて退屈だったんだ』

—— ……そんなことない

『でも、従順で素直だったし、扱いやすかった。他に、なんて考えるようには見えなかったのに、こんなに簡単に乗り換えるなんて……』

—— ……そんなんじゃない。

『僕の想像以上に尻の軽い遊び上手な女だったんだね』

—— ……違うっ!! 訂正しろっ!!

思った瞬間、殴ってた。

今も、思い出しただけで、腸をえぐられるように痛む。痛くて、痛くて、違うと否定し吐き出した台詞を訂正させるよりも早く手が出てしまっていた。

俺にだって、分からない。

俺のことじゃないのに、どうして自分が切れたのか……。

ただ、耐えられなかった。

耐えられなかったんだ。

俺はきゅつと下唇を噛み締めその痛みにただ静かに堪えた。碧音さんの痛みを何も知らないくせに……あんな、クズ……。

「ごめんな……次があつたら、ちゃんと、訂正させるから……本当、ごめん」

P P P …… P P …… P ……

「ん、分かったよお……」

いつも通りに可愛らしく鳴る、目覚まし時計に手を伸ばし、私は何とか目を覚ました。

—— …… あれ？

私、ベッドで寝てたっけ？

確か、克己くんの部屋の前にいたと思うんだけど……克己くん、運んでくれたんだ。

まだ、覚めきらない頭を働かせて昨夜のことを思い出していた。今もちろん、隣に克己くんの姿はない。只でさえ広いベッドが、ますますだっ広く感じて、何だか妙に寂しかった。

「仕事いかなくちや」

いないってことは、きっと、まだ怒ってるんだろうな。

普段、あんまり怒らない——いや、最近は怒らない——から、どう扱って良いか良くわかんないや。

小さく溜息を吐きながら私はベッドから這い出した。

いつもと同じように珈琲を淹れ、私は、出勤の準備を整える。その間にでも、ひょっこり出てこないものかと思ったけれど、甘かった。克己くんが出てくる気配は全くない。

うーん。

ドアの前で踊りでも踊ったら出てくるのかなあ？

って、そんなつまないこと考えてたら、会社が遅れちゃう。

―― ……コンコン

「克己くん。私、仕事行ってくるね。昨日はごめんね。部屋にも運んでくれたんでしょう？　ありがとう。じゃあ、帰ったらまた話、しよう？」

返事の返ってこないドアの向こうに、私はとりあえず、声を掛けたあと慌しく家を後にした。

一人のときは、返事があるはずない

「いってきます」

なんて当たり前だったけど、今は妙に冷たく、そして物悲しく玄関に響いた。

早く、克己くんにも許してもらわないと……私のほうが先に参っちゃうよ。

外気の冷え込みに、コートの襟をぐっと引き寄せると、私は足早に会社へ急いだ。

静かに、閉められた玄関の音を聞いて俺は部屋を出た。

結局、パソコンに向かいつつ妙な姿勢で眠っていたらしく体中が痛い。

寝なおそうかとも思ったけれど、珍しく真からメールが来ていて、呼び出しを食らっていたために、それは叶わないでいた。

―― ……それにしても、何かあったんだろうか？

真から、何かいってくるなんて。

また、瑠香のこととかだったら嫌だ。

透なら急に呼び出したりも、日常茶飯事なんだけど、な。

「おっ、と……」

―― ……珍しい。

ダイニングテーブルのランチョンマットの上に、サラダボールとハムエッグ……とバターロール。

サイフォンには、珈琲も点てられていた。

その隣りには、数枚の絆創膏と消毒薬が置いてあった。

それで思い出した昨夜の傷を見たが、もうすっかり乾いている。このままほっておいても別に問題ないだろう。

よっぽど、気を遣ったんだな。

伏せて置いてあったコーヒークップをひっくり返し、珈琲を注ぎながらそう考えると可笑しくて仕方なかった。

いつまでも拗ねた子どものような自分も可笑しかったし、そのご機嫌を必死に伺おうとしている碧音さんの姿は目に浮かぶようだ。それを思うと嘔み殺しきれない笑いが零れる。

謝るだけなら、メールや書置きでも事足りる筈だ。絶対に顔を見てじゃないと駄目だと、思っているか……もしくは、天パってるからそんなこと思いつかないのかもしれない。

—— ……後者っぽい

もう笑いは我慢出来なかった。

「こ、これなんですか？ チーフ」

机の前に立つなり、私は自分の机の上を指差しつつ、葉月チーフに訪ねた。

「ああ。ごめん。急にデータが必要になっちゃって、ちょっと、机借りてたのよ。暇が出来たら、資料室に返してきてくれると嬉しいかも……で、そのとき……」

—— ……はあ。

他の人がやってたら、こんな虐めだよ。

机の上に山積みになった書類とファイルの山に私は溜息を吐いた。今どき、こんなに資料持ち出すの葉月チーフだけだよ。

チーフはどういうわけかデジタルな資料を嫌がり、基本的に紙媒体の資料を持ち出すのは常ではあるけど、今日のは酷い。

「あ、そうだ。その前に外で会議があるから、それに付き合って」
「……はい」

今日は一日自分のことをするようにはなりそうにないな。

再び私は溜息を漏らすと共に、やれやれという笑いまで零れてしまった。せめて残業がないと良いな。そう頭の片隅で願い一日の仕事を開始した。

「で、何かあったのか？」

何かあったのはどっちかといえば、俺の方なんだけど。自分から、真に相談するような気にはなれなかった。

「最近、透に会ったか？」

「ん？ 会ったぞ」

「本当か?!」

ファーストフード店で向かい合わせに座っていた俺に、真は身を乗り出して真意を確かめた。俺がそんな嘘を吐く必要はどこにもない。そのくらいは分かるはずだろうけれど、真は時々、色んなことを見落としている。

俺は微妙に身体を引いて「まあ、座れよ」と促してから頷いた。

「ああ。本当だよ。昨日大学の図書館で会った。その透がどうしたっていうんだよ」

「—— ……なんだ。そうか、大丈夫なら良いんだ」

—— ……かたん

俺の返答に脱力した真は呟くようにそういつて、ようやっと静かに椅子に腰掛けなおした。

「いや。連絡もとれないし、メールも送ってこないから、ちょっと

気になってたんだ。前に何か悩んでいたみたいだったから」

「―― ……悩んでた、か」

そういえば、前に店に顔を出したときも様子が少しおかしかった。何かを愚痴っていたが……何の脈絡もないようなことを淡々といっていたような気がする。

「古河なら、何か聞いてるかと思ったんだけど、昨日何か聞いたか？」

「いや、別に何も聞いてないけど……どうして、俺に話してると思うんだ？」

「透の奴。案外お前には、気を許してるところがあつたからさ。俺にいけないことでも知ってるんじゃないかと思ったんだよ」

―― ……そうか？

真の話には、いまいち納得はいかなかったが、訪ね返したりはしなかった。

透が俺を？　そうだろうか？　ぴんとこないが、他人から見たらそう見えたという話だろう。それで、今日の用はそれだけかと聞こうとしたら、正面に座っている真が目を丸くした。

どうした？　と重ねるより早く、ずしんと俺の肩は重くなる。

「どうしちゃったのかなあ？　克己くん」

「別にどうもしてない……お前、重い」

「透っ！！」

真の大きな声に「大きな声出さないのー」といつものように笑いながら、俺の肩をぽんぽんと叩いて追い越すと、真の隣に腰を下ろした。

「お前。今まで何やってたんだよ。それに」

「ん？ 真が、メールでここに来て送ってきてたじゃん」

真の動揺を他所に、さも当たり前そこにいるように透はポテトをつまんでいた。

「で、克己に何か、あったのか？」

「いや、俺のことじゃなくて、真がお前の事を……」

—— …… R R R …… R R ……

「あ、悪い。ちょっと、席はずす」

俺達を呼び出した張本人の真が携帯片手に席を外してしまった。多少呆れ気味にその後姿を見送って、小さく溜息。俺に用なんてないから、なんとなく黙ったら

「で、お前顔色悪いけど？ どうした？」

そう問い掛けてきたのは、透の方だ。透の表情からは笑顔が消えて、真摯な対応になる。

どうしてこいつは他人の機微に敏感なんだろうな。いうほど、顔に出ているとは思わない。現に真はそんなこと一言も触れなかった。

俺は苦笑して、肩をちょっと竦めて「別に」と答える。

不思議と俺自身もこいつには隠す気にはなれなかった。が、今回ばかりは、話す気にもなれなかった。

「白羽さん。お昼にしても良いわよ」

「ええ。そうですね」

結局、葉月チーフの外回りに付き合ったあと、持ち出していた資料の整理をしていたら、いつの間にか、お昼を過ぎていた。

もう少しで乱雑になってしまった書類も元の形に戻るし。午後からは、資料室に戻しにいけそうね。

一息吐いた私は、あやを誘いに向かった。

そして、珍しくあやを掴まえることに成功した私は、二人で社外でランチを取ることにした。他愛のない話をしながら歩いていたのに、ふと、あやが足を止めたので私も同じように立ち止まる。

「あれ、克己じゃない？」

あやの指差す方にはファーストフード店がある。促されるままに視線を移すと、確かに座ってるのは、克己くんだ。目立つから直ぐに分かる。

向かい合ってるのは、透くんかな？ クリスマスパーティーの時にいた。

その隣の子も、その時にいたような気がする。

「何か、三人とも、小難しい顔してるわね」

「……そう……だねえ」

あやのいうとおり、三人とも何だか、難しい話でもしているように見える。仲の良い友達とつるんでわいわいという雰囲気ではない。

「寄る？」

「ううん。良いよ。割って入れる雰囲気じゃないし……」

「それはそうね」

それにまだお怒りの最中だろうから、私は冷たい洗札を受けることになるだろう。だとしたら、やっぱり一対一が良い。

「あ、そういえば、いうの忘れてたけど」

「何？」

「静也。ここ離れるわよ。確か、イタリアの方に行くらしいような書類が出来てたと思うわ。ロンドンは無理だった見ただけだね。良いんじゃない？ 国内支社はどうしても嫌だったみたいだしね」

—— ……そっか。

そうか。小西さん。

行っちゃうんだ。

あやの話に小さく頷いたが、何だか複雑で返す言葉は見つからなかった。

「まあ、あんたが、無理しなくても、良いように転がす奴は勝手に転がっていくのよ。だから、あんたがいちいち、責任感することないわ」

「—— ……そう、だねえ」

誰かが自分の選んだ道を正しかったと判断してくれるわけじゃない

い。

結果を出すのは自分自身で、結局、小西さんも良いように進んだのなら、きっと私の判断は正しかったんだろう。

ただ。

ただ……私は、彼の進むべき場所を一つ削ってしまったことに違いはなかった。

私の、今の生活は彼の削られてしまった道の上に成り立っているわけだ。小西さんには、悪いことをしてしまったかもしれない。

「だから、あんたが責任感じゃなくて良いって、いってんでしようが！」

黙り込んでしまった私は、あやにこづかれてしまった。

「ほら、笑いなさいよ。立ち直りの早さだけは負けないでしょう。あんたはもう別の道を歩いてんのよ。あんまし、ひっぽってたら、一緒に歩いてる人に失礼だと思いなさい」

—— ……新しい道。一緒に歩いてくれる人……

「ふふ。そうだよねえ」

「そうよ」

本当に、あやのいう通りだ。

本当に、あやはとても不思議。

いつだって、私の欲しい言葉を簡単に探し当てて、告げてくれる。しみじみと感心していると、最後にぴしゃりと頭を叩かれて、二

人とも同時に笑いが零れた。

よし。元気였다。

今日こそはしっかり……和解の道を模索するぞっ！　　つと……。

「ていうか、最近。何やってたんだよ。」

五分ほどして、席に戻ってきた真の開口一番の台詞だった。真の問いに、いつもとより少しわざとらしい感じでへらへらと笑いながら、透はグラスの中の水を揺らしていた。

「おい？ 透？」

「—— ……だ」

—— ……え？ 今なんていったんだ？

聞きなおした真にポツリと答えた返答を、聞き間違えたのかどうなのか、俺はとんでもないような話に聞こえて目を丸めてしまった。

「悪い。透。ちょっと聞き取りにくかったんだけど……もう一度いつてくれるか？」

どうやら真も同じことを感じたようだ。おそろおそろ、透に聞きなおしていた。そんな俺たちの顔を見ることもなく、透はあっさり、そして、今度ははっきりと口にする。

「だから『結婚』するんだよ」

—— ……がつっ！

透の突拍子もない発言に組んでいた足が崩れて机の脚にぶつかってしまった。

「大丈夫かあ？ あーんま、長いからって持て余すなよ、克己」

「―― ……いった、え、は？ ああ。いや、でも」

俺と同じように真も、文字通りぽかーんとして、何をいわれたのか頭がついてきていないようだ。それなのに、透はそんな俺たちの様子を見て、さも可笑しげに笑っていた。

今の自分の発言がまるで他人事のように平然と変わりなく、だ。

「まあ、そのごたごたで、ちょっとぼたついてて、なかなか連絡出来なかったんだ」

「……相手。誰なんだよ」

我に返った真は、真剣に透を見据えると低い声で訪ねた。

「それは……」

真の真剣な声に答えるように、透から第三者的な笑顔は消えていた。暫らくは遅疑逡巡していた透も、覚悟を決めたのか、ゆっくりと順を追って話を始めてくれた。

―― …… ――

俺の心境は、複雑だった。

にこやかに俺達に「結婚する」と告げた透は、腫れ物がとれたようにすがすがしい顔をしていた。

一通りの経過を俺達に話した透はまだやることがあるから、いつてすぐに店を出てしまった。

残された俺達も、特にそのことを話すわけでもなく無言で数分過ぎして、どちらともなく席を立ち店を出て別れた。

「あいつ、一体いつから、悩んでたんだろうな」

帰り際、真がポツリと呟いた一言が俺にも重くのしかかった。

もしかしたら、ふらりと店に来たあの日、本当はいいたかったのかも知れない。でも、いえなくてあいつは、支離滅裂なよくわからない話をして酒を飲んでいた。

『父親になるんだ』

さらりとそういつてのけた透を、俺は凄いと思った。

相手は、驚くことにあの吉野さんだった。いつから二人がそういう関係だったのか、俺には全然わからなかった。

確かに、彼女の様子も変だった。今になって思えばということだけれど、ここ暫らくの二人の様子を振り返れば合点がいく。だからこそ、妙に納得したような感じがして頷けた。でも透たちが出した答えは本当に、それで良かったのか？ という疑問が消えない。

透は市外にある個人病院の息子だ。

だから今後のことも考えて学校はもちろん続けるらしい。

吉野さんは暫らく自分の実家に帰って、その後は透の実家で透が卒業するのを待つらしいのだけど。

結婚？

子ども？？

駄目だ、ぴんとこない。分からない。全く現実味がない……――

それが俺の正直な感想だった。

でも、俺達の知らない道に、あいつは自分から足を踏み入れた。
その第一歩はどうあれ、大変なものだったんだろう。そのためか、
ほんの少しあいつが大人に見えた。

それと同時に、自分の幼さも思い知らされた気分だった。

「やっぱり、二回に分けた方が無難だったな」

ぽつりと小さな声で呟きながら、山積みにしたファイルを抱えてエレベータのボタンをようよう押した。ファイルが重たくて、手が微かに震えてしまう。

どうか落ちませんように。

静かに開いたエレベータに乗り込むと、次は、階数を指定するのに戸惑ってしまった。ああ、右手を離れたらきつと落としちゃうだろうし……。

うーん……どうしよう。一回下に降ろして……台車借りてくれば良かった、今から借りにいったほうが良いかな？

「資料室で良いの？」

「え」

ふ……と荷物が軽くなって、視界が広がった。

「あ……と、はい」

そして、難なく階数は指定されて静かにドアは閉まってしまふ。さっきまでそこで扉が開くのを待っていた廊下が、閉まっていく扉

で見えなくなっていく。今すぐそちら側に戻りたかったけど、もう遅い。

「もう少し、持とうか？」

「あ、いえ。大丈夫、です。すみません」

本当に、何でまたこういうときに、これだけ広い社内で顔を合わせなくちゃいけないんだろう。私は視線を置く先に困って階数を数えていた。密室——カメラはあるけど——で二人きり、以前の私だったらふわふわした気持ちになっていた。けれど今は痛みしか湧いてこない。

「ありがとうございます。もう、大丈夫ですから」

資料室に到着してカウンターにファイルを置くと、そこまで一緒に運んでくれた小西さんにお礼をいった。心の中でこのまま立ち去ってくれることを願ったのに、伝え切れなかったのだろう。

「でもこれ全部、返さなくちゃいけないでしょ？ 手伝うよ。どうせ、今のとこ暇だし」

「—— ……え、えと……。その、すみません」

小西さんにいつもの調子でにこやかにそういわれてしまったのは、私はそれ以上断れなかった。

資料室に直接資料を取りに来るような人は、殆どいなくて人気は全くといって良いほどない。引き続き二人きりだ。意識なんてしなければ良いだけなのに、どうしても色々と気になってしまう。

「でも、珍しいよね。直接こんなに資料引っ張り出すなんて」

「ああ、うちのチーフ。こういうのに目を通すの好きなんですよ。」

たくさん資料があればあるほどご満悦なんです」

「ふう〜ん。大変だね。データだけなら直ぐ済んじゃうのにねえ」
「ですなえ〜」

普通の雑談を交わしながら、手元にあったファイルを年度ごとに棚に収めていった。

―― ……ことん。

「これで、最後」

最後の一冊を書類棚に収めると私は一息吐いた。そこで、やっぱりこのままでは申し訳なさ過ぎると思い「あの、小西さん」と切り出した。過度の緊張から少し声が上がってしまった。それがどうしようもなく恥ずかしくて頬に熱が集中する。それを見られたくなくて、私は自分のパンプスの先を見ながら続けて謝罪した。

「昨日は、その、すみませんでした」

理由ははっきり分らない。

理由が分からないのは、私のせいだし、きっとそうなってしまったのも、二人を繋ぐのは私だけだから、私のせいなのだろう。

だから、私は手伝って貰った御礼と共に昨日のことも謝罪した。

そんな私の様子を見て、小西さんは柔らかく微笑んでくれる。変わらない笑みだけど、唇の端に昨夜の傷が微かに残っていて少し痛い痛しかった。

「彼から、何か聞いた？」

「あ……いえ……。何も。でも、克己くんがやったことは」

しどろもどろになってしまった私に、くすくすと笑いながら小西さんがこちらの方へ歩みを進めたことに、反射的に警戒してしまった。

私はその足取りに合わせるように後退した。

でも、後退出来たのはほんの僅かで、私はカウンターに背をついてしまった。

「自分がやったわけでもないのに、彼のために謝るんだね？」

「いえ、その」

—— ……そういうわけじゃ……ないことも、ないけど……。

私が背にしているカウンターに片手をついて、真正面に立った小西さんは、さも可笑しげに私の顔を眺める。

「そんなに怯えなくても大丈夫だよ」

「い、いえ、その、怯えては……でも、ちょっと、近いかと……」

「そう、感じちゃうんだ？ 少しショックかな」

ショック。そう口にした彼の瞳は僅かに翳った。

「え……？」

「いや、つい最近のことのような気がするのに、もう、碧音ちゃんの中では、僕のことは過去なんだね。ただ、ここまで近寄っただけなのに、碧音ちゃんは逃げ腰になってるし、凄く警戒してる」

少し、眉間に皺を寄せて悲しそうに微笑みながらそういった小西さんを見ると、心の奥のほうがほんの少し、ちくりと痛んだ。

「そ、そういうわけでは……」

「しー……っ……」

「――……っ！……」

小西さんは何かいおうとした私の口を空いた片手で、そっと塞ぐとその上から軽く口付けた。

その行動に、目を白黒させてしまった私を楽しそうに眺めると

「これで、今回は彼のこと、許してあげるよ」

そういつて笑った。

「僕のこととは、あやからでも聞いた？」

「――……はい」

「なら良いんだ。だから、碧音ちゃんは気にしなくて良いんだよ。

僕の動機も不純だったわけだし、僕の方も謝った方が良くらいだよ」

「そんなこと」

掛ける言葉も思いつかないくせに口を開こうとした私の声を遮るように、そつと言葉を重ねる。

「じゃあ、一度準備のために来週発つから、そうしたら、もう……暫らくは会えなくなると思うけど、元気で」

優しく、愛しそうにそういいながら、私の頬を撫でた小西さんは少し寂しそうだった。寂しそうだ、私が思いたかっただけかもしれないけれど。

何か劳いの言葉でも掛けたほうが良いのだろう。でも、私には、もう何もいうことは出来なかった。

そのことを重々承知しているのか、それ以上小西さんは何もいわずに、私から手を離れた。そして、立ち去り際、ふと思い出したように声をあげて振り返る。

「あ！ と、そうだ。最初から怒ってなんていないから、彼を責めないであげてね？ 僕が煽ったんだから……彼に罪はないよ。逆に、あれでも冷静でいるようなら、彼といえるべきじゃない」

「――……」

「大丈夫。彼は良い子だよ」

その言葉と柔らかいいつもの笑みを残して、小西さんは、部屋を後にした。その後姿を扉越しに見送りながら、彼の感触が残る唇をきゅっと噛み締める。

湧いてくるこの感情の名前を私は知らない。

ただ、胸をぐっと潰されて息をするのも苦しく感じる熱を帯びた想いだ。私はとても嫌な女だから、心のどこかでは、彼に私を裏切ったことを後悔して欲しかった。未練を残して欲しかった。

それなのに、リアルにそれを見せ付けられると、ただただどうにも出来ないことが苦しかった。

でも、私はここで確信した。小西さんと今はっきりと決別出来たのだろう、と。

「――……」

きゅつと胸元に抱いた拳を抱き締めるようにして、強く瞳を閉じる。そして、心の中だけで「さよなら」を告げた。
私、本当に貴方が好きでした …… ——

—— …… ぱたんっ

少し陽は傾いていたものの、碧音さんの退社時間まではまだある。だから、一人だと分かっているのに、部屋に戻ってやけに静かだと少しだけ虚しくなる。

本当に、誰かが入り込んだのなんて一時前だというのにこんな風に感じるなんて、どこかくすぐつたい。

どさりと、ダイニングテーブルの上に買い物してきてものを載せて、仕分けを始める。

とりあえず、あのあと俺はその足でマスターに昨日のことを詫言に行った。

マスターはそんなに怒った風もなく「これからあんなことしないでくださいね」と一言笑顔で告げただけで他には、何も追求しなかった。

他に客がいなかった。

ということも功を奏したようだ。

—— …… 透と…… 吉野さん…… かあ。

何か不思議な組み合わせだな。

でも、本当に一体いつからそんな関係？ だったんだろう。何度

考えても分からない。よく考えたら今までの俺は特に他人に興味を持っていなかったから、知るわけない。

あいつらの情報で知っていることなんて、あいつらが話してくれたことくらいだし、それだって、大半は聞き流していた。

同じように俺も聞かれたこと以上の話はしてこなかったし……なんて薄っぺらい人間関係しか築いていなかったんだろう。

透から突然あんな情報を入れられてしまったから、気になってしようになかったのと同時に、これまで以下に他人に無関心だったかを知らされたような気がしていた。

そしてほんの少し昨夜のことを反省した。

結局、一人熱くなつて、小西に怪我を負わせたうえに、碧音さんまで困らせてしまった。

あの時、碧音さんをほったらかしにして……

戻ってきたから良かったものの

……もしここへ戻ってこなかったら俺はどうするつもりだったんだろう。

小西の言動には間違いなく腹はたつたし、碧音さんのことも頭にはきいていた。でも、どうしてかといったら……。

少しだけ、思ったんだ……碧音さんが俺の話を聞いてくれなかったのは……

—— ……相手が小西だったからじゃないか、って。

あいつは俺より幾つも大人で、社会的地位もあって今の俺がどんなに頑張っても追いつくことの出来ないところで俺の大事なものに触れて、その上、平気で傷をつけて……

だから、あんなふうに怒ったんじゃないか、って……何かそれっ

て……格好悪いし情けない。

それじゃ、結局のところただのやきもちじゃないか。

怒るにしても訂正させるにしても、もっとスマートな対応の仕方があったかもしれない。せめてそれを思案する余裕くらいあったほうが良い。

そうじゃなかった俺はタダの子どもだ。

大きく溜息を吐いた。

大体っ！ よく考えたら……あの日、碧音さんは確かに俺に愛されたがっていた、わけだし……過去にこだわったのは俺の方だんだ。きっと、喧嘩の相手が小西じゃなくても碧音さんは怒っただろうし、同じように駄目だといっただろう。落ち着けば容易に想像がつく。

碧音さんは俺を信じるといった。

俺も信じたいと思った。

そのことに違いはない。嘘もない。

「絶対、絵に描いたようにしょんぼりしてるだろうな」

ほろっと零れた独り言。その碧音さんの姿は目に浮かぶようで、噴出しそうになるのをぐっと堪えた。

自分から折れようかと、携帯を手にしたけれど“しょんぼり”を体現した姿も見てみたいような気がして、ぱたんっと閉じた。

—— ……今日は碧音さんの好きなものでも作るかな。

ぱたんっと閉じた冷蔵庫の扉を押さえて、その中身と夕飯のメニューを模索する。

……俺、なんだか主夫みたいだな。そう思ったことはスルーした。

今日は本当に一日チーフに振り回されてしまった。そのお陰で色々考え込まなくて良かったというのは助かったけど……大量のファイルと、データに囲まれてかなり疲れた。
仕事始め早々するような量じゃないよね。

それでも何とか、今日の区切りをつけて私は残業抜きで退社出来た。

—— ……克己くんまだ怒ってるかなあ。

そんな一抹の不安を取り除けないまま、私は重い足取りを進める。いつもなら、大した距離でない場所が物凄く遠い距離を行かなくてはいけないような気がした。

マンションに到着してもエレベータの前で、私は小さく溜息を吐いた。

暫し、ボタンを押すのを躊躇って立ち止まる。

「早く行けよ」

その姿に遠慮なく声を掛けられて、私は誰の目にも明らかに肩を跳ね上げた。

「か、克己くん」

びくびくとしていた私がゆっくりと首だけで振り仰ぐと、私の直ぐ後ろにいたのは克己くんだった。克己くんはすっと手を伸ばしてエレベータの昇降ボタンを押した。

触れるか触れないかくらいのも、とても近い位置に立つものだから、背中からふわりと克己くんの熱といつも使っている香りがしてどきりと胸が高鳴る。

それを誤魔化すように

「えっと……おかえり？」

と口によれば、克己くんは苦笑して

「お互い様だろう。ほら、帰るぞ」

開いたドアの先に私の背を押した。自分の足に足をとられよろめきながら、私はとりあえず乗り込んだ。

「あの、さあ……」

謝るなら今しかない。エレベータの扉が完全に閉じたのを見計らって切り出したら、克己くんの方が早かった。

「昨日は悪かったよ。俺が大人気なかった」

—— ……驚いた。

克己くんから、謝罪してもらうなんて。

本当は私のほうが悪かったのに、

克己くんは謝らせてしまった。

小さく頷いた私の頬は、申し訳なさと、嬉しきで自然と紅潮していた。

「泣くなよ。ほら、これ買ってきたから」

「別に、泣いてないよ」

そう思ったけど、とりあえず、顔は拭っておいた。

顔を真っ赤にして俯いた碧音さんは、猫が顔を洗うようにごしごしと両手で顔を拭っていたから泣いてるのかと思ったけれど、そういうわけじゃなさそうで良かった。

俺が買い足してきたボトルを手渡すと反射的に受け取って「何これ？」と包装をぎゅっと瓶に押し付けてラベルを透かせる。

薄っすらと浮き上がったワインのラベルをまじまじと見つめて、納得したように微笑んで抱えた。

根っからの酒好きだな。

音もなく苦笑した俺に気がつくことなく、碧音さんは、それはそうと……でもいうようにぽつぽつと切り出した。

「克己くん。えっと、その、私も、悪かったの。ごめんなさい。一方的に怒ったりして、克己くんの話も聞かなかった。私の方こそ、大人気ないよね。本当にごめん。手、痛かったでしょう？ 小西さんのことは、本当にもう何でもないから」

階上に到着してドアが開く。それにも気がつかないように話す碧音さんの手を取った。軽く引けば素直についてくる。のんびりと廊下を歩き始めれば、俺より一回り小さな手に、きゅっと力が籠る。なんだか不安そうなのその仕草が可愛いとか思ったら終わってる。

でも、俺は終わってるからすると指を絡めて繋ぎなおすときゅっと握り締めた。誰かの手を自分から取ることがあるなんて、以前

の自分なら、絶対にはないと思っていた。

「本当に、私のせいで克己くんに嫌な思いをさせてごめんね」

「―― ……別に」

「……もう、顔を合わせるようなこと、ないと思うから……」

「寂しい？」

反射的に訪ね返していて、俺は地味に凹んだ。どれだけ小さい男なんだ。慌てて「今のなしっ」と取り消そうとした自分がもっと小さく感じて再度凹む。

そんな俺の一連の動揺に気がつくこともなく、碧音さんは素直に答えてくれる。「内緒だよ」と可愛らしく前置きをして

「ちょっとほっとしてる。私、そんなに良い人じゃないから……やっぱり、ちょっと辛いよ。それに、なんだか怖い」

「怖い？ また気持ち揺れそう？」

うわああ……また俺小さい……俺の中狭小過ぎんじゃねえの……。もうとっくに部屋の前についているのに、鍵をあけるのも忘れて話し込んでしまう。

「え？ ああ、ううん、まさか。そういう怖さじゃなくて、文字通り怖い。他人が近いのはやっぱりちよつと怖い……」

「―― ……」

他人との距離の怖さは色んな意味で分からなくもない。だから思わず黙ってしまったら「そんなことよりも」とぐいぐいっと手を引かれた。

何？ と顔を合わせれば、ふわりと笑みを溢された。

「かばってくれて……ありがとう……」

「え」

「私の名誉、守ってくれようとしたんだよね」

「……いや、別に……」

にこにこにこにこ……なんだろう、この碧音さんの妙に押しの強いところは……。がつくりと肩を落として、俺はこう答えるしかない。

「どう、いたし、まし、て」

「うん」

あ！ 鍵開けなくちゃとバッグから慌てて鍵を取り出して開錠する碧音さんの後姿を眺める。かちつと開錠音がして玄関を開き肩で支えた碧音さんは俺を振り返って安堵したように微笑む。

「おなかすいちゃったね」

「ああ、そうだな」

「ねえねえ、今日の夕飯何？」

「ん？ 今日は…… ——」

—— ……ありがとう……か……。

扉を支えれば、先に靴を脱いで「ただいまー」と声を上げる。

碧音さんと居ると、表情筋が鍛えられる気がすると思った傍から頬が緩んだ。

「克己くん、ただいま、忘れてるよ」

「は？ あ、ああ、ただいま」

「おかえりなさい」

この馬鹿みたいに安穩としているのが、もう俺の日常だ……

「—— …… ああ、そっちにつくのは明日の夜になるから」

『空港まで迎えに行こうか？』

「いや、必要ない」

俺はホテルの一室から、帰国時間の報告をした。

こちらに来てからは、忙しくて結局電話もろくろく出来ないでいたためか、受話器の向こうから聞こえる碧音さんの声が妙に懐かしく感じた。

長いかと思われた二週間、過ぎてしまえば大した時間ではなかった。

出かける前は、散々だったのにな。

肩で形態を支えて室内のミニバーから、ブランデーを注いで、ぼんやりとそれを眺めながら、取り留めない話をしている間に、ふと、出発前なのが頭によぎった。

—— …… ——

俺の周りは、透のこともあって、大学が始まってからも、落ち着くことはなかった。真と瑠香の方は問題ないようだし、季節の変わり目と同じ様に、桜咲く状況なのだろう。

まあ、俺には関係のないことだ。

俺の方も、大した生活の変化もなく。
日々平和に穏やかに過ごしている。

「克己くん。準備は出来てるの？」

「いや、ただだ。来週なんだから、まだ良いと思って」

—— …… やれやれ。

来週から、研修でアメリカの緊急救命医療センターに行かなくては行けなくなった。最前線の医療に触れるという名目だ。

大きなスーツケースをがらりと引っ張ってきた碧音さんに小さく溜息を吐いた。

「そんなに荷物ないぞ。自分が入るつもりかよ」

「ええ！ このくらいはいるでしょう？ 二週間も行ってるわけだし。それに、来週っていつでも、明後日でしょう？ 忘れ物があったらどうするの」

「—— …… 向こうで買う」

「ああ。そっか。そりゃそうだね」

ぽつりと呟いた俺の一言に妙に納得しながら、ソファに座っていた俺の隣に腰を下ろした。

研修の期間は二週間。

何が楽しいのか、春休みをつぶしての研修だった。戻ったらこっちは桜満開だろうな。

「克己くん」

「ん？」

「何か持っていってかなくちゃいけないものない？」

「例えば？」

「えっと、そうだなあ。歯ブラシとかシャンプーとか、味が恋しくなったらだめだからレトルト食品とかいろいろあるじゃない、あ、私、適当に買って来ようか？」

必要なのか必要じゃないのかわからないようなものを羅列して、急に立ち上がりとした碧音さんの腕をひっぱった。勢いよく立ち上がりとうしていた反動で、俺の上に倒れこむ。

どんっと受け止めると、ふんわりと柔らかい甘い香りがした。

「何？」

急に腕を引いた俺の顔を不思議そうに目を丸めて覗き込む。

「―― ……別に何でもない。とりあえず、大丈夫だから」

「うん？」

「頼むから落ち着いてくれ」

その俺の一言に、急に我に返ったのか碧音さんは顔を真っ赤にして俺から視線をそらした。

―― ……克己くんという通りだ。

私は一体何をそんなに焦っているのだろうか。

分かっているのに、そのはずなのに、何だか、気持ちほそわそわして、落ち着くことが出来ないでいたことは確かだった。

ここへ転がり込んで、三ヶ月くらいなものだ、けれどどちらかが長期間不在になるということは、これが初めてだったから。

何だか、何かに不安だった。

そんな、微妙な心境を私の視線の先で笑う克己くんに見透かされたような気がして、私は子どもっぽくて気恥ずかしかった。

「ごめん。私が行くんじゃないんだから、大丈夫だよ。私、留守番してるだけだし」

「寂しいのか？」

「――・・・分からない……」

「ふーん？」

一体何がそんなにおもしろいのか、克己くんは声を殺して笑っていた。

そしておもむろに私を抱きこむと腕にぎゅっと力を入れて呟いた。

「俺は、寂しい」

「え？」

聞き取れないほどではないが、らしくない台詞に私が聞き返すと、克己くんは「聞き流しとけ」と尚笑ったあと潔く私を解放し

「じゃ、仕方ない。用意でもしとこうか」

ひょいと、私を隣に移すと立ち上がり、寝室に入ってしまった。その後姿を見送っただけで胸が苦しい。嫌だな……とっても寂しいっていつてる私が胸の中に居る。

「大丈夫か。大概のことはやつといたし、冷凍庫に何食分かは冷凍しといたから……それ以外は、何とか出来るよな？ あんまし、退屈だったら、あやでも呼んどいて良いから、戸締りはいいとして、火の始末と……えっと……」

「ふふ。大丈夫だよ。ここに来るまではこれでも一応一人でやってたんだから」

出発する間際になって、玄関先でわたわたと言葉を並べる克己くんを、何だか可愛いと思いつつ笑ってしまった。

そんな私の顔を見て小さく溜息を吐きながら、克己くんは、すつと手を伸ばし私を抱き寄せる。そして、ぽんぽんと背中を叩いて「無茶すんなよ」と一言付け加えて手を離れた。

「克己くんの方こそ、無茶しないでよ。体調も壊さないでね」

にっこりとそういった私に答えるように、切れ長のちよつと冷たそうな印象の瞳を細めて微笑み「ああ」と頷く。

そして、もう一度私を抱きしめて額に軽くキスをして、鼻先が触れ合う距離で視線を絡める。

離れがたくなるからやめとこうと二人で決めたはずなのに、克己くんは私の唇に啄ばむようなキスを、続けて何度も落としたあと、ぐいっと私の腰を引き寄せて深く口付けた。

「—— ……っん……う」

呼吸をするのも惜しいというように、強く口内を犯されて、じわりと目尻に涙が浮かぶ。息を詰め、喘ぐように声を漏らした私に気がついて、克己くんは「ごめん」と短く詫びて離れた。

そんな風に素直に寂しいというような態度を取られると強がっている自分が馬鹿みたいだ。

「直ぐ戻るから」

「うん。気をつけて」

結局、私が用意した大きなスーツケースは不要だと断られ、小さなスーツケース一つ引いて玄関を開いた克己くんを反射的に呼び止めてしまった。

「あのっ！」

「ん？」

顔だけで振り返った克己くんが続きを待っていてくれる。何か、何かいいわなとっ。

「えっと、その、お土産、待ってるから……」

焦った私は有体の言葉しか思いつかなくて、しょぼしょぼと尻すぼみになってしまう。そんな私を見て克己くんはくすりと少しだけ大人びた笑みを溢した。

「……忘れないよ」

スーツケースについた小さなタイヤが、かたんと廊下へ出してしまうと、克己くんは扉を支えていた手をひらひらと振った。支えがなくなった扉がゆっくり、ゆっくりと閉まっていく。

—— …… ちゃん。

と小さな音を立てて、玄関は閉まった。微かに、さっきまでそこに立っていた克己くんの気配を残して……—。

—— …… 行っちゃったか。

閉まったドアを暫らく眺めたが、どうこういつても2週間は帰ってこない。私も仕事に行かなくちゃな。

寂しい気持ちを全て吐き出すように、ふう、と長嘆息すると私は部屋の中へ戻った。

「あいつてて」

つい、電話を切ったあと考え込んでたら、俺は妙な体勢で眠っていたようだ。いまいち、座り心地のよろしくない、椅子から立ち上がるとカーテンを上げた。

眼下には輝くネオンが広がっていて、今夜も町は眠りそうになかった。

—— …… R R R …… R R R …… R R ……

そんなことを考えていたら、電話が遠慮気味に鳴っていた。こんな時間に誰だよ。そう思って、無造作に、電話の受話器を上げるとわさわさと雑音に混じって麗華の声が聞こえてくる。

「いつの間にか、いないと思ったら。どうして、先に帰っちゃうの？」

「―― ……何だ。まだ、そんなどこにいたのか。で、何？」

この研修に引き出されたのは、たった十数名だったにも関わらず、こいつも入ってたんだよな。俺はうっとおしくてたまらなかったこの2週間を思っただけ溜息が出た。

「何？　じゃないわよ。最後の夜なんだし、終わりまで付き合うのが礼儀ってもんじゃないの？」

―― ……礼儀？

まさか、麗華の口からそんなことを聞くと思わなかった。

研修先の病院の連中はやけに陽気で、今夜も俺達のラストパーティーだとか、何とかいって、馬鹿騒ぎをしていた。

そんなものに、最後まで付き合う気なんて俺にはさらさらなかったし、最初から、抜ける気だったため、麗華からそんな風にいわれるのは心外だ。

「しっかり、相手しといてくれ」

受話器の向こうで、まだ何かいていたが、俺は受話器を置いた。

さて、と、シャワーでも浴びて……休もう……。

そう思って立ち上がると、右手にずっとはめていたブレスレットが、何かに引っかかったのか切れて、ぽとりと、床の上に落ちた。

しまった！ と反射的に思い、急に軽くなった右手首を押さえたあと、慌てて落ちたそれを拾い上げる。留め具が馬鹿になっている。ここを交換……したくらいでは、直りそうもない。

別に碧音さんがこれを気にしている風はなかったから、なくなっ
ていても気にしないだろうとは思うけど……あつて当たり前のもの
がなくなると……表現しがたい物悲しさがある。

ふうっと冷たい風に巻かれたような気がした。

……まあ、物は壊れるものだし、帰ったら一緒に新しいものを探
そう……

その程度で片付けて、俺は壊れたそれをサイドテーブルに載せ立
ち上がった最初の目的通り、シャワー室に足を運んだ。

仕事の帰り、あやの予定をずらしてもらって今日も今日とて夕食に付き合ってもらおう。

最初の数日は、真面目に作ってみたり、克己くんが作り置きしてくれたものを素直に食べたんだけど、一人広い部屋に居るのは、その広さとは対照的に窮屈で、あまり美味しくなかった。

克己くんの部屋に最初生活感がなかったのにも頷ける。

「今日帰って来るんだったっけ？」

「うん。明日の夜になるって昨日いったから……今日の夜ってことかな？ んん？ 明日？」

私は時差で頭がこんがらがってしまった……一体、いつ克己くんは帰ってくるんだろう？

「克己のことだから、あんたの頭に合わせたんでしょ？ 昨日、明日っていったんだったら、今日の夜じゃないの？」

「うーん……。そうだよね？」

あやに、からからと笑われながらそういわれてちよっと、納得したけど……。私の頭って……。どういう意味よ。失礼だな。小さくむつとした私の頭を軽く叩いて、あやは、まだ笑っていた。

—— ……ちえ。

私は、やり場のない気持ちを抑えて、両手に包み込んでいた、カップの中身を飲み干して、ふうとひと息。

でも明日の朝には、いつもの生活が戻ってくると思うと、凄く胸の奥が温かくなる。意図せず頬が緩んでしまう。

「てことは、あんたとの連続お食事会も今日で最後ね」

にやにやしないの。と額を弾かれて顔を上げると「そろそろ時間だから」とあやが立ち上がった。私もそれにつられて腰を挙げ「あと漏らす。」

「ん？」

私のその反応にあやは少し驚いたような顔で、大きな瞳を瞬かせた。なかなか次の言葉が出ない私に、あやが小首を傾げたところでごによごによと口にする。

「―― ……いや。ごめん。なんでもない。また、明日ね」

「そう？　じゃあ、明日ね」

そう交わしたのに、バッグを肩に掛けて椅子を戻したあやをもう一度引きとめてしまう。あやは面白いものでも見るように私を見た。かあつと頬が熱くなるのが分かるけど、やっぱり礼儀として……その、改めていうのはあれだけど……

「あ、と。その、ありがとね」

いつも。と心の中だけで付け足した。そんな私に、極上の笑顔で答えるとあやは止めてしまっていた足を軽く踏み出して、先に店を出て行った。

そのあとを追うように、私も荷物を片手に店を出る。

こつこつと慣れた帰り道にヒールの音を響かせてのんびりと家路に向う。まだそんなに遅い時間じゃないから、行き交う人たちには慌しさが残っている。これからの用事に向っているんだろう。

擦れ違う一人一人に予定や約束がある。自分と一生関係することのない人たちが大半なのに、こうして同じ道を歩いている。なんとなく不思議な感じだ。

「―― ……花、か」

ふと、花屋の前で足が止まった。

いつもはダイニングとリビングに少しだけ、生花を置くようにしているのだけど、一人寂しさに花瓶は空っぽになっていた。

―― ……あ、桜だ。

装飾用の物だろう。小ぶりの枝が売られていた桜。可愛いなと素直に思っ手取った。

本当は、今朝からずっとそわそわしていて落ち着かなかった。最初は嬉しくて高揚しているのかとも思ったけれど、それ以上に何か嫌な予感というか、不安というか、そういう感が働いて私に警戒しろといっているような気がした。

とはいっても私の感なんて当たったことないけど。

自嘲気味な笑みを溢し、手の中の桜に微笑む。

「すみません。これください……」

―― ……――

「よし」

ダイニングテーブルの上に、一枝、ちょっと時期の早い装飾用の八重桜を飾りつけると、一人納得して私はサイフォンにお湯を注いだ。

出国してから、一度の連絡も寄越さなかった克己くんになんか怒りを覚えていた私だったが、声を聞いたらそんなことどうでも良かった。

たった1本の電話で棘のたくさん生えていた心が丸くなった自分が少しおかしくて、小さく笑ってしまった。

私も、いい加減甘いな……。

—— ……ピンポーン

「あ」

—— ……帰ったかな？

インターホンの音に反応して、私は慌てて受話器を上げた。

ぷっと小さな機械音がして、ホールの映像と音声が部屋まで届く。

「—— ……」

しかし、そこに映し出されたのは、見たことのない女性で私は思わず声を出すのを忘れていた。

『あの？ 克己さん？』

何も反応がないことを不思議に思ったのか、綺麗な瞳を不安げに

曇らせてカメラを覗いている姿に、ハッつと我に返った私は慌てて「はい」とだけ答えた。

『えっと、こちら、古河克己さんのお部屋ではありませんか？ わたし、風見小雪と申します』

——…風見……小雪……。

その名前に聞き覚えはあった。
一度聞いただけだったけど……私が一生忘れることはないだろう名前だ。

「はい。そうです。今、不在ですがもうすぐ戻ると思うので、今開けますからどうぞ」

震えそうな声を押し殺してようやくそこまでいうと、私は解除ボタンを押し、受話器を置いた。

その場にへたり込みそうなのを、ぐっと堪えて、私は玄関に立ちスリッパを下ろした。

今、階下から上がってくる女性のために…… ——

—— ……ふう

流石に疲れたな。

俺はようやく、空港からタクシーに乗り込むとシートに深く腰掛けて長嘆息した。

予定通り小一時間で戻る。時計を見ながら、そう確信した俺は到着ゲートを潜ってすぐにかけた電話のことを思い出した。

暫らくぶりだったからかどうなのか、少し、碧音さんの声がおかしかったように思えた。それに、俺の帰りを待つ客って誰だ？ 疲れてるのに、碧音さんのほほんとした、顔を見て寛ぎたいのに、いい迷惑だ。

「少し寝るから、着いたら起こしてください」

「はい。良いですよ」

ちょっと恰幅の良い運転手に、俺はそう告げると静かに目を閉じた。

2週間は、ちょっと長かったな。早く、帰りたい……碧音さんの淹れてくれる珈琲も懐かしい。

—— ……早く帰りたい……早く会いたい……

それ以上を考えることもなく、スムーズに車が進行する震動も重なって直ぐに深い眠りに誘われた。

「綺麗な八重桜ですね」

椅子に腰掛けて、さっき私が活けた桜を眺めつつ瞳を細める。桜の精のようにその姿がしっとりと一枚の絵のようになる。

「一時間ほどで戻るって、さっき、電話があったから……あの、珈琲飲めますか？」

「はい。ありがとうございます」

言葉を選び選びかけている私を他所に、にっこりとそう丁寧に見えると部屋の中をぐるりと見渡した。

私は、静かにカップに珈琲を注ぎ淹れる。ふんわりと立ち昇る香りはいつもなら心穏やかになるものなのに、今は全くその効果はない。けれど、つい、いつもの癖で、二杯分作っていたことが、早い対応をするのに功を奏したようだ。

ことつ。

そっと、目の前にカップを置くと、驚いたのか小さく肩をこわばらせた。

「いただきます」

「いいえ。どうぞ」

何とか笑顔を作った私は、自分の分のカップを持って、彼女の前

に腰を下ろした。綺麗な手先で、少量のミルクと砂糖を入れると静かにかき混ぜているその姿も、何だか妙に品のあるお嬢様だった。あまりじろじろと観察するような真似は失礼だと分かっているけれど、どうしてもその姿は人目を引くのだと思う。

彼女は艶やかな長いストレートロングの髪の毛を後ろで束ねて……その名前の通り、抜けるように白い肌とほんのりピンク色の頬。顔の部品は小ぶりだったけど、綺麗に整って配置され、どれも申し分のない、良いバランスだった。

雪女って、こんな感じで人を魅了するのかな？

さっきから、桜の精だとか、雪女だとか、人外なものを浮かべてしまう。そのくらい彼女はどこか完璧さを纏っていたし、そう思うことで私はどこか心の平穏を求めている。

手が細かに震えてそれにあわせるように、カップの中の琥珀色のいつもどおり良い香りを漂わせる珈琲が静かに波打っているのを、私は、ただ、ただ……見つめていた。

「お客さん。着きましたよ、ルイスキャロル。お客さん」

「——……ん。ああ、悪い」

すっかり寝入ってしまった俺は、運転手に数回声をかけられてようやく目を覚ました。

——……ばたん。

タクシーが走り去っていくのを見送りつつ、俺はホールへ入って行った。開けてもらおうかとも思ったが、ま、良いか……と思い直

して、俺は自分の鍵で上がっていった。

—— ……何か、久しぶりだと緊張するな。

部屋のドアの前で一瞬躊躇してしまった自分が可笑しかった。ついさっきまで、早く早くと思っていたのに、情けないな。

やれやれと、一息ついて、ドアを開けると小さく「ただいま」と呟いた。

もちろん、以前の俺にはないことだ。今は、これをいわないと碧音さんにぶすりと怒るから仕方なく、だ。

俺の後に引っ付いているスーツケースを玄関に引っ張り込んでいると

「おかえりなさい」

という声が聞こえた。

けれどそれが、聞きなれない声だったことに妙な感触を覚えて俺は声のした方に視線を移した。

「お……まえ……。え？　はあ？　小雪？！」

動揺全開だ。

顔を上げた先に居たのは、俺が最後に見たときより、ホンの少しだけ大人っぽくなった……いわゆる幼馴染。という奴だ。

「お久しぶりです。克己さん」

「は？ 何でこんなところに？ 碧音さんは？」

俺を待つてる客っていうのは、小雪のことだったのか。

ああ。だから、碧音さんの様子がおかしかったわけか……。

また、何か勘違いでもしたんだろうな。いや、するなというほうが無理かもしれない。そう思うと苦い笑いがこみ上げてきて、とりあえず、荷物はそのまま玄関に放置して部屋に入った。その後ろを、ばたばたと小雪が追いかけてくる。

「克己さん、聞いてください！ わたし、ちゃんと通ったんですよ。来週から克己さんと同じ大学に通えます」

「ああ、そうか。入学祝ならあとで、考えてやるから」

「えーっ、小雪そんなのいらないです」

「分かった分かった」

後ろで騒ぎ立てる小雪を殆ど無視して俺はダイニングに続くドアを開けた。碧音さんは多分小雪にでも出していたんだろう珈琲カップを片付けていた。

「おかえりなさい。克己くん」

「—— ……え、あ、ああ、えと、ただいま」

予想以上に落ち着いた物腰で俺を迎え入れた碧音さんに拍子抜けして、かけるはずの言葉が思い浮かばなかった。その代わりに出たような、条件反射はかなり間抜けだ。

「小雪ちゃんが、首を長くして待ってたよ。何か作ろうか？ それとも何か飲む？」

「え、あ、いや。何も」

「そう？　じゃあ、座ったら？　二人とも」

物凄い違和感を感じる。違和感を感じるのに、それを指摘させない威圧感があって俺は遅疑逡巡した。

—— ……普通に……普通に……普通に……

そうすることが、私の精一杯だった。

まだ、状況を把握しきれない克己くんは可愛らしく目を白黒とさせている。

何はともあれ、元気そうで良かった。

怪我はもちろんだけど、体調も悪くないようだし……少し、疲れてるみたいではあるけど……。

「えーっと、話す事もあるでしょう？　私、席外すね」

「別にかまわないから居ろよ」

「良いよ。私、明日も仕事だし。それに、小雪ちゃん暫らく泊まるらしいからベッド用意しておくよ」

私は、気丈に振舞えてると思う。ちゃんと普通に出来ているはずだ。お腹のその方で黒いものがぐるぐると渦巻いて鉛のように重

く感じる。

でも、平気。

二人の前で、簾を外して泣いたりしない。

泣きそうになる必要なんてないのに、なんで私目の奥がこんなに熱いんだろう。

一分一秒でも早く。早く早く……この場を離れたかった。

だから、まだ、何かいいたそうな克己くんを半ば無視して、私は逃げるようにその場を後にした。

駆け出したいのを押さえて、いつも通りにゆっくりと歩く。

ゆっくりと歩いて、自然にドアのノブに手を掛けて開く……そして、

—— ……パタン……。

寢室のドアを閉める。

限界。

ずるずるずる……と、私は、扉を背に座り込んだ。膝に額を擦りつけて、息を殺す。気取られないようにこっそりと……音を出さないように……。

ぽたぽたぽたっ

溢れ出した涙は止まらなかった。

吐きそうなほど胃が痛かった。

息が止まりそうなほど苦しくて、肩を大きく揺らした。

—— ……泣いちゃ駄目、泣いちゃダメ、泣いちゃ、だ、め……

痛いくらい下唇を噛んで、零れてやまない涙を堪えようとした。
口の中に、血の味が広がり、ますます胃が疼く。

覚悟していた、分かっていたことだから。最小限の傷で済むように何度何度もシュミレートしたはずだ。……確かに、そのどれも上手く行かなくて、毎回隣で眠る克己くんにすがり付いていたけれど……。

それにしても、こんなに早く来るなんて思わなかったな。
もっと、ずっと、あとで、もっとずっと……ずっと……大丈夫だ
と思った。

— 5 — (後書き)

※ すみません。明日から、不定期更新となります。更新時間は17時で変更しないようにするので、その時間に更新がなければ別の日となります。ご了承ください。

※ 最後まで書きあがっている作品ですので、打ち切りになることはありません。

碧音さんは一体何をどんな風にこいつから、聞いたんだ？

何もかも堪えたような顔をしている碧音さんの後姿を見送って、俺は大きく息を吐いた。正直、頭の中が混乱していて、どう整理をつけて良いか分からない。何から考えて何から処理すれば良いのか……さっぱりだ。

「克己さん？ 聞いてます？ わたしの話」

「ん？ ああ。聞いている。大学に受かったんだろう。そんなことより、暫らく泊まるってどういうことだよ」

とりあえず、目の前には小雪がいる。こいつの話の聞こう。

「はい。私が借りるようになって、マンション。新築で、入居が少し先なんです。とはいっても一週間くらいなんですけど。でも、早く克己さんに会いたかったから、先に来たんです！」

—— ……来たんです……って……

そんなこと、何の予告もなしに突然やってきて……何を考えてるんだ。

「社長は知ってるのか？」

「ええ。克己さんのところなら、かまわないってお許しただいてきました」

何考えてんだよ。

頼むから俺の許しも取ってくれ。

俺はあまりの脱力感に二の句が告げなかった。そして、力なくリビングのソファに身を沈め、長嘆息して頭を抱える。

「お電話おかけしたんですよ？ 携帯の方に……でも、繋がらなかったし」

「あ？ ああ。研修にでたからな。私用のは持ってなかったんだ」「そうだったんですか。でも、良かった。丁度お帰りになる日で。これは運命ですね」

—— …… 何の運命だよ

そんな運命があるなら、運命の女神ごと追放してくれ。そんなもん、俺は微塵も小雪に感じてないから本当にマジで、そんなチワワみたいにきらきらと、自分の行ったことに酔いしれてる視線を投げてくるな。

ちらりと、小雪を見て改めて溜息を重ねる。

「もう、物凄く頑張ったんですよ。でも、入れたのは薬学部だったんですけどね。あ、学部は条件に入ってたから良いですよね」「条件？ 条件って、何の条件だよ？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった俺に、小雪は少々むくれつつらをして、ひょいと正面に正座した。フローリングに正座は痛いだろうに。

「克己さんの婚約ですよ」

——…は？

「克己さんいったじゃないですか、あっちを出るときに、同じ大学に入れたら考えても良いって。忘れたんですか?!」

「は？ いや、忘れたとかそんなじゃなくって、お前……。そんなこと信じてたのか？ ていうか、それなら、それで、今の状況見れば、わかるだろう？」

いや、分からなくても良いからある程度察してくれ。もんの凄く迷惑だ。迷惑千万だ。そんな俺の心中を察することなどなく。小雪はにこりと話を続ける。

「今の、状況？」

「そうだよ、今の状況だ」

「ああ。白羽さんのことですか？ わたし気にしませんよ。ちょっとした浮気くらい。それに克己さん口癖みたいにいってたじゃないですか『誰にも本気になることはない』って」

だから、白羽さんのことも本気じゃないんでしょう？ と何の毒を含むことなくあっさりと告げる小雪に胃の裏側あたりがきりきりと痛む。

「気に、しない……って……」

小雪が本当にさらりと簡単に流してしまうので、動揺しきってしまった俺は上手いこと言葉が出なかった。言葉に詰まった俺に助け舟なのか、どうなのか、こつこつと小さな音で壁を叩き廊下に立っていた碧音さんがにこりと告げた。

「お風呂の準備も出来たよ？ 克己くんも疲れてると思うけど、小雪ちゃんが先で構わないよね？」

「―― ……え、あ、ああ」

恐いくらいに普通の碧音さんに反射的に頷くと、小雪は俺と碧音さんの間で少しばかり遅疑逡巡したが「話す時間はまだあるよ」と付け加えた碧音さんの言葉に頷いて「分かりました」と立ち上がった。

それでもまだ少しだけその場を立ち去ることを迷っていた小雪を「早く行けよ」と追い立ててその後姿を見送った。

微かに聞こえるドアの開閉の音に、俺は、ふうと嘆息する。やっ
と息が出来た気がした。

「お疲れ様」

そんな俺を見て、静かにそういった碧音さんのお疲れ様の予先が
分からない。

研修のことについていったのか、それとも小雪のことを指してい
ったのか……出来れば後者で、大した事じゃないと、俺が何とかす
ると信じてくれていれば良いのだけど……。

そう、願ってしまうのは安気過ぎるだろうか。

「克己くん」

ゆっくりと落ちついてその名を呼ぶ。

私なんかよりきつと克己くんの方が今は動揺しているはずだから、私はちゃんと受け止められる。その手はずは整っている。

大丈夫。

大丈夫。

いつも通りの顔をして、いつも通りの声を出して

「気にしなくて良いからな。あいつのことは」

そんなにあっさり切り捨てないであげて。

簡単な問題じゃないのくらい分かっているし、私なら、大丈夫だよ。平気。慣れてる。

落ち着いて、笑って。お願い……顔の筋肉ってどうやって動かせば良かったんだっけ、いうこと、聞いて、よ、ね。

「克己くん、疲れてるでしょう？ とりあえず簡易ベッドも用意したからそっちで、寝て良いよ。今日は私がそこで寝るから」

いって、ソファを指差す。

克己くんが逡巡し、私の声に困惑している。

どうして？ 私何かいつもと違うかな。私ってこんなんじゃないかなっただけ？ こんな感じだよ。こんな感じが、私で……私は大人

だから。

「碧音さん……」

「あつと、そういえばスーツケースどこに置いてきたの？」

「え？ ああ。玄関に置きっぱなしだけど」

「そっか。じゃあ、持って入っとくね」

克己くんが、いいたいことは分かる。聞きたいことも分かる。
でも、今私が答えを口にするのは、恐い。

—— ……ぐいっ！

腕を取られた瞬間。咄嗟に身構えてしまったら、多少強引に引つ張られ克己くんの傍へと引き寄せられる。体温がじわりと伝わってくる距離に、心臓がぎゅうっと悲鳴をあげた。

「ちょっと待ってっ！ いい加減にしろよ」

「……何……？」

何をいい加減にすれば良いの？ 私、間違えてない、よね。

私、今、凄く頑張っているのに、お願い、そっとしておいて。さつきからきりきりと胃の裏側上がりがきりきりと締め付けられていて、痛い。痛くて痛くて、どうしようもないのだから、私のことは……

こっちを向けよと、顎に手を掛けられ視線が無理に絡む。泣いてない。ちゃんと我慢している。

そのはずなのに、視界は緩い。克己くんの顔がはっきりと見えな。なんとか堪えようと息を呑み、頬が紅潮してくるのを堪えようと必死になる。

「口……切れてる……?」

もっと他の事をいいたかったのかも知れないけれど、克己くんはそういつて静かに顎にかかっていた指先が私の唇に触れ、つつとなぞる。克己くんの手のぬくもりが愛しい。心地良い。このまま触れて欲しいと思うけれどそんな自分はいちやいけくない。

「大丈夫だよ。何でもないから。ほ、ほら、きつとあれだよ、乾燥してて割れちゃっただけ」

そつと克己くんの手を取り、私の顔から離してもらう。
ずきん……と胸が痛む。この手が恋しい。このまま頬を摺り寄せることが出来たらどんなに幸せだろう。

「―― ……そうか?」

「うん。そうだよ」

名残惜しい気持ちを堪えて、手を離す。

「ああーつと、その、何だかあいつ勘違いしてるみたいだから、ほんとに碧音さんは何も気にしなくて良いからな? 俺が何とか追い返すから」

「良いよ。大丈夫」

―― ……ん? 何が良いんだ? 何が、大丈夫?

碧音さんの様子がおかしいことは分かるけれど、この状況がおかしいのだから、妙でも当たり前だ。当たり前前の筈なのに……物凄い違和感を覚える。

色々、女がらみの揉め事はこれまでもあったけど、なんていうか、碧音さんは落ち着きすぎだ。

「私なら、大丈夫だから。えーっと、その、うん。ちゃんと出てくし……。うん……。うん……。大丈夫だから」

「碧音さん？ 何が良くて、何が大丈夫で、何で出てくんだ？」

自分に言い聞かせるように、うん……。うん……。と一人頷きながら、視線を彷徨わせる碧音さんの肩を掴んで俺は聞き返した。

出て行く。

なんで碧音さんが出て行かないといけないんだ。

出て行くのは小雪のほうで、異物はあいつで、碧音さんじゃない。

—— ……俺を……置いていくのか……？

俺は、また、捨てられる。

ぎゅううつと身体が軋む。

反射的に碧音さんの肩を掴んで、顔を覗き込むが逡巡し逃げられる。

そして、俺の問いに答えるのが嫌なのか、下唇を噛み首を小さく振った。

—— ……ああ……

だから、唇が切れてたのか。ふと得心した。そんなことから、ふと碧音さんの癖を思い出して、心のどこかがちくりと痛んだ。

「私、わたしは……」

「―― ……うん？」

「私……知ってたのよ」

「何を？」

一度も顔をあげない。俺を見ない。それでも話したいことがあるなら、口にしても良いけど……声はかすれているし、ちらりと覗いている頬は、赤みが引いて青ざめている。

「小雪ちゃんのこと」

「は？」

「だから、克己くんには決まった相手が居ること、こんな日が来ること。どっちも分かったの」

ぼそぼそと紡がれる台詞に、苛立ちが募る。

「誰がそんなこといったんだっ」

自然と語気に熱が籠る。

「それ、は……」

「誰だって聞いているんだよ!!」

あまりのことに思わず声を荒げてしまった俺を、不安そうに見上げた碧音さんは首を横に振るだけで答えようとしなかった。でも答えは出ている。

あのときだ……。間違えなくあの時、碧音さんの様子はおかしか

った。

「橘だな。橘にあの時そういわれたんだな?!　そうだろ?」

思わず強い口調でそういつてしまった俺を見つめて首を縦に振り
はしなかったが、大きな瞳から、ぽろぽろと大粒の抑えきれなかつた涙が溢れてきていた。

碧音さんはあの日からずっと、そんなことを、腹の底に抱えて…
…苦しんで…悩んで……どうして……どうし、て、

「何で今まで、黙ってたんだっ!　一言聞けば良いだけだろう!
どういふことなのかって!!　あんな奴のそんな言葉を信じるくらい
이었다ら、一言訪ねるくらい造作もないことだろう!」

「――…だ……って……」

俺はそのことを聞き出せなかった自分にも腹がたって仕方なかったが、そのことを心の奥に閉まったまま、一人覚悟をしていたという碧音さんにも頭にきていて、荒立った言葉を抑えることが出来なかった。

「だって何だよ！ 泣いてないで、ちゃんと説明しろよ！」

—— ……どうして?! どうして、どうして……何で……分かってくれないの?!

何で私がこんなに克己くんに責められなくちゃいけないの?!
私は、克己くんのために……克己くんの将来のために……。

だって、私は良いところのお嬢様でもないし。大手製薬会社の社長令嬢でもない。私は、克己くんの将来に何の役にも立たない。

だから……我がままを押し通すことなく、揉めることなく、後腐れなく……手を引くことしか。

私には、残されてなかった。いないと思った。
それなのにどうして、そんな怖い顔をするの？

どうして、どうして、そんなに怒るの？

どうして…… ——

もう私の頭の中は疑問符だらけで、ただ……ただ……涙が溢れて
何一つ言葉に出来なかった。

私の肩を掴む克己くんの手に力が入って、ぎりぎりと痛む。

「俺を信じてたんじゃなかったのか……。あんたは！ 俺よりも橘

のいうことを信じたのか!!」

ぎりぎりど歯噛みするようにそう告げられて、お腹の底のほうから冷やりとした感覚が身体中に走る。克己くんの怒気にあてられて、まともに声が出ない。

「わたし、は」

「あんたは口では信じてるっていいながら、腹の中では俺が本当を
いわないとでも思ってたんだろう!」

「違、」

「違わねーよっ! そういうのは、そういうのはっ!!」

「――……」

「信じてるっていわないんだよ!!」

――……ボタンツツ!!

怒鳴られた私は、それ以上そこに居られなかった。

両肩に置かれた腕を振り払って、踵を返す。そして、私は自室に
逃げ込んだ。

強くドアを閉め、その場にへたり込んだ私は、頭が痛くてたまら
なかった。

ううん。

頭だけじゃない身体中いたるところが痛いど悲鳴を上げている。
どこ、なんて特定出来ない。痛まないところを探すほうが難しい。

私は……克己くんを傷つけてしまった。

ここに来てから、どんな喧嘩をしようと、克己くんは決して私の
ことを「あんた」なんて呼び方しなかった。大事に名前を呼んでく
れていたのに……でも、今日、は、

「……………く…っ」

—— ……ごめん、ごめん、な、さい。

違う。

違うよ。

信じてないわけじゃない。

そうじゃない……………ただ……………克己くんの口から聞くのが怖かった。

もしかして、そうだよって、そういわれるんじゃないかと思って怖かった。

だから、信じてないわけじゃない。

そんな風に思わないで……………聞く勇気がどうしてももてなかっただけなの……………お願い……………違うの……………そうじゃ、ない、のに。

私は両膝を抱えて泣きじゃくることしか出来なかった。

私は、もう、身体中の痛みを一人で堪えるしかない。

—— ……俺の言葉はそんなに無力なのか。

俺の言葉はそんなに信用出来ないのか、俺は彼女の気持ち一つ救ってやる事が出来なかったのか。

一体、碧音さんはどんな気持ちで、今まで、ここにいたんだ？
いつか来る確実な別れを、覚悟して……………どうして、笑っていられ

たんだ。

あんなに、楽しそうにしていたと思ったのに、全部、全部……嘘だったのか？。作ってただけだったのか？

本当は……どう思ってたんだ。

俺の腕を払いのけ走り去った碧音さんを、俺は追うことも出来ず、力なくソファに寄りかかりずると座り込んでしまった。

「克己さん。白羽さん。泣いてましたよ？　大丈夫ですか？」

「――……」

小雪の声は耳に届いていたが、顔を上げることが出来なかった、苦しくて、悔しくて、何より情けなくて、正直、俺だって泣きそうだった。

「わたし、先に休ませてもらいますね。おやすみなさい」

そういつてその場を離れた、小雪の気配を感じながら、俺は纏まらない頭を、怒りが覚めやらない心を、何とか落ち着かせようと必死だった。

心から、信じてくれていると、俺は勝手に思い込んでいた。

俺はまた、裏切られた。信頼は薄っぺらで、真実の追究すらしてもらえないほど軽いもの、俺はまた、一人になる。

一人は気楽で、一人が良いと思って過ごしていた頃なら、こんな風に痛みを伴ったりしなかっただろう。俺が他人を信用していないんだ。信用されなくても当然。当たり前。だから、信じてもらっていなかったことを辛いなんて思わなかっただろう。

あのころの俺だったら。

平気だったのに……。

どうして、今更。

どうして、俺の中にこんなに入り込んでから、かき乱していくんだ。

こんな気持ちは初めてで、俺の中で……どこにもいつて行きようのない不安と、孤独が黒々と渦巻いていた。

碧音さんの心が見えない。

碧音さんの考えが理解出来ない。

だから……

—— ……俺は、おれ、は……どうすれば良いのか、見失ってしまい、そう、だ……

「ああ、そりゃあんたが悪いわ」

—— ……ぶっ！

「ちよつと、きつたないわねえ。噴出さないでよ」

「ごほっ。噴いてないよお。ちよつと、むせただけじゃない」

あやの即答に思わず、噴出しそうなのを堪えてむせこんでしまった。なんか入ったらいけないところに入った気がして、涙目になる。そんな目尻を擦りながら、はあと溜息。

昼休みにオフィスの近くにあるカフェに連れ込まれた私は、あやの尋問にあい、昨日の事件の話しを一通りあやに話した。

「やっぱり、私が悪い……かな？」

「悪いわね。」

「—— ……そんな実も蓋もない」

迷いもない答えに私は脱力感を拭えないでいた。

もう、お昼時だというのに、私のお腹はぐうともいわない。空腹が訴えてこないなんて、こんなことは滅多にないのだけど。ふ……と息を吐くと視線を下げた。

「大体そんな古風な話、信じるのもどうかしてるわよ。真意を確かめないっていうのもね」

あやは心底呆れたようにそういうと、カップの中身を一口のんで静かに戻すと話を続けた。

「―― ……ま。どっちも、あんたらしいといえば、らしいけどね」

「らしい、か。はあ……。だってねえ、私、物凄く考えたんだけど……何もないのよ。克己くんのプラスになるようなこと」

「ふうん……。で、その子は何があるわけ？」

「少なくとも、私よりは良いわよ。風見製薬の社長令嬢だし、薬学部への入学も決まってるし」

「風見製薬?!」

あやは余程驚いたのか、思わず声を張り上げた。

でも、あやが驚くのも無理もない話で、風見製薬といえば国内大手企業に名を連ねるほどの大手製薬会社だった。そこのお嬢様が小雪ちゃん、もともと風見社長と克己くんのお父さんは旧知の仲でとても親しくて、そんな話がお互いの利害関係に伴いあがったらしい。と、聞いたわけだ。

まあ、一部私の推測も入ってはいるけどわけだけど。

「なるほどお。相手にしては不足ないわけねえ。しかも本人も清楚で淑やかな美人ときたら、」

「―― ……でしょう」

肩書きに妙に納得したあやは小さく頷きながら呟いていた。

「ま。それは置いておいたとしても、今回の問題はそこじゃないわけでしょ?」

確かに、今回はそこじゃない。

そういう人が居たこと、で、揉めているわけじゃない。

知っていて尚、そのことを伏せ一人で抱え込んでいたことを克己くんが怒っていることは分かる。分かっているんだけど、ね。

「そう、だよねえ。でもね、本当に信じてないとか、そんなんで聞けなかったわけじゃなくて」

「戦う前から尻尾巻いてたわけでしょ？」

「いや、だから、そういうわけでなくてね？」

あやの一言に、わたわたと補足説明をつけようとした私に、あやは声を上げて笑うと話を続けた。

「分かっているわよ。まあ、大人の分別。みたいなもんね。感情だけで突っ走れないこと……だったわけでしょ？」

—— …… 『大人の分別』

そう表現したあやの言葉に私は頷いた。

克己くんよりも私は幾つも大人で、その私がしっかりしてあげないと駄目だと思った。ちゃんと克己くんのためになることを考えてあげないと駄目だと、そう思った。

「それにしても、おかしいじゃない？」

「え……？」

にんまりと私の顔を見据えて、そう問い掛けたあやに私は何をいわれてるのか分からずに、きょとんとしてしまった。

「あ、と。もうこんな時間ね。あたし、昼から会議が入ってるのよ。ほら、社に戻りましょう」

「え？ ああ、うん。そうだね」

あやにせかされて、席を立つと店を後にした。
そして、帰る道すがらあやは話を続けた。訳知り顔で、にやつき
楽しそうに話す。

「いつものあんたなら」

「うん？」

「その秘書さんに話を聞いた時点で、克己から手を引くんじゃない
？……でも……」

いいたいことは分かる。

大人であるし、別れることがわかっているのに、その時点で私は
克己くんから離れることが出来なかった。何度も、何度も考えた。
終わりを告げれば良いと。そのほうがきっと良いハズだって。

それでも、私はこのときまで迷っている。

「うん……私は、ひかなかった。うん——……ひけなかった」

「そう、つまりは、そういうことなんでしょう？ だったら、今更
遠慮しなくても良いでしょ？」

——……ウィイイン。

私たちは、そんな話をしながらオフィスの玄関を潜った。

「ううん。遠慮じゃない」

遠慮じゃないんだよ。

そう痛感すると、心が震える。今私に起こっている全てが、とて
も恐い。

私の声はあやには届かなかっただろう。あやは、同じルームの子に声を掛けられ引きとめられていた。資料を受け取りながら、今日の打ち合わせの内容を引き継いでいるようだ。

あやは忙しい、仕事も、私生活も、これ以上付き合わせるわけにも、行かないか。

「あや、じゃあ。また今度ね」

小さく手を振ってエレベータのラウンジへ足を進めた。

そんな私を視線で見送ってくれたあやに微かに微笑んだ。

「どこへ行かれるんですか？」

俺が出掛ける支度をしていると、にっこりと小雪が後ろから声を掛けてきた。

答えるのももう面倒くさかったが、答えないと黙らないだろうことを想定して俺は、学校へ足を運ぶことを告げた。

「わたしも行きます。これから、お世話になる場所だし、案内してください」

「—— ……お断りだ」

—— ……はあ。

といったところでこいつが諦めたりもするわけもなく、付いてくることは目に見えていた。

そして、その予想通りに、俺にくっついて出てきた小雪は、嬉しそうに俺の腕をとって隣を歩いている。

—— ……邪魔くさいなあ。

時折、腕を絡めている小雪の足と俺の足がぶつかる事にわずらわしさを覚える。

こんなにくっ付かなくても迷子にはならないだろう。と何度いつても聞き入れられない。何故だ。遠回しではなく。はっきりと邪魔

だといっているのに。

そして、ふと……普段こんなことを感じたことなかったことを思い出した。

碧音さんと歩くときって、どうだったんだろう？ 腕を？ いや、彼女は俺の腕を掴んだりしない、手を引いたりもしない。

つかず離れず……隣に目をやるとそこに居たような気がした。目が合えばにこりと話をはじめめる。楽しそうに何かを話しているときも、無言でそこに居るだけでも、煩わしいなんて思えなくて、どこか心地良いものだったのに。

昨夜、あんなに、取り乱さなければ良かったな。

急に、寂しくなって碧音さんへの罪悪感を覚えてしまった。

「克己くん。今日は珍しいね、一緒の子がいるなんて？」

居た堪れない気持ちのまま、小雪の歩幅も気にせず歩いていると、聞き知った声に呼び止められ顔をあげた。視線の先に居たのは溜香で、不思議そうな目で俺を見ていた。

「―― ……ああ。真もきてるのか？ 丁度良い。こいつを、適当に、案内してやってくれ。邪魔でたまらない」

つい、本人を前に本音を漏らしてしまった俺に、少々溜香は呆れたような表情を見せたが「やれやれ」とでもいいたげに微笑んだ。

「新人生？ 別にかまわないわよ。真くんは、研究室の方にいるから、後で顔でも出して上げておいて」

「よろしくお願いします」

にっこりと、溜香に手を伸ばされた小雪は、深々と頭を下げて一

言そういった。やっと、小雪の腕に開放された俺は、ほっと胸を撫で下ろした。

―― ……私が、悪い……か……。

からからとデスクの脇に置いておいた、アイスコーヒーをかき混ぜながら昨夜のことを振り返った。

確かに、私は橘さんの話ししかきかなかった。

その真意を克己くんに聞いただすこともしなかった。

出来なかった。

だって、きつと、克己くんはそんなこと、笑い飛ばしてしまう。でも、家と家のつながりなんて、笑い飛ばせるものだけじゃない。どんなに、泣いても喚いても、従わなくてはいけないことだってある。それが継ぐべき家督のある人間だ。

きつと、克己くんには真実を、家の持つ考えを、伝えていなかっただけかもしれない。それを聞いたとき、克己くんが迷うことのないように、私は覚悟してきたつもりだ。

それが彼のためであり、未来のためであると思ったから。

それは、誰がするでもなく、今、隣に居る、大人であるべき私が、しなくてはいけないことだ、とも思ったから。いつまでも、自分本位で過ごすことが出来ない。それも、大人になるということだと思う。きつと、そのとき限りの恋愛感情なんて、そんなものに比例したりしないのだ。

―― …… 私が線を引かないと。

添えてあったストローにそっと、口を寄せ私は一息吐いた。

「あやは、ああいうけどねえ」

馬鹿馬鹿しい。そういつて笑い飛ばした、あやの言葉が脳裏に蘇った。私も、そういつて笑い飛ばしてしまいたかった。出来れば忘れていたかった。でも、そのときは刻一刻と近づいてるということが、今の現実なのだ。

―― ……

「ただいまあ」

そんな肩を落としきった私を迎えてくれたのは、現実を再確認させてくれる相手。小雪ちゃんだった。

帰りに、うろうろと不動産屋等をまわってはみたものの、どうしても、本腰をいれて、探すような気にもなれずやっぱり私はここへ戻ってきた。

「食事されました？」

「あゝ……いや、まだだけど」

わざわざ、私を玄関まで迎えに出てくれた小雪ちゃんは屈託のない笑顔でそういうので、私は食欲もないのに、つい、素直に答えてしまった。

「わたし暇でしたので、余計なこととは思ったんですが。食事用意

させていただいたんです。良かったら食べませんか？」
「そっか。ありがとう」

他に私には答えることは出来なかった。

「じゃあ、着替えてきてください。すぐに用意しますね」

―― ……悪い子じゃない。

私は、小雪ちゃんにいわれるままに自室に着替えに戻りつつ、改めて再確認した。

昨夜克己くんが戻るまでも、そう思ったのだけど、小雪ちゃん自身、決して悪い子じゃないと思う。嫌味のない素直な子だ。こんな子と一緒に居るなんて無理だと思わせるくらいだったなら、私はこんなに悩まなかった。

はあ。今の私からでるのは、もう、溜息しかなかった。

「—— ……おい。克己起きてるかい？」

ぱんっ！ と、目の前で優に手を叩かれて俺は我に返った。

小雪と二人なんてのに耐えかねて、早々とマンションを離脱。自分の家だというのに情けない。こういうときはバイトを入れておいて良かったと思う。悪いけど、逃げ場にはなる。逃げ場……逃げ、てるん、だよ、な。やっぱり。

はぁ、と重ねる溜息も重い。

わしわしと、前髪を掻き雑ぜてコンロ台の端に手をつくとうなだれた。

「悪い……ぼおつとしてた」

「別に良いけど、あんまし、鍋焦がすと、マスターに怒られるよ？」

優にそういわれて初めて、鍋が濛々と煙を上げていることに気が付き慌ててコンロの火を止めた。参ったな。これは消炭じゃないか。俺としたことがこんな失態を犯すなんて。

ようやく、煙の収まった鍋の中に残っていたのは、多分食べ物だったのだろう。いや、それすら、怪しい、黒々しい炭化した物体だった。

「おはよう。二人とも、外に凄い煙が漏れてたけど、どうしたんですか？」

「—— ……あ、いやぁ」

タイミングよく出勤してきたマスターに、俺は優と顔を見合わせ
て情けなく笑った。マスターは、辛苦の中に放り込んでしまってい
た鍋をちらと目に止めて、訳知り顔で頷くと「その鍋結構するんで
すよ。バイト代から引いておきますねー」と奥の従業員室へと消え
ていった。

「白羽さんって、おいしそうに食べますねえ」

「あ、っと……うん。美味しいよ」

一つ一つの名前なんて良くわからないけど、純の日本料理。会席
料理風に盛り付けされた、その品々を、つい、いつもの調子で食べ
てしまった私を見て、小雪ちゃんはまじまじとそういった。

何だか、いつも、いわれることではあるけれど恥ずかしくなって、
私は苦笑いを浮かべて箸を止めてしまった。

「良いんですよ。続けてください」

そんな私を見て、どう思ったかは分からないが、にっこりとそう
いって自分も止まっていた箸を進め始めた。

暫らく、そんな感じで沈黙の食卓を、ただ箸を進める音のみが行
きかっていた。そして、その沈黙を破ったのは、

「あの、白羽さん」

「……はい？」

一通り済んだのか箸を置くと、湯飲みを両手で包み込み、ぽつりと私の名を呼んだ小雪ちゃんに私は視線を合わせた。

「正直。どう思ってるんですか？」

「―― ……どうって？」

「だから、その、普通怒りませんか？　ここに、ずっと克己さんといらしたのでしょうか？」

少し、戸惑いながら、そう私に訪ねた小雪ちゃんは何だか、可愛らしかった。

「ずつつて、わけでもないよ。それに、分かってたし。私は、それを最初から、受け入れるつもりだった」

「―― ……」

「実際、確かにショックだったし、どうして良いか分からなかったけど。でも、だからって」

ごくり。

纏まらない頭の中を何とか纏めながら言葉にしていた私は、ひどい喉の渴きを覚えて、お茶を一口流し込んだ。

「怒るっていつでも、どこに。そう、どこに怒って良いのか分からないよ」

「―― ……分から、ない？」

「そう。分からない。突然現れた、小雪ちゃんに怒るの？　何ていうて？　それとも、知っておきながら、何の手も打たなかった自分に怒るの？　それとも、それとも……克己くん？　何も、いってくれなかったといつて克己くんに怒るの？」

「克己さんは、きつと、わたしとの約束なんて覚えてなかった」

そういった、小雪ちゃんは、寂しそうに下を向いてしまった。

泣いてるのかな？

泣きたいのは、私のほうなのに。

そんな顔をされてしまったては私には泣くことなんて許されない。

私は泣けない。

克己くんは例え覚えていなかったとしても、間違いなく、周りは覚えている。今の私にとっては、そっちのほうが辛い。

「―― ……大人、なんですネ」

「そうだね」

―― ……大人だから、年上だから。

分かってても、私はこんなに苦しい。

私のこのやり場のない心はどこに吐き出していった良いのか、行き先のない気持ちちが、体中を駆け巡って、何もかも締め付けていた。もしも、私が、まだ何も知らない子どもだったら。

相手構わず、酷いと叫んで、泣いて、喚いて……後先も考えずに自分の気持ちをぶちまけることが出来たのだろうか？

私が克己くんの恋人だと胸を張って主張していただろうか？

絶対に別れないと声高に叫んだだろうか？

分からない。

だって、もしもなんてどこにもなくて、あるのは目の前の現実だけ。私はただ心の片隅で、未練に思うことしか出来ない情けなくて

ちっぽけな女だ。

—— ……あれ？ 廊下の照明が消えてる。

ふと、玄関に足を踏み入れて普段気にもならないようなところが目に付く。

何だか嫌な感じだ。いつもと違う。

他人の気配がする……生活を乱される。いつもと同じじゃない。同じ場所だけどそこは全く違う場所だ。それは、まるであのころのようだ。

あの頃は思ったまま素直に嫌だと全てを拒絶出来た。少し前までの俺でも出来ただろう。

けれど、今は即行動に出ることが出来ない。きっと碧音さんが悲しそうな顔をしてしまうと思うから、俺がそうすることを、きつと望まないから。

もっと、他人のことを考えろと馬鹿みたいに説教しそうだ。気持ちを考えろというだろう。その姿は容易に想像出来る。

ったく、そんなことばかりいつてたら、誰が碧音さんの気持ちを汲むんだよ。

「おかえりなさい」

ぱたぱたとスリッパを鳴らして、にこやかに俺を迎えた小雪に「ああ」とだけ、短く返事をし、部屋に入ってしまった。

「お食事はされました？」

「―― ……ああ。適当に済ませた。碧音さんは？」

俺が遅番のときは、飯は済ませてくることくらい。小雪は、知らない……か。

玄関を潜ってから、ずっと感じている不快感が拭えない。気持ちが悪い。

「もう、お休みになれていると思いますよ。

「……そうか。どうした？」

返答の後、何だか、いいもっているような雰囲気だった小雪に再び問い掛けた。

「いえ、何だか……白羽さんって、変わってますよね」

「―― ……？ 何かいわれたのか？」

まあ、俺にいわせれば変わってるが、ほとんど初対面の奴にまで、そういわれるほど変わってるとは思わない。

「だって普通でしたら、わたしなんてつまみ出されても可笑しくな
いと思いますし」

顎に人差し指を添えて首を傾ける小雪に「分かってるなら出て行
けよ」といたい俺は心が狭いのか？ いったら駄目なのか？ 駄
目、なんだよなあ……はあ。

「でもそんなこと口にしないし、わたしにも丁寧に対応してくれま
すし……大人だから？ うーん、小雪よく分かりません。今の彼女
に激しく攻め立てられて、それを見かねた克己さんが小雪を助けて
くれるって筋書きだと思ったのに……」

「――……」

何の本を読んだんだ？

「結局、白羽さんって」

そして、いうことだけいって、風呂へ行ってしまった小雪を見送って、俺はソファにどっかりと腰を下ろした。

――……どこに怒っているのか分からない、か……。

全く持って、碧音さんらしいといえば、らしい答えに笑わずには居られなかった。けれどその笑いは自分に向けられたものなのか、碧音さんのお人好し加減に向けたものなのか自分でもよく分からない。

「本当に、馬鹿だな……」

ぐしゃりと頭を抱えて零した台詞もどちらに向けたものなのか分からなかった。

カタカタと室内にはキーボードを叩く音だけが響いていた。ふと片手を机上に伸ばして、その動きを止めた。

「――……ありや」

今日、仕事にならなかった分の書類のデータを持ち帰っていた私は、ワイン片手に、その整理を行っていた。

私生活に何があるうと、時間は待つてはくれないし、書類の期限も待つてはくれない。

渋々、片付けていたためか、ワインが進むのが早く、パソコンの脇においてあった瓶はすでに空っぽになっていた。

キッチンに取りにでもかまわなかったけど、さっきがたがたといってたから、きっと克己くんが帰ってきたんだろう。まだ、直接顔を合わせるような気分にはどうしてもなれなくて、私は、空になったグラスを弄びつつ、作業を続けていたが、限界。

あまりにも、身が入りなさ過ぎる。

―― ……やっぱり、明日にしよう。

そう思い立って、普段ならローテーブルが置いてある場所に自分で用意した簡易ベッドに身を沈めた。

「……ふう。疲れた」

別段、肉体労働をしたわけじゃないけど、頭を使うとこれがまた、結構疲れるんだよね。

酷い疲労感に襲われて思わず溜息が漏れる。

こんな時忙しいということは救われる。

何かやることがあればそれに集中している間はほかの事に思い悩まなくて良いし……それにそんな風に疲れていれば、眠りに就くまでに、そう時間が掛からなくて済む。

小雪が「もう寝る」といって、寝室に入っていくのを確認して、俺はふらりと碧音さんの部屋へ向かった。さっき、寝ていたといってたわけだから、もう爆睡してるころだろう。

どうしても、不快感の拭いきれない俺は、碧音さんの顔が見たかった。

そっと、ドアノブを下げると楽に下がる。鍵がかかってないことにほっとして、俺は静かにドアを引いた。

俺の予想通り、薄明かりの下、碧音さんは寝息をたてていた。

―― ……疲れた顔してんなあ。

フローリングの床に直接置かれた、ベッドの隣りに腰を下ろして、邪魔そうに顔にかかる碧音さんの髪を静かに横に流した。

―― ……信じてるっていわない、か。

我ながら、酷いことをいったもんだ。

つい取り乱してしまった自分の言葉を今更ながら、後悔しつつ、小さく溜息を吐いた。

「碧音さんが、一人で大人ぶるからだ」

声に出すか出さないか、そんな小さな声で俺は愚痴った。

家に他人が入り込む不快感。昔から、嫌って程味わってきた。それをまた、今更味わうことになるうとは思わなかった。

後、3日。

それで、一旦あいつはここを出て行く。その時、碧音さんも出て

行くといっていたが本気なんだろうか？

あのとときから、一人でこんな馬鹿みたいなことを、抱え込んで本当に馬鹿だ。この人は……。

でも、それなのに碧音さんは逃げ出さなかった。

どうして、どうして、碧音さんは自ら苦しいほうを選択したんだろう。

俺を、信じていたから？

いや、それは違うだろう。そんなんじや、きつと、ない。

でも、今もこうして、碧音さんはここにいる。

簡単に俺の前から去っていく、あいつらとは違う。

俺は、ふと、昔親父が次々に「新しいお母さんだ」といって連れ帰った奴らのことを思い出した。

俺自身、俺を生んだ母親のことは何一つ知らない。知っているのは、代わる代わる俺の傍に愛想を振りまいて寄ってきた奴らくらいだ。

『仲良くしてね。何でもいってね』『お母さんって呼んで良いのよ』どんな言葉を並べ立てても、あいつらは俺がちょっと（いや、ちょっとじゃないときもあった。子どものすることだ遠慮はない）反抗したり嫌な顔をしたりすれば、どんどん離れて、結局居なくなってしまうっていた。

そうだ。

そして……俺はだんだん笑わなくなった。感情なんて、表に出せば顔色を伺ってる奴の思う壺だと、誰にも本当なんて知られたくなかった。

一人で居たかったんだ。

——でも、もう今は。

「……ん……」

物思いにふけてしまっていた俺は、小さく碧音さんが寝返りを打ったことで、現実に戻された。

碧音さんは眉間にしわを寄せて、なんだか難しい顔をしていた。

悪い夢でも見てるんだろう。

「ごめん」

ぽつりと呟いた俺は、碧音さんのこめかみに軽くキスをして、部屋を後にした。

翌朝、リビングのソファの上で少々寝苦しそうな克己くんを見つけて、起こさないようにそっとその顔を覗き込む。

難しそうな顔をしてるなあ、と思うと切なくなって額に掛かっている前髪にそっと触れる。

綺麗な顔。

小雪ちゃんと並んだら美男美女でお似合いなんだろうな。

私なんかよりきつと、ずっと……。

そんな考えを持つのはかなり自虐的だと思ったが、その位自分を追い込めば思い切りだって良くなるはずだ。

……そのはずなのに、私はまだここに居る。

自分がこんなに諦めの悪い女だとは思わなかった。私は苦笑して、静かに寝ている克己くんの額にキスをしてそっと離れると家を出た。面と向かって言葉を交わす勇氣は相変わらず、まだ、私の中にはなかった。

今日は、朝から私の気分反して、物凄く良いお天気だった。

こんな気分の日は、傘でもさして歩いてる方が、しよぼくれた顔が隠せて良いのに。

誰にいうでもない不満を抱えて、会社までのいつもの道のりを急いだ。

「おはよう。珍しいわね。碧音がちゃっちゃか歩いてるなんて」

ぽんっ。

と背中を叩かれ振り返ると、あやの悪態が聞こえた。

「おはよう。悪かったわね。いつつも、とろとろで」

「あらら、今日はご機嫌斜めね？ 何？ まだ、片ついてないの？」

「――……」

付いてませんよ。私が出て行くまでは付かないのではないの？

そんなひねくれた台詞をあやに向けるわけにも行かず、私は、そのあやの問いには答えなかった。

「そっか、まあ。気分転換に今日は付き合ってよ。んんっと、そうね。7時に下で待ってるわ」

「ちょ！ ……ええ」

私の返事なんて待たずに、あやはそういい捨てると、とつとつと小走りに、杜屋に入ってしまった。そんな気分じゃないのに。全く、人の気も知らないで。胸の中だけで地団駄。

そして、がっくりと溜息。

けれど「下で」といって『X―クロス―』で、といわなかったから、あやはあやなりに気を遣ってくれてるんだろうな。そう思うと、ちょっとあやがかわいかった。それにそんなことをいわせるくらい、本当に私は気分転換が必要な陰気な顔をしているのだろうな。

痛い。

ソファは寝るためにあるわけじゃない。身体の節々が痛くて、軽く身体を伸ばして筋肉を解す。起きてから、結構経つのに戻らないなんて、日頃の運動不足がたたっていると思えない。

時間を工面してジムとか通ったほうが良いだろうか。

はあ。

次の講義のある教室に早めに入って、ぼんやりと時間を潰す。

天気良いなあ……机に載せた肘の上に頭を載せて空を仰ぐ。開け放たれた窓からは心地良い風が吹き込んでくる。少し寒いくらいだけれど、丁度良い。

縁側の老人の如く、だれていたところで、ポケットに放り込んでいたケータイが震える。短いからメールだろう。小雪だったら、嫌だな。

今朝方、引越し先に必要そうなものを買いたいからと付き合い合っていて欲しいといわれて、三秒考えずに断った。

「――……」

ディスプレイに映し出される文字に溜息。まだ、直接口も利きたくない。というわけか。

ケータイに入ってきた、メールは碧音さんからだった。あやとの”お付き合い”のために今夜は遅いらしい。

あやもちよつとは気を使っていたのか、最近”お付き合い”の回数が減っていたのに、嫌なタイミングで入れるなど苦い思いが湧いてくる。碧音さんは自分で思っているほど、弱くはない。正直、俺の方が弱い。嫌な気分になるのも自分の弱さのせいだろう。

「どうかしたの？ 昨日も、ちよつと、変だったし」
「別になんでもない」

なおも溜息を重ねた俺に、いつの間に隣りに座ったのかちよこんとそこにいた瑠香に心配そうな顔で覗き込まれ、俺は視線をそらした。

これこそ、第三者には全く関係のないようなことだ。いちいち説明するに及ばない。

まあ、普通に考えても、あんな状態の家、帰りたくないよな。

俺だったら、相手とぶつかっているか、もしくは早々に家を出て
るだろう。やっぱり、碧音さんの芯はとても強い。

いつもの、イタリアンレストランの一室で今日も、一種の賭けのような会は開かれていた。何の変哲もなく自己紹介から始まって、たわいのない話をとめどなくしている。

今、それどころではない私には、そこに集中している場合じゃなかった。

自然と会話も上の空、ワインも手酌になり進みも速くなる。

時折、あやに「大丈夫？」と声を掛けられるのに答える程度で、さほど会話にも混じっていなかった。

するといつの間にか誰からともなく、二次会の話になっていた。

「あや。私、今日二次会はちょっと」

くんくんとあやの袖を引っ張って耳打ちする。あやは私の方を見てから、暫らく黙って「そう、よね」と苦笑して頷いた。

「分かった。タクシーでも呼ぼうか？」

「大丈夫だよ。そんなに飲んでないし、歩いて帰れる距離だから」

心配そうなあやを後に、私はとりあえずみんなより一足先に店を出た。外の風は意外に冷たく、火照った頬を冷たく撫でていく。

「ふう」

店内ではそうでもなかったけど、やっぱりちょっと酔いが回って
いたみたいだ。

外に出たとたん足元が怪しい。

参ったな。

これではカッコ悪すぎる。戻れば小雪ちゃんもいるだろうし、これじゃ、駄目なオトナの見本みたいなものだ。

ちよつと、酔いを醒ましてから帰ろう。

レストランの近くの川沿いは整備されていて、綺麗な遊歩道になっていた。そのベンチでも、座ってれば少しはましになるだろう。そう思った私は、とりあえずそこへ向かった。

こつこつとレンガ道を歩き、丁度人が途切れたあたりのベンチを確保して、街頭を反射する川面を眺める。ここはまだ明るいし、大きな声を上げれば聞こえる程度の距離に人影もある――カップルだけれど――だから、まあ、大丈夫だろ。

あまり時間はない。早く私から切り出さないと。

分かっているのにいざ口に出そうとすると、喉に何か詰まったように上手く言葉が出なくなる。情けない。気がついたらこんなに固執していたなんて。

はたはたと煩い心音に眉を寄せ、はあと溜息を重ねた。

――…コンコン

この間の研修のレポートを纏めるため、俺は自室のパソコンの前

に座りっぱなしだった。

殆ど、家に戻ってから部屋を出ない俺の部屋をノックしてきたのは他に居ない。碧音さんは今夜遅いのだから小雪だろう。

「克己さん。珈琲淹れたんですけど、飲みませんか？ 開けますよ」

ドアを開けに立とうかと思ったが、小雪のことだ。碧音さんのようなことはしないだろう。そう思って「ああ」と返事だけを返したら、思った通り、ちゃんとお盆にカップを乗せて部屋へ入ってきた。普通そうだよな？ 思い出し笑いなんてらしくない。でも碧音さんのことを思うとらしくないことばかりしてしまう。

「何だか、たくさん瓶があつて、よく分からなかったんですけど。これで、良かったかしら？」

「――…ああ、別に良い。あれは碧音さんにしか、分からないからな」

「そう、ですか。じゃあ、これ、ここに置いておきますね。わたしは、邪魔になったらいいけませんから、出ておきます。頑張ってくださいね」

机の上に横に置いてあったコースターの上に、そっと、マグカップを乗せると、静かに小雪は部屋を出て行った。

「やっぱり、普通はそうだよな」

やはり小雪の言動を見ると、あれが普通なのか碧音さんが変わってるのか、ちょっと不思議でちょっと可笑しかった。

碧音さんだったら、絶対カップは二つ、人の気も知らないで、このソファにいついてしまうだろうしな。

ちらりと、部屋のコーナーにおいてある誰も座っていないソファ

を見ながら、俺は小さく笑った。そして、小雪が入れた珈琲を一口呷ったけれど、やはり何かが足りないような気がした。碧音さんは珈琲だけは上手に淹れる。

そう思うと小雪には悪いけれど、碧音さんの珈琲が無性に飲みたくなった。

——…もうこんな時間か。

そう思っ、ふと時計に目をやると時間を確認したと同時にくらいに携帯が着信を伝えた。

面倒臭いなーと思いつつ、もしかしたら、碧音さんからかもしれないとディスプレイを見るとあやだ。ほんの少しガツカリ。けれど、出ないわけにもいかない相手だ。俺は一つ長嘆息してから通話ボタンを押した。

『もしもし、克己？』

「ああ」

『ちょっと、悪いんだけど。碧音を迎えに来てくれない？』

「何？ 碧音さん、つぶれたのか？ 珍しい」

『いや、そうじゃないんだけど。結構、あの子一人で飲んでたから、普通に今店を出たけど』

なるほど…それが一番怪しいな。

とうかそれを告げるあやの声がどこか楽しげに聞こえるのが気に入らない。

「ていうか、お前が連れ出したんだから、最後まで責任持てよ。全く」

『あゝ。ごめん。あたし、二次会があるんだよねえゝ。じゃあ。頼んだわ』

—— ……ぷちん。

「切りやがった」

やれやれ。

どこで飲んでたかくらいいってから切れば良いものを、あやが何を考えているのか俺にはさっぱりだ。ああもう！ と苛々していたら次はメールが入った。あやだ。伝え忘れたことを思い出したらしい、場所が書いてあった。

どれだけ酔っていても碧音さんなら、一人で帰って来るだろうけど今はこんな状態だし、放っておいて良いようには思えない。それに、俺自身放っておけない……かたんつと立ち上がると素直に迎えに出ることにした。

「どこへ行かれるんですか？」

「あゝ。ちよつと、買出し」

よもや、酔いつぶれた碧音さんを迎えに行くとはいえない。

あの店からだど、川沿いでも歩いて帰るつもりだろう。途中で、会えれば良いけれど都合良くいくかな。重い腰を上げた俺は、碧音さんの帰路を予想しながら、付いてきそうな勢いの小雪を無視して家を出た。

「大丈夫？」

ぼんやりとベンチに腰掛けていると、男の人に声を掛けられてしまった。全くほっといてくれて良いのに。少し苛々としながらとりあえずは無視した。それでも気にしないように、彼は勝手に話を続ける。

「あんまり、楽しそうじゃなかったね」

—— …… ああ。さっきまで一緒だったのかな？ 覚えてないなあ。

私は何となくはつきりしない火照った頭をフル活動させて思い出したが、今日の前で愛想を振りまいてくれている男の人に覚えはなかった。

「本当に、大丈夫？ どっか、そこら入って休んだ方が良いんじゃない？」

「結構です。私のことは、大丈夫ですから、二次会にでも行ってください」

普段の思考回路より薄く、私はいつになくそっけない返答しかできなかった。別に悪気があるわけではないと思うけど、下心はありそうだしね。当然といえば当然の対応だと思っている。

「ええ。女の子一人、おいてくなんて心配だよ。ほら、休みに行こうよー」

「ああっ！ もうっ。結構ですってばっ！！」

しなっと、人の腕を取っているのに気が付いて、私は必要以上の力で振りほどいてしまった。その反動は、目の前の人ではなく自分自身に振り返ってきてしまって、私はふらついてしまった。

「おっと。ほらね。大丈夫じゃない」

尻餅ついでに、座り込んでしまった私に、けたけたと笑いながら手を差し出してきた。

「取り込み中悪いんだけど。それ、俺の連れなの」

その手を取る気は全くなかったけれど、聞こえて来た声に驚きは隠せない。思わず、立ち上がることも忘れてぼんやりと見上げた。

「克己くん？」

その人の後ろでに、立っていた克己くんの言葉はまだ柔らかかったけど、目が笑っていなかった。その威圧的な、雰囲気能耐えかねたのかどうなのか「なあんだ、迎えが来るならそういつてよ」とかいいつつ彼は、そそくさと退散してしまった。

「ほら、大丈夫か？」

ぐいと、私の手を掴んで立たせた克己くんは、ちょっと、いや、結構。息が上がっていた。

「う、うん。私は、なんとも……大丈夫？　息あがってるよ？」
「あのなあ」

私の声に一気に脱力したのか、両膝に手を当てて「あゝ、しんでえ」と大きく肩で呼吸していた。

―― ……全く、あやにはやられるな。

普段運動らしい運動もしていないため、急に走ると結構辛い。やれやれと、一息吐いた俺は、隣りにあったベンチに腰掛けた。川風が身体を心地良く包んで抜けていく。

「ほら」

俺がわざわざ走ってきたのに、疑問を感じて拭いきれない様子の碧音さんに、俺はケータイを突き出した。家を出てすぐくらいから、あやからメールが数回に分けて入った。
内容はもう、あまり触れたくないな。

「―― ……な……何これ。あや」

それを見て笑いが堪え切れなかったのか、くすくすと笑いながら俺にケータイを返した。

「信じたの？」

「―― ……」

別に、信じてねえけど、無茶飲みしてるっていったし、迎えに
来い。なんて電話、初めてだったんだから焦るだろうが。

実際、本当に男に絡まれていたわけだし。
全く。

すどんつと俺の隣りに腰を下ろした碧音さんは、黙り込んでしま
った俺にっこり、本当に嬉しそうに笑って「ありがとう」といっ
た。

この顔は久しぶりに見たような気がする。久しぶりの全力疾走に
乱れた息とは別に胸の奥がきゅっと苦しくなる。

「克己くん。そういうば、これどうしたの？」

そういうつつ、自分の手首を掴んだ。

「ああ、悪い。研修中に切れちゃった」

「―― ……そっか。良いよ、うん」

気が付いてたんだな。と少し驚いた。ずっとつけていたときも、
なくなってからそんなこと、一度も触れたことなかったから、別
段気にもなっていないのかと思った。

碧音さんは、ああそうか。と重ねて、深くベンチに腰掛けるとぶ
らぶらと足先を揺らす。そして「あのね」と切り出してきた。

「あや、あれでも気遣ってくれたんだと思うよ」

「ん？」

「二人で話すこと、出来ないでしょう？」

酔ってるせいで本音が出るのか、見たこともないくらい物憂げな表情で、ぽつりとそういった碧音さんは、胸が詰まりそうなほど苦しそうだった。

「悪か……」

「そういえばさあ。私、前から気になってたことがあるんだけど」

謝罪しようとした俺の言葉をあっさりと遮って、碧音さんはこつと俺の顔を覗き込んできた。酔いの回ってるやつのテンションにはいまいち付いていけない。俺ははあと溜息を重ねて「何？」と続きを促した。

「いや、どうして、私だけ『さん』付けなのかなあ？　って思ってたさあ」

「はい？？」

「だって、克己くんってあんまり『さん』とか、つけなくない？」

「覚えてないのか？　碧音さんが『さん』くらい付けろっていったんだぞ」

素っ頓狂な質問をしてくるから思わず声が裏返りそうだった。

「ええっ？　そんなこといったっけ？」

「……いった。最初は呼び捨てだったんだ。でも、人ん家に転がり込んで大熱出したとき、そういつて怒るから……でももう馴染んだから変えられない」

文句いうなよ。と続ければ、にこりと微笑まれた。

ああ、もう。そんな無防備に笑われると弱い。俺、気持ち悪い。

＊＊＊

——…：…そっか、私ってば朦朧としながらそんな偉そうなことをいっていたのか。

おぼろげな記憶を辿っても、いまいち思い出せない。出せない、けど

「そんなこともあったんだね…：」

何だか、無性にそのことも懐かしく思えた。

「ああ。大変だった」

苦々しくそう零す克己くんの台詞はとても深いものがあって私は申し訳なく苦笑する。本当、私迷惑掛けっぱなしだった。だから、これまで一度だって克己くんに年上らしいことなんて出来ていない。大人らしいところなんて見せることが出来ていなくて、情けないところばかりだ。本当、情けない。

「ごめんね」

でも、気持ちとしては、懐かしくて、とても楽しかった。そんな思いの方が強く残っているのだから不思議だ。

何だか、お互いに振り回されてたような気もしないでもないけど、いつの間にか一緒に居て、それが普通で…：…そこが私の居場所になっていた。

大好きで大切で…：…だからこそ、私が何を守りたいのか悩んだ。

ずっと不意に立ち上がった私は、川辺の柵まで足を進める。水の

香りがする。ここは海が近いからほんの少し、潮の香りもするような気もしないでもない。

風が気持ち良い。

「―― ……なあ」

ぽおっと、風に吹かれる私の隣に歩み寄ってきた克己くんは、柵に寄りかかると、そのまま、しゃがんで私を見上げた。真っ直ぐに私を、見つめる瞳に緊張した。

克己くんは時々、こういう風にどきっとするような表情をする。

「―― ……」

そして、暫らく私を眺めたあと、よっと。しゃがみこんだ姿勢から、すっと立ち上がり、大きく息を吐いてもう一度私の顔を見つめた。

「碧音さんは」

「うん？」

「碧音さんは、本当はどう思ってるんだ？ どうしたい？」

克己くんの真っ直ぐな視線に、真っ直ぐな質問。

私は、それから、逃げ出すわけには行かなかった。緊張のあまり小刻みに震える手を自分で握り締めて深呼吸して……口を開いた。

「私は」

私が守りたいのは

「―― ……」

「私は、別れるべきだと思う。そうしなきゃいけないと思う」

克己くんだ。彼の歩む道を守りたい。彼の未来を守りたい。私には、もう大した道は残っていないだろうけど、彼はこれからだから。

はつきりと告げたあと、ごくりと唾を飲み込む音が身体の中でやけに大きく響いた。

ぶつかっている視線が痛い。

体中の血が頭の先っぽまで一気に上って、そして引いていくような……なんとも表現しがたく苦しかった。

私の出した返答に、克己くんがどう答えるのか怖かった。

「――……分かった」

けれど、克己くんは静かに一言そう答えて、私から視線をそらした。

そして、柵から身を離すと、私の手をとって歩き出した。

「克己くん？」

「帰る」

必要以上に、何もいわない克己くんの後姿が少し切なかった。

「一人で歩けるよ」

以前は慌てて手を離したのに、克己くんはその手を離さなかった。するっと力を緩めて、離れ落ちるかと思った私の手を、指を絡めてしっかりと繋ぎなおす。アルコールで火照った私の手に、ほんの少し体温の低い克己くんの手はとても心地良くて、私からこの手を話さないといけないと思っている、分かっているのに家に戻るまで

その手を離す事も力を緩めることも出来なかった。

—— ……二人とも、何も話せなかった……。

あのあと二人で家路に着くと、小雪ちゃんが物凄く不可解そうな顔をしていた。

私を迎えに行ってくるなんていつて出てきているとは思えないから、きっとどうして一緒なんだという気持ちだったのだと簡単に推測できるけれど、私も克己くんもそれを説明できるだけの心の余裕は残ってなかった。

何事もなかったようにいつも通り、眠る支度を整えて就寝。

朝も普通通り起き出して出社した。

家から出てようやく一息吐いた私は改めて

—— …… 行ってしまった。

という現実には苦悩する。

考えてみれば生まれて始めてかもしれない。

今まで誰かと付き合っても大抵振られるのは、別れを告げられるのは私の役目だった。私から、あんなこといい出すなんて。

そうしようと思っているときと実際口にしたあととは、かなり違う。

でも、きつとこれで良い。

これで良かったのだと、自分にいい聞かせる反面……どこかで、どうしてもが渦巻いて気持ちはすっきりしない。

好きな気持ちだけで一緒に居られるのは、子どもと大人の間に居る僅かな期間だけ。

その境界線を決めてしまったのは私。決断したのも私。分かって

る分かってる分かってるけどっ！

—— ……はあ。

「白羽さん？　どうかした？　そういえば、この間預けておいたファイル整理できた？」

深い溜息を吐き、ぼんやりとデスクに腰掛けて上の空になっている私の顔を覗き込んで、葉月チーフがにっこりと微笑んだ。

そして掛けられた問いを頭の中で反芻して、はたっと我に返る。

「—— ……あ」

「あ。じゃ、ないわよ。あれ、明日の朝一の会議で使うから、纏めておいてね？」

「はい。分かりました」

どこか上の空な私に「大丈夫？」と心配そうな声を掛けてくれるチーフに、はい。と頷いたものの、何が大丈夫なのかなんて自分でも分からない。

そんな私に少し困ったような顔を見せたが、ぼんぽんと肩を叩くと「任せたわよ」と一言残して、自分の席に戻っていった。

その後姿を見送って、傍に置いておいた資料を引き寄せ、ぱらぱらと捲る。

私ってば、あれだけ、時間があつたのに一体何をやってたんだろう。

正直、何にもやってないよね。社会人失格です。

自嘲的な笑みが零れ、そのあとは、やっぱり溜息が零れる。それと同時に体中の何かが抜けていくような気がする。

—— ……今日は残業になりそうだ。

今朝碧音さんと顔を合わせることはなかった。

リビングのソファなんてところで今寝起きしている——家主なのに一番待遇が悪い——俺としては、普通、誰かが傍を通れば目が覚めるのだけど、昨夜は明け方まで眠れなくて……そのせいで碧音さんが起きてきたのに気がつかなかった。

まあ、今顔合わせても、碧音さんにしんどそうな顔をさせるだけだろうから、それで良かったのかも知れないけれど、ちら見くらいしなかった。

「何作ってるんですか？」

「—— ……ん、ちよつと」

ひよつこりと脇から顔を覗かせて問い掛けてきた小雪に、適当に答えた。

別に大した物も作ってないし、別に餌でどうにかしようというわけでもない。

考え事をするときには、何か作りながらというのが俺の性にはあっているらしくて、台所に向っていただけの話だ。

もう何が正しいのかなんて、俺には良く分からなくて
自分がどうしたいのかははっきり分かっているのに、どうしてやれば良いのかが分からない。

まあ——あくまで昔の——俺が適当なことだったのが悪かった。
ということになるので、俺自身責める先がない。

「何か、手伝いましょうか？」

「必要ないからあっち行つてろ」

俺の隣でちよろちよろとしていた小雪を追いついて、俺は一人黙々と作業を続けた。因みにパイ生地を練っている。この単調作業。考え事をするのに向いていると思う。

「あのー克己さん？」

必要ないといったのに、まだ傍を離れていなかった小雪に名前を呼ばれて無愛想に返事をする。そんな俺の態度を気にする余裕もないのか、気にならないのか、小雪はぽつぽつと話を始めた。

「克己さんは、どうして白羽さんと一緒にいるんですか？」

そして、投げられる単刀直入な台詞。

どくんつと心臓が強く打って、刹那手の動きが止まってしまった。

——……どうして？ か……

「あ！もしかして、押しかけてこられて迷惑してるんじゃないですか？」

「——……そんな風に見えるか？」

ぽんっ！ と、何か物凄いことでも思いついたように手を打って、出た言葉がそれだったので俺は思わず脱力した。はあ、と溜息を落としてつつボウルにラップを掛けて寝かせる準備を整えると、キツチ

ンの端に体重を預けて、ダイニングテーブルの傍でごによごに話を続ける小雪を見る。

「いえ、見えませんが……もしそうなら、克己さん、遠慮なく放り出しそうです、よね？」

ちらりと投げられた視線に苦笑して「そうだな」と頷いた。

「それに、碧音さんをここへ連れてきたのは俺だ」

はっきりとそう告げた俺に小雪は、僅かな間きよんとして、はっと気が付くと奇妙な声を上げた。

「……え、ええええ!!」

全く、何だよ。その驚き方は……。

ヘンテコな奇声を発した小雪に突っ込みたかったが、とりあえずやめておいた。

俺が誰かを必要としたというのは、そんなに驚くようなことだろうか？

「ちよ、克己さん。白羽さんの、どこが良いんですか？ 毎晩遅いし、お酒飲んで酔っ払ってるし」

「っはは」

むうつと眉を寄せてそう零す小雪に乾いた笑みが零れた。
なるほど、小雪にはそんな風にうつってるんだな。

「遅いのも、酒飲んでるのも」

気が付いていないのか、本当に鈍いのか、そういった小雪に一言添えて俺は指差した。小雪は俺が指差した先を目で追う様に自分の胸元を見たあと、顔を上げて複雑そうな顔をした。

「わたしのせい……ですか？」

「だろうな。碧音さんは堪え性だから。お前にも何もいわないし、もちろん、俺にもいわない」

—— そう、そのはずだから、きっと今一番苦しんでるはずだ。

「そう、ですか。でも、わたし、知らなかったし、関係ないし、わたしあの人に興味ないし」

知らなかったらいいっていうのか。

俺のところに來たのに、俺の傍にいた碧音さんを関係ないと、興味ないといいきれるのか？

本当に、お嬢様育ちで自分勝手に……だからきつと、知っていたとしても、お前はこうやって、ここへ足を運んだだろう。確実に。

だから今の事態を避けることは、俺達にはできなかった。

例え、あの日に碧音さんが俺に問いただしていても避けれなかった。それなのに、そう直ぐに気がつかなかった自分は、やっぱりまだ未熟で、守るよりも守られている人間だと思い知らされる。

「それで、結局あの方のいいところって何なんですか？ 何かあるから一緒に居るんですよね？」

「良いところ？ 何かあるか……？」

良いところなんて上げたらキリがないといったら、ないのと一緒にだといわれそうで飲み込んだ。何かあるかと問われても小雪が聞いているのは見返りのなものだろう。

俺が碧音さんから得ているのは信頼だ。気持ち的な部分で俺を落ち着かせてくれる。特に考える必要もなかった俺に、色々考えても良いのだと、そういう余裕を与えてくれる。

「お前には分からないよ」

沢山の理由があっても、小雪に今分かれというのは荷が重いと思う。それに俺に伝えるだけの言葉があるとは思えない。残念だけど、ちゃんと説明してやれる自信がない。

「どうして、分からないんですか？ 自分の気持ちなのに」

「ああ、そう、だな。なんていって良いか分からない」

「どうして、分からないんですか？」

重ねられるどうしても胸が痛む。自然と眉間による皺をとることが出来ない。

「それだよ……」

「え？」

「そんな風にいわれたら、余裕がなくなる。あの人は俺に余裕をくれるんだ。考える時間をくれる。碧音さんが居てくれれば俺はゆっくり考えることが出来る」

「意味が、分からないです」

物凄く複雑な表情でそう告げる小雪に、俺もふっと力なく微笑んで「俺も分からない」と答えた。

「碧音さんは俺の一部で、この場所の一部なんだ」

「――……」

まあ、その一部にあっさり別れを告げられたけどな？
そこは伏せる。

それに小雪がこうやって乗り込んできたからこそ、俺は改めてそう考える。小雪が、碧音さん以外が、この部屋の異物であることを再認識するできた。

「克己さん、わたしだって克己さんはわたしの一部だと思ってます。ずっとそう思ってます」

「――……でも、俺はそう思っていない」

「じゃ、じゃあ！ 克己さんだって一方通行なんじゃないんですかっ！」

――……ずきんっ。

吐き捨てるようにそう叫んで小雪はその場を離れた。

俺はその後姿を見送って、ずきずきと痛みを訴える胸を押さえて瞑目する。

――……別れるべきだと思う。そうしなきゃいけないと思う。

昨夜の台詞がフラッシュバックする。

そうしなくてはいけない。そうならなくてはいけない。

いつも俺に余裕を与えてくれる碧音さんが、俺の迷いと不安を断ち切った一言だった。

「んんーっ！」

やっと会社から解放されて、大きく伸びを一つ。

遅くなってしまった。

流石にサボっていた付けは大きくて、結局こんな時間になってしまった。

あまり星の見えないどんよりとした夜空を仰いで、瞳を細める。
でも、この時間なら、確実に克己くんはバイトだろうから、顔を
合わすのは小雪ちゃんだけで済みそうだ。

良いのか、悪いのか、私はそんなこと考えながら帰路につき、マ
ンションのドアに手を掛けて、深呼吸。かちやり、と玄関のドアを
開けた。

今日は、ぱたぱたと迎えに出てくる小雪ちゃんの姿はなかった。

——…出かけてるのかな？

どういうわけか決まって小雪ちゃんは私まで迎えに出てくれてい
たから、そう思っていたけれど、よく考えるまでもなく、私を迎え
なくてはいけないような理由ない。

これが通常だ。

それはそれで良いんだけど。

ぽち……っと廊下の照明をオンにして、リビングに入ってしまった。

「あれ？ 小雪ちゃん？」

とても静かだからやっぱり出かけているのかと当たりをつけたところだったから、人影があったことに驚き目を凝らす。真っ暗だったりリビングのソファに静かに腰を降ろしているのが小雪ちゃんだとなんとか目視できた。

「どうしたの？ 電気も点けないで……。えーっと、調子でも悪い？」

「――……。――」

泣いていたのか、どうなのか、真っ暗で表情も読み取ることが出来ない。とりあえず、私はリビングに電気を点けた。

「今日も、飲んでたんですか？ それってわたしのせいですか」「え？ いや、今日はただの残業だけ」

―― ……えーっと。

確かに私は良く飲んでるから否定しない。寧ろ出来ない。

昨日もかなりあおったし。

でも、それを小雪ちゃんのせいにするつもりは毛頭ないしそんなこと一言も口にしたつもりはないんだけど。

一体どうしたっていうんだろう？

私の頭に疑問符が、ぽこぽんっと飛び出る中、小雪ちゃんはぽつりと口を開いた。

「白羽さんは、
「ん？」

蚊の鳴くような声で呼ばれた私はとりあえず小雪ちゃんの隣りに腰掛けた。

さらりとした、長い髪が顔にかかっている、表情は横からではないまいちつかめない。でも、私の名を呼ぶことすら苦しげな姿は、私の胸も締め付けて不安にする。

「白羽さん、は」

「うん？」

「――……克己さんのこと、どの位、本気なんですか」
「え」

喉につかえていたものを吐き出すように、小雪ちゃんはそういつて俯いていた顔をあげ私の顔を見た。

小雪ちゃんの目は真っ赤にして、真っ直ぐに私を見る。

やっぱり、泣いていたんだろうなと確信を得ると、きりきりと胸が痛んだ。

克己くん、何かあったのかな？

小雪ちゃん個人のことを克己くんがとやかくいうとは思えない。だとしたら、やはりその内容は私に無関係な内容ではないだろうなということとは想像に難くない。

本気の、度合い……か……。

「わたしはずっと、ずっと大好きでした。附属の学園に入る前から、もちろん。それからもずっとずっと」

「――……」

「克己さん、あんなんだから、女の子の間でも、凄く人気があったけど、みんな近寄りがたくて話すことも出来なかったみたいで……でも、わたしは、小雪だけは、そんな子たちとは違ってた。それで、みんなから疎まれてもわたしだけが特別なんだと思って我慢出来た。お父様たちも仲も良かったし……」

「うん」

ぽつぽつと零していく小雪ちゃんの話に私は相槌を打つくらいしか出来ない。小雪ちゃんの痛いくらいの本気は分かった。

分かるよ。

分かるに、決まってる……。

きゅつと私は膝の上に置いた手を握り力を込める。

「克己さんは小雪だけに、優しかったし、小雪にだけ……ずっとそうだったのに。だから、ずっと、ずっと大好きで、ずっと一緒なんだと思ってた。だから、だから、附属の大学にそのまま進むんだと思ってたのに克己さんは……わたし、物凄く驚いて凄く辛かった、悲しかった。小雪と気持ちは同じだと思ってたのに」

ぽろぽろぽろ……っ

綺麗な涙が、小雪ちゃんの頬を伝っていた。

「だから、約束したのに！　だから、頑張ったのに！　頑張れたのに！」

「――……小雪ちゃん」

なんていつて良いか分からなくて、もう、私と克己くんは関係ないから、心配しないでといえは良いのかも知れないけれど、それを口に出来ない私はとてもずるくて……自分で切ってしまったはずなのに、私はどこかでまだきつとしがみ付いている。

そんな私の心うちを見透かすように小雪ちゃんは涙を拭うこともしないで、吐き捨てる。

「白羽さんは！ 白羽さんはずるいです！ 酷いです！！ わたし以上に克己さんを好きだっていうんですか？！」

—— ……小雪ちゃん……。

私は、堪らず目の前で号泣する小雪ちゃんを抱きしめた。小雪ちゃんは一瞬肩を強張らせたけれど、突き放したりはせず、ただただ、酷いよ、ズルイよと繰り返して身体を震わせていた。

—— ……ダメだ……。

「ごめん、小雪ちゃん」

それ以上その場に居られなかった。

私の気持ちなんて、今、この状況に何の影響ももたない。

やっぱり何もいうべきじゃない。何もいう資格もないし、何もいえない。小雪ちゃんの本気に私の宙ぶらりんな気持ちなんてぶつけてはいけない。

私は、痛む胸を押さえて、言葉をかみ殺し部屋へ戻った。

ぱたん

静かにドアを閉めた私は、部屋においてある小さな冷蔵庫を開けた。

胸が苦しくて、痛くて、本当はこんなことではいけないんだけど、他に何かこの痛みを紛らわせる方法なんて私は知らなくて、何か飲んでいなかった。

心は冷え切っている、身体だけは暖くなる。
だから、独りで耐えるために、私には他に方法がなかった。

苦しくて、悲しくて涙が溢れそうで、私だって好きだと正面からぶつかることは出来ない。私は別れることを、身を引くことを選択し、それを克己くんに告げた。

もう、終わっているのだと、そう告げたらきっと小雪ちゃんは救われたかもしれない。克己くんになにをいわれたのかは私には分からない。

けれど、傷付き胸を痛めているときなら、きっと自分に優しい言葉を受け入れると思う。それが、分かっているのに……。

「……あれ……？」

そこにはいつものようにビールも数本入っていたが、それより私の目に飛び込んできたのは、小さなパイだった。

—— ……克己くん。

それは私の大好きなもので、疲れたとき『X―クロス―』で何回か食べさせて貰った。メモもないし、どういう意図で置いたのか分からない、けれど、ここに置くということは、私のために作ってくれたのだと思う。

きっと疲れているだろう私のために……。

—— ……もう、私は涙を堪え切れなかった。

もう、私の本気を受け止めてもらえる先はない。あってはいけ
ない。

分かってる、分かってる。

何度も何度も自分にいい聞かせる。

私は抱きしめてくれる腕も、優しく声をかけ、口付けてくれるそ
の全てを、自らの手で切ったのだから。

克己くんは「分かった」とそういったのだから。

声に出来ない、言葉のために私はまた口の中に広がった血の味を
飲み込んだ。

涙だけは止まらない。止めかたが分からない。

—— ……克己くんがこの先、幸せになるのなら、私なんて消え
てしまっても良い。

居なくなっても構わない。私……は……私の本気、私の心、行き
先もない……言葉。

大好きだといいたかった。

ずっと隣りに居たいといいたかった。

なのに……どうしても……いえなかった。私はこの結末を知って
たから、覚悟してたから、私の心の行き先が、いずれなくなっ
てしまふことを分かっていたから。

いえなかった一言……いえなかった気持ち。

それでも尚消せなかった想い。

ぶううう……ん……という機械音と、冷氣だけが今の私を包んでいた。

もう、いつそ私なんて消えてなくなってしまうえば良いのに……

――

あのあともちゃんと小雪には話をしたつもりだ。

俺なりに誠意ある言葉を選んだと思うし、変に期待を持たせるような形になってしまったこともちゃんと詫びた。

小雪は最後まで分からないと駄々をこね、どうしようもなく、時間もなく、仕方なくその話はまたあとでということにして、俺は『X—クロス—』へ入っていた。

今更なんだけど、バイト先を逃げ場所のようにしてしまっているようで、気が引けるから気分は重いし最悪だ。

そして、目の前には最悪な客も居る。

「……珍しいな」

「そう……？」

そっけなく答えるくせに、その雰囲気は俺に退席することを許さない。

珍しく連れもなく一人で今日のお薦めとワインを口に運んでいるあやとの沈黙に耐えかねて声を掛けたところだ。

あやは、知ってるんだろうか？

碧音さんからなにか聞いたんだろうか？

そういえば碧音さんが「気を遣ってくれてる」って言ってたから、概要くらいは知ってるんだろう。ということは、やはり俺に一言物申しに来た。というところだろうか？

「何か、いいたいことがあるのか」

「……何か、いつて欲しいの？」

「――……」

何も語り始めないあやに痺れをきらして、思わず口にしたが、あやはちらりと俺の方に視線を移すとそっけなく一言返しただけだった。

何か、物凄く、試されてる気分だ。

調子が狂う。

はあ、と嘆息したところで、あやは仕方ないとばかりに単刀直入。簡潔に問い掛けてきた。

「別れるの？」

「――……っ?!」

俺が思わず息を吞めば、ゆっくりと重ねる。

「碧音がそう望むなら……貴方は別れる？」

――……碧音さんが望むなら。

ぼつり、ぼつりと言葉を繋いだあやの本心は全く見えない。俺にどう答えることを望んでいるのか分からない。何かを期待しているのかも分からない。

だから、俺は何も答えなかった。

「まあ、あたしがどうこういうことではないわね」

特に感情の起伏もなく。無言の俺に、細く長い息を吐いて薄っすらと口元に笑みを浮かべるとそれだけを告げた。

「――……」

「……ごちそうさま」

本当にあやは一体何をしに来たのか、何一つはっきり告げないまま、席を立ち、いつものようにマスターに声を掛けると、恐いくらいあっさりと店を後にした。いつものあやの勢いだったら、怒鳴られてもおかしくないし、絶対に駄目だとか、ありえないとか、散々ないようで罵られるくらいしてもよさそうなものだ。

それなのに、何もいわない。

それが余計に不気味で、恐ろしく、俺に選択を迫っている気がした。

確かに昨夜、俺は碧音さんの気持ちは聞いた。

碧音さんは「別れる」と「別れるべきだ」といい切った。俺は、それに「分かった」と答えた。

それはただ単に、碧音さんの意志は分かったという意味でそれ以上でもそれ以下でもない。

別に小雪は明後日にはいなくなる。それまで碧音さんを引き止めていられれば、考えも変わるだろうと思っただし、あんな馬鹿げた話なかったことにしてくれば良いと安直にも考えていた。

でも、もしもそれと同時に碧音さんも居なくなったら、俺はまた、一人になって、あの部屋で一人で過ごすことを考えると正直憂鬱になる。

俺はずっと、一人が好きで一人が楽だと思っていた。

それなのに、本当のところは、一人が嫌いで一人がとても辛いな

んて…… —

「—— ……己、克己」

「あ、ああ」

ぼんやりとそんなことを考えていたから、優が俺を呼ぶ声に気が付かなかった。

ぽんぽんと肩を叩かれて、必要以上に驚いた俺が振り返ると、それに過剰な反応に優も驚いていた。

「もう、時間だよ。あがったら？　どうかした？」

「え、あ……いや、なんでもない」

時計を見れば確かに定時を過ぎている。

何かしてもしなくても時間は勝手に過ぎていく。その証拠のようだ。

だから、もし、碧音さんと別れたとしてもこんな風に時間は勝手に流れていって、全て過去になってしまっ……そうすると、また、俺は何も感じなくなってしまうのだろうか。

一人が嫌いだと、辛いと気がついたのに、俺はまた忘れてしまうことが出来るのだろうか。

尚もそんなことが頭の中でぐるぐるとしていて、動けないで居れば、優に半ば追い立てられるように店を出ることになってしまった。

俺は研修の帰りから、右手が軽くてどうしようもなかった。無意識に何もない手首を握って、やっぱりそこに何もないことを確認し、どこか落胆する。

別に物凄く大切にしていたわけでもなかった。

それなのに、腕に巻かれていたあれは、していて当たり前のようになっいて、ないと身体の一部に風穴が出来たようで癖のように触れてしまう。

次は、俺の心がそれと同じ様に感じるのだろうか。

そして、いつしかその穴に慣れてしまっいて、やっぱり忘れて……。

碧音さんと会っう前に、ただ、戻っただけが、どうしてこんなに恐いんだろう。このまま戻っいて、碧音さんがあの部屋に居なかつたどうしようかと、不安になっいて……。

俺は、今まで誰とも付き合っいて、誰とも付き合っいていなかつたはずだ。

そう、碧音さんだっいて、他のやつと同じように、俺の前を通り過ぎようとしていっる、俺はこのまま目を閉じてしまえば、今までと同じで……きつと、同じで……同じはずなのに……怯えていっる自分がどこかに、確実に、存在していっる。

だから、やっぱり、俺の答えは決まっいていっる。

——…ん。頭痛っ……。

もう、これ以上涙なんて出ないというほど、泣くと私は疲れて眠ってしまっていたみたい。目を覚ますと頭がずきずきと痛んだ。身体を起こしてぐりぐりと両方のこめかみをマッサージする。瞼もパンパンに腫れていた、目を開けるのが辛かった。

時間はもう、深夜を回っていた。

こんな時間だったら、克己くんも、小雪ちゃんも眠ってるだろう。とりあえずシャワーでも浴びよう。それでもまだ、頭痛が残るようなら薬でも飲んで寝ないと明日に差し支える。

年寄り臭く、よいしょとか、掛け声を掛けそうになって飲み込むとよろよろ、簡易ベッドから立ち上がった。そおっと、ドアを開いて廊下を覗くと、しんと静まり返っていて、誰かが起きているとこのはなさそうだ。

私は起こしてしまわないように、最善の注意を払って部屋を出た。

——…サアアアアアア……。

暖かな水滴に打たれながら、私は荒立っていた心を落ち着かせていた。大きく何度も深呼吸する。

うん。大丈夫。

私は気持ちに割り切れる。
まだ、離れられる。

大丈夫、大丈夫。

呪文のように繰り返す。

自分の隣りにあるはずの存在を失ってしまったとしても、私は何とかやっていける。今までだってそうだったんだから、これからだってきつとそうだ。

克己くんは克己くんの道を歩くしかない。その隣りにいるのは、私ではなかった。

ただ……ただ、それだけのことだ。

別に……何も……。

驚くようなことではないし、ちゃんと分かっていた。覚悟、出来ている。

平気、平気、平気。

再び溢れ出しそうだった涙を流し去るため、私は顔からシャワーを浴びた。瞼の上を踊る水滴が心地いい。

—— ……きゅっ。

「ふう」

ぽち……つぽち……つと、数滴の雫を残して、お湯は止まった。
温かな湯煙だけが私を包んでくれる。

頭はまだやっぱり、ぼうっとして、冴えることもなくずっきんずっきんと鈍く痛む。

痛むこめかみを押さえながら、ふらふらと脱衣所に出た。身体から適当に水滴を拭き取ると、バスタオルを身体に巻き私は洗面台の前に立った。

「酷い顔だね」

私は、物凄く情けない顔をしていた。

鏡に映ったその顔に思わず、誰にいうでもない独り言をぽつりと呟いた。

そして、ふう……と、溜息を重ねたのと同時に視線を落とした瞬間！

「――……っっ!!」

「しー……っ。小雪が目覚めます」

――……び、吃驚した。

突然、後ろから抱きしめられて思わず悲鳴を上げるところだった。かろうじて飲み込んだというよりは、大きな手で口を塞がれていて音が漏れなかったというのが正解だ。

鏡越しにそれが克己くんであったことに、ほっとして、私は口から飛び出そうだった早鐘のように高鳴る心臓を元に戻し、泣きはらした顔を見られなくて慌てて顔を伏せた。

「そんなに驚かなくても」

「ふ、普通驚くよ」

小さく声を立てて笑った克己くんは、私も苦笑しつつ小声で答えた。

きゅっと前に回された腕に力が込められて、今度は別の意味で心臓がとくとくと早い鼓動を始める。

「顔上げて」

伏せた顔を上げようとしないうちに碧音さんに、柔らかく伝えたけれど、碧音さんはふるふると小さく首を振り顔を上げてくれる様子はない。これでは、埒が明かない。

俺は碧音さんの前で組んでいた腕を解いて、肩に手を掛けると少しばかり強引に身体ごとこちらに向かせた。最初は抵抗するように、肩に力が入っていたが、碧音さんの力なんて俺に敵うわけもない。そんなこと本人が一番良く分かっていて最初の抵抗以降はすんなりと向き直ってくれた。

それなのに、それでも顔を上げない。

「碧音さん」

「――……」

「そんなに俺の顔見たくない？」

意地の悪い質問を投げ掛けても碧音さんはふるふると首を振るばかりだ。いつもなら、慌てて「そんなことないっ！」といいそうなところなのだと思うと胸が痛む。

俺はゆっくりと深く一度呼吸すると、そっと碧音さんの頬に両手を添えて僅かに力を込めて上向かせた。

苦しげな瞳は一瞬だけ俺を捉えてその後直ぐに伏せられる。

「見ないで」

不服そうに添えられた一言に俺の心はふと緩んだ。

「そんなに、泣かなくちゃいけないくらいなら、あんま無理するなよ。あんな無茶いうなよ」

「別に、そんなんじゃない。それに、私は別れるってちゃんといったじゃない。無茶なつもりもないし、私がそうしたいと思ったから」

だから……と、繋ぐ碧音さんの目尻に涙が浮かぶ。それが零れてしまわないように、碧音さんはきゅっと瞳を閉じて深く眉間に皺を寄せた。必死に堪える姿とてもいじらしい。なんて思ってしまったことを俺が口にしたら、きっと碧音さんは自分の方がオトナなのにと怒るだろう。

「ああ、聞いた」

「あ、明後日、明後日までには出てくから、そ、その、ずるずると長引かせてごめん、なんとかするから」

そう重ねて、俺の腕の中から逃れるように、碧音さんは顔をそらした。いつだって、こっちが恥ずかしくなるくらい真っ直ぐ見上げてくる瞳が俺から逃げる。

それが本心を隠している証拠だと、俺が気がつかないと思っているんだろうか？ 確かに俺は他人の機微に疎いところがあるし、まだまだ碧音さんの気持ちを汲んでやることは出来ていないかもしれない。

それでも……それでも、俺は自分の気持ちくらいはわかっているつもりだ。

どうして、ほっといてくれないの？

私は、今、自分の気持ちに整理を付けて……ちゃんと……ちゃんと伝えた筈なのに。

克己くんはそれを分かったっていつてくれたのに、それなのに……こんな風に触れられたら、馬鹿な私の心は直ぐに喜んでしまう。

私はいつていることも、行動も、心も、全部、全部ばらばらだ。

—— ……かぁ……つつ

私の台詞を聞いてか聞かずか、克己くんは頬に掛けていた手を解いて、私をぎゅっと抱き締めると、顔を逸らしていた私の首筋に優しく何度もキスをして、そのまま舌を肩まで這わせた。

鎖骨の端までくるとやんわりと食んで、軽く吸う。その感触が私の体中に電気を走らせるようだった。

「……ん……ちよ……つと」

湧いてくる感情に慌てて私は克己くんの腕から逃げ出そうとしたが、無駄な抵抗だったようで、再びにっこりと微笑んだ克己くんの視線とぶつかった。

「やっと、こっち向いたな」

「そ、そんなじゃなくて……そうじゃ、なくて。もう……っ私の話、聞いているの？」

言葉尻が弱くなる。

克己くんの瞳は真っ直ぐに私を見ていて、何事もなかったように
緩い笑みを浮かべ、ちゅっと悪戯のようなキスを唇に落とした。

「ん。ああ、聞いてる、ちゃんと」

どこか楽しげな表情で、片腕で私の腰を抱き、空いた手を頬に滑
らせる。熱を持った頬に克己くんの少し冷たい手のひらはとても心
地良い。

別れを決心し、告げても尚、そうやって触れてくれる手のひらが
恋しい。心が喜んで、ふわふわと身体が暖かくなる。

こんなのじゃ駄目だ、駄目。

自分に何度もいい聞かせる。

駄目、駄目。

私は克己くんと距離を置くと決めて、だから、別れると決めて、
だからだから…… ——

「や、やめてよ」

毅然とそう告げてその手を掴んで、引き離そうとしたけど、無理
だった。

「やめない。嫌だ。絶対に嫌」

そういつて悪戯っ子のように笑った克己くん。

その表情が私の胸を締め付ける。

苦しい。きりきりと胸が痛む。やっと止まった涙がまたあふれ出

してしまいそうだ。

「小雪にはちゃんと、納得させるから」

そつと囁かれる甘い台詞。

「―― ……ダメだよ……」

そう口にしながらも、甘い期待が胸に沸き起こってしまう。私はとても駄目なオトナだ。

「碧音さんがちゃんと……ちゃんと、納得するようにするから」

「―― ……ダメ……無理、、無理、だよ」

緩く瞳を閉じて、駄目と無理を繰り返せば、息が掛かるほど誓い距離で「駄目じゃない」「無理じゃない」とことごとく私の言葉を打ち消すように繰り返される。

そして、私の鼻先に克己くんの唇が軽く触れて離れると、今度は唇が触れ合うかどうかの至近距離で懇願される。

「もう少し、隣りにいて」

―― ……とくん、とくん、とくん、、、、とく、とく、、、、

隣りに居て、隣りに、隣り……克己くんの隣りはもう私の場所じゃない。そう分かっているはずなのに、胸のどきどきが押さえられない。

「……ん……っ」

—— …… パサ …… ツ ……

重ねられた唇。逃げようとした私の腰を強く引き寄せるものだから、身体に巻かれていたバスタオルが微かな音を立てて、床に落ちた。

「やっと、触れられた……」

静かにそう重ねられ、再び唇が重なる。

腕を伸ばし克己くんの首に腕を回しそうになる自分の衝動を抑えて、ただ、されるままになる。拒絶は意味を成さない。

味わうように唇を吸い、軽くあわせられた唇を割ってゆっくりと歯列を撫でられ私は我慢出来なくて、軽く口を開いてキスに応える。拒絶されなかったことを素直に喜び尚深い口付けが交わされる。

「ん。んう……」

「……っ、は、、、、あ」

零れ落ちつ吐息にあわせるように、私の身体を優しく撫でる手のひら。

克己くんが与えてくれる一つ一つの行為に私の全てが恥ずかしいくらい敏感に反応する。

……好きで、好きで……たまらない感情が溢れてくる……。

—— …… 隣りにいて。

その一言が、私の胸の中で何度も繰り返し響いていく。
叶うことなら隣りにいたい、傍にいたい。

離れたくない……。

好き、好き……大好き。

だから苦しい、だから悲しい、だから……
こんな気持ち、誰か、消して……お願い。

心が……痛い……。

「――……」

「……だ、ダメだよ……」

「――……分かってる……」

私がようやくと出来た拒絶をどう受け取ったのか、あまりに苦し
くて、私の頬を一筋流れた涙を舐め上げると、最後に瞼に口付けて
克己くんは静かに私を解放した。

そして、いつもと変わらない優しく甘い瞳を向けて

「小雪が起きてきても困るしな」

と、笑う。

――……違う……。

「続きは、また今度ということだ」

――……そうじゃ、ない、よ。

心で、否定するのを声に出すことも出来ず、私は、まるで私の一
大決心の別れ話を一切取り消しにしたような、なかったようにした
ような克己くんになんと続けて良いか分からなくて、ぼんやりと見

つめていた。

「早く、服着ないと身体が直ぐに氷のようになる」

折角温めてやったのになんて軽口を添えて、私の顔が、ぱあっと朱色に染まるのを楽しそうに見て笑いながら「先に出るな」と告げて、私の頬にキスを落とす。

――……馬鹿……。

離れてしまう腕を名残惜しいと思ってしまった。閉められるドアにまた泣きそうになった。

これじゃ、駄目なのに……。

私はぺたんつとその場に崩れるように膝を折り両手で自分の身体を抱き締める。堪え切れなかった涙がはらはらと床を濡らした。

私は馬鹿だ。あんなに心に誓ったのに、決めたのに、簡単にその気持ち揺らいでしまう。

克己くんの言葉が嬉しくて、克己くんの腕の中が居心地良かった。

親まで絡んでそれを納得させるような簡単な方法なんて、あるわけがないのに。例え、小雪ちゃん一人が納得したところで解決なんてしないだろうに。もう、私には克己くんが何を考えてるのか判らない。

唯一つははっきりとわかることは……私が……克己くんを……。

叶えてはいけない気持ちだけが溢れてきて、押し殺すために私の涙はまた流れ続けた。微かな嗚咽を漏らしながら。

翌朝、出社する碧音さんを掴まえて、大丈夫だから心配しなくて良いといったけど、あれは多分、心配している。というか、疑っているというか……当たり前前の反応だろうと思うけど、もっと信じてくれても良いと思うのは俺の勝手だろうか？

「じゃあ。そういうことで、頼んだぞ。ああ、かまわない」

—— …… ぴっ。

静かに受話器を置いた俺は、小さくため息をついた。

連絡を取るだけで一日近く掛かるとかないだろ。朝から電話してメールしているというのに、時間の確保が出来たのが、日が暮れてからとか有り得ない。……とか、滅多に連絡しない俺がというのは間違っているのか？

兎に角、小雪とのことだけはハッキリさせておかないと、話をややこしくするのは基本的に俺だ。

意を決した俺はバイトは休みにして、風呂から上がってくる小雪をリビングのソファに腰掛けながら、待ち受けていた。

夕飯はいらないとメールが届いた。どうも、今夜も碧音さんは遅いようだ。

本当にここ数日、泣き顔ばかり見てるような気がして、こっちま

で滅入ってしまう。俺のせいだから、やっぱり早くなんとかしないと気持ちだけが焦る。

—— ……ふう。

結果俺は深い溜息を吐き出した。

「どうかしたんですか？」

俺の溜息を聞きつけて、風呂から上がった小雪は、後ろから声を掛けてきた。

ほんの少し、驚いた俺は静かに振り返ると長い髪をタオルで拭きながら立っている小雪と目が合う。小雪は不思議そうに首を傾げていた。

「どうもしない。どうもしないが、ちょっと、ここ座れ」

ぱんぱんっ。

俺は自分の隣を、空叩きし小雪を呼び寄せた。

ソファ自体5人掛けなので、ある程度の距離をとって話せると思ったのだけれど……。なぜか嬉しそうな小雪は俺の直ぐ隣りに腰掛けた。膝頭がぶつかりそうな距離だ。

近い……。

俺は微妙に下がったけれど、直ぐに肘掛が脇腹に当たって止まってしまった。この際距離は諦めた。そして、特に見ていなかったTVは雑音としかならないので、とりあえず音量を下げた。

—— ……はあ。

溜息がどうしても漏れてしまう私。

克己くんの笑顔が心に痛かった。

どうして、そっと、しておいてくれないのか。もう何が何だか分からない。

克己くんは一体どのくらいの先まで考えてくれているんだろう？

きっと、今しか見えてないんだよね。だから、きっとあんな風に強気で断言できるんだ。でもそれできっと充分なんだ。一緒に居る私は大人なのだから、私がしっかりと線を引いて……離れてあげれば良い。

何とかしようという克己くんの気持ちは嬉しい。でも、それに甘えているわけにも、素直に手放して喜ぶわけにはいかない。オトナは自分の気持ちだけでは動けない。時には大切な気持ちに蓋をすることだって必要なんだ。

私はそれをよく分かっているつもりだ。

分かっている、大丈夫、分かっている。

はあ。

結局、今日も真っ直ぐ帰りそびれてしまっていた。

不動産屋巡りをしようかとも思ったんだけど、思っただけで終わってしまった。新しい生活というのが全く想像出来ない。時間はそ

んなに重ねていない筈なのに、そのくらい、私にとって大切な場所だった。

まあ……暫らくはあやの家にでも転がり込もうと一人で決め込んで、会社で少し時間をつぶした私は、その足で、何だか懐かしいワインバーに足を運んでいた。

—— ……本当、どうしよう……。

私は、ぼんやりと頭の整理も付かないまま、ワインを淡々と進めていた。

折角の物なのに、ろくろく味わう余裕もなく、ただ何となく喉に流し込んでいる感じだ。

そんな感じだから、いつの間にか私の座っていたカウンター席の隣りに、他の客が腰掛けたことになって気付くはずも無く「こんばんわ」と声を掛けられて、びくりと必要以上に驚いてしまった。

「あ、えと、はい。こんばんわ」

突然、私に挨拶してきた、スーツに身を包んだ同年代くらいの男性はにこやかに微笑む。雰囲気から私と同じように仕事からの帰り、というところだろうか？ この店は静かで落ち着いていて、一人でも気兼ねしなくて良い。

「一人？」

「……ええ。まあ、見ての通り一人です」

わけわかんない人の相手をしてるほど、私には余裕もなく、返事はやはりそっけないものになってしまう。そんな返答に苦笑いしながらも、相手は特に気にはしていないようだ。

「そか。結構、飲める方？」

「……そう、ですね」

お酒に飲まれるような経験もない。

それがどうしたというのか、私のつっけんどんな返答を他所に、彼はにこにこ気さくに話を続ける。

「飲み比べしようか？」

「え？」

そんな私に、彼はにっこりと微笑みながらそんな提案を持ちかけた。

普段の私だったら、そんな話適当に聞き流すんだけど……今日は何かおかしかった……というか、どれだけ飲んでも、酔う気がしなかったから。自信もある。

「良いですよ」

そういった私は、普段しないような意地の悪い笑顔を作っていたに違いない。

「やめたほうが、良いですよ、お客様。もう、結構飲んでらっしゃいますし」

止めに入ってくれた店員さんの声を、静止して彼は私の前においてあった、空のグラスにワインを注いだ。

「君が勝ったら、ここは僕が持つよ」

「はい」

「で、僕が勝ったら僕のいうことを一つ聞いて」

その勝負は、何だかなり私にとって、とても不利な気がした。
でも、まあ、良いか。

「良いですよ」

そして、私も彼のグラスにワインを注ぎいれて「乾杯」と小さく
グラスを合わせた。

—— …… チンッ ……

澄んだ綺麗な音が微かに響いた。

「嫌です」

思った通りの返答に、とりあえず納得した。

ああ……納得してる場合じゃないな。と自嘲的な笑いが零れてしまふ。けれど、小雪からしたら「はい、そうですか」とはいかなくて当然だろう。そのくらいは俺にも分かる。

「だって、わたしとっても頑張ったんですよ。ずっと、信じて」

「—— ……だから、そのことは俺が悪かった。あの時は、何にも考えてなかったし、こんな状況に俺がなるとも思ってなかった。とにかく、あの時とは、状況が違うんだ」

「分かりません。分かりませんよ！」

風呂上りのため、ほんのり色づいていた小雪の頬は、興奮のためかますます紅潮していた。俺を真っ直ぐ見据えて、離さない瞳からは今にも涙が溢れそうだ。

「克己さんにとって、あの人がなんだっていうんですか？ 今、克己さんは離れていこうとしてるあの人を引き止めたいだけなんです！ それは『今』の感情なんでしょう？！ そんなのっ！ そんなのっずっと続くわけ無いじゃないですかっ」

ずきんと、胸が痛む。

続くわけがない。その言葉に苦しくなる。俺の傍から離れていっ

た連中の後姿と、碧音さんの姿が重なる。

永遠なんてないと俺は知っていた。知っていたから拒絶していた。続くものは、続くかもしれないというものは必要ないと思っていた。でも……でも今は違う。他人から与えられるものに永遠なんてないかもしれない。ないかもしれないけれど、自分が作るのならそれは無理じゃないと思う。そう、思えるようになった。

「――……」

黙ってしまった俺に、小雪は震える声で続ける。

「良いんです。別に、もう少し、待つくらい。今まで待っていたんです。少しくらい伸びたってわたしはかまいません。克己さんの酔いが醒めるまで待ちます」

こんな状況下でも、まだ、待つといってやまない小雪に正直どう説明してどう納得させれば良いのか、わからなかった。

今、俺が碧音さんに酔ってるだけだという小雪の言葉も聞き捨てなら無い。

――……そうなのか？

自問する。

――……そんなこと、ないよな。

自答する勢いが無いのは、俺の中身に自信がないからだ。確固としたものが持てない。持ったことがないからこれだそうだというものが分らない。

でも、少なくとも俺は、碧音さんにここにいて欲しいし、離れた

くなんてない。

この感情は持続されないのだろうか？

それだけでは、一緒に居る理由にはならない？

この思いは子どもっぽい我が儘でしかないのだろうか？

「克己さん。あの人は、今の人は、今の人は。克己さんの将来に何の役にも立たないでしょう？ わたしは、わたしだったら……邪魔にもならないように気をつけます。今すぐじゃなくてもかまいません。だから、わたしに、もう、二度と可能性のないようなこといわないで下さい」

碧音さんが今いなくなったからといって、俺は小雪といるのが正解とは思えない。というか、こいつといえるということがいま想像出来ない。

邪魔……？

確かにそうだ……。

「克己さん？」

「―― ……なんでも、ない」

思わず黙り込んでしまった俺の顔を覗き込んでくる小雪の頬には一筋涙の伝った後が残っていた。

「考えなしだった自分を悔いてるだけだ」

頭を抱えてしまう。

今のこいつに一体何をいえば納得してもらえるんだ。

「克己さん」

「―― ……俺は、お前と付き合うとか、社長やお前が考えてるような、そんな先のつもりは、さっきからいってるように全くない。社長だって今の俺を見たらきつと反対すると思う」

小雪が泣こうが喚こうが、これだかははっきりいっておかないと埒が明かない。

目の前の小雪の表情がどんどん曇って、いくのを見詰めながら淡々と、そしてはつきりと口にする。ぎゅっと拳に力を込めて……今分からなくても、分かったといっただけ欲しい。俺の勝手だけど……分かるのはいつかで良いから、昔の俺を許して忘れて欲しい。

ぽとぽと……っ

溜まりに溜まった涙は、留まるところをなくして静かに落下していく。小雪の膝は自ら流した涙でじんわりと濡れていった。

ぎゅっと胸が痛んで苦しくなった。

こんなことに、罪悪感を感じるようになったということは、きっと俺自身変わってるんだろう。昔はこんな光景よくあったし、それに何かを感じることもなんて無かった。

強いていうなら「くだらない」「うるさい」「鬱陶しい」「面倒臭い」そう思うくらいだった。ていうか、俺空気読まないにもほどがあつたんだな。

でも、今なら小雪が何故泣いてるのか、どうしてそう思うのか、分からないでもない自分がそこにいた。

—— …… かつんっ

「あゝ……ダメだ……敵わないな」

空になりきらないグラスが、カウンターに置かれた。

名前も知らないサラリーマン風の男性。こんな日の私に、挑戦したのが運の付き。最近お酒にばかりお金が飛んでいくので私にとっては丁度いい話だった。

「ご馳走様です」

カウンターに突っ伏し腕の隙間から、私の顔を見て「ははっ」と笑う彼に、空いたグラスを振って私はお礼をいった。

「名前聞いても良いかな？」

「内緒です」

「ええ、固いなあ」

「固いんです」

酔いが回ってるのか、彼は身体を起こすことなく、そのままの体制で話しかけ続ける。本当は早く一人になりたかったんだけど、成り行き上仕方ない。

「ははっ。良い心がけだよ。碧音ちゃん」

「—— ……え？」

突っ伏したまま、私の名前を呟いた彼に私は目を丸くした。

おかしい。私、名前なんていったかな？ このお店は『Xークロスー』ほど行き着けというわけでもない。だから、店員さんも私の名前なんて知らないはずなのに……どうして、目の前の彼は私の名

前を知ってるんだろう。

目を白黒させながら、見詰める私にけたけたと愉快そうに笑った彼は、ようやく沈み込んでいた身体を起こして、改めてこちらに向き直ると、今度は穏やかににっこりと微笑んだ。

——…あれ。どこかで？

その笑顔にはどこかで見た覚えが。記憶の片隅に残っているような気がする。

「白羽、碧音ちゃん、だろ？」

「——…」

フルネームで知られていることで益々怪訝そうな表情になってしまふ。そんな私に彼は肩を竦めた。

「まだ、思い出さないかなあ」

何をいつてるのか分からない私。分からないのだから何も答えることは出来ない。そんな私に、良く見て。と身を乗り出してくる。彼が乗り出してきたのと同じだけ後ろに引いて、じっと見詰めるけれどやっぱり、どこかで覚えがある気がするけど、残念ながら辿り着けない。

「ほら、もっと良く俺の顔見てよ」

「え？」

躊躇いなく、ずっと私の手を取った彼はそのままその手を自分の頬につけにっこりと笑った。

……どこか、いたずらっぽいその顔……そういえば……どこかで？

「あ、唯……人……くん？」

「そそっ。良く出来ました」

—— ……いまがわゆいと今川唯人

声に出してみると曖昧だった記憶がはっきりとしてくる。

間違いなく私は彼を知っていた。

確か、中学校まで一緒だったんだ……で、そこから引越しちゃって……そのまま……それまではそこそこ仲が良かったような気がする。

「よく覚えてたね、私のこと……ていうか、私もしかして子どもの頃とあんまり変わってない？」

片方だけ記憶にあったということに少々不満を持った私は子どもっぽいと分かっているながらもそう聞いてしまった。

その質問に、にこにこ唯人くんは「まあねえ」とだけ答えた。店員さんがそっと置いてくれた、グラスには、冷たい水が注がれている。それを片手で揺らしながら、ぼんやりと唯人くんは眺めていた。

「ちえっ。俺はこんなところでの再会に、運命を感じただけだな」
「え？」

「だってさあ、こんな広い町の中で、普通会わないでしょう？ まあ、偶然といわれてしまえばそれだけだね」

「偶然は必然。会うべくして会った……って？ またいいんだ」

彼の昔と変わらない話口調に私は、少し親近感を覚えた。

「お？ 記憶戻ったか？ 昔から抜けてたからな。碧音は」

それから、何とはなしに、昔話に今どうしてるかとか……いろいろと、懐かしいような話に私たちは花を咲かせた。

久しぶりに、楽しくて笑ったような気がする。

ここ数日ずっと思いつめていたから、久しぶりに落ち着いて、凄く安堵した。

唯人くんは、克己くんを知らない。

今、私がどんな立場に立たされているかも知らない。

だから逆に、私はこの時間を寛ぐことが出来た。

— … —

「今日は、ありがとね。」

「良いよ。俺も楽しかったし。それに……ちょっと心配したんだ」

とりあえず、当初の話通り私は彼に代金を払ってもらって店を出た。

半分出すといったけど昔から彼は真っ直ぐだ。自分でいったことを曲げたりはしない。

のんびりと同じ方向を並んで歩く。

ひんやりとした風が吹いていて肌に気持ち良く当たって抜けていく。煌々と煌く繁華街を避けて私たちは川沿いの遊歩道を歩いていた。

「心配？」

「ああ。何か、凄く苦しそうな顔しながら、座ってたらからさ。あのまま、どっかで消えてしまいそうだった。だから、声掛けたんだ」

少し照れながら、そういつてくれたことがほんの少し嬉しかった。彼には「そっか」としか答えなかったけれど、彼のいうことは間違っていない。私は本当に消えてなくなりそうなの、そんな不安定な気持ちを抱えて無茶に飲んでいたから。

「何かあったら、電話して」

ずっと渡された名刺に、視線を落とす。

「―― ……公務員って……警察だったの？」

「え？ ああ。まあね。何か『警察』っていったら壁みたいな感じあるだろ。だから、基本的にいわないんだよ。特に女の子にはね」

そういつて少し恥ずかしそうに鼻の頭を掻く仕草は昔から変わらない。

「そっか。ふふっ」

「何？ 可笑しいか？？」

「―― ……いや。唯人くんの中では、女の子なんだなぁって思ってたさ」

何となく、馴れ合った人たちとしか合わないような生活が続いたから、そんな風にいつてもらえると、くすぐったい様な嬉しいような、不思議な気分だった。

そんな私に唯人くんは迷うことなくはつきりと

「女の子だよ。いつだって碧音はとびつきり可愛い女の子」

毒なくいい切った。なんだか、今はその真っ直ぐさが心地良い。素直に嬉しくて顔が綻び頬が熱くなる。

静かな部屋の中で小雪がしくしくと泣く音だけが響いていた。

「小雪？」

散々、泣いた後、何もいわず俯いたままの小雪に不安になり俺は声を掛けた。小雪は小さく首を左右に振るだけで、返事も無く何も答えようとしなない。

俺は、かける言葉も無い沈黙に、息苦しささえ感じていた。

「克己さん」

「―― ……ああ」

「……好きです……」

「―― ……うん、知ってる」

引っかかることの無いおかしな会話に、俺は顔色一つ変えること無かった。

ここできっぱりと線を引いておかないとお互いのためにならない。

「克己さん」

「―― ……ああ」

「どうしても、ダメ……ですか？」

「―― ……ああ、駄目だ」

そこで小雪がようやく顔を上げた。

まだ、流れ落ちることなく、瞳に溜まった涙がTVから漏れる光に反射して、きらきらと輝く。真っ白な肌を赤く染めて、何かいい気にピンクに色づいた唇を微かに動かして俺を見ている。

そんなに見るな。

俺にも罪悪感くらいあるんだ。

悪かったと……素直にそう思っている。

真摯に見上げてくる、受け止めることの出来ない小雪の視線から

俺は逃げた。

「克己さん」

「――……」

「抱いてください」

「は？」

小雪の突拍子も無い、言葉に一瞬身を強張らせる。

それまでの話を聞いていなかったのか？

そうじゃないよな。そうじゃないうえで……そんな関係を求めるなんて間違っている。

俺は、大きく息を吐きだし、小雪に視線を合わせた。

「つまらないこというな」

「本気です。もう、わたしだって子どもじゃないんです」

「――……子どもじゃないなら尚だ。馬鹿馬鹿しい」

その程度のことと済むというのなら、以前の俺なら迷い無く「据え膳食わぬは何か」とでもいうように抱いただろう。でも、今そんなことをしたら、きつとまた碧音さんは泣く。俺はもう俺のせいで彼女を泣かせるのは嫌だ。

散々、傷つけたから、もう、本当に嫌だった。

それでも、小雪は俺を見つめて、放さない。お願いしますと重ねて、その返答を待つ間も、はらはらと頬に涙が伝う。

「もう、勘弁してくれ……」

いたたまれなくなった俺は、ソファから立ち上がりダイニングの

方へ足を進めた。

ぐいっ

背を向けた俺の腕を、小雪が強引に引っ張る。

「だから……っ！」

俺は苛立ちを隠しきれずに、振り返った。

「本気です」

「――……小雪」

三番目ぐらいまで、パジャマのボタンを外して、両肩を肌蹴た小雪はそれ以上落ちないように胸元で、パジャマを握り締め俺を見上げていた。

生乾きの髪が、肩にかかりその間から覗く白い肌が子どもではないとアピールするように何だか妙な色気を放つ。

片手を、胸元に置いたまま、小雪は俺の顔にそっと触れた。それは、「お願いだから怒らないで」と懇願されてるようで、何もいえなかった。

小雪は静かに、軽く背伸びをすると顔が近づいてくる。睫毛の本数まで数えられそうなほど傍に来て、何かいおうとした、俺の口を最初に置いた手で軽く静止した後、そのまま、唇が重なった。

不覚にも驚いてしまった隙を突かれて、するりと細い腕が俺の首の後ろへ回り、ぐいっと引き寄せられた。無理に引き離せば、フロリーングに押し倒しかねない。どうするべきか悩んでいる間に、小雪の薄い唇が、そっと俺の唇を食み甘く噛む。

「――…っん！」

強引に留められない俺の心境を悟ってか、域とつめたタイミングで角度を変え、再び口付けられる。全身に電気が走るような感情が沸き起こって、ぐっと眉間に皺を寄せた。

――…この馬鹿！

俺は何とか飛びそうだった理性を呼び戻し、手持ち無沙汰になっていた両手で小雪の両肩を掴んだ。

――…かちやつ。

微かに、後ろから聞こえた物音に振り返ると、ありがちに碧音さんが立ち尽くしていた。

ただ、ありがちでなかったのは、俺と視線のあった碧音さんは何をいうでもなく、ふらりとリビングとダイニングの間の廊下へ進み私室へ消えていったことだ。

その様子に、俺は、一瞬立ちすくんで何もいうことも、追い掛けることも出来なかった。

何もいわずに、視線があたった瞬間の碧音さんの目が俺の心を締め付ける。非難するでもない、蔑むでもない、ただ諦めにも似た寂しげな瞳。

「――…碧音さん…碧音さんっ！」

ようやく、その第一声を口にするのできた俺は金縛りから解けたように、彼女の部屋へ駆け寄った。後ろからは、再び小雪がす

すり泣く声と、その間から「ごめんなさい」という謝罪の声が聞こえたが、俺は聞かなかったことにした。

いうべきことはいった、これ以上小雪には構ってられない。
俺はどうせどんなに背伸びしたって碧音さんほど大人じゃない。

かちゃん……。

私は、初めて部屋に鍵をかけた。

心臓は頭の方でどくどくと壊れそうなほど大きな音を立てている。

今、私が目にしたのは、現実……？

私は一体何を見たの？

私は、パニックを起こしてしまっている。頭を冷静に保とうと、大きく深呼吸しながら、ワインセラーにおいてある瓶に手を掛けた。乱暴に蓋の枷を外しコルクを抜き取るとグラスになみなみに注ぎ一気に飲み干した。

かぁっと、体中をアルコール分が駆け巡る。

もう既に、充分に飲んでいた私の身体は、ぐらつき、そのままになっっていた簡易ベッドに堕ちた。天井が揺らいで回っている。

もう、何も考えたくない……聞きたくない……見たくない……。

—— ……信じたくない。しんじ、られ、ない……

何も…… ——

ドンドンッ！

少々荒っぽいノックが、部屋に響く。
私の頭にも響く。

何度かノックと共にノブがガチャガチャと下がる。開くはずの無いドアの向こうから、克己くんの私を呼ぶ声がする。懇願するように何度も何度も。

聞きたくない。

お願い。もう良いの。もう良いから。お願い。

もう……私の名前を呼ばないで……おねがい。

もう、良いから。

何も怒ってないから。

これで、良かったんだから。

こめかみのほうへ涙は静かに流れて行った。はらはらはらはら、止まることがない。

起き上がる気力も無い私は、倒れこんだままどこか遠いところでするようなノックの音と、私を呼ぶ声を聞いていた……そう、どこか……とても、とても遠くの方で……。

「くそっ！」

俺は初めて鍵のかけられたドアに蹴りを入れた。

「~~~~っ!!」

—— …… ああゝっ! 腹が痛えっ!!

内臓の全てをえぐられる様な痛みを覚えていた。身体中が痛い、心が、痛い……痛い……痛い……くそっ!!

—— …… ドン……ッ

開かない。

分かっているドアに拳を叩きつけて、そのドアで頭を支えた。

ああ……泣きそう……。

痛いくらいに強く双眸を閉じて涙を堪える。けれどかっかど熱を持つ目頭は色んな意味で限界だ。

そういえば、前に俺も鍵を閉めて籠ったことがあった。きつと碧音さんも、ドアの前で、こんな気持ちだったんだろう。

あの時は、悪いことをした。

あの日の、碧音さんと同じ様に俺は力なく、ドアの横へずずと滑るように座り込んだ。

ふと、さっきの感触を思い出して、シャツの袖を乱暴に口に押し当て拭き取った。微かにピンク色に袖が色づいた。

—— …… 全く……本当に何にも上手くない。

自分で招いた種とはいえ、ここまで話が広がるとは昔の俺はおろ

か、今の俺にだって予想出来なかった。俺は大きく溜息を吐くと、両膝を抱えた。

碧音さんも、今、こんな風に痛いんだろうか？
どうすれば……この痛みが消えるんだろう？

またもじわじわと熱くなってくる瞼を押さえて、俺は必死に浮かびそうになる涙を堪えた。

膝を抱えたままの俺の傍で人の気配がする。
きつと小雪だろう。

消えそうな声で「ごめんなさい……」という声が再び降ってきたような気がする。それでも俺は顔を上げなかった。

暫らく、俺の傍に立っていたがどう諦めたのかその気配は寝室の方へ消えて行った。

小雪は明日にはいなくなる。
とりあえず、夜が明けさえすれば……ああ……明日は休みだったな。

碧音さんの顔が見たい。

声が聞きたい。

髪に触りたい。

頬に触れたい……唇に触れたい……肌を重ねたい………したいことばかりだ。

何度でも、何度でも謝るから、どうしようもなくお子様な俺を許して、俺はもうこんなに弱くて碧音さんが居ないと何も出来ない……

…。

——…こうなることを望んでいた。

そう、私は望んでいたんだ。

だから、黙って耐えていた。だから、誰も責めるつもりは無い。怒るつもりも毛頭ない。

ただ……どこもかしこも、ずくずくと鈍く疼く。

無理矢理に閉じた瞳には、さっき見てしまった二人の姿が鮮やかに蘇る。

覚悟してたけどできれば見たくなかった。さっさと、ここを出て行っていれば良かった。未練だらしくここにいないければ、あんな姿見なくても済んだのに、こんなに、痛くなくて良かったのに。

やっぱり、私は馬鹿だなあ。

こんなに、痛くなるほど苦しくて嫉妬している。

あんな風に自分以外が彼に触れるのを私の全てが拒絶している。それなのに、私はそれを望んでいた。

まだまだ、天井は揺らいでいて私は起き上がることが出来ない。目も妙に冴えていて、眠ることもできない。

最後にどんっという大きな音が響いてから、ドアの外も静かにな

った。

もう、どうでも良くなったんだろう。案外克己くんは淡泊だから……きつと私なんか長く拘ったりなんてしない。しては貰えない。去る者追わず、来る者拒まず……ってか……ははっ……私は前者だからな。

私は、もう、一人だろう。

うん、それが良い。

ずっと一人ならこんな気持ち知らなかったのに……って私が何も知らずに居られるのって一体何処まで遡れば良いんだか。

自嘲気味な笑みが零れる。何も考えず、ただ毎日が楽しくて笑っていた頃が懐かしい。

笑ってた……か、そういえば小雪ちゃん。

笑ってた。

—— ……そうだ。

笑ってた。

心の底から驚いていた克己くんの肩越しで、あの子笑ってた。

まるで、獲物を捕らえた蜘蛛のように、勝ち誇ったように笑っていた。

謀られていたわけ、か……なるほど、でも……もうそんなこと、どうでも良いや。

—— ……はあ。

溜息と共に、寝返りをうった。

平衡感覚が怪しい。

体中が痛い。

心も身体も……克己くんが……恋しい。

形をなくしてしまいそうな心をなんとか自分ひとりで支えて我慢する。そして、決意。

夜が明ける前にここを出よう。明日は休みだし、早い時間なら、あやも家で寝てるだろう。

ごめんね、あや。私はもう駄目だよ。

もう……溺れてるわけには行かないんだよ、きっと。

私たちのことを、素直に喜んでくれたあやに、何だか申し訳ないような気がして、心の中でそっと詫びた。

ちっちっちっち……

時計の秒針がやけにうるさい。

うるさい……うるさい……うるさい。

まだ、ぐらぐらとする頭をようよう起こし時計に目をやった。何だかんだといいながらも、少し眠っていたようだ。

あと、1、2時間もすれば夜が明けるだろう。

そろそろ、出て行く準備を簡単に。

どこで、どうして、身体が痛みを訴えるのか、わからない。

それでも私は何とか老体に鞭打って、身体を起こし部屋の隅にいてあった、いつかのボーナスで購入したスーツケースに手をかけた。

何日か、ここにいたおかげでこの部屋にもある程度の着替えを持ち込んでいたから、とりあえずはそれでなんとか過ごせるだろう。そんな身の回りのものを乱雑にそれに詰め込んでロックをし鍵をかけた。荷物が少ないせいもあって、その作業は大した時間を割くことも、体力を使うことも無かった。

—— ……よし。

私は部屋の中を静かに一周して自分の足元を確認した。

大丈夫……真っ直ぐ歩けるくらいにまでは回復している。

かちゃん……。

閉めた鍵をゆっくり、ゆっくり回して開ける。

そして、細心の注意を払って静かにドアを開けて頭だけを出し辺りを見回した。

電気の点いていない廊下は、しんと静まり返りひんやりとしている。

—— ……ん……？

視線を落とした私は、ドアの隣で座り込んだままの克己くんを見つけた。

馬鹿だなあ、風邪ひいちゃうのに。

えっと運ぶことは無理だから。

何かかけてあげようか……とも、思ったがそれで目を覚ましてしまってもいけない。良心は痛むけれど、私は心を鬼にして通り過ぎることを決断した。

私は、静かにそっと部屋を出てドアを閉める。

そして、気が付かれないように、ゆっくりそおっと克己くんの前を通り過ぎた。

「—— ……おい」

足音を忍ばせるように、俺の前を通った碧音さんに声をかけた。背中が、びくりと強張って、その次はその場に固まっていた。

「こんなところで、眠れるのは碧音さんくらいだと思うけど」

俺はこの期に及んでも、悪態をつきながら、ゆっくりと立ち上がる。

まだ、体中が痛む。

何かをしたわけでもないのに何でだ。

自然に寄ってしまう眉間の皺をなんとか取り払って

数歩近づいた気配に気が付いたのか、固まっていた碧音さんは振り返ることなく歩みを進めた。

「待てよ」

「――……」

ぐいっ

と掴んだ手が熱かった。

まだアルコールが抜けきっていないんだろう。

でも碧音さんは足を止めなかった。つられて俺もリビングまで付いて出る。

「碧音さん？」

「離して」

「嫌だ。……っていったら？」

「離してよっ!!」

普段では考えられない大声に一瞬驚いて、手を離してしまった。碧音さん自身も自分の声に驚いたのか、俺が掴んでいた手を抱え

込んで、あわあわとまた一步距離を取る。

「あ……っと、その、ご、めん。その……別に怒ってないから……
ていうか、怒る理由も無いよね？ やだな……」

こちらも振り向かずに、ぽつりぽつりと吐き出すように碧音さんはそういった。

—— ……痛い。

碧音さんは理由なんてないというけれど、理由は山ほどあるはずで、俺は本当は攻められてもおかしくない。おかしくないのに、碧音さんは怒らない。

まただ。また腹の奥のほうで激痛がする。

「大丈夫だよ。もう出て行くから。ごめんね。長居しちゃって。ん
と……その、小雪ちゃんにも謝つというて」

「—— ……」

碧音さんの震える声が、身体に痛い。あんなに聞きたかった声なのに、必死に喉の奥から絞り出してくる掠れた声が……苦しい。

どうして、俺は碧音さんにまだそんなことをいわせてしまうんだろう。俺がまだ子どもで碧音さんを安心させてやれるだけの器がなくて……だから、碧音さんは自分ひとりで何もかも背負ってしまう。苦しくてきゅっと唇を噛み締めて痛みを堪えたあと、俺は開いていた二人の距離を一気に縮めた。

そして、立ち尽くしていた碧音さんを後ろから、しっかりと両腕で抱きしめた。

こんなに華奢で小さいのに、どうしてこんなにも強いんだろう。どうして、こんなに……。

回した腕に、力が籠る。

碧音さんは一瞬驚いたように肩に力が入ったが、それもすぐに抜けていた。

「……ありがとう。止めてくれるんだね。去る者追わず。かと思っ
た」

自虐的な切ない一言。そうさせてしまうのは普段の俺の行いのせい。
い。

ごめん……本当に、ごめんな。

「他の奴なら……今までの俺なら……うん、否定しない」

そつと俺の腕に触れる碧音さんの手が愛しかった。
ほんの少し、痛みが治まった。

碧音さんが触れてくれると痛みが和らぐ。心を寄せてくれると
甦ぎいてくる。今、これを手放してしまったら、俺はきつと一生痛み
を抱えなくちゃいけなくなる。

それは、きつと、碧音さんも同じはずだ。

「俺、痛みに弱いんだ」

「え？」

「痛いのも、寂しいのも平気だと思ってた。そう思えたのは、ただ俺が、それらを知らなかったただけなんだな……今ならはっきり分かる」

ぽつぽつとそういつて克己くんは私を抱き締める腕に力を込めた。

「どっちも大嫌いだ」

「……克己、くん」

気がつけなかった気持ちを私が与えられたなら、私がここにいた意味があったのだと思える。私でも、克己くんの日常に影響を与えることが出来ていたのだと思える。

それだけでも私はとても嬉しい。

ここに居て良かった。

克己くんの傍にいて良かった。

我慢しているのに、じわりと目頭が熱くなる。

「こっち、向けよ……」

あんまり、顔は見られなくなかった。

振り返るのは嫌だった。

でも、克己くんの力には敵わない。私は身体だけ向き直ると俯いた。

「顔上げないのか？」

「……うん……」

「そ、か……まあ、良いけど……こうすればどうせ、見えない」

——…ぽす…っ

静かに抱き寄せられた私は、克己くんの胸の中へ納まった。

少し早いような鼓動が、心地良く私の耳へ届く。

私の大好きな場所。

克己くんはそのことを知ってるのか、知らないのか…万人が喜ぶと思ってるのか…分からない。分からないけど、暫らくそのまま、静かに抱きしめて大きな手で私の髪を撫でていた。

——…ずきずき…痛い…。

克己くんの優しい手が私に痛い。心に痛い。

「痛いの」

「え？」

「痛いの…克己くんが優しくしてくれたら…身体の奥の方が痛い。とても…とても痛いの、涙が止まらなくなるの」

実際、私の目からは涙が溢れていた。瞳に留まりきらなかった涙がはらはらはらと落ちてしまっただけで止まらない。

「俺も痛い。どこか分からないけど…すげえ…痛い…」

「大、丈夫…？」

「じゃない。全然大丈夫じゃない。碧音さんが泣いてるのも、痛い、言葉を押し殺してるのも、痛い。全然大丈夫じゃない」

——…克己くん。

私は、ごしつと顔を拭って静かに顔を上げた。

克己くんは、泣いてこそ居なかったが、苦しそうな顔をしていた。眉間に寄せられた皺が、それを物語っている。

「やっと、顔上げたな」

はは……つと力なく笑うと、私の頬に新たに伝った涙を両手で拭ってくれた。

そして、そのまま頬を包み込んで私の顎を上げると静かに口付けた。

「―― ……ん……」

何度か軽く重なったキスは、徐々に深いものに変わっていく。

こんなことでは駄目だと、私は毅然としていなくてはと思って最初は、拒んで口を一文字に結んでいたけれど……徒労に終わる。

静かに、優しく進入してくる彼の舌を拒むことはそれ以上出来なくて。

一度進入を許したら我慢出来なくて私は彼に何度も応えた。

「行くな」

「——……」

名残惜しくないわけではなかったけれど、これだけはちゃんと伝えないといけないから、最後に、碧音さんの唇を甘く噛んで、そっと唇を離すした。

そのままぼすりと俺の腕に抱かれる碧音さんを抱き留めながら、出来る限り穏やかにそう告げると小さく首を横に振った。

——……本当に……強情だな。

「頼むから、行くな。小雪はもう分かってるはずだ」

「それだけじゃないよ」

「昨夜もいっただろう？　ちゃんと、納得行くようにするって。それに……」

「それに？」

俺が途中で言葉を切ると、その先を催促するように、碧音さんは顔を上げた。また、一筋涙が頬を伝っている。強くて弱くて脆い。だからきつと、とても愛しい。そんなことを思ってしまう自分が可笑しかった。

——……泣くな。

俺は静かに、頬の涙を片手で拭き取った。

「泣くなよ。今、ここから、逃げ出したら。一生痛いぞ」
「―― ……だろうね」

予想以上に冷静な一言。これから先、ずっと辛いと分かってて…
…それでも……本当に、全く、どうして……。俺が驚いたのが分かったのか、碧音さんは再び視線を俺から離れた。

「どうして、一人で我慢するんだ？」

「……だから……」

「え？」

「好きだからだよ」

俯いたまま、俺のシャツを握る手に力が籠る。

俺の手より一周りも二周りも小さな手が拳を作る。微かに震えているのが分かる。

好き……。

とくんつと胸が高鳴る。

おかしいな、好きなんてありふれた台詞。何度も、そう、何度も聞いてきた。誰だって必ず口にした。

好き。愛している。

その類の台詞に今更心が揺さぶられると思わなかった。

好きなら離れなければ良い。そんな風に思う、思える俺は、きっと碧音さんのことを理解出来ていないのかもしれない。

――…好きだからに、決まってるじゃない。

私は今までいふべきではないと思い、留まってきた言葉を小さく吐き出した。

でも、心の枷が一つ外れたようで、ほんの少し、どこかの痛みが取れたような気がする。

好き。大好き。

何度も胸の中で繰り返していた。

でも、別れることが決まっていたから、私が口にはいけない言葉だと思っていた。

「初めて聞いたな」

「初めていったもん」

別に、そんなこといわれなれてると思ってたから、想像以上の克己くんの動揺が少し可笑しかった。

子供のような部分がほんの少し、見え隠れする瞬間が彼にはあつて、だからこそ、私は頑張った。いや、強がれた？ 素直になれなかった？ いや、それでは克己くんのせいになってしまう。

違うよ。

そうじゃない……

”せい”ではなく”ため”なんだ。

「情けないな」

「え？」

「俺はそう思ってくれてる碧音さんに、ずっと、苦しい思いを抱えさせたままだったんだな。気が付かずにずっと、曖昧なまま自分の気持ちを押し付けてきた」

―― ……はぁ……。

と重たい溜息を吐いて、克己くんは私から手を離れた。

「ちよっ！」

ごどんっ

握って離していなかったスーツケースを取り落としてリビングに派手な音が響く。

でも、私の驚きは当然のもので、克己くんが突然私の前へ腰をかめたかと思ったら、膝の後ろに手を回して担ぎ上げたのだ。

もちろん私の身体は、持ち上げられる。

……普通に……お姫様抱っこにかにしてくれたほうが良いんだけど、獲物か……私は……。

吃驚しすぎて思考回路が上手く回らない。

人の背中をぼこぼこ叩いて、暴れる碧音さんを無視して、そのまま、ソファまで運んで下ろした。

逆さになっていたためか、それとも残っていたアルコールが回ったためか、碧音さんの顔は真っ赤になっていた。

「もうっ！ 急に何するのよ」

「ふふ、変な顔」

「っ！ なっ！」

「悪い悪い、嘘々。とりあえず、ほら、ここ」

噛み付きそうな碧音さんに向ってぽすぽすと自分が座った隣りを叩いた。勢い余って立ち上がってしまった碧音さんは、俺の様子に赤い顔のまま眉を寄せたけど、ふうと軽く深呼吸すると、俺が促したとおり腰を下ろした。

「何か、何か、さ。物凄く難しく考えてるみたいだけど」

「うん？」

「そんなに、難しくはないんだ」

俺の一言に、心底驚いたような顔をして話の続きを待っていた碧音さんの肩を抱き寄せて髪に静かにキスをした。
柔らかい、いい香りが碧音さんを包んでいる。

「俺の親父のこと知ってる？」

「んー、と、実はあやに克己くんとその病院のサイト見せてもらったから、ちょっとは知ってる。克己くんにお父さん似だね。あやがうっとり見てた」

残念ながら俺は見たことない。

というか普通見ないよな。うん。なんか別に個人サイトというわけじゃないんだからあれだけど、微妙に居た堪れない恥ずかしい感じがするのはなぜだ。

「ま、まあ良いや。それなら、多少は知ってるんだよね？」

こくこくと、碧音さんは上下に首を振った。

「それであいつが俺に後を継がせようとしていることは確かなんだ」

碧音さんは尚もこくこくと頷く。……なんか土産物の類にこんな動きをするやつがあったような気がする。

「で、実際の継ぐ継がない……の話は良いとしても、継ぐのはあの病院だ。親父のコネまで継ぐ気もなければ、必要も無い。あいつはあいつのやり方で、あそこまでにした。俺も俺のやりかたで、追いついて見せる」

「で、でも」

「それに、あいつもそんなつもりはないと思う」

分かっていない！　とでもいうように、話に割って入ろうとした碧音さんの台詞を最後まで俺はいわせなかった。

「でも、風見製薬さんとこの株主もしてるでしょう？」

そうだ。この克己くんのお父さんは風見製薬の筆頭株主でもある。だから、私はこの話を半ば信じがたいと思いながらも信じていた。

「は？　そうだったか？　あいつ、いろんな会社の役員になってた

かもしれないな。まあ。それも、どうでも良ささ」

「どうでもって！」

「俺の親父に引けを取らないくらい、風見の社長も軽いんだ。まあ……大事な一人娘だ。得体の知れないような男に任せるよりは……小雪が望むなら。ぐらいの感じで、頷いたんだと思う」

「―― ……な……何よ、それ……」

吃驚しすぎて、気が付くと涙も止まっていた。

冷静に、克己くんの腕の中で彼の話を聞いていると自然と頭がすっきりしてきた。

そう、そうだよね。

中世の英国貴族とかじゃないんだから……結婚相手があらかじめ決まっていて、なんて……そんなの……いって行く先の無い言葉の代わりに溜息が零れた。

「と、このくらいでは、納得しないだろうな。碧音さんは」

やれやれというように、私の頭を撫でながら克己くんは呟いた。
今の時点で、両方の親が小雪ちゃんということを、望んでいるんだとしたら。

うん。

私は、克己くんの言葉だけでは納得いかない。

「まあ、その辺は、明日にでも解決させるから、今は少しでも、寝とけ」

「え？」

そういつてぎゅっと私を抱きしめると、そのまま倒れた。
ぽすりと柔らかいソファが心地良く私たちを包む。

さっきまで、ひどく痛んでいた、どこもかも。それなのに、今の時は不思議と痛まない。

克己くんもそうなのかな？　ちらりと顔を上げると、克己くんが目があった。

彼は微かに目を細めて「早く寝ろ」とでも、いわんばかりに腕に力を込める。

私の居場所を、克己くんが守ってくれようとしてくれていることはなんとなく分かった。自分だけの独断ではなくて、私のことも考えてくれて、それで、結果を出そうとしてくれている。

そんな彼の腕の中で私は、もう少しだけでも……ここに居たいと改めて思ってしまった。

翌朝憎らしいほど天気が良かった。

小雪ちゃんを新しいマンションへ送って、私たちはそのまま車を走らせていた。どこへ行くのかはまだ私には分からない。ただ

「碧音さんが気にしなくて良い」

私の考えてることが分かるのか、運転席から克己くんの声が掛かる。私はそれに「うん」とだけ返事をして、流れていく景色に視線を送った。

高速道路を延々と走る。最初は高いビルの間を走っていたけれど、それを通り過ぎれば青い空にスプレーアートしたような雲が窺えた。

小雪ちゃんは、もう泣いてなかった。

昨夜は泣いていたのか、まだ、目は腫れていたような気がしたけど到底触れることの許される部分ではなくて私は黙って見過ごした。だから、結局、私とは言葉を交わすこともなかった。

当然といわれれば当然だけど、痛む胸は仕方ない。私なんかと話すことないと分かっている。それでも他人を傷つけて得た先に何があるのかと思うと苦しくて仕方ない。

ぎこちない息の詰まる時間だった。

そうなることくらい分かるから、私は着いていかないっていったのに克己くんに無理矢理車に乗せられた。ゼットはやはり克己くんのものだったらしい。

はぁ……金持ちの道楽。普段乗りもしないくせに。

思考を別のところへと運んでも、まだやっぱり直ぐに戻ってきて

しまう。

—— ……小雪ちゃんの視線が忘れられない……。

一度だけ、送り届けたマンションのドアが閉まる直前、かち合った視線。

明らかに、私は彼女の恨みを買ったんだろう。

すぐに克己くんが気が付いて、立ち位置をずらしたから、その視線からは開放されたんだけど、やっぱり、かなり、きつかった。

「やっぱり、出て行こう。なんて考えるなよ」

「うん」

やっぱり、どこか、克己くんには読まれてるような気がする。

克己くんの言葉にそっけなく答えた私は、窓の淵に腕を当ててその上に頭を乗せ目を閉じた。風が気持ちよく、私の顔の上を通り過ぎていく。風も冷たいから嫌がられたけど、密室にしてしまうと吐いた溜息が溜まりそうで嫌だった。

「あんまり、頭出すなよ」

「ん、分かってる。ねえ……どこ行くの？」

「ああ。もうすぐ着くから。着いたらすぐ判る」

「—— ……ふーん」

この道が高速ではなくって海沿いとかだったらもっと気持ち良いのにな。

折角だから、今度はドライブでも行きたい。休みでもとって、旅行もかねて、さ。

「そのうち行こう」

「え？」

「どうせ、旅行でも行きたいなあ〜とか、考えてたんだろう？」

「――……」

驚いて克己くんの方を見たが、ふふっと笑う彼を見て複雑な気分になりつつも、まあ……良いか……と思い直して何もいわずに、元の位置に視線と頭を戻した。

それが面白かったのか、隣りで堪えきれない笑い声が聞こえたけれど、無視した。

「ちょっと！　ここって」

「ん？　ああ、親父の病院だ」

インターを降りて暫らく走ると、普段足を運ぶことのない場所が見えてきた。

ようやく、行き先が分かったのか……本当に分かってなかったら、よっぽど鈍いと思うが碧音さんならありえる。

驚いて窓の淵に頭をぶつけて「いったあ」と席に座りなおした碧音さんが恨めしそうに俺の顔を見る。

うん。気付いてなかったんだな。分かったよ。

「そんな、睨まれても、俺、別に何にもしてないだろう」

「してはないけど……ていうか、私会わないよ。心の準備も出来ないし」

無駄に広いような駐車場を抜けて俺は地下駐車場に続く坂を下っ

た。

「会わなくても良いよ。別に」

「え？」

「会うのは俺だし、話をするのも俺だから、別に無理して会う必要はまだない」

—— ……別に変なことってないよな？ まだない。まだ、と
いっただけだ。

一瞬顔色を曇らせた碧音さんに気がついて、自分の台詞を反復した。やっぱり、会いたかったのか？

解決しないことに頭を悩ませている場合じゃない、解決しそうなことから、済ませてしまおうと思った俺は、一番院内への出入り口に近い場所へ車を止めて降りた。

自分で降りてこようとしない、碧音さんを助手席から引っ張り出して、何とか院内へ足を運ぶ。

「忙しいから、いないんじゃない？」

エレベータに乗り込んで上がっていく、階数を目で追いながら、ぼつりとようやく碧音さんが口を開いた。

「普段ならそうだろうけど、でも、まあ、アポは昨日取ったか
ら今はいるだろう。時間も丁度良いくらいだし」

「準備良いんだ」

「まあな。あいつは捕まえとかなないと捕まらない」

確かに、橘に無理をいって時間を空けさせたことに間違いは無い。

—— ……このまま……

このまま、エレベーターが壊れてたどり着くことがなかったら良いのに、ふと、そんなことを考えてしまった自分に苦笑いしていたらエレベーターは静かに止まった。

35階？ 病院の割りに高いところに、あるんだなあ。

静かに、開いたドアから、克己くんの後に続いて出た。廊下は全面ガラス張りになっていて、ちよつと怖い。

「病棟とかとは、離れてんだよ。まあ、オフィスビルみたいなものだな。ここは」

ちよいと、外を指差していった克己くんの指した先を見下ろして納得した。

眼下には、こんな高いところから見たら、平屋にしか見えないが敷地面積の広い、建物がいくつかの棟に別れて点在していた。

「さて、と」

突き当たりの大きなドアの前に立つと、克己くんは大きく深呼吸して、ドアを叩いた。

平気だと心配なと繰り返してくれていたけれど、やっぱり、緊張しているようで、少しほつとしてしまった。

そのノックの音に答えるように、ドアを開けたのは

「お久しぶりです。克己様」

やはり、橘さんで笑顔で克己くんを招きいれた。

その後ろに居た、私に気がついた橘さんは静かに微笑むと軽く会釈して私も中へ通してくれた。

「あいつはいるのか？」

「また、あいつだなんて。お父様でしたら、ちゃんとお待ちになってますよ。久しぶりに会えると嬉しそうでしたし」

「嘘をいうなよ」

すぐに、その部屋へ通じてるのかと思ったら、ドアの向こうは大きなホールのようになっていて、ドアを潜ってすぐには、受付テーブルのような物も置いてあり、そこには綺麗な女の人が腰掛けてにっこりと、頭を下げてくれた。

中の予想外のことに、つい恥ずかしくなって慌てて私も頭を下げたが顔が熱かった。

その奥には応接セットも綺麗に準備されていて、ここを訪れる人が多いことを示しているようだ。

「碧音さんは、ここで、待ってて良いから。座ってて」

その奥の重厚そうなドアの前に立った克己くんは、振り向きながらそう言って、私に応接セットの豪華な椅子を薦めたが、一瞬それにしたがって良いのか量りかねて動けなかった。

「そんな緊張しなくても良いから、ほら、座って、座って……」

とことごと一度私の傍まで戻ってきた克己くんは、私の両肩を掴み椅子に半ば無理矢理座らせた。ぽんぽんっと肩を叩かれて、何と

か詰まっていた息を吐き出すことが出来る。

その様子を確認した克己くんは、再びドアの前に立ち何度かノックした。

私のところまで返事は聞こえなかったが、きっと二人には聞こえたんだろう。克己くんは、静かにドアを開け入りながら後に続こうとした橘さんを制止した。

「橘も良いから。というか、遠慮して。俺のことより、碧音さんに何か出してやって欲しい」

「―― ……はい」

馬鹿みたいに重たいドアを潜ると、待ってましたという風に親父は奥の無駄にでかいデスクから立ち上がった。

「久しぶりだな。一体どういう風の吹きまわしだ。お前から、私に会いたいとは」

「―― ……用事があるときくらいあるだろ」

「しょっちゅうあったら良いんだがな」

室内の壁には本棚と絵画、ミニバーが設置されていていつでも来客を迎える準備は出来上がっていた。

机から出てくると、親父は俺に椅子を勧めた。

俺が素直にそれに応じて席につくと、満足そうにそれに対面した席に親父も腰を下ろした。

「何か、飲むか？」

「車で来てる。何もいらない。いらないから、誰もいれるな」

「ふーん、そうか。じゃあ、お前はなしでも、別に私が淹れるなら不都合無いだろう」

俺の相変わらずな態度に気分を害することも無く、一度は座った席を立ち、ごとごとと、準備を始めた。

「で？ 今日はどうした？」

「ああ。風見社長のことだよ」

「よいつちゃんの何か？」

「その呼び方やめろ。気持ち悪い」

風見与一かざみよいちそれが、社長の名前だ。どこをどうとって、それが親しみある呼び方なのか俺にはさっぱりわからないが、昔から、親父は風見社長のことを「よいっちゃん」と呼ぶ。良い年したおっさんからちゃん付けを聞くのは耳に痛い。

「そうか？ 別にお前に呼べといってるわけじゃない。構わんだろ。お前相変わらず酒は弱いのか？」

—— …… からん……っ

とグラスに注がれた飴色のそれは嗅ぎなれたアルコールの匂いがした。それをいらなといったはずの俺に手渡しながら面白そうにいった親父に少々腹も立ったが、そんなことは今どうでも良かった。

「で、どうした？」

よいしょと、自分の分も用意し終えた親父は再び同じ席に腰を下ろすと、からからと楽しそうに、グラスを揺らしながら俺に話を戻した。

「ああ。この間、小雪が来たんだ」

「小雪ちゃんかー、さぞ美人になってるだろうな」

いうと思った。あまりにも予想通りの台詞に、色々と馬鹿馬鹿しくなってくる。

「あ、ありがとうございます」

にこやかに、私に紅茶を淹れてくれた橘さんに膝に手を揃えてぺこりとお礼をいった。お客様なのですからそんなにかしこまらなくても、と微笑まれるけれど一般人の私には息苦しいことこの上ない状況なのです。

それを分かった上で橘さんがそういつていることも分かるから、益々居心地は悪い。

「こちら、座っても？」

私と対面する方をさして、にっこりとそういった橘さんを毛嫌にする術も無く、私は静かに頷いた。その返答に、嬉しそうに頷くと静かに腰を降ろし軽く足を組んだ上に両手を組んで添えて私を見つめる。

「―― ……あの、なんででしょう？」

その視線に耐えかねた私は、緊張しながら彼に問い掛けた。相変わらず表情一つ変えないで彼は笑顔で腹の底が見えなくてちよつと恐い。

「失礼。少し、思い出す方がいたもので……。ああ、そういえば、この前は失礼しました」

「え？ ……あ、と、良いんです」

一瞬何のことを詫びられたのかと思ったが、きっと小雪ちゃんのことだろう。

私は確かに彼からその話は聞いたのだから、今日だってそのことで克己くんが連絡を取ってくれたことくらいこの人ならお見通しだと思う。

「色々、ありますから……ね」

「……そう、ですね」

—— ……色々。

その一言で、纏めてしまった彼をちよつとずるいとも思ったが、本当にいろんな思惑が渦巻くような世界なのだろう。

きっと私には、一生わからない。

もう、いろんな意味で、彼にどうこう思うことはなかった。

彼も病院のことと院長のことも克己くんのこととも考えてのことだったのだということは直接いわれなくても分かる。

小雪ちゃんのこと、こういう風に仕あって、決着はついたよなものだし。私の幸せはやはりあの子この悲しみの上に成り立ってるってことを、私は忘れちゃいけない。薄いカップに注がれた紅茶を眺めながら私は改めて、彼女の視線を思い出していた。

「—— ……ほお」

俺の話に意外だというように、顎に手をあて目を細めた親父は次の言葉を出すまでに時間がかかっているようだ。

「少しは、想う事も覚えた……ということか。拗ねているだけの子どもだと思っていたのにな」

「――……」

――……想う事……か

俺には分からない。変わったとは思えけれどそれが良いことかどうかも、俺には判断出来ない。実際、分かったことといえば自分がとてもちっぽけで、弱い。ということだけだ。

そんな俺だから、小雪がいつていたように、本当は今を守りたいだけかもしれない。そうじゃないと思いたい。思っている。でも、その全てを今俺が判断することは出来ない。自分の価値は自分だけでは決められないことも、他人の価値も他人が勝手に決めて良いわけじゃないことも分かった。

分かったことを活かせるかどうか、まだ、分からない。

「まあ、良いだろう。別段、私も本気にしていたわけでもないし、そうなればお互い老後が楽しいだろうな、という話はした……様な気がする」

やっぱりその程度だ。

その程度に子どもを振り回すなど怒鳴りつけたいのを堪えて、溜息に変えた。

そんな俺を見て、ふふと何かを思い出したように笑ったが、なるべく俺は気にしないようにした。

「よいつちゃんには私から、話しておこう。だが、一つ条件がある」
「――……条件？」

親父がいい出すことは大抵、ろくでもないようなことだ。その今までの経験から、俺は一瞬身構えた。

—— …… かちゃ。

静かに克己くんが入っていったドアが開くと、中からHPで見掛けた克己くんのお父さん。——古河雅也さんといったと思う。

彼の姿を見つけた橘さんは静かに腰を上げると折り目正しくきっちり和一礼した。

慌てて、私も立ち上がったが足をテーブルにぶつけてしまいカップが派手な音を立てた。

私のバカッ！ 恥ずかしすぎる。

ふわあああっと顔が紅潮するのを隠して俯く。

「貴女が」

雅也さんは、私の立てた音にちよつと驚いたようだったけど、すぐに穏やかな雰囲気に戻り、恐る恐る顔をあげた視線が絡み、ぼつりとそう呟やかれた。

「え、っと……。白羽碧音です。初めまして」

ようやく、そこまで言葉を取り戻した私はひと息にそういうと頭をぺこりと下げた。

「そんなに、怖がらなくても良いよ。座っていてください。克己は今私との誓約書を書いているから、もう少ししかかると思うけど。それ

にしても……」

真っ赤になった私を見て、楽しそうに笑うと席に戻るよう促した。やっぱり、親子なのか笑うとどこか面影がある。私は、いわれるままに座りなおしたが、彼の視線は私を見つめたままで、どうにも、居心地が悪い。

「どこか、似てらっしゃるでしょう？」

「—— ……ん、ああ。そうだな」

橘さんが耳打ちするようにそういった声に微笑しながら、雅也さんは「こんな可愛い子で良かった」と一言添えて次の予定を橘さんに確認し始めた。

—— ……私が、誰に似てるって？

よくわからない謎めいた二人のやり取りを疑問に思いながらも、それ以上の追求は今はいらないことにした。誰かに似てるなら、きっと、克己くんも知ってるだろうし。というか、確か「誓約書」っていったよね……一体、何を誓わせているの？ 何かやっぱり、私には理解出来ない親子関係な気がする。

「おい」

無愛想に部屋から顔を出した克己くんは、ずっと雅也さんの前に一枚の紙を差し出した。

「これで、満足か？」

「ああ。満足だ」

雅也さんは挑戦的な克己くんの言葉を軽く流すとそれを受け取って確認すると満足そうに微笑んで「まあ、頑張ってくれ」といって克己くんの肩を叩いた。

「では、私はこれから、出掛けるが……。下までご一緒に」

そういいながら、私に差し出された手に私は立たされて、にっこりとお誘いを受けた。

「ご一緒する気はない。さっさと先に行け」

思わず、つられて笑ってしまった私の隣りから克己くんの冷たい一瞥と一言が飛んだ。やっぱり仲睦まじいという親子関係には至らないようだ。

「そうか、残念だな」

苦笑しながら、そういった雅也さんはどこか寂しそうだと思うのは私のかってだろうか？

そのくらいしてあげても良いのに。正直ちょっと思ったが、これも二人の色々なのだらうと、私は口出しするのをやめにした。

「碧音さん」

私たちが入ってきたドアを開けながら、そういつて振り返った雅也さんと視線があつたので小さく頷いた。

「愚息で申し訳ないがよろしく頼みますね」

「え！ えっと、その、はい」

どうして私は咄嗟に気の聞いた一言を紡ぎだすことが出来ないのだろう。私はこくこくと頷くのがやっとだった。

—— ……愚息は余計だ。

部屋を後にする最後にそういった親父に付け足そうかと思ったが、余りにも、親父が嬉しそうだったので、結局それは飲み込むことにして出て行く二人の姿を見送った。

「さて、俺らも帰ろう」

暫らく放心していた碧音さんの肩を叩いて、その部屋を後にした。

「ねえ、克己くん」

「—— ……ん？」

「『誓約書』って何？ 何を約束させられたの？」

エレベータを降りるまで黙っていたのに、車に乗ったとたん当然というような質問をしてきた碧音さんをちょっと可愛いと思いながら、俺は微笑した。

「あいつは、書き残しておくのが好きなだけだから、気にしなくても良いよ」

「—— ……何、それ？」

俺の返答に無理だと碧音さんの黒目がちな丸い瞳が問いを重ねている。そしてまた、話を戻して「なんて書かされたの？」と真剣な

顔をして聞いてきた。

「別にたいしたことじゃない」

「じゃあ、いってよ」

「本当に、なんでもないのに……っていつても、いうまで黙りそうにないな」

溜息交じりでそういった俺に碧音さんはこくこくと力強く頷いた。

「躓くなっていわれて約束させられただけ」

「——……え？」

「だから、簡単に言えば留年したり、試験に落ちたりするなつてことだよ。早く引退したいんだつてさ」

俺の答えに碧音さんは黙って俯いて考え込んでしまっているようだ。

「別に碧音さんが気にするようなことないつて、俺、頭は良いし」

「——……でも、もし」

「もし、はない」

きっぱりとやってやったのに、まだ、納得行かないのか、そのまま碧音さんは外を眺めて呟く。

「でも、もしそのことが負担になったら」

「ならない」

「なつたら、話だよ。なつたら……私を」

「捨てないでー、っていえよ？」

「は？」

虚を疲れたように、振り返り目を丸くして俺を見る姿が、あまりにも小動物的で面白い。ぷふっと噴出した俺に、むっ！と眉を寄せる。

「心配はいらない。いらないけど、もし、が、あれば、そのときまた別案を考える。その中に碧音さんと離れる選択肢はない。それだけのことだよ」

片手でハンドルを支えて、ぽすっと碧音さんの頭を押さえて多少乱暴にぐりぐりと撫で回す。

「ちょっ！ や、やめてよ」

わたわたと暴れた碧音さんをようやく解放してやると、ぶっすーっとしゅつと乱れた髪を撫で付けながら

「ねえ……克己くん……」

ぽつりと声を掛けられた。

「うん」

「馬鹿息子」

「はっ?!」

さっきまでしょぼしょぼしていたくせに、急に思い出したようにそういうと、ころころと笑っていた。

これは暫らくいわれそうだなと、溜息を吐きながら、隣りで笑ってる碧音さんをそっとしておくことにした。

これでようやく少し前までの穏やかな生活が戻ってくると思っただけで、心は凪ぎいて頬が緩んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4905r/>

桜の下で君を待つ

2011年11月24日17時59分発行